

千葉ニュータウン 埋蔵文化財調査報告書XXIX

—印西市泉北側第2遺跡（II）—

平成25年11月

独立行政法人 都市再生機構
公益財団法人 千葉県教育振興財団

千葉ニュータウン 埋蔵文化財調査報告書 XXIX

いんざい　いりぞみきたがせき
—印西市泉北側第2遺跡（II）—



序 文

公益財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを目的とし、昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第719集として、独立行政法人都市再生機構の千葉北部地区新住宅市街地開発関連事業に伴って実施した印西市泉北側第2遺跡（II）の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、旧石器時代の石器、縄文時代・古墳時代等の遺構・遺物が出土しており、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

この報告書が、学術資料として、また地域の歴史解明の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成25年11月

公益財団法人 千葉県教育振興財団

理 事 長 錦 織 總 夫

凡　例

- 1 本書は、独立行政法人都市再生機構による千葉北部地区新住宅市街地開発関連事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県印西市鹿黒字新山558ほかに所在する泉北側第2遺跡（遺跡コードCN613）である。今回の報告分は「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書X」で報告済みの隣接地にあたり、第2次調査分となることから副題を印西市泉北側第2遺跡（II）とした。
- 3 発掘調査から報告書刊行に至る業務は、独立行政法人都市再生機構の委託を受け、公益財団法人千葉県教育振興財團が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆は、第3章第2節土器・第7章第2節を上席文化財主事 西川博孝、第4章・第5章を主任上席文化財主事 倉内郁子、岸本雅人、上席文化財主事 小高春雄、第7章第3節・第4節を小高が行い、それ以外を主任主事 山岡磨由子が担当した。編集は山岡が行った。
- 6 発掘調査から報告書刊行に至るまで、下記の諸機関、諸氏から多くのご指導、ご協力を得た。記して感謝申し上げたい（順不同、敬称・所属略）。

千葉県教育庁教育振興部文化財課、独立行政法人都市再生機構、印西市教育委員会、
高橋直樹、加藤久佳、吉川敏之、中村由克、田島 新
- 7 本書で使用した地図は下記のとおりである。

第2図 国土地理院発行 1/50,000現況図 平成9年度修正版（龍ヶ崎、佐倉）
第3・4図他 印西町役場 印西町図1/2,500（その8）、（その13）（昭和40年3月）
第5図 参謀本部陸軍測量局第1軍管地方迅速測図（明治14・15年）
第6図 国土地理院発行 1/25,000数値地図
「ふさの国文化財ナビゲーションシステム」
- 8 本書で使用した航空写真は下記のとおりである。

図版1 千葉県航空写真データ 京葉測量株式会社 写真番号69-C4-9（昭和44年3月24日撮影）
- 9 本書で使用した図面の方針の北はすべて座標北であり、測地系は日本測地系による。ただし抄録の経緯度は世界測地系に基づく。
- 10 第6章の黒曜石産地推定にあたっては明治大学黒曜石研究センター 池谷信之氏に分析を依頼した。

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の概要	1
1. 調査の経緯と経過	1
2. 調査の方法と概要	2
3. 遺跡の位置と地理的環境	2
第2章 旧石器時代	6
第1節 概要	6
第2節 ブロック	22
第3節 単独出土	110
第3章 繩文時代	112
第1節 概要	112
第2節 遺構と遺物	112
第4章 古墳時代・古代	140
第1節 概要	140
第2節 遺構と遺物	140
第5章 近世	160
第1節 概要	160
第2節 遺構と遺物	160
第6章 黒曜石産地推定結果について	166
第7章 まとめ	168
第1節 旧石器時代	168
第2節 繩文時代	171
第3節 古墳時代	173
第4節 近世	175
抄録	卷末

挿図目次

第 1 図 グリッド呼称例	2	第 30 図 第 2 文化層第 7 ブロック出土石器（10）	47
第 2 図 泉北側第 2 遺跡周辺	3	第 31 図 第 2 文化層第 7 ブロック出土石器（11）	48
第 3 図 年度別調査区域及び旧石器時代ブロック位置図	4	第 32 図 第 2 文化層第 8 ブロック母岩別分布	49
		第 33 図 第 2 文化層第 8 ブロック器種別分布	50
第 4 図 縄文時代以降の遺構位置図	5	第 34 図 第 2 文化層第 8 ブロック出土石器（1）	52
第 5 図 基本土層（13J -06グリッド）	7	第 35 図 第 2 文化層第 8 ブロック出土石器（2）	53
第 6 図 泉北側第 2 遺跡周辺の旧石器時代遺跡 （迅速調査）	8	第 36 図 第 2 文化層第 8 ブロック出土石器（3）	54
第 7 図 泉北側第 2 遺跡周辺の旧石器時代遺跡 （現況図）	9	第 37 図 第 2 文化層第 8 ブロック出土石器（4）	55
第 8 図 第 1 文化層ブロック位置図	22	第 38 図 第 2 文化層第 9 ブロック石器分布・出土石器	57
第 9 図 第 1 文化層第 1 ブロック石器分布	23	第 39 図 第 2 文化層単独出土石器	58
第 10 図 第 1 文化層第 1 ブロック出土石器	24	第 40 図 第 3 文化層ブロック位置図	59
第 11 図 第 2 文化層ブロック位置図	25	第 41 図 第 3 文化層第 10 ブロック器種別分布	60
第 12 図 第 2 文化層第 2 ブロック石器分布・出土石器	26	第 42 図 第 3 文化層第 10 ブロック出土石器（1）	61
第 13 図 第 2 文化層第 3～6 ブロック器種別分布	27	第 43 図 第 3 文化層第 10 ブロック母岩別分布	62
第 14 図 第 2 文化層第 3～6 ブロック母岩別分布	28	第 44 図 第 3 文化層第 10 ブロック出土石器（2）	62
第 15 図 第 2 文化層第 3～6 ブロック出土石器（1）	29	第 45 図 第 3 文化層第 11・12 ブロック器種別分布	63
第 16 図 第 2 文化層第 3～6 ブロック出土石器（2）	30	第 46 図 第 3 文化層第 11・12 ブロック母岩別分布	64
第 17 図 第 2 文化層第 3～6 ブロック出土石器（3）	31	第 47 図 第 3 文化層第 11・12 ブロック出土石器	65
第 18 図 第 2 文化層第 7 ブロック器種別分布 （チャート 3 を除く）	34	第 48 図 第 3 文化層第 13 ブロック器種別分布	66
第 19 図 第 2 文化層第 7 ブロック器種別分布 （チャート 3）	35	第 49 図 第 3 文化層第 13 ブロック母岩別分布	67
第 20 図 第 2 文化層第 7 ブロック母岩別分布	36	第 50 図 第 3 文化層第 13 ブロック出土石器（1）	68
第 21 図 第 2 文化層第 7 ブロック出土石器（1）	37	第 51 図 第 3 文化層第 13 ブロック出土石器（2）	69
第 22 図 第 2 文化層第 7 ブロック出土石器（2）	39	第 52 国 第 3 文化層第 13 ブロック出土石器（3）	70
第 23 国 第 2 文化層第 7 ブロック出土石器（3）	40	第 53 国 第 4 文化層ブロック位置図	71
第 24 国 第 2 文化層第 7 ブロック出土石器（4）	41	第 54 国 第 4 文化層第 14 ブロック石器分布	72
第 25 国 第 2 文化層第 7 ブロック出土石器（5）	42	第 55 国 第 4 文化層第 14 ブロック出土石器	73
第 26 国 第 2 文化層第 7 ブロック出土石器（6）	43	第 56 国 第 4 文化層単独出土石器	74
第 27 国 第 2 文化層第 7 ブロック出土石器（7）	44	第 57 国 第 5 文化層ブロック位置図	75
第 28 国 第 2 文化層第 7 ブロック出土石器（8）	45	第 58 国 第 5 文化層第 15 ブロック器種別分布	76
第 29 国 第 2 文化層第 7 ブロック出土石器（9）	46	第 59 国 第 5 文化層第 15 ブロック母岩別分布	77
		第 60 国 第 5 文化層第 15 ブロック出土石器	77
		第 61 国 第 5 文化層第 16～18 ブロック器種別分布	79
		第 62 国 第 5 文化層第 16～18 ブロック母岩別分布	80
		第 63 国 第 5 文化層第 16～18 ブロック出土石器（1）	81

第64図	第5文化層第16~18ブロック出土石器（2）	82	第101図	遺物包含層出土土器（9）	127
第65図	第5文化層第16~18ブロック出土石器（3）	83	第102図	遺物包含層出土土器（10）	128
第66図	第5文化層第16~18ブロック出土石器（4）	84	第103図	遺物包含層出土土器（11）	130
第67図	第5文化層第16~18ブロック出土石器（5）	85	第104図	遺物包含層出土土器（12）	131
第68図	第5文化層第19~21ブロック器種別分布	89	第105図	遺物包含層出土土器（13）	132
第69図	第5文化層第19~21ブロック母岩別分布	90	第106図	遺物包含層出土土器（14）	133
第70図	第5文化層第19~21ブロック出土石器（1）	91	第107図	遺物包含層出土土製品	134
第71図	第5文化層第19~21ブロック出土石器（2）	92	第108図	縄文時代の石器分布	135
第72図	第5文化層単独出土石器	94	第109図	縄文時代の出土石器（1）	136
第73図	第6文化層ブロック位置図	95	第110図	縄文時代の出土石器（2）	137
第74図	第6文化層第22ブロック器種別分布	96	第111図	縄文時代の出土石器（3）	138
第75図	第6文化層第22ブロック母岩別分布	97	第112図	106号住居跡及び出土遺物	141
第76図	第6文化層第22ブロック出土石器（1）	98	第113図	110号住居跡及び遺物出土状況	142
第77図	第6文化層第22ブロック出土石器（2）	99	第114図	110号住居跡出土遺物	143
第78図	第6文化層第22ブロック出土石器（3）	100	第115図	110号住居跡及び遺物出土状況	144
第79図	第6文化層第22ブロック出土石器（4）	101	第116図	110号住居跡出土遺物	145
第80図	第6文化層第22ブロック出土石器（5）	102	第117図	112号住居跡及び遺物出土状況	147
第81図	第6文化層第23ブロック剥片類、礫・礫片分布状況	103	第118図	112号住居跡出土遺物	148
第82図	第6文化層第23ブロック石材別分布（礫・礫片）	104	第119図	117号住居跡及び遺物出土状況	149
第83図	第6文化層第23ブロック器種別分布（剥片類）	106	第120図	117号住居跡出土遺物	150
第84図	第6文化層第23ブロック母岩別分布（剥片類）	107	第121図	118号住居跡及び出土遺物	151
第85図	第6文化層第23ブロック出土石器（1）	107	第122図	119号住居跡及び遺物出土状況	152
第86図	第6文化層第23ブロック出土石器（2）	108	第123図	119号住居跡出土遺物	153
第87図	第6文化層単独出土石器	109	第124図	120号住居跡及び遺物出土状況	154
第88図	単独出土石器	110	第125図	120号住居跡出土遺物	155
第89図	単独出土石器分布（文化層別分を含む）	111	第126図	遺構外出土遺物	156
第90図	115号住居跡・116号土坑及び出土遺物	113	第127図	113号土坑及び出土遺物	156
第91図	108号土坑・114号炉穴	114	第128図	1号溝（1）	161
第92図	縄文土器時期別分布・接合状況	115	第129図	1号溝（2）	162
第93図	遺物包含層出土土器（1）	117	第130図	1号溝出土遺物	162
第94図	遺物包含層出土土器（2）	118	第131図	2号溝（1）	163
第95図	遺物包含層出土土器（3）	120	第132図	2号溝（2）	164
第96図	遺物包含層出土土器（4）	121	第133図	105号炭窯	165
第97図	遺物包含層出土土器（5）	122	第134図	黒曜石产地推定結果一覧	167
第98図	遺物包含層出土土器（6）	124	第135図	旧石器時代主要石器	170
第99図	遺物包含層出土土器（7）	125	第136図	縄文時代・古墳時代遺構分布図	174
第100図	遺物包含層出土土器（8）	126			

表 目 次

第1表 周辺遺跡（旧石器時代）……………	10	第20表 第5文化層第15ブロック組成表 ……	76
第2表 器種別組成表（全点）……………	11	第21表 第5文化層第16ブロック組成表 ……	86
第3表 石材別組成表（全点）……………	12	第22表 第5文化層第17ブロック組成表 ……	87
第4表 石器集中地点一覧 ……	13～16	第23表 第5文化層第18ブロック組成表 ……	87
第5表 母岩觀察表 ……	17～21	第24表 第5文化層第16～18ブロック組成表 ……	87
第6表 第1文化層第1ブロック組成表 ……	23	第25表 第5文化層第19ブロック組成表 ……	93
第7表 第2文化層第2ブロック組成表 ……	26	第26表 第5文化層第20ブロック組成表 ……	93
第8表 第2文化層第3ブロック組成表 ……	32	第27表 第5文化層第21ブロック組成表 ……	93
第9表 第2文化層第4ブロック組成表 ……	32	第28表 第5文化層第19～21ブロック組成表 ……	93
第10表 第2文化層第5ブロック組成表 ……	32	第29表 第6文化層第22ブロック組成表 ……	101
第11表 第2文化層第6ブロック組成表 ……	32	第30表 第6文化層第23ブロック疊・礫片重量、接合番号一覧 ……	105
第12表 第2文化層第3～6ブロック組成表 ……	33	第31表 第6文化層第23ブロック組成表（1）…	108
第13表 第2文化層第7ブロック組成表 ……	48	第32表 第6文化層第23ブロック組成表（2）…	109
第14表 第2文化層第8ブロック組成表 ……	56	第33表 単独出土石器組成表 ……	111
第15表 第2文化層第9ブロック組成表 ……	57	第34表 繩文時代石器組成表 ……	139
第16表 第3文化層第10ブロック組成表 ……	62	第35表 古墳時代竪穴住居跡一覧表 ……	153
第17表 第3文化層第11・12ブロック組成表 ……	65	第36表 出土土器觀察表 ……	157～159
第18表 第3文化層第13ブロック組成表 ……	70		
第19表 第4文化層第14ブロック組成表 ……	73		

図版目次

図版1 遺跡周辺航空写真	図版5 調査区遠景
図版2 確認調査状況	115号住居跡・116号土坑 全景、遺物出土状況
13J-06グリッド北壁土層断面	108号土坑全景
図版3 第1文化層第1ブロック、第2文化層第2、第3～6、第7、第8、第9ブロック、第5文化層第16～18ブロック遺物出土状況	図版6 114号炉穴、106号住居跡、110号住居跡全景、111号住居跡・112号住居跡 全景、遺物出土状況、117号住居跡遺物出土状況
図版4 第3文化層第10、第13ブロック、第4文化層第14ブロック、第5文化層第15ブロック、第6文化層第22、第23ブロック遺物出土状況	図版7 117号住居跡・118号住居跡 全景、119号住居跡・120号住居跡 全景、遺物出土状況、113号土坑 全景、遺物出土状況

- 図版8 1号溝 T1・16、T3・4、T10・11、T13・14、
2号溝 T3・50、T3、T25-2、105号炭窯
- 図版9 第1・第2文化層出土石器（1）
- 図版10 第2文化層出土石器（2）
- 図版11 第2文化層出土石器（3）
- 図版12 第3文化層出土石器
- 図版13 第4・第5文化層出土石器（1）
- 図版14 第5文化層出土石器（2）
- 図版15 第6文化層出土石器（1）
- 図版16 第6文化層出土石器（2）
- 図版17 第6文化層出土石器（3）・単独出土石器
- 図版18 龍文時代以降出土石器
- 図版19 遺物包含層出土土器（1）
- 図版20 遺物包含層出土土器（2）・土製品
- 図版21 遺物包含層出土土器（3）
- 図版22 遺物包含層出土土器（4）
- 図版23 遺物包含層出土土器（5）
- 図版24 遺物包含層出土土器（6）
- 図版25 遺物包含層出土土器（7）
- 図版26 遺物包含層出土土器（8）
- 図版27 遺構内出土遺物（1）
- 図版28 遺構内出土遺物（2）
- 図版29 遺構内出土遺物（3）・遺構外出土遺物
- 図版30 1号溝出土遺物、龍文土器拡大写真

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1. 調査の経緯と経過

千葉北部地区新住宅市街地開発関連事業に伴う埋蔵文化財の調査は、公益財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）が、当初千葉県企業庁の委託を受けて開始されたものである。その後事業主体者は日本住宅公団に引き継がれ、現在は独立行政法人都市再生機構となったが、継続して当財団が業務の委託を受け発掘調査を実施している。

泉北側第2遺跡は、昭和57・58年度調査分を『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書X－泉北側第2遺跡（CN613）－』として平成3年度に刊行済みであり、今回はその後発掘調査を実施した東側隣接地の報告であることから泉北側第2遺跡（II）として報告することとした（第3図）。

泉北側第2遺跡（II）の発掘調査は平成6、19、20年度の3か年にかけて行われた。平成6年度は3度にわたりて行われ、全体の調査対象面積は37,100m²で、確認調査面積は上層3,910m²・下層1,130m²、本調査面積は上層3,800m²・下層713m²であった。平成19年度は調査対象面積2,800m²で、確認調査面積は上層280m²・下層76m²で、上・下層とも本調査までには至らなかった。平成20年度は調査対象面積43,362m²で、確認調査面積は上層4,340m²・下層1,959m²、本調査は上層100m²・下層574m²であった。

発掘調査から報告書刊行に至るまでの各年度の担当者及び期間は以下のとおりである。

発掘調査

平成6年度

組織 調査部長 西山太郎 印西調査事務所長 谷 匄

調査担当 主任技師 土屋潤一郎・鶴岡則幸

調査期間 そのI 平成6年4月5日～平成6年8月1日

そのII 平成6年8月1日～平成6年11月11日

そのIII 平成7年3月1日～平成7年3月24日

平成19年度

組織 調査研究部長 矢戸三男 北部調査事務所長 豊田佳伸

調査担当 上席研究員 鈴木弘幸

調査期間 平成19年7月2日～平成19年7月31日

平成20年度

組織 調査研究部長 大原正義 北部調査事務所長 豊田佳伸

調査担当 上席研究員 島田裕之

調査期間 平成20年9月1日～平成21年2月26日

整理作業

平成24年度

組織 調査研究部長 関口達彦 整理課長 高田 博

整理担当 主任上席文化財主事 岸本雅人・倉内郁子 上席文化財主事 西川博孝・小高春雄

主任主事 山岡磨由子

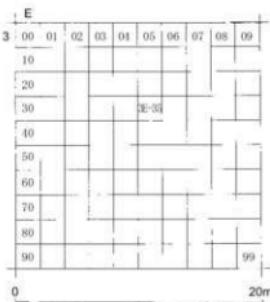
整理内容 基礎整理～原稿執筆

平成25年度

組織 調査研究部長 伊藤智樹 整理課長 今泉 澤

整理担当 上席文化財主事 西川博孝 主任主事 山岡磨由子

整理内容 編集～報告書刊行



第1図 グリッド呼称例

2. 調査の方法と概要（第1・3・4図）

発掘調査を行うにあたり、公共座標を基準に20m×20mの大グリッドを設定した。さらにその大グリッド内を2m×2mに分割し、100個の小グリッドとした。基本とするグリッドは昭和57・58年度調査の際に設定されたグリッドを踏襲しており、大グリッドは西側から東側へA、B、C…、北側から南側へは1、2、3…となる。小グリッドは北西隅を起点として西から東に00、01、02…、北から南に00、10、20…と付し、これらを組み合わせて3E-35のように表示した（第1図）。

調査については、上層の確認調査は地形、調査区域の形状を勘案して東西方向、南北方向等に對象面積の10%を目安としてトレンチを設定し、遺構の存否及び遺物の出土量と分布範囲を確認した。下層の確認調査は調査対象面積の4%を目安として規則的に2m×2mのグリッドを設定し、遺物の存否と出土層位及び分布範囲を確認した。本調査はこの確認調査をもとに、調査範囲を設定して実施した。その結果、旧石器時代の石器集中部23か所、縄文時代住居跡1軒・炉穴1群3基・陥没穴1基・土坑1基、古墳時代住居跡8軒、奈良・平安時代の蔵骨器を伴う土坑1基、近世溝2条、近世以降の炭窯2基を検出した。

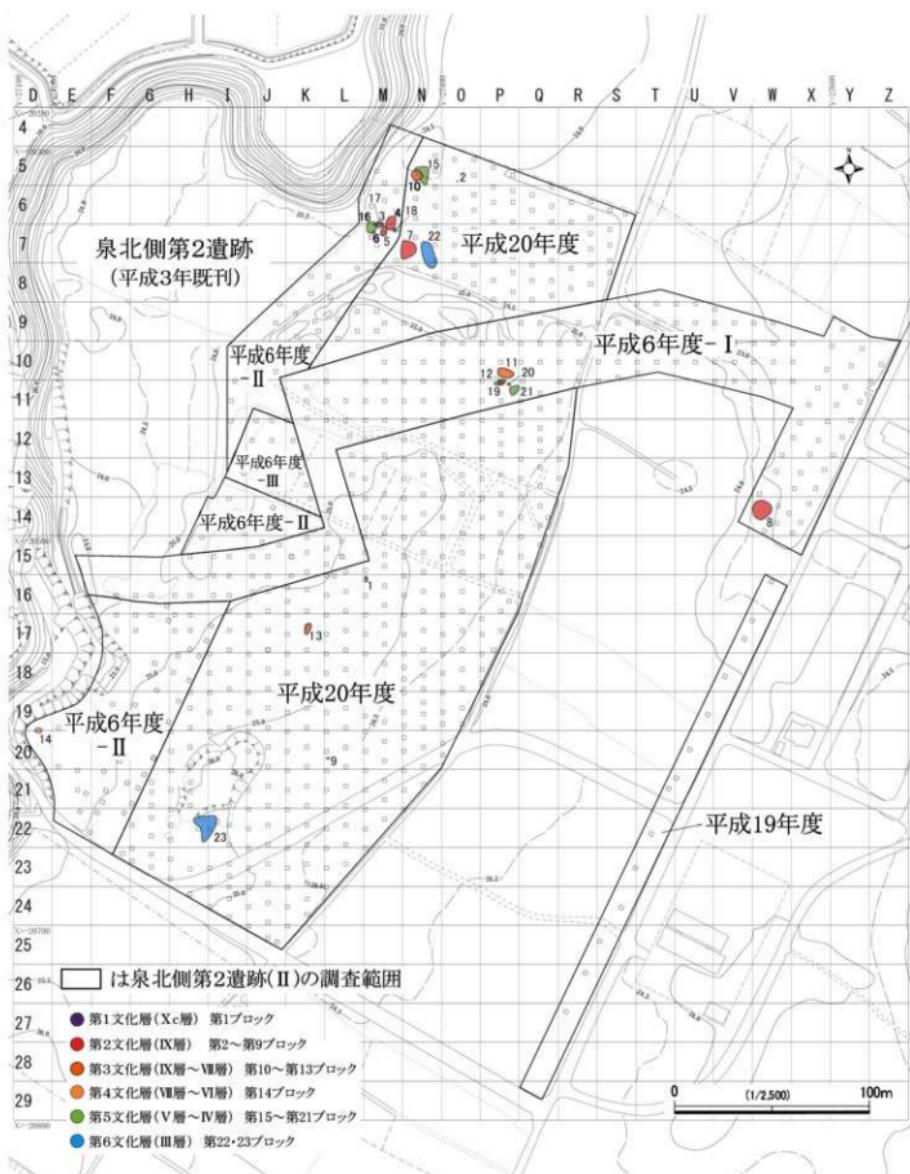
3. 遺跡の位置と地理的環境（第2図、図版1）

泉北側第2遺跡（II）は、千葉県印西市鹿黒字新山558ほかに所在する。調査が始まった平成6年度当初は「千葉県印旛郡印西町」であったが平成8年に「印西市」となり、平成22年3月23日には印西市、印旛村、本塙村が合併して新しい印西市となった。

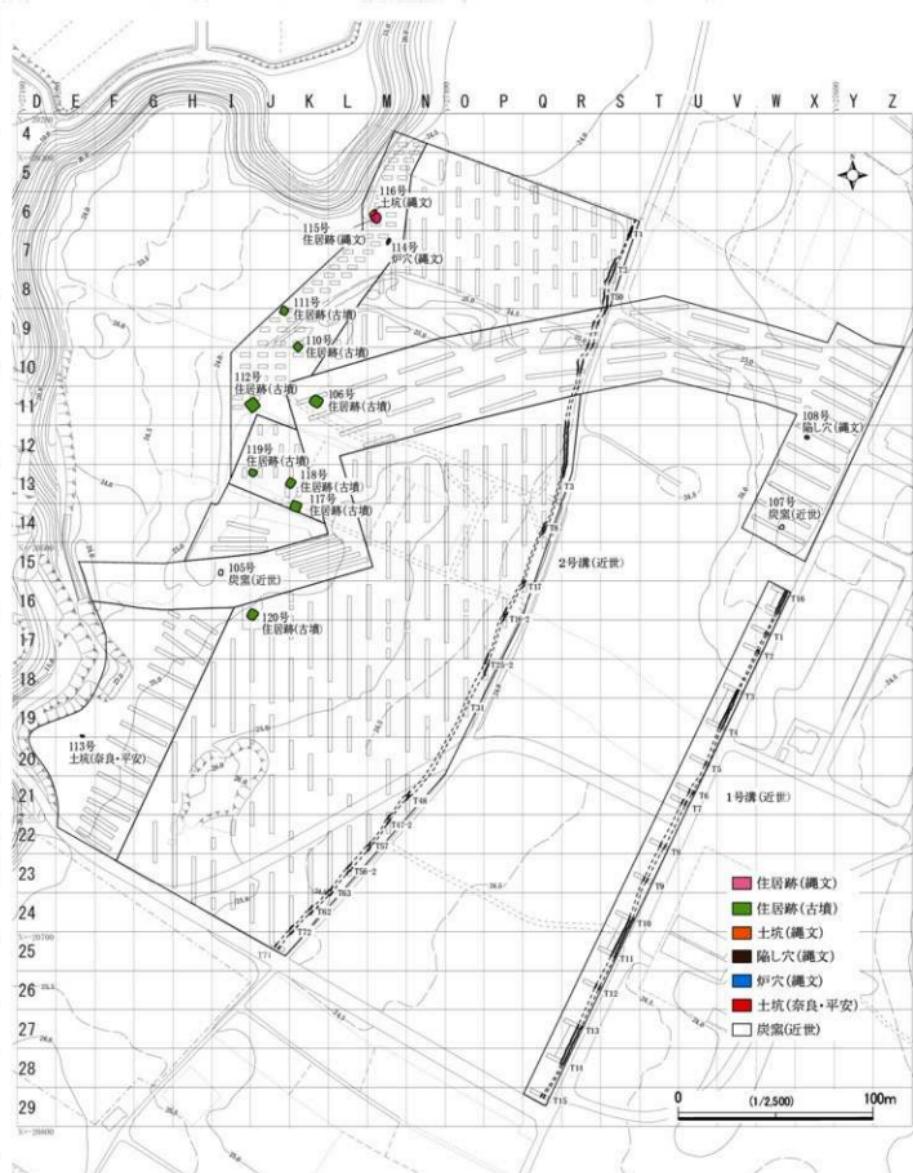
大小の河川浸食にともない、樹脂状に入り組んだ谷によって深く開析された下総台地は、随所に複雑な地形を見せるが、巨視的に見れば低平で広大な洪積台地である。泉北側第2遺跡（II）から周囲をみると、北西に手賀沼、南東に印旛沼があり、北に利根川が流れている。利根川は周知のとおり、江戸時代の河川改修（東遷）によって流路変更されたものであり、この人的改変以前は上越国境（三国山地）を源流とし、鍋川・神流川・荒川などの水系を集めて荒川低地、ときには中川低地を流れて東京湾に南下していた。したがって江戸時代以前の泉北側第2遺跡（II）の北側に位置した河川は現在の利根川ではなく、付け替えられる前の鬼怒川であり、北から南へ流れ下ったのち、東に流れを変える。この古鬼怒川が運んだ竜ヶ崎砂層と、関東周辺火山からのテフラなどが印旛沼周辺の台地を形成し、豊かな水資源と堆積物とによって多くの動植物が育まってきた。これらの資源は、原始・古代から近世にわたって人々の利用に供され、その証が各時代の遺跡として残されたのである。このうち、旧石器時代の周辺遺跡は第2章で扱ったが、縄文時代遺構の周辺遺跡については隣接する泉北側第3遺跡の報告書『千葉ニュータウンX XVIII』で紹介したので参照願いたい。



第2図 泉北側第2遺跡周辺 (S = 1 / 100,000)



第3図 年度別調査区域及び旧石器時代ブロック位置図



第4図 縄文時代以降の遺構位置図

第2章 旧石器時代

第1節 概要

1. 周辺の遺跡（第6・7図、第1表）

県内の遺跡分布状況は、開発に伴う発掘調査の多寡、精度を反映しており、必ずしも当時の人々の暮らしに結びつくものではないが、遺跡の立地する場所は現在でも人々が暮らす場所であることが多い。

第6図の明治14・15年の迅速測図、第7図の平成20年の地形図と同じ縮尺で対比させ、現在までに発掘された旧石器時代の遺跡を示した。図中の29か所の遺跡と、図示できなかつたいくつかの周辺遺跡の概要を第1表に掲載した。遺跡名・石器が検出された層位・石器総数・礫群の有無を項目として挙げ、概要には特記事項を含めた。表中の石器総数は旧石器時代石器の総出土点数である。主要石材の項には礫群構成石材は含めず、剥離された石材片数の多い順に上位3種を記したが、特徴的な石材においてはこの限りではない。産出層準は、立川ロームの出土層位を武藏野台地の層序に合わせた。

2. 遺跡の概要（第3図、第2～5表）

泉北側第2遺跡（II）では立川ロームIX層～III層に包含される1,436点の石器を確認した。ここでは石器の出土した層を手がかりとして、23か所の石器集中域を6枚の文化層に大別した。

第1文化層はIXc層から石器4点が出土しており、生活面はIX層下部にある。遺跡中央部から出土した4点は出土地点が最長2.4m離れるが、同一母岩の3点はほぼ同位置にある。垂直分布では8.7cmの高低差であり、同時存在した可能性が高い。石材は栃木県の高原山甘湯沢群産黒曜石1点と、同じく栃木県の西荒川上流に分布する堆積岩3点で構成される。堆積岩は石刃の形態で持ち込まれ、2点が接合した。

第2文化層はIX層～III層にかけて石器の分布がみられるが、生活面はIX層中～上部であろう。遺跡北側を中心に6か所、東側と南寄りに1か所ずつ、計8か所の集中域が検出され、332点の石器が出土した。ガラス質黒色安山岩とチャートが多く用いられ、中でも東側のブロックでは127点中93%がガラス質黒色安山岩である。

第3文化層はIX層～VII層にかけて石器が包含される。4か所のブロックが点在し、出土点数は104点である。チャートを消費するブロック、硬質頁岩のみ56点が出土したブロックがある一方で、多様な母岩で構成されるブロックがあり、場における機能の違いが明確である。硬質頁岩が多用されるブロックの在り方は、南側に隣接する泉北側第3遺跡第2文化層と共通する。

第4文化層はVII層～VI層にかけて24点が出土した。ブロックは1か所で18点出土であるが、この他に単独では6点出土した。ブロックから出土した石器はガラス質黒色安山岩が83%を占めており、石核4点を数えるが接合資料はない。

第5文化層はVII層～III層にかけて石器が分布するが、生活面はV層～IV層下部であろう。7か所のブロックが帰属し、160点が出土した。2か所のブロックには硬質頁岩が多出し、搔器・削器・角錐状石器・ナイフ形石器が検出された。また、削器とその調整剥片、搔器同士の接合資料などは、製品もしくは製品に近い状態で搬入された状況を示している。

第6文化層はIII層から808点が出土した。遺跡北側と南西側に2か所のブロックがあり、両ブロックとも礫群を構成する。北側は38%、南西側は94%が礫・礫片である。

出土した石器の器種別組成を第2表に、石材別組成を第3表に掲載した。また、第4表の石器集中地点一覧では母岩の分布状況に重点を置いてブロックごとに表示した。

表、挿図の一部、写真図版の注記には略号を用いた。第2・3表、実測図と合わせて参照していただきたい。また、写真図版では、石材の質感や色など、そのままの情報を提示するため、実測した石器をカラーワ 写真で掲載した。実測を行っていない遺物は母岩単位で撮影し、母岩番号を注記した。

3. 基本層序（第5図、図版2）

泉北側第2遺跡（II）13J-06グリッドの土層断面を第5図に示した。石器群が包含される土層が遺跡ごとに異なる名称で扱われることへの危惧や、下総台地内における地域ごとの立川ローム層の比較、武藏野台地との対比などが検討された結果、平成4年に当財團で共通見解に至った標準土層^{註1)}に則ったものである。

泉北側第2遺跡（II）13J-06グリッド 平成6年度調査

I・II層：表土削平により不検出。

III 層：ソフトローム層。膨軟化が著しく、クラックの最深部は第2黒色帯まで到達する。

IV 層：膨軟化が著しく、部分的に確認できる。橙褐色を呈し、黒色・赤色スコリアを若干含む。

V 層：第1黒色帯。黒色・赤色スコリアを含む。

VI 層：明るい黄褐色を呈する。ATバミスが混在する。
第5図 基本土層（I3J-06グリッド）

VII 層：第2黒色帯上部。直径1mm前後の黒色・赤色スコリアを含む。ATバミスが僅かに混じる。

IX a層：VII層より黒みを増し、堅くしまる。黒色・赤色スコリアを多く含む。

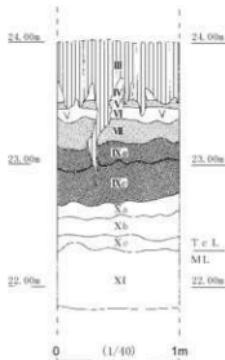
IX b層：橙褐色土層。黒色帯の間層である。スコリア等はみられない。

IX c層：IX a層よりさらに黒みを増し、堅く締まる。スコリアの量が増し、大型となる。

X a層：黄褐色土層。スコリアの量が少なくなり、大きさは小さくなる。

X b層：黄褐色土層。X a層よりやや暗い色調である。スコリアの量はさらに少なくなる。

X c層：黄褐色土層。スコリアをほとんど含まなくなる。



註

1) 烏立 桂・新田浩三・渡辺修一 1992「下総台地におけるローム層の層序区分－平成2・3年度職員研修会から－」『研究連絡誌』第35号 県立千葉県文化財センター



第6図 泉北側第2遺跡周辺の旧石器時代遺跡(迅速測図) I 1/25,000



第7図 東北側第2遺跡周辺の旧石器時代遺跡（現況図）I 25,000

第1表 周辺遺跡（旧石器時代）

番号	遺跡名	産出層番（層）	石器箇数	種類	文獻	概要
1-1	東北側第2遺跡（Ⅲ） (新山北遺跡)	Ⅹ下、Ⅹ中～Ⅹ上、Ⅹ～Ⅸ、 Ⅸ～Ⅷ下、Ⅷ、Ⅶ～Ⅵ	1,436	○	山岡2013	X：炭化物・焼土集中。Ⅹ下：高原山產黑曜石と都木本西荒川にみられる焼質黃岩石刃 Ⅸ～Ⅷ下：焼質黃岩の器。跡片多数 角状伏石器 縫合96点
1-2	東北側第2遺跡 (新山北遺跡)	Ⅷ上、Ⅷ～Ⅶ	1,276	○	高橋1991	黒曜石の片割。跡片多数 角状伏石器 縫合96点
2	東北側第3遺跡 (新山南遺跡)	Ⅸ中～Ⅸ上、Ⅸ～Ⅷ、Ⅷ～Ⅶ、 Ⅶ～Ⅵ	1,798	○	山岡2010	Ⅸ中～Ⅸ上：環状ブロック群・北側集中域 Ⅸ～Ⅷ：焼質白岩接合資料
3	奥遺跡（新山南遺跡）	Ⅴ～Ⅳ、Ⅲ	32	●	木本1989	野辺山型縫石刃核、縫石刃
4	古新田南遺跡	Ⅷ上～Ⅵ	974	○	香取2007	2mほどの垂直分布帯 安山岩多消費 繁岡産珪質頁岩、高原山產黒曜石含む
5	大割御附遺跡 (割御附遺跡)	Ⅸ～Ⅷ	177	○	香取2010	斜面立地、弧状分布 犀玉(赤玉)製鉈器
6	鹿島遺跡	不明	1	●	木本1989	良質半透明黒曜石製ナイフ形石器
7	東北側第1遺跡 (前原東遺跡)	Ⅵ下	5	○	香取2010	砂岩製磁石1点。跡片は全て玉髄の同一母岩
8	大割水溜遺跡	Ⅲ～Ⅱ	268	○		移行期の微先形尖頭器 尖頭器のメンテナンス 2013年度刊行予定
9	東京新田南遺跡	X、Ⅷ、Ⅶ下	6	矢	木本2004	X：燒土遺跡
10	東南遺跡	Ⅸ上	4	○	落合1999	
11	南西ヶ作遺跡	Ⅲ上～Ⅱ	23	○	井上2008	黒曜石多 石核4、剝片16、跡片2、縫石器1 ブロッカ外4点
12	木戸崎遺跡	Ⅵ1、Ⅳ～Ⅲ下、Ⅲ中～Ⅲ上	6,010	○	木村2000	黒曜石表面削除による細孔形成。縫石刃核の出土 石材、器種は多様にわたる Ⅳ下に縫石器
13	一本桜南遺跡	Ⅸ上、Ⅷ下、Ⅷ上、Ⅵ1、Ⅴ、 Ⅳ下、Ⅳ上、Ⅲ下、Ⅲ中	約4,280	○	落合1998	10枚の異なる文化層から絆合。縫石器、縫石器群、信州産黒曜石小石質ナイフ形石器、縫石刃、縫石刃核の出土 石材、器種は多様にわたる Ⅳ下に縫石器
14	復岡遺跡	Ⅲ上～Ⅱ	不明	白石他1983	大型の微先形尖頭器 移行期か	
15	高根北遺跡	Ⅳ～Ⅲ	187以上	○	古内1974	ソフトヨム山中より黒曜石、炭化物片(年代測定で1221, 269~610) 鋸器・削器・骨器
16	別所新田遺跡	不明	不明	○	落合・木村1999	別所新田第2遺跡として報告。表探資料あり 詳細不明
17	六角遺跡	Ⅳ(ほか)	48以上	○	古内1974	国府系のナイフ形石器(林板岩と報告) 縫形の尖頭器はチャートか
18	武西近隣遺跡	Ⅸ～Ⅷ、Ⅲ	372	○	高橋2010	Ⅸ～Ⅷ：頁岩、安山岩の一般的消費と。石刀石器群とに二分
19	北の古遺跡	Ⅷ～Ⅶ、Ⅲ	64以上	○	古内1974・1975	Ⅲ：剝片製造何形ナイフ形石器
20	向原遺跡	Ⅸ上～Ⅷ	17	○	落合2002	
21	鳴神山遺跡	不明	2	○	鳴田1999	グリッド出土2点のみ 1点は黒曜石製ナイフ形石器先端部
22	船尾白幡遺跡	Ⅲ上	188	○	古内1976・ 平田2009	信州産小角縫石材の野辺山型縫石刃核、縫石刃
22-1	船尾白幡遺跡	Ⅷ、Ⅶ、Ⅵ～Ⅴ下	458	○	田島2004	Ⅳ、Ⅴ～Ⅳ下は船尾白幡II遺跡の第1ブロックと同石材
22-2	船尾白幡遺跡 II	Ⅸ、Ⅷ～Ⅶ下	29	矢	木本2005	更なる外から面取り施設と削片(信州産黒曜石)、縫身大費安山岩製尖頭器、横斜削片材の組合せ 天然開拓 2つの1面削片と縫石刃核群に伴う形態の二次加工跡あり 調査区外に広がりを見せる可能性大
23	新井瀬Ⅱ遺跡	X上、IX下、VII、V	88	○	新田2004	Ⅹ～Ⅷ下：台形縫石器。局部製石所
24	松崎I遺跡	X上～Ⅸ下、Ⅸ上～Ⅷ、Ⅷ～Ⅶ	456	○	山岡2004	Ⅹ上～Ⅷ：千手台技術。Ⅷ～Ⅶ：三分割された角縫状石器+調整削片
25	松崎II遺跡	IX、Ⅷ～Ⅶ、Ⅷ～Ⅶ、Ⅶ～Ⅵ	250	○	古内2003	Ⅹ：縫状ブロックの可能性 リダクションの進んだ局部製石所
26	松崎III遺跡	X上、IX下、IX上、VII、VI下	92	○	新田2006	Ⅹ上：黒曜石多層 大型削片から台形縫石器 Ⅷ～Ⅶ：千手台技術
27	松崎IV遺跡	IX下、VII～VI、III	121	○	新田2006	石片再生削片9点
28	松崎V遺跡	X、IX	87	○	古内2006	張田産灰質貝殻 細粒再生削片
29	松崎VI遺跡	V～IV、Ⅲ上～Ⅱ	171	矢	木本2004	Ⅷ～IV：角縫状石器と他所のナイフ形石器 単純出土中に黒曜石製男女食量尖頭器 Ⅲ上～Ⅱ：荒尾遺跡。野辺山型の縫石刃核
馬込遺跡	VI、Ⅲ	約670	○	古内・木本2004	焼質貝殻と信州産黒曜石、石刀製小型石器複数出土	
石塚第2遺跡	Ⅷ、V～IV、Ⅲ、Ⅲ上	792	○	落合1999	Ⅷ：焼物跡が多い黒曜石の大半が砂岩 Ⅲ：安山岩製尖頭器 Ⅲ上：影打型石器、細石刃 V～IV、Ⅲ：縫合	
向原北遺跡	Ⅲ上	292	○	古内1976	縫合2点。削片製小型微何形ナイフ形石器 大型玉髄	
谷田木曾地遺跡	IX、VII～VIII、VII～VI、V～IV、 IV～III、Ⅲ	1,150	○	古内・官1984	Ⅹ：詳細不明 ホルンフェルス質石器 Ⅸ～Ⅷ：字型ナイフ形石器 Ⅲ：小型尖頭器/歯石	
道作古墳群	VI、V、V～IV下、Ⅲ下、 Ⅲ下～Ⅱ中、Ⅲ中、Ⅲ上	678	○	宇野2007	Ⅹ：詳細不明 周囲地帯住居址化石材質石刀群 Ⅸ～V：整頓高地周囲地帯住居質を構成する右石刀群 右石刀削器共伴 V～IV下：宇都宮市産の安山岩製模打削片質群 高原山系質を伴う Ⅲ下～Ⅱ中：大型尖頭器の生産	
地蔵穴台遺跡	IV～III、Ⅲ、Ⅲ～Ⅱ	1,253	○	天野1974	石器集中地帯未確 宮原山產黒曜石剝片刃核 黒曜石、削片製縫何形ナイフ形石器	

※縫合標の「（）」は「子葉軒縫藏文化財分布図（1）」による遺跡名称である。

第4表 石器集中地点一覧 - 1

文 件 記 録 番 号	出土グリッド 座標	出土 部位	遺物の範囲 (に点をつけて示す。無く なれば、矢印をつける)	平面分布		垂直分布		母岩分布		石材の分類状態	複合化状 態(複合化 率と混合率)	石材記載は ない場合 の記述	
				面積(m ²)	位置関係	面積(m ²)	高さ m	同一母岩の分類の状態	ブロック判別指針				
第 1 文 化 症 地 点 （A 部 位 ）	16M+00・10	IIC.	○	2.1	21.91.3-	CH1(NW)に露出して出石 側に點をつけて示す。無く なれば、矢印をつける)	23.862	SS1(北東面)に最も長さ 約2.3m露出する。 CH1(北東)に出石。	2.石材2面露 出し。SS1は北東面 に点をつけて示す。無く なれば、矢印をつける。	石材2面露 出し。SS1は北東面 に点をつけて示す。無く なれば、矢印をつける。	CH1・萬葉山山頂 代表例		
第 2 文 化 症 地 点 （B 部 位 ）	50+03・94	IX	○	2.4m×0.4m	†169.2m(P)	★	4	22.473-	CH1(NW)に露出して出石 側に點をつけて示す。無く なれば、矢印をつける)	22.577	CH1(NW)に最も長さ 約2.3m露出する。 CH1(北東)に出石。	2.石材2面露 出し。SS1は北東面 に点をつけて示す。無く なれば、矢印をつける。	1個2.5m 高さで最も長い。 R=3.7m露出する。
第 3 文 化 症 地 点 （C 部 位 ）	63+94.	IX	○	4.3×1.3m	†169.2m(P)	★	2	22.720-	CH1(NW)に露出して出石 側に點をつけて示す。無く なれば、矢印をつける)	22.619	CH1(NW)に最も長さ 約2.3m露出する。 CH1(北東)に出石。	2.石材2面露 出し。SS1は北東面 に点をつけて示す。無く なれば、矢印をつける。	1個2.5m 高さで最も長い。 R=3.7m露出する。
第 4 文 化 症 地 点 （D 部 位 ）	63+87・88*	IX	○	6.1m×4.2m	†169.2m(P)	★	53	22.868-	GAI(北西)から北に2.5m 離れて出石。SNIは中央付 近に点をつけて示す。無く なれば、矢印をつける)	22.293	GAI(北西)から北に2.5m 離れて出石。SNIは中央付 近に点をつけて示す。無く なれば、矢印をつける。	3.6m×1.3m GAI(北西)から北に2.5m 離れて出石。SNIは中央付 近に点をつけて示す。無く なれば、矢印をつける。	7個1.5m 高さで最も長い。 R=4.2m露出する。
第 5 文 化 症 地 点 （E 部 位 ）	95+96・97*	IX	○	4.4m×2.1m	†169.2m(P)	★	8	22.846-	RH2(北)に露出して出石 側に點をつけて示す。無く なれば、矢印をつける)	22.423	RH2(北)に露出して出石 側に點をつけて示す。無く なれば、矢印をつける。	4.石材2面露 出し。RH2(北)に露出 して出石。SNIは北東面 に点をつけて示す。無く なれば、矢印をつける。	1個1.5m 高さで最も長い。 R=4.2m露出する。
第 6 文 化 症 地 点 （F 部 位 ）	78+05・13*	IX	○	4.4m×2.1m	†169.2m(P)	★	111	22.653-	RH2(北)に露出して出石 側に點をつけて示す。無く なれば、矢印をつける)	22.515	RH2(北)に露出して出石 側に點をつけて示す。無く なれば、矢印をつける。	4.石材2面露 出し。RH2(北)に露出 して出石。SNIは北東面 に点をつけて示す。無く なれば、矢印をつける。	1個1.5m 高さで最も長い。 R=4.2m露出する。
	24+25	IX	○	9.4m×8.0m	†169.2m(P)	★	120	22.485-	SNS6(3)に最も長さ 約0.7m露出する。 CH1(北東)に出石。	/0.104	SNS6(3)に最も長さ 約0.7m露出する。 CH1(北東)に出石。	4.石材2面露 出し。SNS6(3)に最も 長さ約0.7m露出する。	1個1.5m 高さで最も長い。 R=4.2m露出する。
第 7 文 化 症 地 点 （G 部 位 ）	62+93・70*	IX	○	7.1×7.2×7.3 80	†169.2m(P)	★	3	22.559-	CH1(北東)に最も長さ 約0.7m露出する。 CH1(北東)に出石。	22.595	CH1(北東)に最も長さ 約0.7m露出する。 CH1(北東)に出石。	4.石材2面露 出し。CH1(北東)に最も 長さ約0.7m露出する。	1個1.5m 高さで最も長い。 R=4.2m露出する。

※ 石材種号・岩種類号は第2・3種類。標準層の種号が大きいもの、H1上部への引抜きは大きい。

第4表 石器集中地点一覧-2

文 化 性 を 示す 地 質 層	出土アーチ ド	出土位置	遺物の形態 (に付する文様)	遺物に付する 通字(その他の文様、記号)	平面分布	垂直分布	母岩分布		石材の分布状態	結合状況 生け縫合具	石材種類など 特記事項など
							標高(m) (標高1m =100m)	平均 高 さ (m)	同一岩の分布の実態	プロック切削面数	
東 北 文 化 層	13W-12* 13S-20-22* 22-23-31* 32-24-40* 41-12-43* 44-32	IX	丸形孔 有孔	GA612中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA612中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA612中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA612中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA612中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA612中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA612中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA612中央に丸形孔直径3.5mmの點打
西 北 文 化 層	9 200-70-71	IX	丸形孔 有孔	GA71中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA71中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA71中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA71中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA71中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA71中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA71中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA71中央に丸形孔直径3.5mmの點打
東 北 文 化 層	10 74-83-84	IX-N	丸形孔 有孔	GA84中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA84中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA84中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA84中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA84中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA84中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA84中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA84中央に丸形孔直径3.5mmの點打
東 北 文 化 層	10P-75*	IX-N	丸形孔 有孔	GA75中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA75中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA75中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA75中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA75中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA75中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA75中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA75中央に丸形孔直径3.5mmの點打
東 北 文 化 層	11 86-87-88* 97	IX-N	丸形孔 有孔	GA87中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA87中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA87中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA87中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA87中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA87中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA87中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA87中央に丸形孔直径3.5mmの點打
東 北 文 化 層	11P-05* 06-14-15	IX-N	丸形孔 有孔	GA05中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA05中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA05中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA05中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA05中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA05中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA05中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA05中央に丸形孔直径3.5mmの點打
東 北 文 化 層	12 17K-25* 35-36-45* 55	IX-N	丸形孔 有孔	GA25中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA25中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA25中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA25中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA25中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA25中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA25中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA25中央に丸形孔直径3.5mmの點打
東 北 文 化 層	14 19D-96* 06-07	IX	丸形孔 有孔	GA96中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA96中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA96中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA96中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA96中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA96中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA96中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA96中央に丸形孔直径3.5mmの點打
東 北 文 化 層	15	IX	丸形孔 有孔	GA15中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA15中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA15中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA15中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA15中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA15中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA15中央に丸形孔直径3.5mmの點打	GA15中央に丸形孔直径3.5mmの點打

各石標号と埋蔵場所は第2-3表参照。構成要素の量が大きいほど、出土レベルのバラつきは大きい。

第4表 石器集中地点一覧-4

文 化 ア ル ゴ リ ズ ム 番 号	出土グッド 番号	出土 位置 (標高/北緯度、東經 度) (メートル/度分分秒)	遺物の形態 (複数に渡る場合は、最高 度分分秒で記述)	平面分布 (複数に渡る場合は、最高 度分分秒で記述)	垂直分布 (複数に渡る場合は、最高 度分分秒で記述)	母岩分析		石柱の分布地図 (複数に渡る場合は、最高 度分分秒で記述)	総合状況 (複数に渡る場合は、最高 度分分秒で記述)	
						測定値 (度分分秒 度分分秒)	測定値 (度分分秒 度分分秒)			
第6 文 化 ア ル ゴ リ ズ ム 番 号	6	77°45'55", 56°45'46", 70°46'47", 90°47'36", 85°17'	遺物の形態 (複数に渡る場合は、最高 度分分秒で記述)	平面分布 (複数に渡る場合は、最高 度分分秒で記述)	垂直分布 (複数に渡る場合は、最高 度分分秒で記述)	測定値 (度分分秒 度分分秒)	測定値 (度分分秒 度分分秒)	測定値 (度分分秒 度分分秒)	測定値 (度分分秒 度分分秒)	測定値 (度分分秒 度分分秒)
第22 文 化 ア ル ゴ リ ズ ム 番 号	22	77°45'55", 56°45'46", 70°46'47", 90°47'36", 85°17'	遺物の形態 (複数に渡る場合は、最高 度分分秒で記述)	平面分布 (複数に渡る場合は、最高 度分分秒で記述)	垂直分布 (複数に渡る場合は、最高 度分分秒で記述)	測定値 (度分分秒 度分分秒)	測定値 (度分分秒 度分分秒)	測定値 (度分分秒 度分分秒)	測定値 (度分分秒 度分分秒)	測定値 (度分分秒 度分分秒)
第23 文 化 ア ル ゴ リ ズ ム 番 号	23 (2a)	77°29'29", 68°69'79", 77°21'30", 31°40'41", 50°51'40"	遺物の形態 (複数に渡る場合は、最高 度分分秒で記述)	平面分布 (複数に渡る場合は、最高 度分分秒で記述)	垂直分布 (複数に渡る場合は、最高 度分分秒で記述)	測定値 (度分分秒 度分分秒)	測定値 (度分分秒 度分分秒)	測定値 (度分分秒 度分分秒)	測定値 (度分分秒 度分分秒)	測定値 (度分分秒 度分分秒)
第23 文 化 ア ル ゴ リ ズ ム 番 号	23 (2b)	77°29'29", 58°59", 77°21'30", 31°40'41", 50°51'40"	遺物の形態 (複数に渡る場合は、最高 度分分秒で記述)	平面分布 (複数に渡る場合は、最高 度分分秒で記述)	垂直分布 (複数に渡る場合は、最高 度分分秒で記述)	測定値 (度分分秒 度分分秒)	測定値 (度分分秒 度分分秒)	測定値 (度分分秒 度分分秒)	測定値 (度分分秒 度分分秒)	測定値 (度分分秒 度分分秒)
第23 文 化 ア ル ゴ リ ズ ム 番 号	23	77°29'29", 39°47'38", 49°48'59", 68°49'78", 31°40'41", 50°51'40"	遺物の形態 (複数に渡る場合は、最高 度分分秒で記述)	平面分布 (複数に渡る場合は、最高 度分分秒で記述)	垂直分布 (複数に渡る場合は、最高 度分分秒で記述)	測定値 (度分分秒 度分分秒)	測定値 (度分分秒 度分分秒)	測定値 (度分分秒 度分分秒)	測定値 (度分分秒 度分分秒)	測定値 (度分分秒 度分分秒)

第2節 ブロック

1. 第1文化層

(1) 概要 (第8~10図、第6表、図版3)

第1文化層は第1ブロック1か所が該当する。遺跡中央の平坦面に位置し、石器4点の出土した標高は23.826m~23.913mである。現場所見の出土層位はXI層~VII層であり、断面図への石器投影はIXc層~IXa層に含まれた。生活面はIX層下部にあると考えられる。

(2) 第1ブロック

分布状況

遺跡の中央部にあたる16M-10グリッドを中心とした2.4m四方に、4点が出土した。総重量は91.73gである。内訳は珪質頁岩の剥片(石刃)3点、黒曜石の石核1点である。高原山甘湯沢群産の黒曜石と高原山南部に産する珪質頁岩のセット関係から、下野北総回廊を通って持ち込まれたものである可能性が高い。

また、高原山産の黒曜石と、栃木県西荒川上流の寺島累層産の珪質頁岩で作られた石刃が共伴する遺跡には柏市中山新田I遺跡があり、環状ブロック群内において、珪質頁岩は遺跡内で素材礫からの石刃生産、黒曜石は一般的な剥片剥離が行われていたことが報告されている。

出土石器

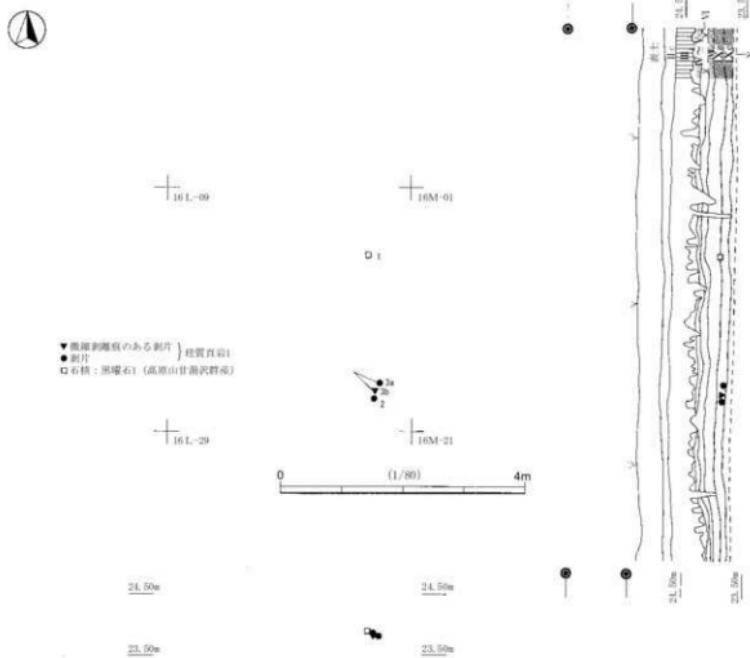
1は石核である。直径1mm~4mmほどの夾雜物が万遍なく入り、ざらついた自然面が残る高原山甘湯沢群産の黒曜石を素材とする。厚みのある剥片の主要剥離面を打面として、剥離作業が行われている。

2は剥片、3は接合資料であり、ともに珪質頁岩Iを母岩とする。自然面は光沢があり、つるつるとした質感である。剥離面の色調は淡緑灰~濃褐色であり、くつきりとした色の境がある。栃木県を流れる那珂川の支流、西荒川の上流部に分布する寺島累層からもたらされた石材である可能性が現在のところもつとも高い。

2・3a・3bは長さが幅の2倍以上を測り、両側縁が平行に走る、いわゆる石刀を素材とした剥片類である。頭部調整が行われており、管理された打面から規則的に剥離されたことがわかる。各々厚みは10.0mm~13.5mm、長幅比は2.3~2.9である。3bの両側縁には微細な刃こぼれが見られる。3点のうち2点で接合関係がみられ、残る1点も極めて近い剥離工程で剥離されたものと思われるが接合せず、遺跡内では剥片生産に伴う碎片や石核などは確認されなかった。



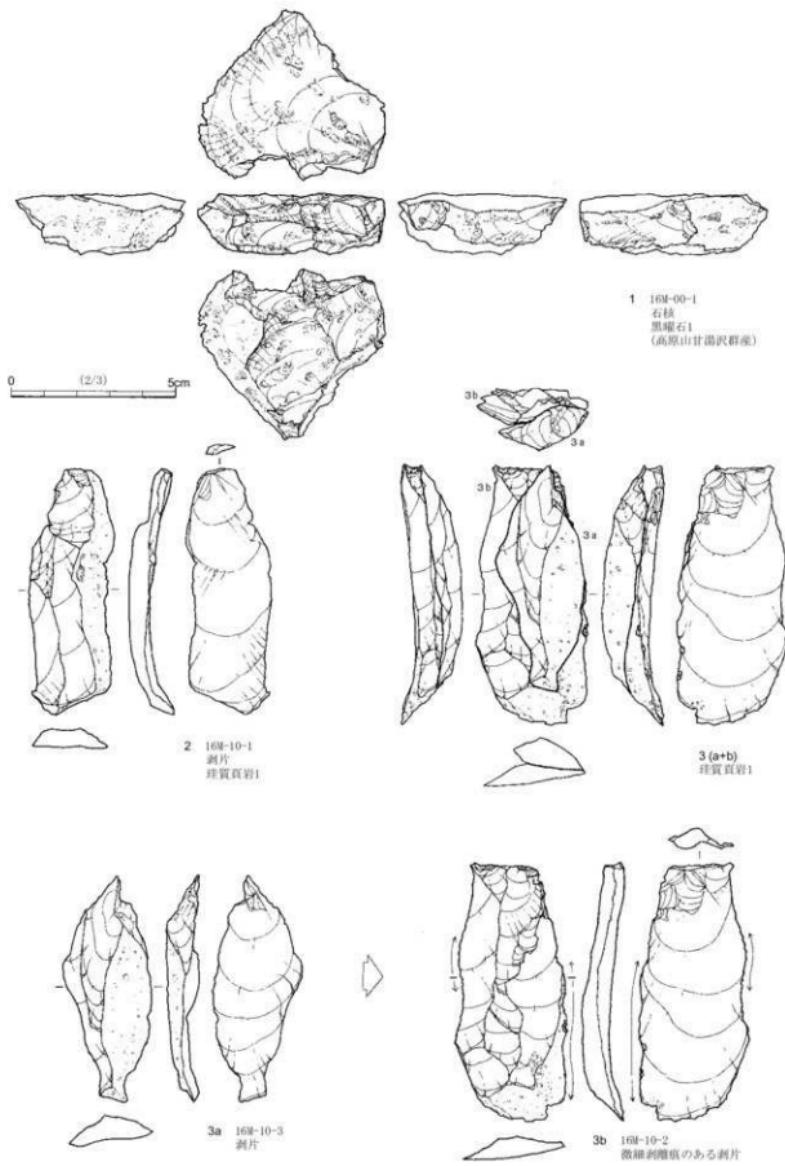
第8図 第1文化層ブロック位置図



第9図 第1文化層第1ブロック石器分布

第6表 第1文化層第1ブロック組成表

母岩 / 器種	微細剝離痕 のある剥片	剥片	石核	点数	点数比	重量(g)	重量比
黒曜石 I 高原山甘湯沢群産	0	0	1	1	25.0%	42.58	46.42%
珪質頁岩 I	1	2	0	3	75.0%	49.15	53.58%
合計	1	2	1	4	100.0%	91.73	100.0%



第10図 第1文化層第1ブロック出土石器

2. 第2文化層

(1) 概要 (第11~39・89図、第7~15表、図版3・9~11)

第2文化層は第2~9ブロック8か所が該当する。これらは遺跡の北、東、南に200m以上の距離を持つて3地点に分けられるが、比較的安定した平坦面に立地する。石器は標高21,900m~23,848mに319(332)点が分布する。現場所見の出土層位はIX層であり、断面図への石器投影もまたIX層に包含された。生活面はIX層中部にあると考えられる。器種組成

はナイフ形石器2点、削器2(3)点、二次加工のある剥片9点、微細剥離痕のある剥片39(40)点、剥片199(209)点、碎片30点、石核23(24)点、敲石1点、礫片14点である。石材組成はガラス質黒色安山岩172(178)点、トロトロ石2点、流紋岩16点、黒曜石2点、緑色凝灰岩3点、珪質凝灰岩4点、砂岩4点、頁岩5点、珪質泥岩7点、珪質頁岩27(29)点、ホルンフェルス1点、チャート68(72)点、玉髓7(8)点、不明1点である。なお、数字に続く括弧内は出土した石片の数を示す(以下同様)。

第3~7ブロックからは177(188)点が出土しており、ブロック間で共通する母岩や接合関係が認められる。平面分布上の空白部を目安にブロックを括り、各々の組成表を作成した。また、単体で出土した器種を優先させて作図したため、後続する接合図中に主要な器種を含んでいるものがあ

る。第13・14図は第3~6ブロック、第18~20図に第7ブロックの分布図を掲載した。

なお、第13図以降、本文中と図中に接201、接202…と記載したが、接合した資料に便宜的に番号を付したものであり、百番台の数字は文化層を示している。

(2) 第2ブロック (第12図、第7表、図版3・9)

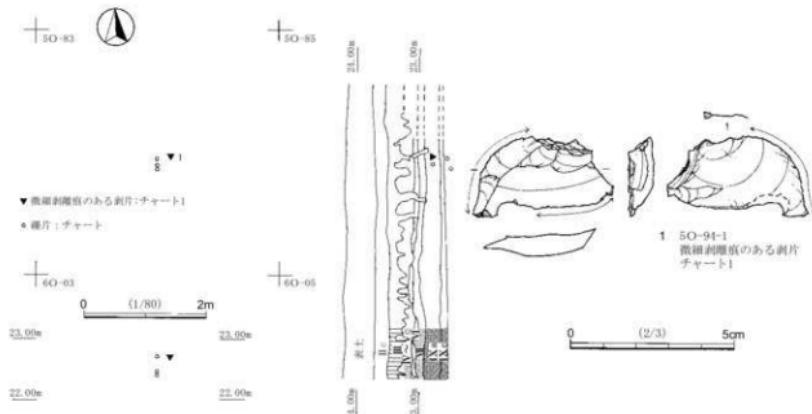
分布状況と出土石器

50~93・94グリッドに位置し、標高は22,473m~22,713mである。直径0.4mの範囲内から、微細剥離痕のある剥片1点と礫片3点が出土した。礫片は風化した角礫状であり、人為的な痕跡は見いだせなかつた。石材はすべてチャートである。

Iは微細剥離痕のある剥片である。緑色を帯びた濃灰色のチャートIを母岩とする。左側縁と下縁辺に微細剥離痕がみられるが、下縁辺は器厚が薄く、調査時の欠損(以降、ガジリと記す)によって使用痕跡の一部が途切れている。



第11図 第2文化層ブロック位置図



第12図 第2文化層第2ブロック石器分布・出土石器

第7表 第2文化層第2ブロック組成表

母岩 / 器種	微細剥離痕のある剥片	剥片	点数	点数比	重量(g)	重量比
チヤート1	1	0	1	25.00%	6.52	14.92%
チヤート2	0	1	1	25.00%	14.86	34.00%
チヤート3	0	1	1	25.00%	5.03	11.51%
チヤート4	0	1	1	25.00%	17.30	39.58%
合計	1	3	4	100.00%	43.71	100.00%

(3) 第3~6ブロック (第13~17図、第8~12表、図版3・9・10)

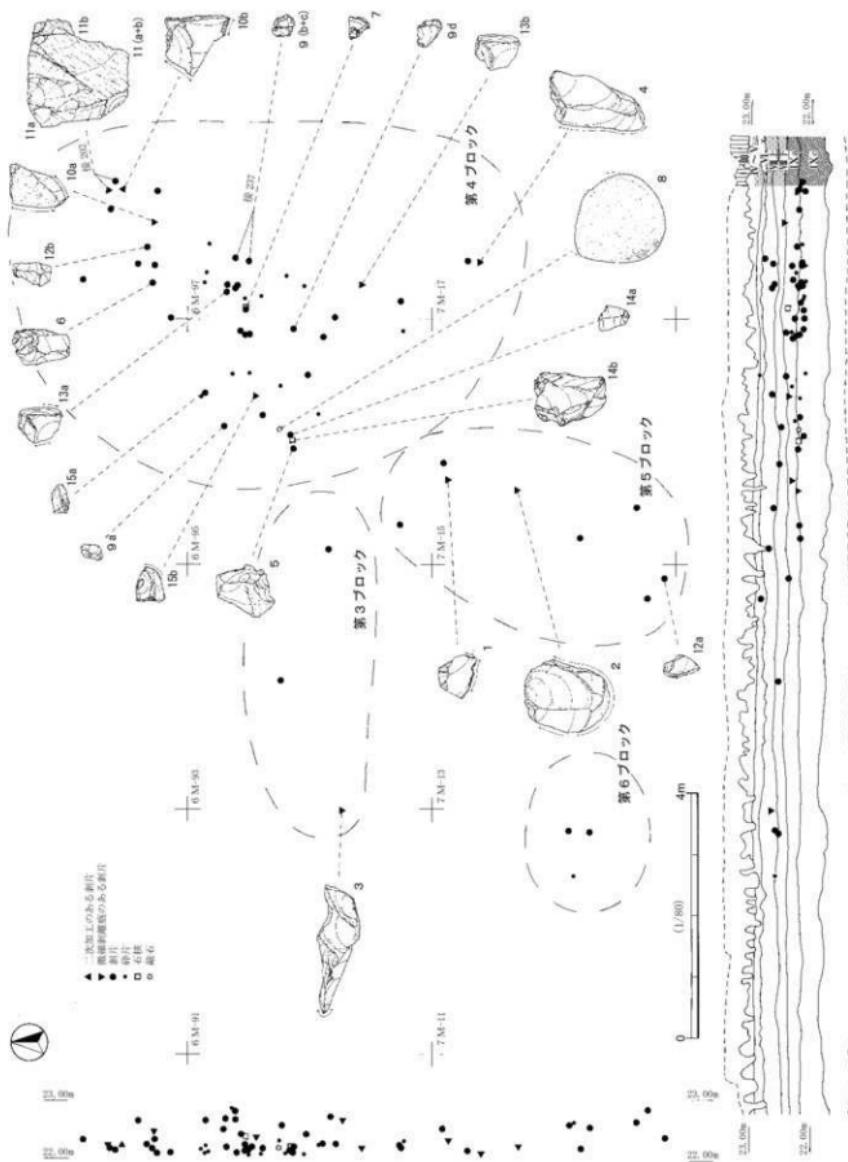
分布状況

遺跡の北側に位置し、谷が入り込む台地縁辺部の長径14.5m、短径7.9mの範囲内に、4か所のブロックが集中する。ブロック名は北西を第3ブロックとし、以下順に時計回りで付した。石器が出土したグリッドは6M-87・88・94~97、7M-02・05・06・07・15・17・22・24・25であり、標高22.114m~22.868m、高低差0.754mの間に66(68)点が出土した。器種内訳は、二次加工のある剥片1点、微細剥離痕のある剥片8点、剥片38(40)点、碎片16点、石核2点、敲石1点である。石材組成は、ガラス質黒色安山岩28(29)点、流紋岩13点、緑色凝灰岩1点、砂岩2点、珪質泥岩7点、珪質頁岩6点、ホルンフェルス1点、珪質凝灰岩3点、玉髓5(6)点である。

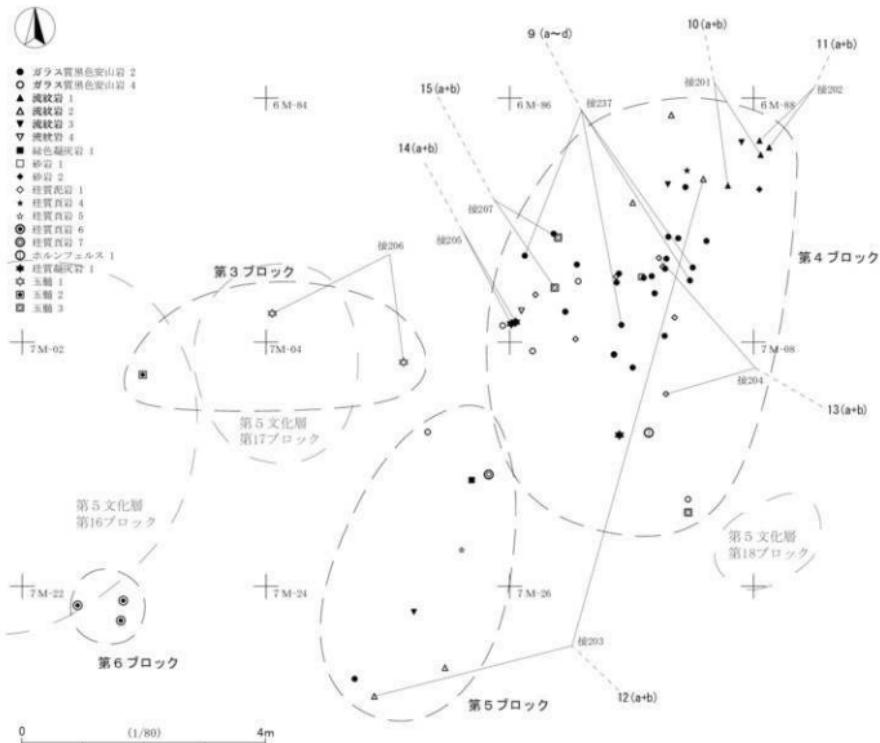
第4・第5ブロックでは合わせて9石材16母岩が確認された。このうち2石材4母岩が共通し、ブロック間で接合関係がみられる。第3・6ブロックは、それぞれ単一の石材で構成される。

出土石器

1~4は微細剥離痕のある剥片である。1の母岩である緑色凝灰岩1は油脂状光沢のある緑褐色であり、均質で滑らかな剥離面を持つ。右・末端縁辺に細かな潰れ状の剥離痕が並ぶ。2は珪質頁岩5を母岩とす



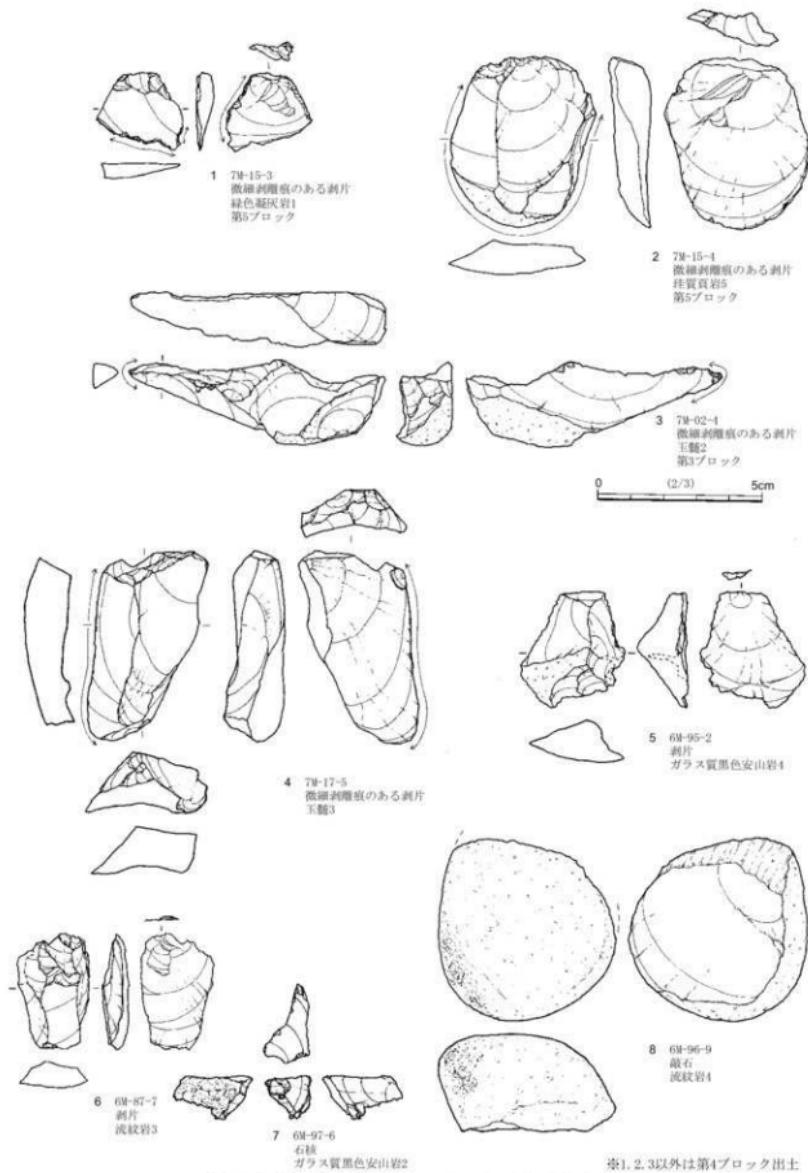
第13図 第2文化層第3～6ブロック器種別分布



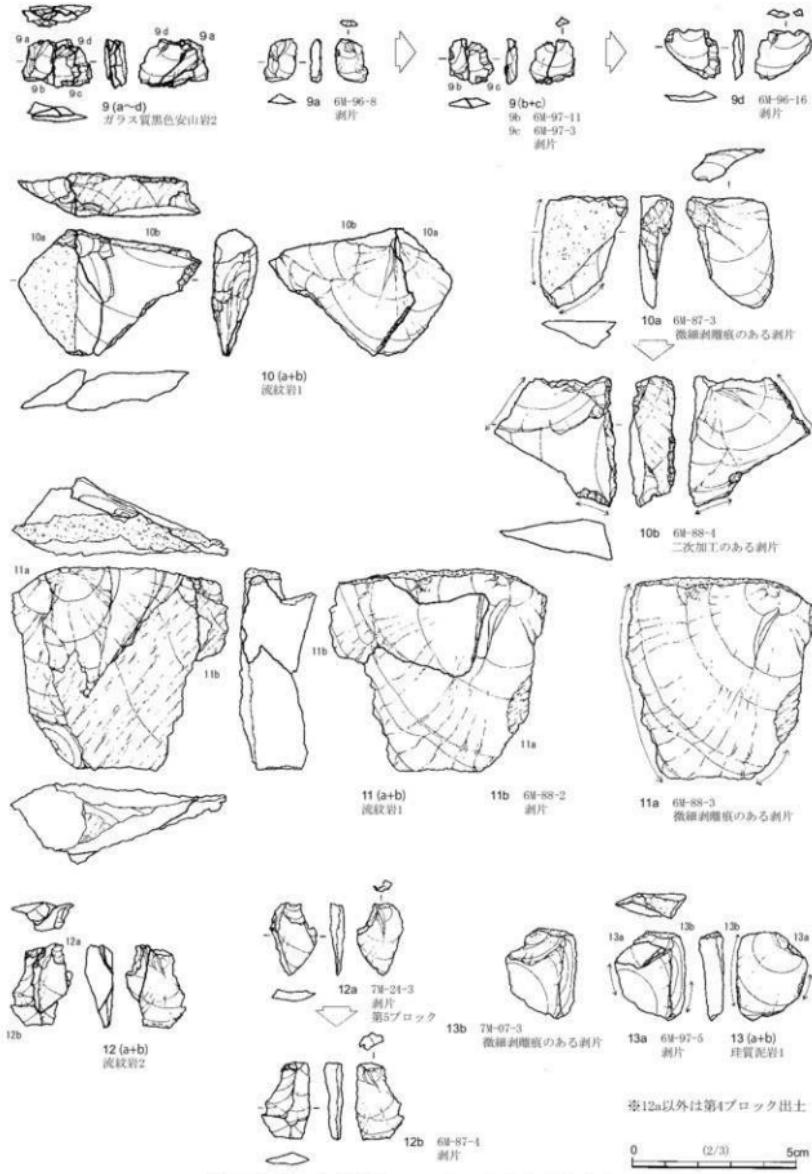
第14図 第2文化層第3～6ブロック母岩別分布

る。自然面は光沢のある灰褐色だが、剥離面は漆黒で光沢はない。同じ打面から3片以上が剥離されたうちの1片であり、全体形状は楕円形である。弧状の縁辺は37°～50°であり、微細剝離痕が並ぶ。3の母岩は玉髓2であり、自然面は明黄褐色、剥離面は白色半透明である。左端部の断面は三角形状を呈し、尖端に剥落と潰れが観察される。錐、あるいは刺突具として用いられた可能性がある。4の玉髓3は灰白色の濃淡が同心円を描き、均質緻密な質感である。調整された打面を持つ。打撃時の衝撃で右側面は大きなバルバースカーとなり、主要剥離面が切られている。32°～35°の薄い左縁辺に微細な刃こぼれが並ぶ。

5・6は剥片である。5のガラス質黒色安山岩4の剥離面は青みがかった灰色だが、ガジリ部分は漆黒で、細かい斑晶が万遍なく入る。石器の背面には自然面のほか、多方向からの剥離痕がみられるが、周縁は風化により欠けている。6は流紋岩3が母岩である。剥離面は緑色を帯びた青灰色、ガジリ部分は濃灰色であり、石英粒の斑晶がみられる。一方向から規則的に剥離されたうちの1片であり、線状打面を持つ。



第15図 第2文化層第3～6ブロック出土石器（1）



第16図 第2文化層第3~6ブロック出土石器(2)

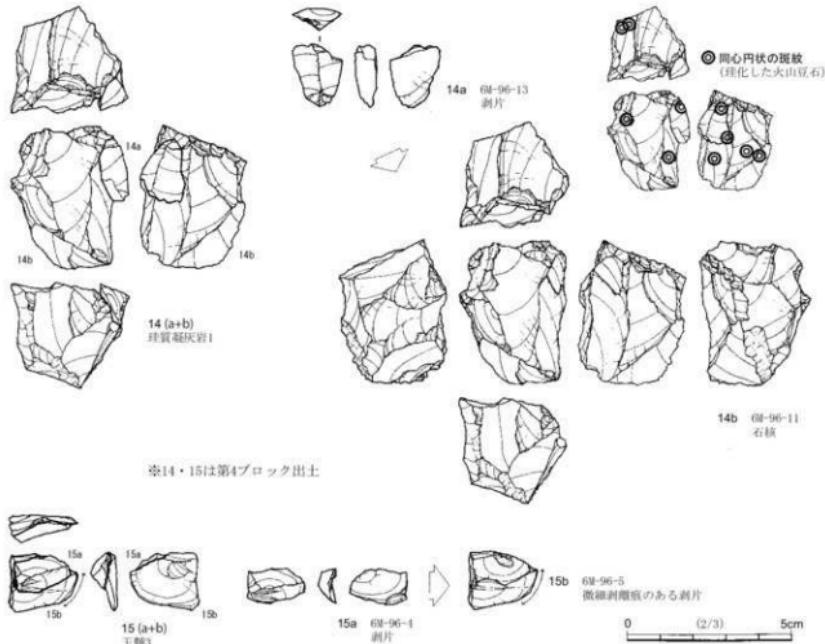
7は石核である。全体的に青みがかった濃灰色であり、自然面はクレーター状の凹凸があるガラス質黒色安山岩2を母岩とする。素材剥片の平坦面を打面として、小型の剥片作出が行われたものである。

8は蔽石である。剥離面は灰白色で直径0.1mm~2.0mmの薄緑色の斑晶が万遍なく入り、自然面は明るい黄褐色の流紋岩4が母岩である。器面端部にざらざらとした敲打痕がみられる。上部は遺存しない。

9~15は接合資料である。9(接237)はガラス質黒色安山岩2の小片4点が接合した。4点とも、打面は小さく器厚が薄い。加工痕・使用痕はなく、何らかの石器を調整するための剥片であろう。10、11は流紋岩1を母岩とする。自然面は淡黄白色で、平坦で滑らかである。節理面は黄土色、剥離面は灰白色と淡黄白色のツートーンであり、直径1.0mmの石英粒を含む。

10(接201)は、二次加工のある剥片と剥片の接合資料であり、2点の距離は約0.8mである。打点直下で折れた剥片の片方には二次加工が施されているが、もう一方は使用痕のみが観察される。10bの加工痕は背面の末端と側縁に線状に並び、両面に及ぶものではない。剥離加工後には磨り潰し(グラインディング)による調整も行われたようであり、潰れ痕が直線状に並ぶ。

11(接202)は2点接合しているが11a剥離時の衝撃で11bが剥落したものであろう。帶状の自然面打面には背腹両面に複数の打点が残っており、剥片剥離に至らずに、打瘤が内包されたものと思われる。11aの側縁には刃こぼれがみられる。



第17図 第2文化層第3~6ブロック出土石器(3)

12(接203)は流紋岩2を母岩とする剥片2点の接合資料である。第4ブロックと第5ブロック間で約10mの距離を持って接合する。流紋岩2は緑色を帯びた灰白色で、微小な斑晶を含む。6M-87グリッドに3点、7M-24・25グリッドに2点の計5点が分布する。接合した2点は同一打面から剥離され、12a剥離前に1片以上、後に2片が剥離される。使用痕・加工痕はみられない。

13(接204)は、淡い緑灰色で鈍い光沢を持つ珪質泥岩1を母岩とする。第4ブロックでは7点が分布する。資料は微細剥離痕のある剥片と剥片が接合したものであり、13aと13bの間の距離は2.3mである。13bの左右縁辺に刃こぼれがみられる。13aは13bの調整剥片であろう。

14(接205)の母岩は珪質凝灰岩1である。緑色の珪質な石材であり、実体顕微鏡では石英粒が確認できた。第17図の◎部分は直径5mm~10mmの同心円状斑紋で、当初、何らかの化石であろうと推測されていたが、珪化した火山豆石^{註1)}であることが判明した。第7ブロックから出土した10と同一母岩である。丁寧に調整された打面からは複数の剥片が剥離され、荒れた器面は別方向からの打撃によって整えられている。14aは石核を上下に持ちかえた後で剥離されたものである。

15(接207)は水和層が発達した玉髓3が母岩である。剥片と微細剥離痕のある剥片の接合資料であり、15b縁辺には刃こぼれがみられる。玉髓3はブロック内に3点出土しており、約5.5m南には4が分布する。

第8表 第2文化層第3ブロック組成表

母岩 / 器種	微細剥離痕 のある剥片	剥片	点数	点数比	重量(g)	重量比
玉 鏽 1	0	1(2)	1	66.67%	3.35	12.82%
玉 鏽 2	1	0	1	33.33%	22.79	87.18%
合 計	1	1	2(3)	100.00%	26.14	100.00%

第9表 第2文化層第4ブロック組成表

母岩 / 器種	二次加工の ある剥片	微細剥離痕 のある剥片	剥片	碎片	石核	離石	点数	点数比	重量(g)	重量比
			剥片	碎片	石核	離石				
ガラス質黒色安山岩 2	0	0	9(10)	11	1	0	21	40.74%	6.60	2.03%
ガラス質黒色安山岩 4	0	0	3	2	0	0	5	9.26%	13.93	4.28%
流 紋 岩 1	1	2	1	0	0	0	4	74.1%	87.38	26.86%
流 紺 岩 2	0	0	3	0	0	0	3	55.6%	11.64	3.56%
流 紺 岩 3	0	0	2	0	0	0	2	37.0%	6.25	1.92%
流 紺 岩 4	0	0	0	0	0	1	1	18.5%	107.08	32.92%
砂 岩 1	0	0	1	0	0	0	1	18.5%	0.33	0.10%
砂 岩 2	0	0	1	0	0	0	1	18.5%	0.14	0.04%
珪 質 疣 岩 1	0	1	5	1	0	0	7	12.96%	8.71	2.66%
珪 質 疣 岩 4	0	0	1	0	0	0	1	18.5%	0.55	0.17%
ホルンフェルス 1	0	0	1	0	0	0	1	18.5%	3.38	1.04%
珪 質 凝 灰 岩 1	0	0	1	1	1	0	3	55.6%	47.29	14.54%
玉 鏽 3	0	2	1	0	0	0	3	55.6%	32.03	9.85%
合 計	1	5	29	15	2	1	53(54)	100.00%	325.31	100.00%

第10表 第2文化層第5ブロック組成表

母岩 / 器種	微細剥離痕 のある剥片	剥片	点数	点数比	重量(g)	重量比
ガラス質黒色安山岩 2	0	1	1	12.50%	0.53	1.66%
ガラス質黒色安山岩 4	0	1	1	12.50%	0.11	0.34%
流 紺 岩 2	0	2	2	25.00%	1.95	6.11%
流 紺 岩 3	0	1	1	12.50%	0.99	3.10%
綠 色 凝 灰 岩 1	1	0	1	12.50%	2.69	8.42%
珪 質 疣 岩 5	1	0	1	12.50%	25.45	79.71%
珪 質 疣 岩 7	0	1	1	12.50%	0.21	0.66%
合 計	2	6	8	100.00%	31.93	100.00%

第11表 第2文化層第6ブロック組成表

母岩 / 器種	剥片	碎片	点数	点数比	重量(g)	重量比
珪 質 疣 岩 6	2	1	3	100.00%	6.53	100.00%
合 計	2	1	3	100.00%	6.53	100.00%

* () は出土点数

第12表 第2文化層第3～6 ブロック組成表

母岩 / 器種	二次加工の ある剥片	微細剥離痕 のある剥片	剥片	碎片	石核	駿石	点数	点数比	重量(g)	重量比
ガラス質黒色安山岩 2	0	0	10(11)	11	1	0	22	33.82%	713	1.83%
ガラス質黒色安山岩 4	0	0	4	2	0	0	6	8.82%	14.04	3.60%
流紋岩 1	1	2	1	0	0	0	4	5.88%	87.38	22.41%
流紋岩 2	0	0	5	0	0	0	5	7.35%	13.59	3.49%
流紋岩 3	0	0	3	0	0	0	3	4.41%	7.24	1.88%
流紋岩 4	0	0	0	0	0	1	1	1.47%	107.08	27.46%
緑色凝灰岩 1	0	1	0	0	0	0	1	1.47%	2.69	0.69%
珪質凝灰岩 1	0	0	1	1	1	0	3	4.41%	47.29	12.13%
砂岩 1	0	0	1	0	0	0	1	1.47%	0.33	0.08%
砂岩 2	0	0	1	0	0	0	1	1.47%	0.14	0.04%
珪質泥岩 1	0	1	5	1	0	0	7	10.29%	8.71	2.23%
珪質頁岩 4	0	0	1	0	0	0	1	1.47%	0.55	0.14%
珪質頁岩 5	0	1	0	0	0	0	1	1.47%	25.45	6.53%
珪質頁岩 6	0	0	2	1	0	0	3	4.41%	6.53	1.67%
珪質頁岩 7	0	0	1	0	0	0	1	1.47%	0.21	0.05%
ホルンフェルス 1	0	0	1	0	0	0	1	1.47%	3.38	0.87%
玉髓 1	0	0	1(2)	0	0	0	1	2.94%	3.35	0.86%
玉髓 2	0	1	0	0	0	0	1	1.47%	22.79	5.84%
玉髓 3	0	2	1	0	0	0	3	4.41%	32.03	8.21%
合計	1	8	38	16	2	1	66(68)	100.00%	389.91	100.00%

(4) 第7ブロック (第18～31図、第13表、図版3・9・10)

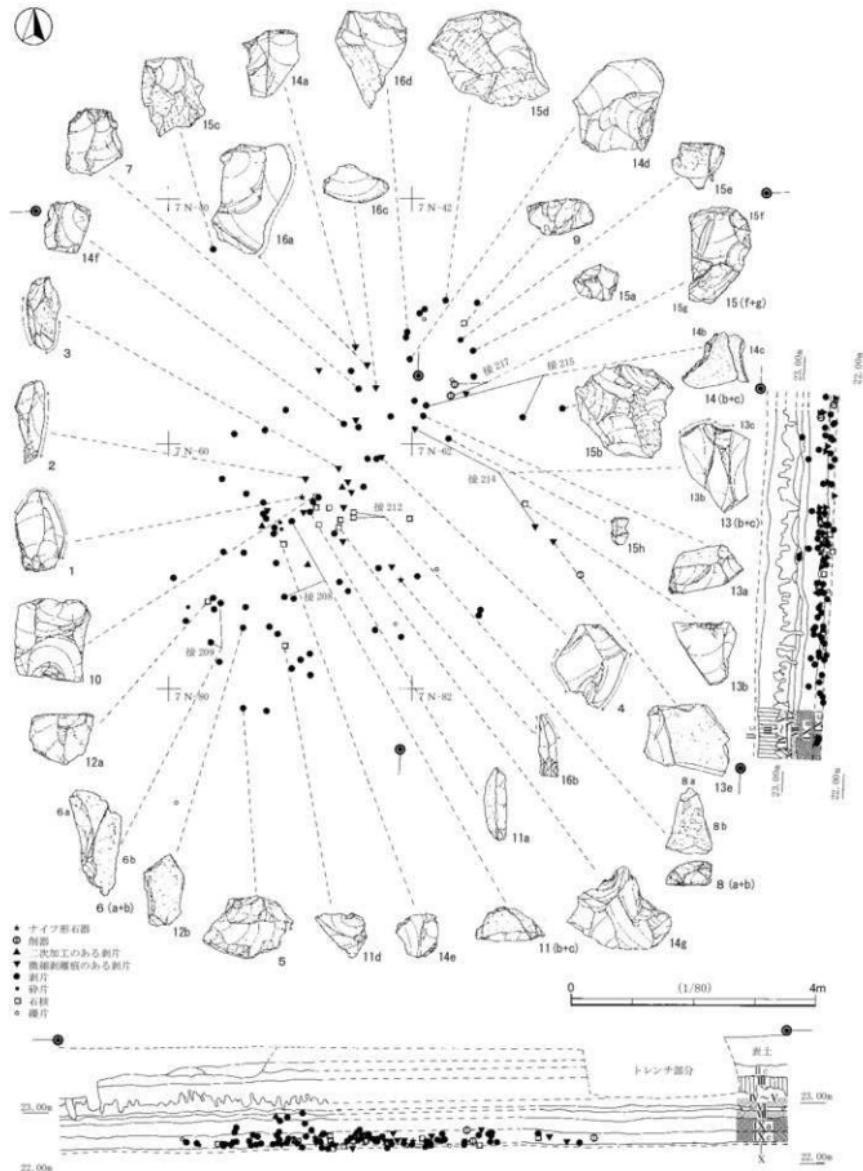
分布状況

石器は7N-40・42・50～53・60～63・70～73・80グリッドの直径約8.5mの範囲内から112(121)点が出土し、標高22.363m～22.953mに含まれる。器種の内訳はナイフ形石器2点、削器2(3)点、二次加工のある剥片3点、微細剥離痕のある剥片18(19)点、剥片64(70)点、碎片3点、石核13(14)点、礫片6点である。石材組成はガラス質黒色安山岩28(31)点、トロトロ石1点、流紋岩3点、頁岩2点、珪質頁岩12(14)点、珪質凝灰岩1点、チャート64(68)点であり、全20母岩を数える。出土遺物の約59%が接合した。ガラス質黒色安山岩、流紋岩、珪質凝灰岩など、第3～6ブロックと第7ブロックとは同じ母岩の組成だが、接合関係はブロック内のみに留まり、ブロック間接合はない。

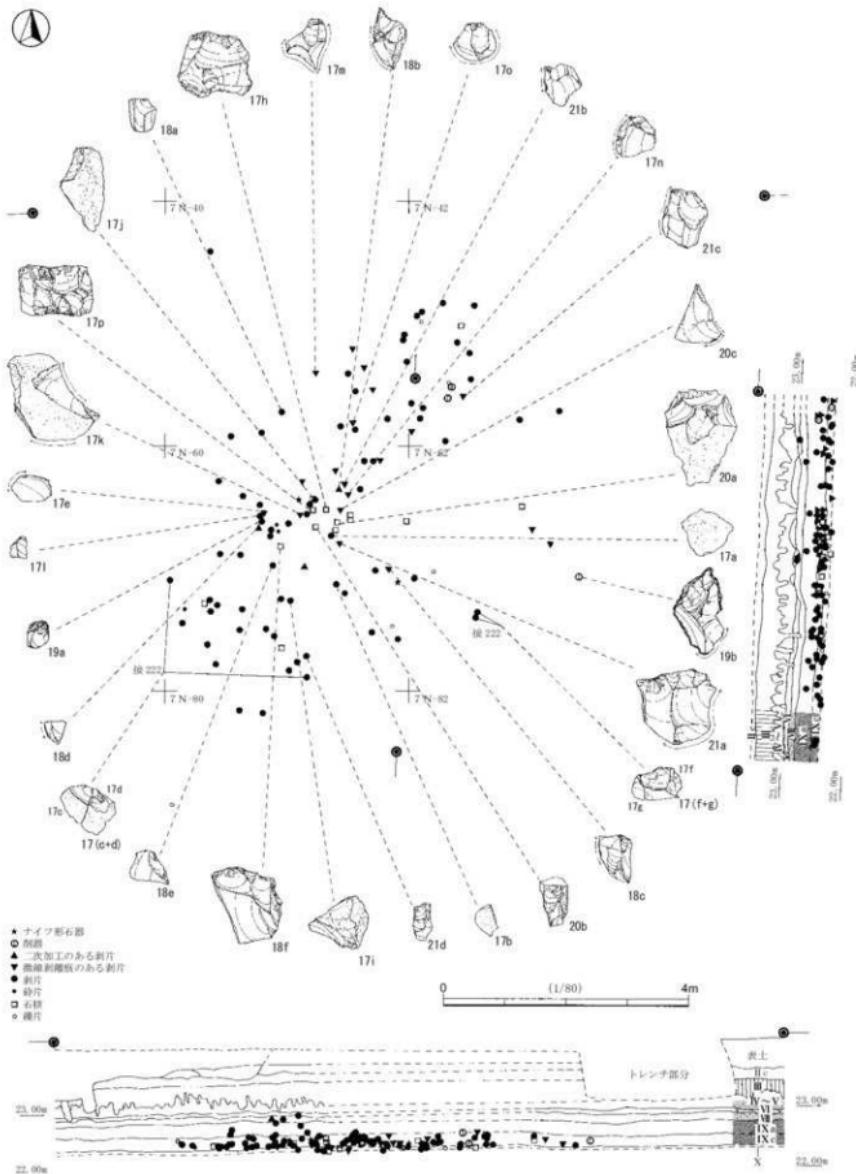
出土石器

1はナイフ形石器である。母岩は淡緑色を基調とし、三日月形の灰色斑が鱗状に連なるチャート2である。素材剥片の片側に主要剥離面側から73°～84°の加工が施される。右刃部は約40°、左刃部は24°であり、刃こぼれが観察される。先端部にある潰れたような痕は、欠けた後の使用によるものであろう。

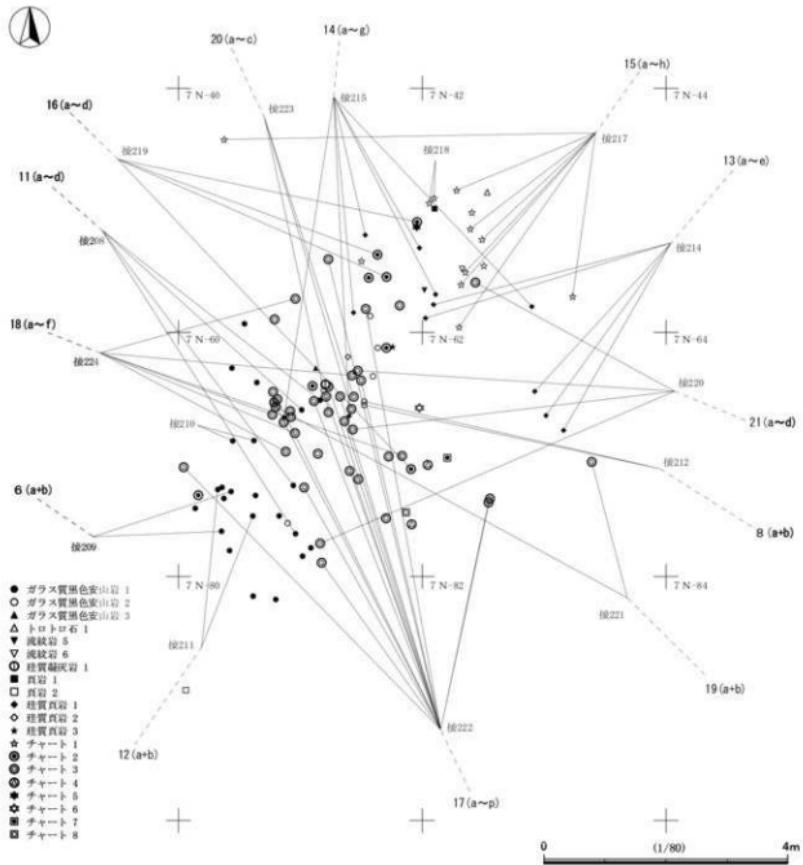
2～4は微細剥離痕のある剥片である。2のガラス質黒色安山岩3は、剥離面の黒みが強く斑晶は少ない。板状に剥かれ傾向がある。平坦打面から複数枚剥離された縦長剥片のうちの1片であり、右側縁に微細な剥離痕が並ぶ。3の珪質頁岩2は淡い褐色を帯びた灰白色であり、細粒緻密で一部光沢を持つ。両側縁はほぼ平行、薄い縁辺には微細な刃こぼれがみられるが、65°の角度を持つ左側縁の刃こぼれの方がより顕著である。4の珪質頁岩3は褐灰色で細粒緻密である。平坦打面から剥離され、菱形を呈する。両側縁には微細剥離痕がみられる。



第18図 第2文化層第7ブロック器種別分布（チャート3を除く）



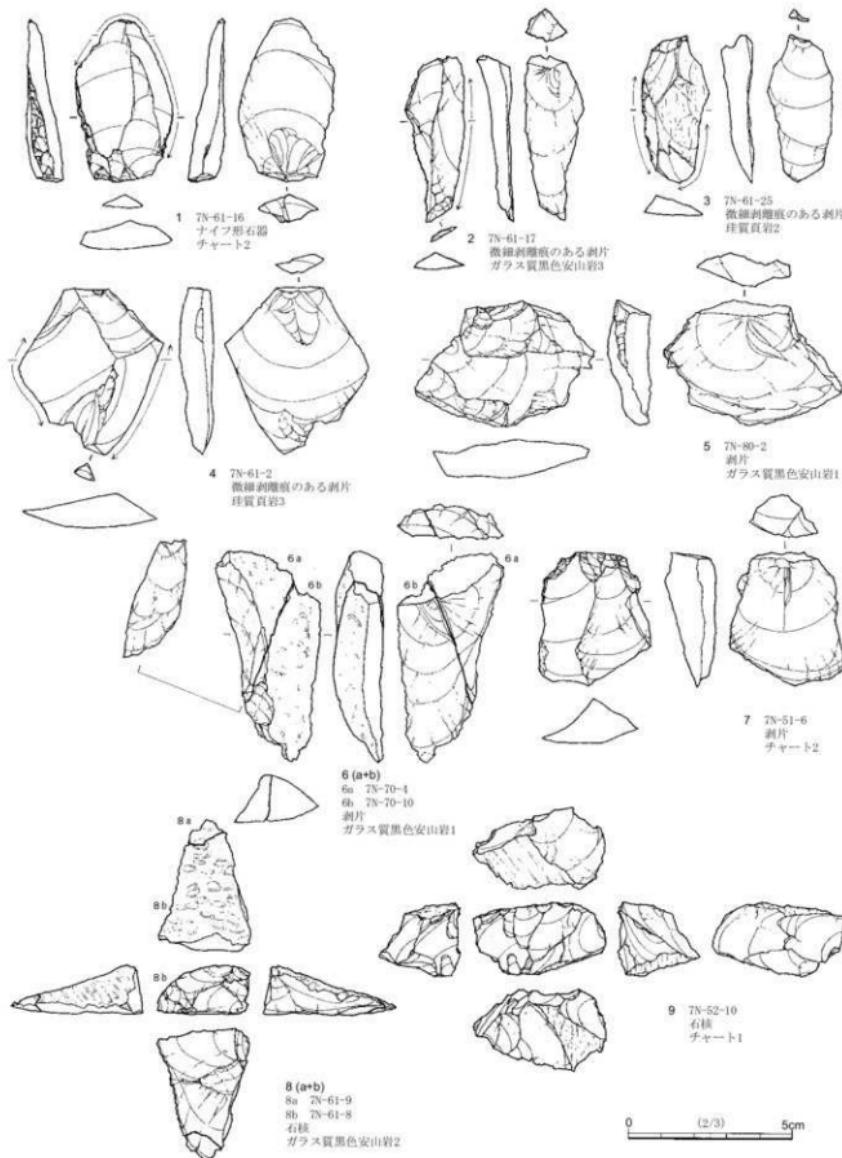
第19図 第2文化層第7ブロック器種別分布 (チャート3)



第20図 第2文化層第7ブロック母岩別分布

5~7は剥片である。5・6の母岩はガラス質黒色安山岩1であり、剥離面はやや黄色かかっているがガジリは濃い灰色である。斑晶は直径1mm前後の白色である。左方向から4枚以上の剥離痕が観察されることから、5は、器面を調整する目的で剥離されたものと思われる。縁辺には細かな凹凸がみられるが、風化によるものか。6は剥離面打面から自然面を削ぎ取るよう剥離されるが、打点直下で折れたものである。使用痕・加工痕はみられない。7は緑色を帯びた灰白色で、砂粒を含むチャート2を母岩とする。縁辺の細かな凹凸は器厚の薄さとフィッシャーによるものであり、使用痕ではないと判断した。

8~10は石核である。8のガラス質黒色安山岩2の自然面はクレーター状であり、灰黒色の剥離面はわずかに青色を帯びる。分割された礫端片を素材とし、小口面からの打撃により剥離作業が行われている。9はチャート1が母岩であり、発達した節理面のため剥離方向が不明瞭である。比較的平坦な上面を打面



第21図 第2文化層第7ブロック出土石器（1）

として長辺側が剥離される。10は第4ブロックに分布する14と同一母岩である。棒柱状礫をいくつかに分割したものが素材であり、いずれの分割面も打面に設定され、貝殻状の剥離痕が残されているが、作出されたであろう剥片は遺跡内からは検出されていない。持ち出されたか、石核のみが遺跡に搬入されたことが推測される。第4ブロック出土の14同様、斑部分を◎で示した³¹⁾。

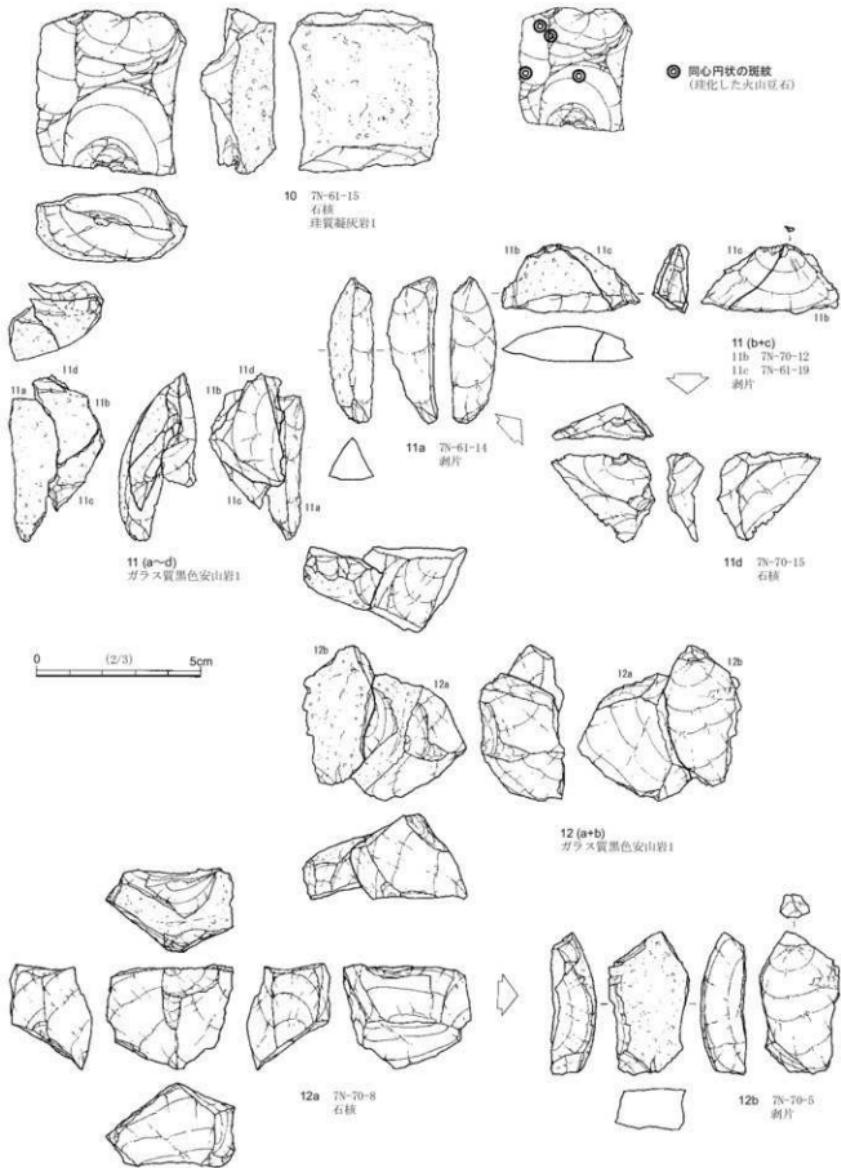
11～21は接合資料である。11・12の母岩は濃灰色のガラス質黒色安山岩1である。原礫面のカーブから想定される大きさは、直径10cmほどであろうか。11(接208)は直径2.2mの円内の4点が接合した。11aと11b+11cは同一工程上にある剥片であり、11dには剥離後の加工や折れがみられる。12(接211)の2点の出土位置は0.7mと至近であるが、早い段階で別個体に分かれしており、新旧関係は不明である。12aは石核、12bは剥片である。

13・14は、剥離面・自然面とも緑色を帯びた褐色の珪質頁岩1が母岩である。原石は拳大ほどであろう。13(接214)の接合した5点は約3mの線状に分布する。厚みのある大型の剥片が素材であり、側縁や下縁辺に残る二次加工痕や抉入部分にみられる刃こぼれ・光沢は、素材時のものか否かの判別が困難である。13a～13eを含む剥片素材の自然面から13aが、左部の剥離面から13b+13cが剥離される。次に右側面の自然面から敲打された衝撃により、13dが剥がれたものと思われる。14(接215)は、13と同一母岩であるが、砂粒を含み油脂状光沢を持つ部位がある。珪質頁岩1の剥離工程終盤の資料である。接合した7点は7N-51・52グリッドを中心とした南北1.9m、東西4.5mの範囲に分布し、14gはこのまとまりの南方から出土した。剥離工程の手順であるが、まず剥離面打面から14aが剥離され、同じ打面から剥がされた剥片の剥離面を打面として14b+14cが剥離される。この後、自然面から14d、14e、14fが順に剥がされる。14gの石核は裏面からの加工により尖端が作出され、三つ目錐のような形状を示すが、使用痕や細かな調整痕はみられない。石錐を意図したような機能部を持つため、凸部を上方にして作図を行った。

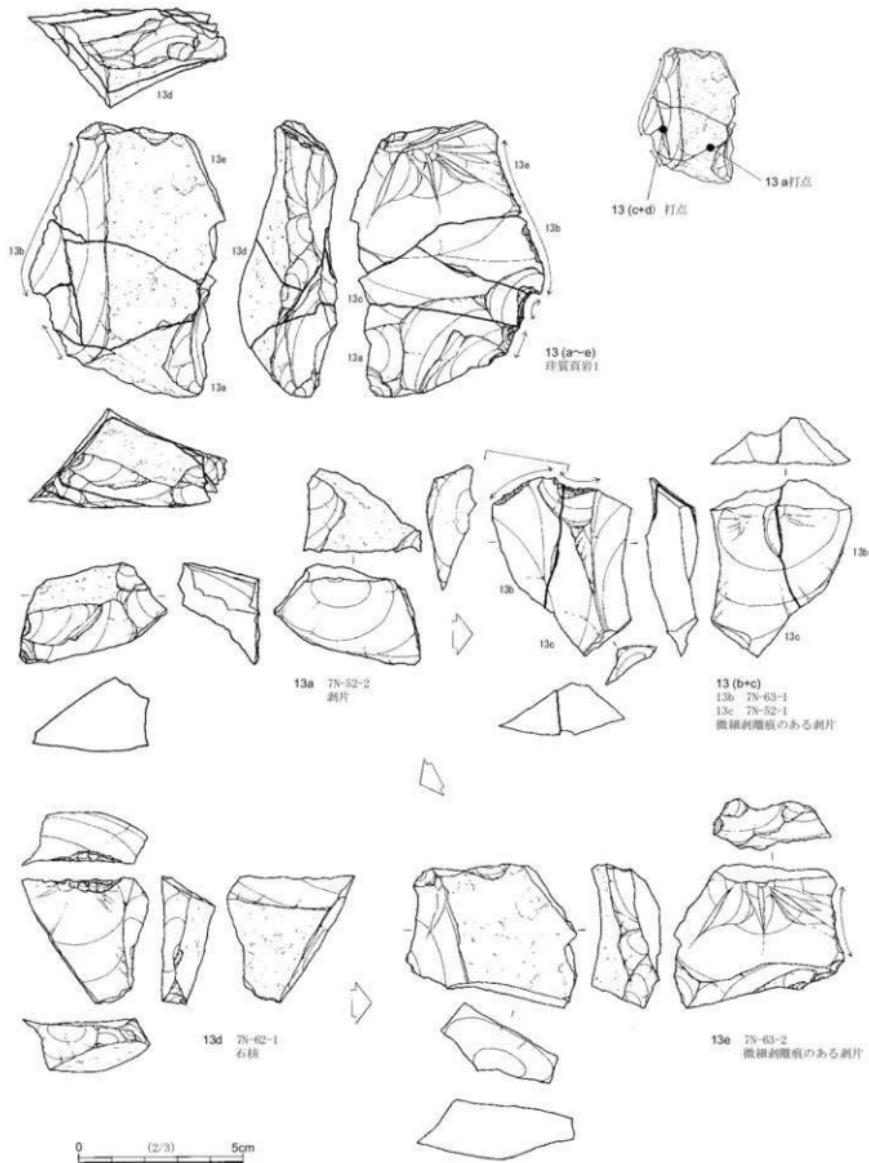
15(接217)はチャート1が母岩である。6m四方に8点が分布する。素材塊の外皮を剥がすように15a+15b、15c、15d、15e、15f+15g+15hが順に剥離される。15a・15bには鉄錆のような茶褐色の節理面が目立つ。15b背面に残る剥離痕の1つに15aが接合する。厚みが比較的均一で節理面の少ない削器15f+15gは一側縁が56°～70°に加工される。15hは削器調整剥片である。

16(接219)の節理面は褐色、剥離面は緑灰色を基調として濃灰色の線が筋状に入るチャート2が母岩である。珪化して光沢を持つ部分と砂質部分が混在する。厚みのある素材塊を石核として、多方向からの打撃により剥離作業が行われている。16a、16c、16dは7N-51グリッドの1m内に3点がまとまって分布しているが、16bのナイフ形石器はこのまとまりから南に約3.5m離れた7N-71グリッドから出土した。素材打面付近は砂粒が粗く、基部調整は明確ではない。刃部に微細な刃こぼれと赤く変色している部分がある。接合する16dには看取されないことから、剥離後に被熱した可能性が高い。先端部はわずかに欠ける。16cは16d剥離と同時に弾けたものであり、展開図は16dに準じた。微細な刃こぼれ痕と接合面の隙間から、広縁は刃器として使用されたことが確認できる。

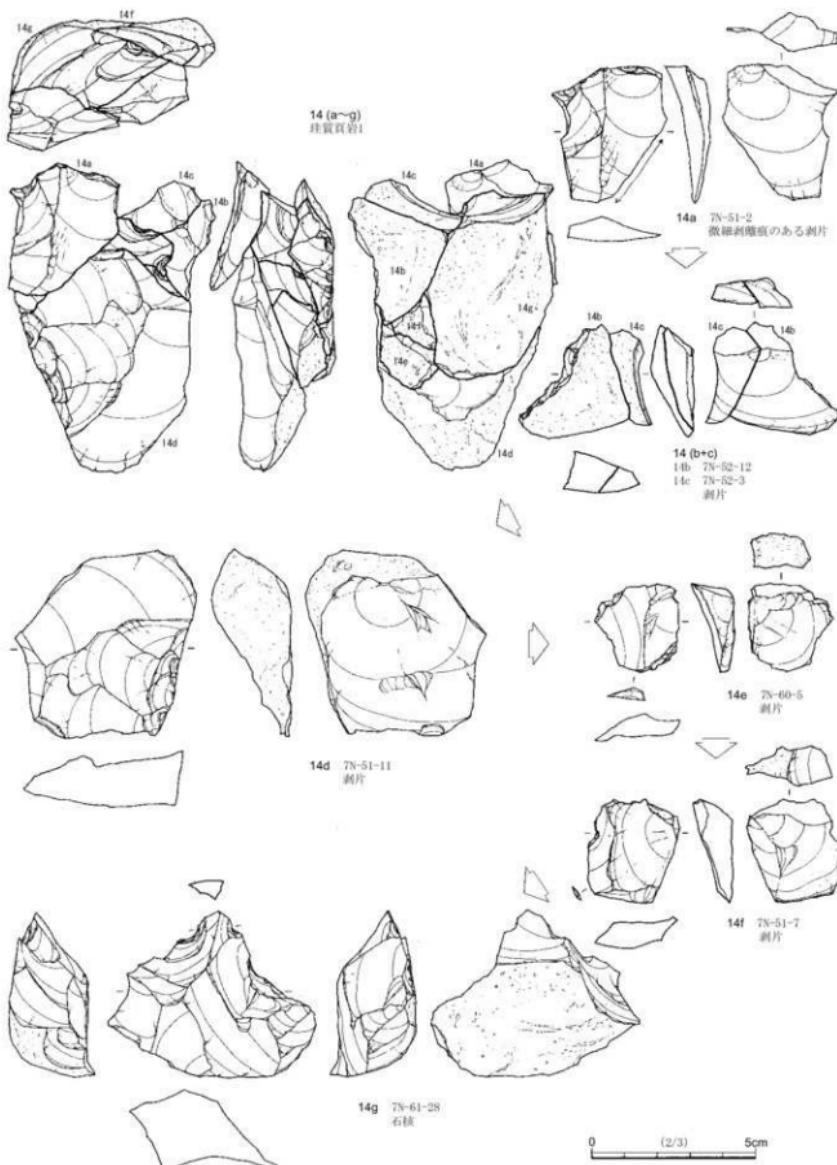
17～21は、鮮やかな緑色と褐色とに二分されるチャート3を母岩とする。17(接222)の接合した塊の大きさの長さ、幅、厚さは各々76.2mm、85.6mm、54.3mmであり、総重量は177.01gである。6m四方に分布する16点が接合した。工程は、まず、打面を作出するための礫端片17aが剥離された後、厚みのあるA塊(17b～17h)が剥離される。この後17i、17j、17kが外皮を削ぐように剥がされ、17i～17pの5点を含むB塊が残される。第7ブロックの南側にA塊、北側にB塊を構成する剥片が分布する傾向がある。A塊は厚みのあ



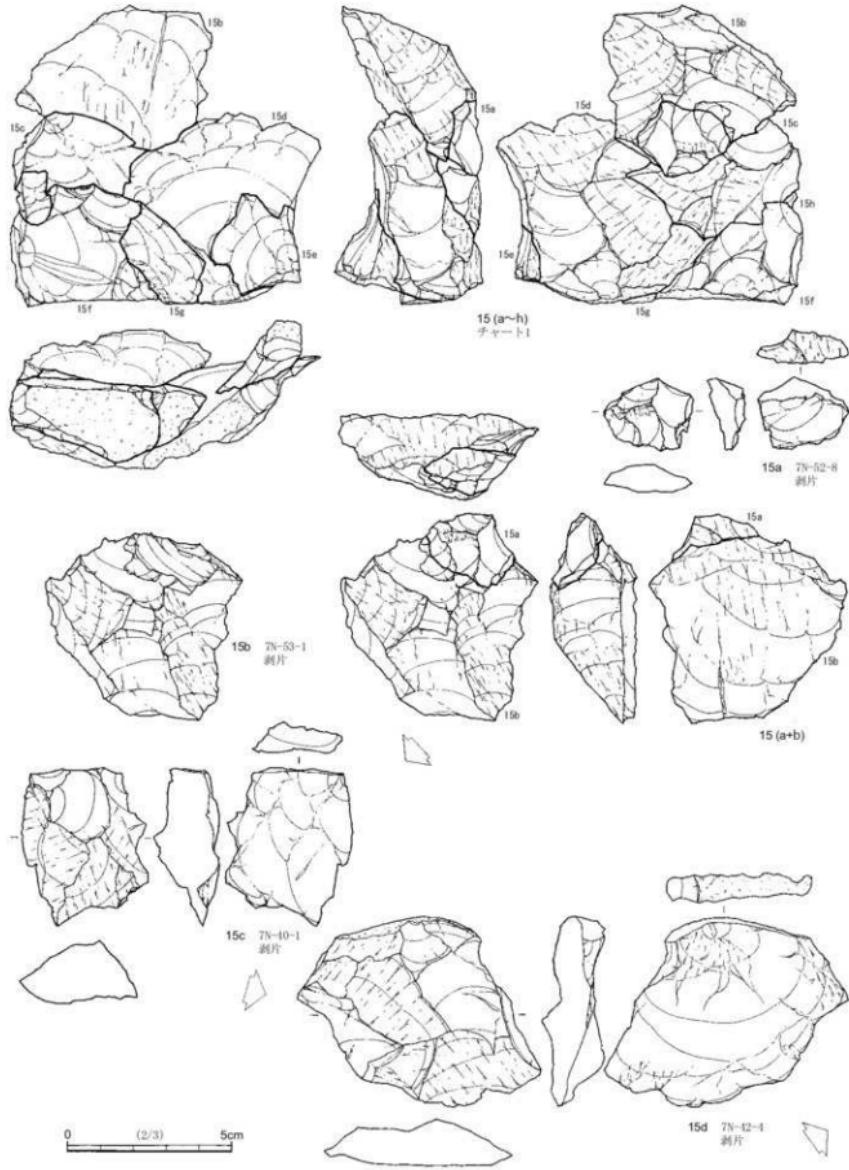
第22図 第2文化層第7ブロック出土石器（2）



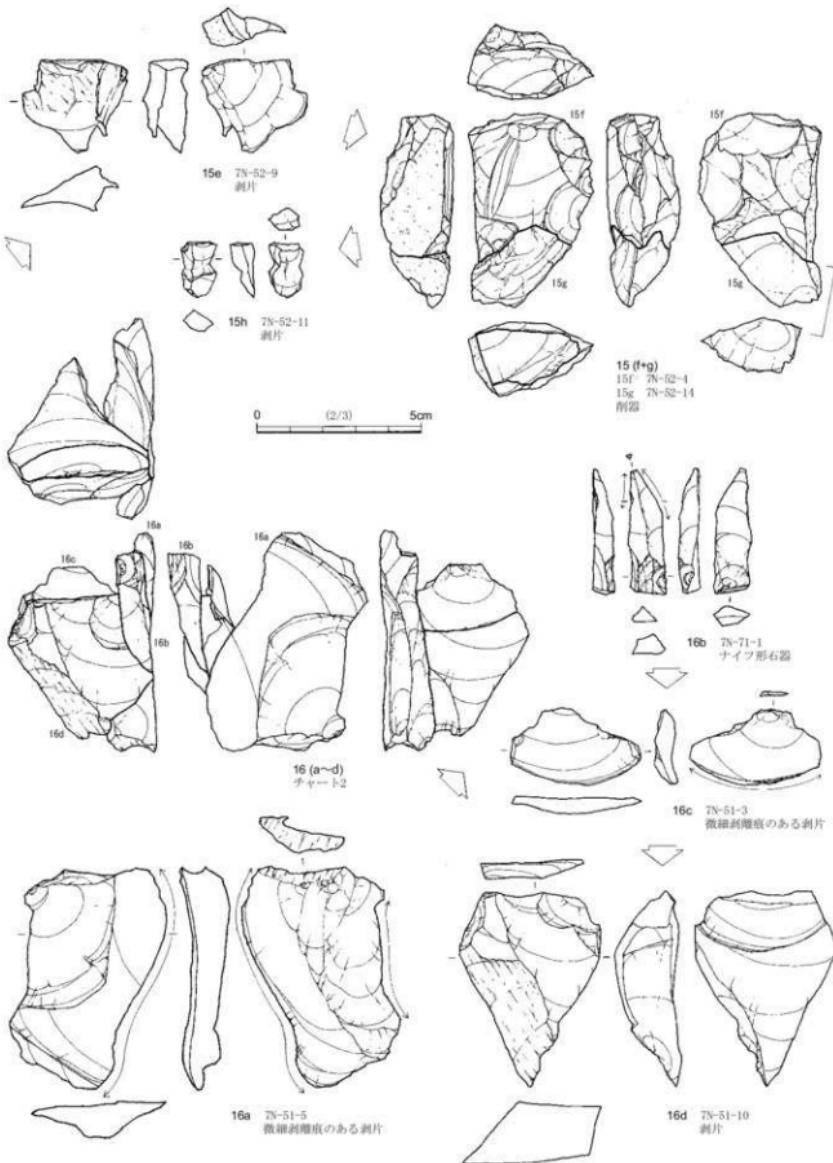
第23図 第2文化層第7ブロック出土石器（3）



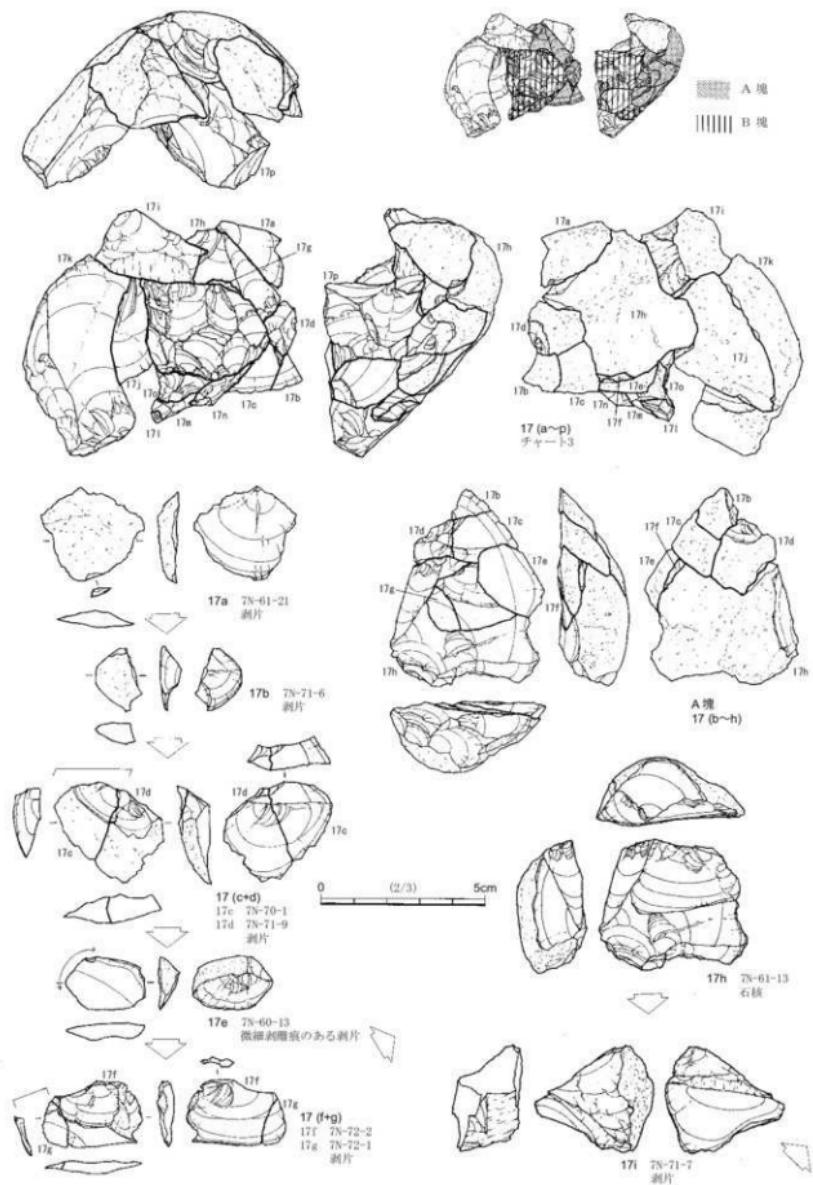
第24図 第2文化層第7ブロック出土石器 (4)



第25図 第2文化層第7ブロック出土石器（5）



第26図 第2文化層第7ブロック出土石器（6）



第27図 第2文化層第7ブロック出土石器（7）

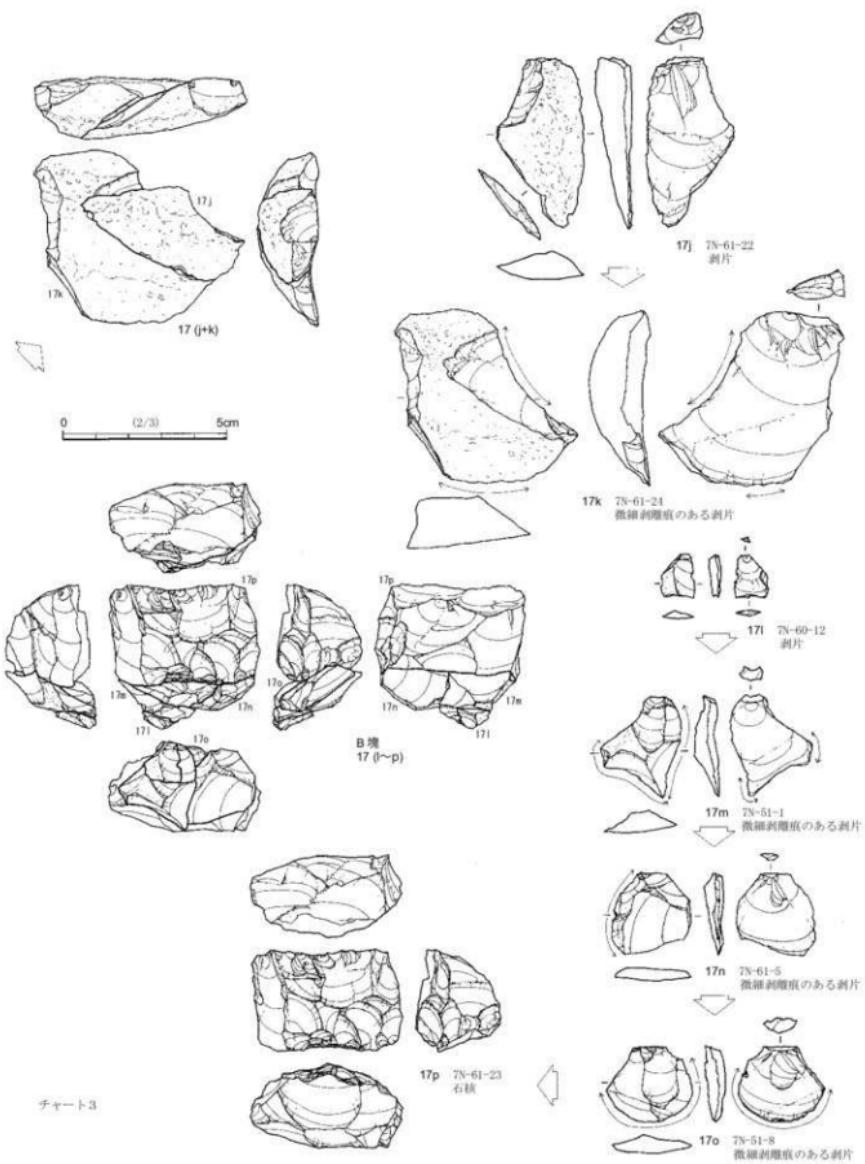
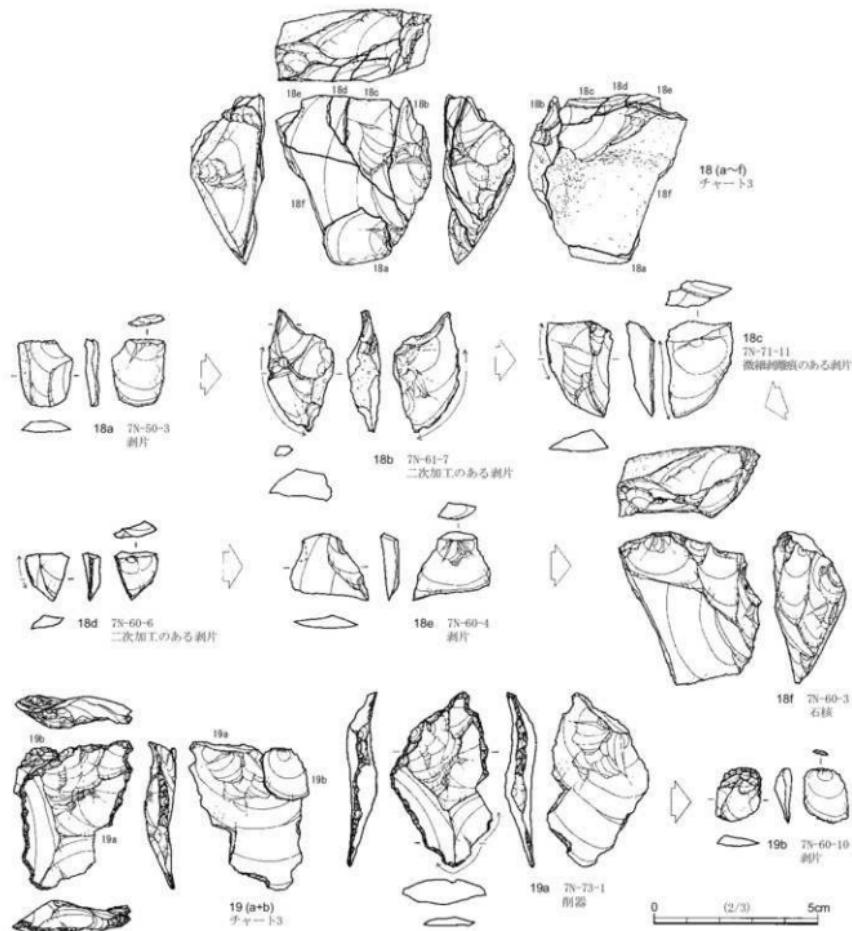


チャート3

第28図 第2文化層第7ブロック出土石器（8）

る剥片が素材である。この末端部付近では、主要剥離面側から加えられた打撃により、17b から 17d が順に剥離される。これによって表れた面を打面として 17e, 17f が剥離された後、1 ～ 2 片が剥離され、17g に至る。17h は残核である。一方、B 塊は、17i から 17o は同一打面から順に剥離され、この工程で表れた作業面とその対面を打面として、さらに剥片が作出されたのち、17p が残される。17m ～ 17o の縁辺には刃こぼれがみられる。まとまった出土状態から、剥離された場所で使用されたものと推測される。



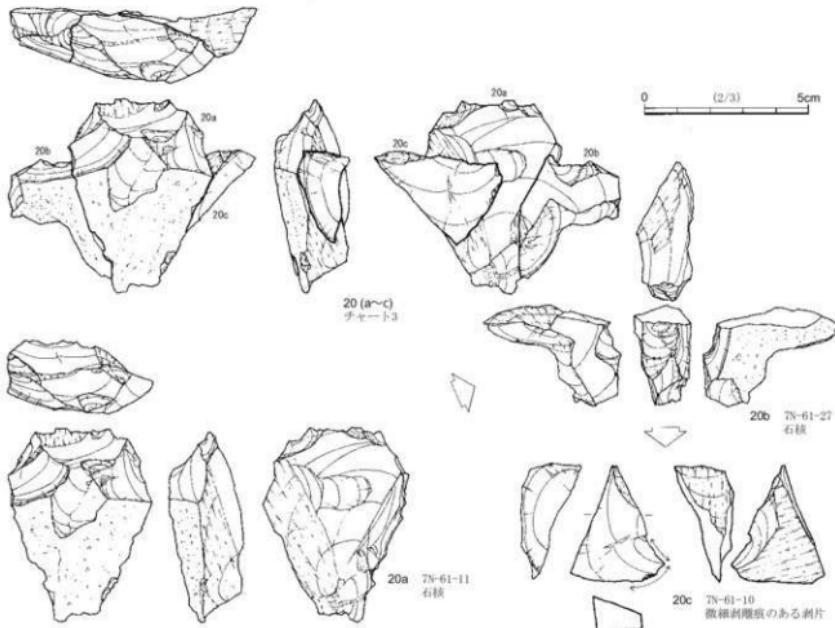
第29図 第2文化層第7ブロック出土石器（9）

18(接224)の6点は3.1m内に分布する。18b～18eは共通する打面から連続して剥離されているが、18aは別個体の石核から剥離されたものである。18bの打面部分は背面側から打撃が加えられており、縁辺には微細な剥離痕が観察される。18cは左上縁部、18dは右側縁と左側縁上半部に微細剥離痕がみられるが、素材縁辺の薄さに起因する自然な刃こぼれの可能性がある。

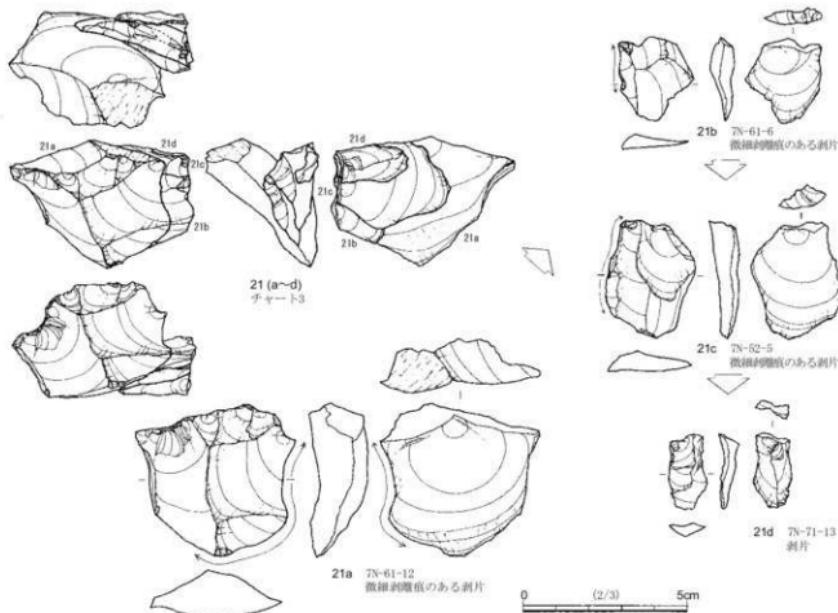
19(接221)は、19aが分布の疎らな第7ブロック東端、19bが濃密度域から出土した。19aの縁辺には二次加工痕と使用痕が廻る。刃こぼれ痕を調整したものと考えられるが、凸部を作りだすことを目的として2か所が抉られたのであれば、錐としての機能が想定される。19bは最大長が20mmに満たない小片であり、縁辺には鋸歯状の細かい欠けがみられる。

20(接223)の接合した3点は7N-61グリッドに分布する。20aと20bは折面で接合し、20bは小口面打面から剥片剥離作業が行われるが、打撃の力は末端まで到達していない。20cはそれらが剥離される前の石核の破片であり、薄い縁辺には微細剥離痕が観察される。

21(接220)は、約5mの線状に分布する4点が接合した。21aの背面には多方向から剥片剥離が行われたことを示す5面以上の剥離痕があり、石核の器面を調整する目的で剥離されたと考えられる。21a剥離後、打面転され、剥片、21b、21c、剥片、21dの順に剥離される。この工程では打面調整は行われていない。なお、21a、21b、21cの縁辺には微細剥離痕がみられる。



第30図 第2文化層第7ブロック出土石器(10)



第31図 第2文化層第7ブロック出土石器 (11)

第13表 第2文化層第7ブロック組成表

母岩 / 器種	ナイフ形 石器	削器	二次加工の 微細剥離 がある剥片	ある剥片	剥片	碎片	石核	礫片	点数	点数比	重量(g)	重量比
ガラス質黒色安山岩 1	0	0	0	0	19(21)	0	2	0	21	19.17%	148.24	10.41%
ガラス質黒色安山岩 2	0	0	0	0	5	0	1(2)	0	6	5.83%	23.63	1.66%
ガラス質黒色安山岩 3	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0.83%	5.38	0.38%
トロトロ石 1	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.83%	19.84	1.39%
流紋岩 5	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.83%	19.63	1.38%
流紋岩 6	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1.67%	22.76	1.60%
珪質基灰岩 1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0.83%	51.98	3.65%
真珠岩 1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.83%	4.55	0.32%
真珠岩 2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.83%	9.05	0.64%
珪質真珠岩 1	0	0	0	3(4)	5(6)	0	2	0	10	10.00%	273.18	19.18%
珪質真珠岩 2	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0.83%	5.72	0.40%
珪質真珠岩 3	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0.83%	17.12	1.20%
チヤー一ト 1	0	1(2)	0	0	9(10)	0	1	0	11	10.83%	263.07	18.47%
チヤー一ト 2	2	0	0	2	3	1	0	0	8	6.67%	113.08	7.94%
チヤー一ト 3	0	1	3	10	18(20)	2	5	0	39	34.17%	357.48	25.09%
チヤー一ト 4	0	0	0	0	2	0	0	0	2	1.67%	9.37	0.68%
チヤー一ト 5	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.83%	0.54	0.04%
チヤー一ト 6	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0.83%	59.19	4.16%
チヤー一ト 7	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.83%	16.48	1.16%
チヤー一ト 8	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.83%	4.22	0.30%
合計	2	2	3	18	64	3	13	6	111(120)	100.00%	1424.51	100.00%

* ()は出土点数

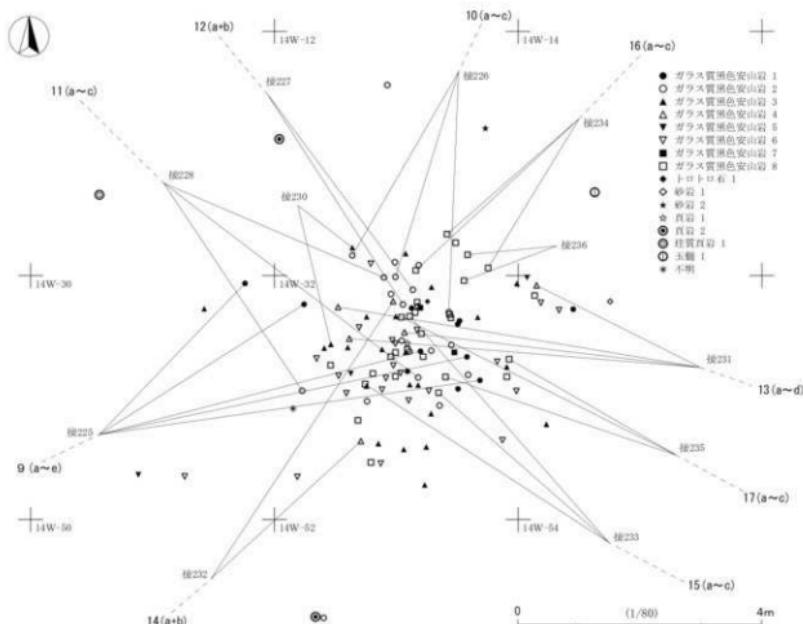
註

1) 第4・7ブロックでは珪質凝灰岩1という母岩番号を付した。当初は何らかの生物化石を伴ったチャートと分類したが、野尻湖ナウマンゾウ博物館 中村由克氏、千葉県立中央博物館 高橋直樹氏、同 加藤久佳氏の鑑定により、火山豆石を含んだ凝灰岩であることが判明した。同心円状に丸く見える部分は火山豆石と呼ばれ、その生成要因については、①噴火した灰が降下する際に塵のような火山灰が付着して成長した、②核が新しい火山灰の表面を転がつて成長した、③新しく降った火山灰が風雨の作用で固まった、との説がある。また、産業技術総合研究所 地質調査情報センター 吉川敏之氏は、栃木県塙谷町西古屋ダム付近から近似した資料を採集し、公開されている。火山豆石は火山灰と雨、長い年月などの要因がそろえばどこにでも生成され、珍しいものではないらしいが、少なくとも火山のない千葉県では産出しないことから、火口付近や河原など採取地であり、いくつかの場を経て遺跡に持ち込まれたものであろう。

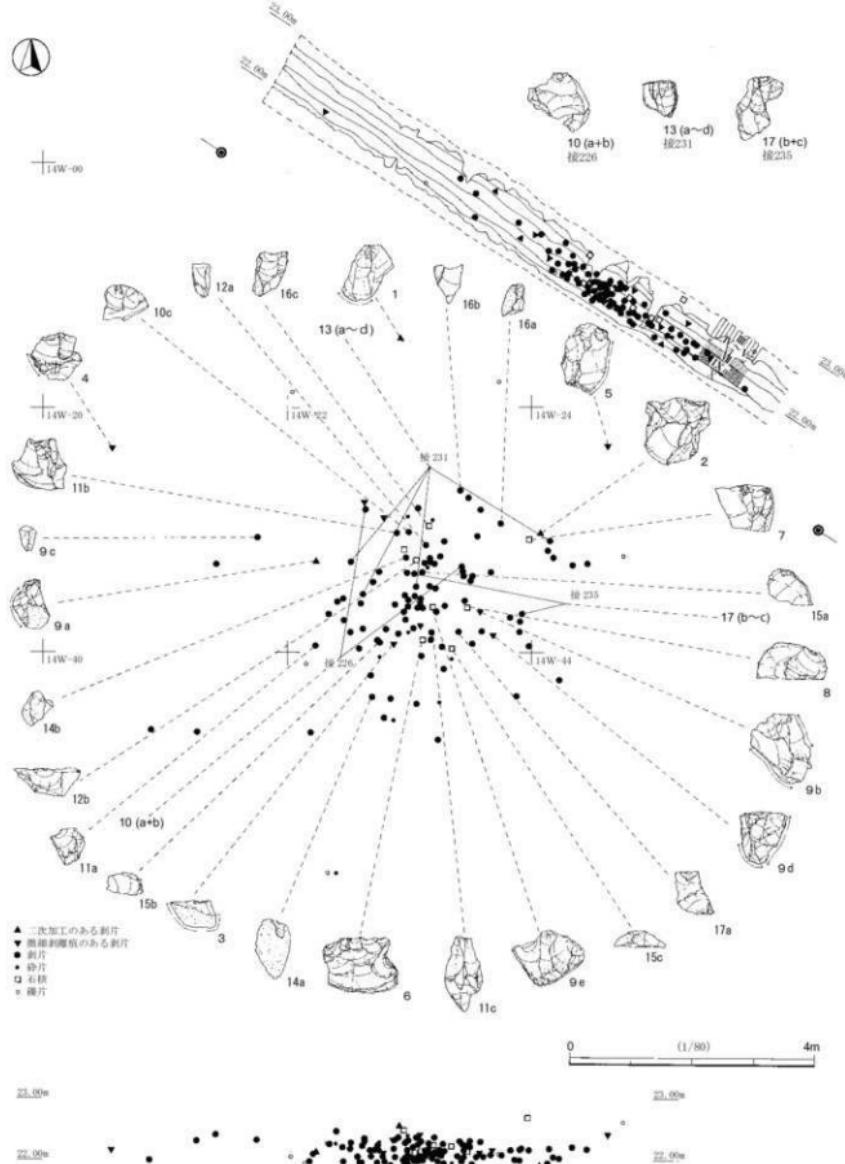
(5) 第8ブロック (第32~37図、第14表、図版3・11)

分布状況

遺跡東部にあたる14W-12・13・20・22~24・31・32・34・40~44・52グリッドの直径約9.4mの範囲内から石器125(127)点が出土した。これらは標高21,900m~22,720mに包含される。器種の内訳は二次加工のある剥片3点、微細剥離痕のある剥片9点、剥片89(91)点、碎片11点、石核8点、礫片5点



第32図 第2文化層第8ブロック母岩別分布



第33図 第2文化層第8ブロック器種別分布

である。石材組成はガラス質黒色安山岩116(118)点、トロトロ石1点、砂岩2点、頁岩3点、珪質頁岩1点、玉髓1点、石材不明1点であり、出土点数の約93%をガラス質黒色安山岩が占める。11個体32点ある接合資料は全てガラス質黒色安山岩であり、ブロック中心部の直径5m内に集中する。

出土石器

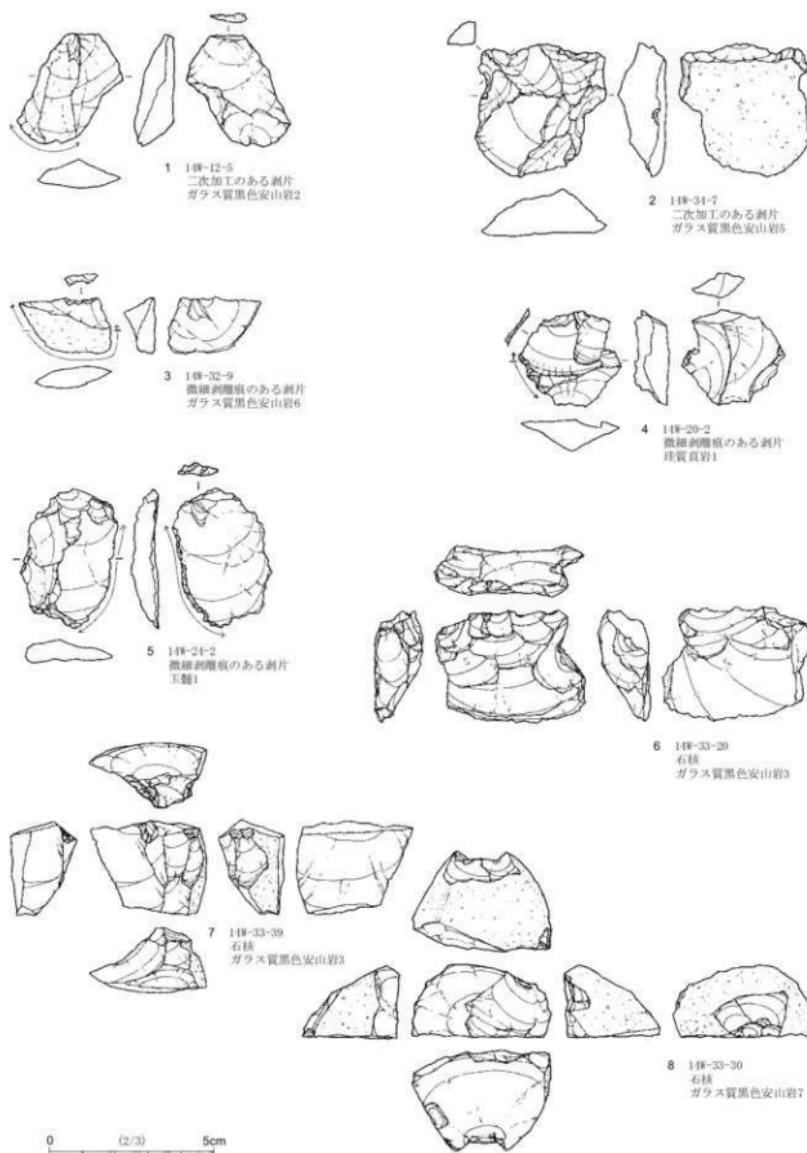
1・2は二次加工のある剥片である。1の母岩であるガラス質黒色安山岩2は23点出土しており、集中域を形成するが、1はこの外側に分布する。主要剥離面下部は2枚の剥離面によって厚みが減じられており、微細剥離痕が連続する末端付近は緩やかな弧を描いているが、風化して丸みを帯びている。2はガラス質黒色安山岩5を母岩とする。裏面の大部分は平坦な自然面であり、爪搔状の溝に入り込んだローム粒によって全体が黄褐色を呈している。剥離面は褐色を帯びた暗灰色で、黒色の斑晶が疎らに入る。背面は、縁辺から中心へ向かう打撃により求心的な剥離痕が廻る。中でも左上部の剥離は器面を抉るような2打によって凸部が作られ、錐状の機能部が作出されていたものと推定されるが、先端部は欠損し遺存していない。

3～5は微細剥離痕のある剥片である。3はガラス質黒色安山岩6が母岩である。自然面、剥離面ともに暗褐色で、黒色玻璃質の斑晶を含む。剥片剥離時の打撃により打面が失われている。弧状の縁辺に微細剥離痕がみられる。4は青灰色と褐灰色が混在する淡い灰色の珪質頁岩1を母岩とする。主要剥離面を縦に走るはっきりとした稜線は、打点直下の折れによって形成される。周縁には刃こぼれや打点を持った加工痕がみられるが、縁辺の薄さから、使用した際に欠けた可能性が高い。下縁部分はガジリで、青みがかつた白色である。5は、白色半透明で白色斑がみぞれ状に入り、光を透過する玉髓1が母岩である。石器の集中域から北東方向に1.8m離れて出土した。主要剥離面の左縁部には微細剥離痕が並ぶ。

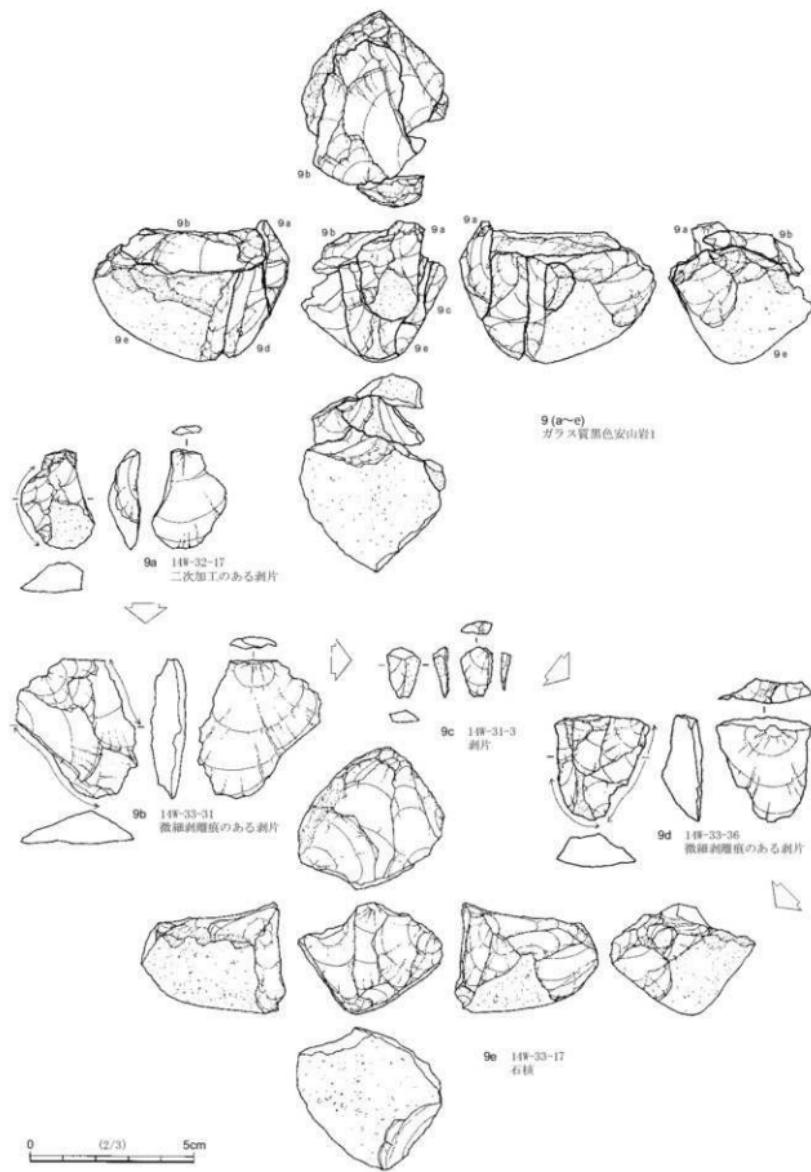
6～8は石核である。6・7の母岩であるガラス質黒色安山岩3の剥離面は、青みのある褐色であり、黒色玻璃質の斑晶が散見される。横長剥片を素材として、厚みを削ぐような周縁部からの打撃により、小型貝殻状の剥片が作出されている。第8ブロックで出土した23点の中には、このような剥片が複数出土しているが、接合関係は確認できなかった。7の打面部と末端部は折れにより遺存しない。上方の折面には2か所に潰れたような敲打痕がみられる。また、この折面打面から自然面が一枚剥離されるが、稜上を軽く潰しただけ本格的な剥離作業には至っていない。8はガラス質黒色安山岩7を母岩とする。自然面は黄褐色、剥離面は濃灰色で斑晶はごくわずかである。素材礫は鶏卵大であり、縦方向に分割後、上下に分かれれる。自然面打面から折面側を削ぐように剥離作業が行われる。

9～17は接合資料である。9(接225)のガラス質黒色安山岩1は自然面、剥離面とも黄褐色であり、ガジリ部分は濃灰色である。一部トロトロ石状の塊が混在している。第8ブロックから11点109.85gが出土し、そのうちの5点92.22gが接合した。推定される素材礫の大きさは拳大ほどであろう。主な作業面は2面あり、打面と作業面を置き換ながら、その都度下部を固定した状態で剥離作業が行われている。上面では5枚、正面では6枚以上の剥離痕がみられる。作出された9a・9b・9dの形状は似通っており、縁辺に使用痕を持つ。

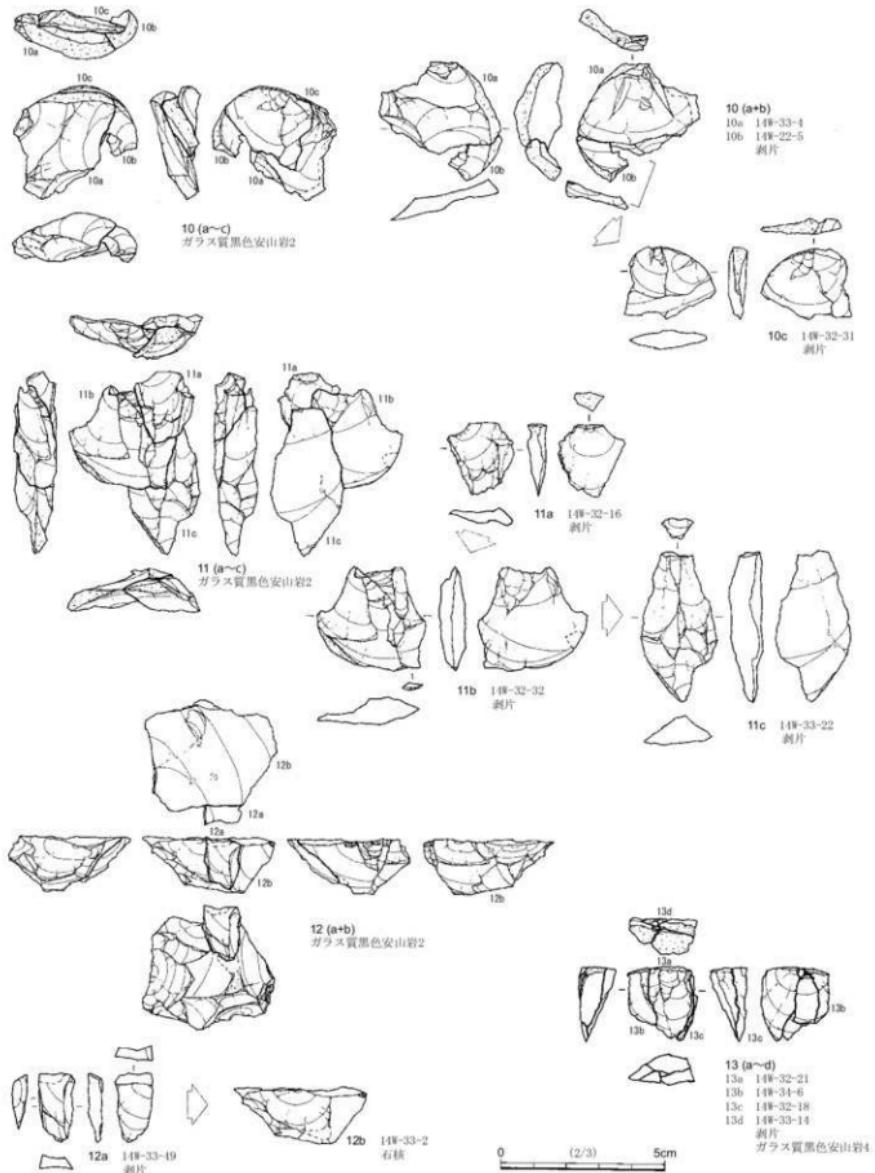
10～12の母岩はガラス質黒色安山岩2であり、剥離面は濃灰～黄褐色、ガジリ部分は鈍い光沢がある黒色である。10(接226)の3点は約2mの直線上に並んで出土した。自然面と剥離面の稜上を打点として剥離作業が行われ、板状の剥片が作出される。11(接228)の3点は直径2.3mの範囲内から出土し、接合した。自然面を打面とした2枚以上が剥離され、11aに至る。頭部調整と剥片作出が繰り返し行われ、



第34図 第2文化層第8ブロック出土石器(1)



第35図 第2文化層第8ブロック出土石器（2）



第36図 第2文化層第8ブロック出土石器（3）



0 (2/3) 5cm

第37図 第2文化層第8ブロック出土石器 (4)

同一方向から3片が剥離される。11cの打面部は遺存していないが、右側縁には微細な剥離痕がみられる。12(接227)の2点間の接合距離は0.3mと、至近である。素材剥片の主要剥離面を打面とし、打点を周回させて幅の広い剥片を作出しているが、接合した剥片は直下折れの12bのみである。素材端部に83°～86°の調整痕があり、当初は搔器として用いられていたと考えられる。

13・14の母岩はガラス質黒色安山岩4である。黄褐色で小型の円礫で、県内の遺跡では使用される例の多い石材である。13(接231)は一撃で4片が弾けたものと思われる。13a～13cの3片は約1m内に、13dはこれらから最長3m離れて分布する。14(接232)は、剥離工程の初期段階において、連続して剥離された2片の剥片であり、2点間は2.3mを測る。

15～17は、14W-33グリッドを中心に28点出土したガラス質黒色安山岩8が母岩である。剥離面は青みを含んだ黒色であり、黒色玻璃質の斑晶を含み、板状に剥離する傾向がある。15(接233)の接合した3点は1.2m四方に分布する。二次加工痕や使用痕は見受けられない。15cは破碎した残核である。16(接234)は14W-23グリッドの3点が接合した。剥片2点は同じ打面から剥離されているが、前後関係は不明である。打撃時の衝撃や斑晶によって不規則な折れが生じたものと推測される。17(接235)は14W-33グリッドに3点まとめて分布する。17a、17b+17cとも自然面と剥離面の成す稜上から、打撃が加えられてできた剥片である。17b、17cは打点直下で折れた剥片であり、いずれの縁にも微細な欠けがみられるか、使用痕か否かは不明である。

第14表 第2文化層第8ブロック組成表

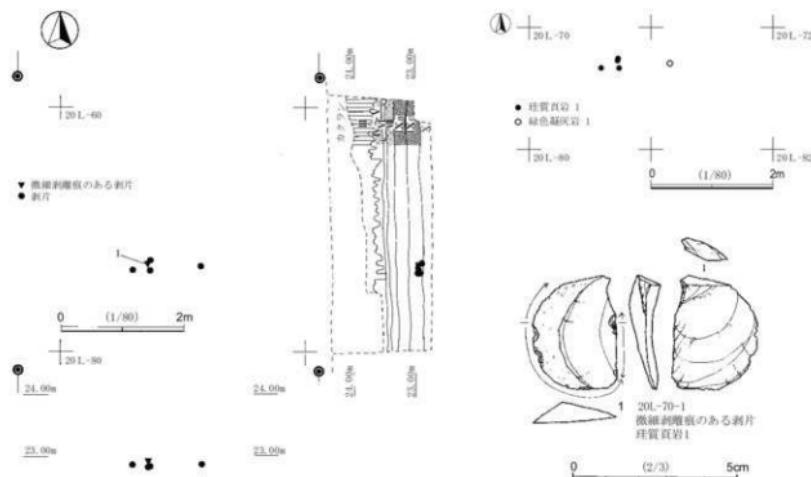
母岩 / 器種	二次加工の ある剥片	微細剥離痕 のある剥片	剥片	碎片	石核	礫片	点数	点数比	重量(g)	重量比
ガラス質黒色安山岩 1	1	3	6	0	1	0	11	8.6%	109.85	22.12%
ガラス質黒色安山岩 2	1	0	12(13)	7	2	0	22	18.11%	82.46	16.61%
ガラス質黒色安山岩 3	0	1	19	1	2	0	23	18.11%	70.36	14.17%
ガラス質黒色安山岩 4	0	0	6	0	0	0	6	4.72%	9.59	1.93%
ガラス質黒色安山岩 5	1	0	2	0	0	0	3	2.36%	25.76	5.19%
ガラス質黒色安山岩 6	0	2	19	1	0	0	22	17.32%	29.68	5.98%
ガラス質黒色安山岩 7	0	0	1	0	1	0	2	1.57%	64.14	12.92%
ガラス質黒色安山岩 8	0	1	22(23)	2	2	0	27	22.05%	72.20	14.54%
トロトロ石 1	0	0	1	0	0	0	1	0.79%	5.35	1.08%
砂岩 1	0	0	0	0	0	1	1	0.79%	0.53	0.11%
砂岩 2	0	0	0	0	0	1	1	0.79%	1.05	0.21%
頁岩 1	0	0	1	0	0	0	1	0.79%	8.69	1.75%
頁岩 2	0	0	0	0	0	2	2	1.57%	3.42	0.69%
珪質頁岩 1	0	1	0	0	0	0	1	0.79%	6.21	1.25%
玉髓 1	0	1	0	0	0	0	1	0.79%	6.82	1.37%
不明 不明	0	0	0	0	0	1	1	0.79%	0.43	0.09%
合計	3	9	89	11	8	5	125(127)	100.00%	496.54	100.00%

※()は出土点数

(6) 第9ブロック (第38図、第15表、図版3・11)

分布状況と出土石器

遺跡の南西寄りに位置する20L-70・71グリッドの直径約1.2mの範囲内から石器5点が出土した。こ



第38図 第2文化層第9ブロック石器分布・出土石器

れらはIXc層に投影されるが、調査時の所見及び写真によればIXa層とIXc層の境、標高22.847m～22.920mに含まれる。器種は微細剥離痕のある剥片1点と剥片4点であり、石材の内訳は緑色凝灰岩1点と珪質頁岩4点である。珪質頁岩は西側に集中するか接合関係はみられない。

1は微細剥離痕のある剥片である。自然面、剥離面とも明るい茶褐色、均質で滑らかな質感の珪質頁岩1が母岩である。自然面と主要剥離面の成す弧状の周縁部と、直線状の右側縁に微細剥離痕が廻る。

第15表 第2文化層第9ブロック組成表

母岩 / 器種	微細剥離痕 のある剥片	剥片	点数	点数比	重量(g)	重量比
緑色凝灰岩 1	0	1	1	20.00%	0.35	4.33%
珪質頁岩 1	1	3	4	80.00%	7.74	95.67%
合計		4	5	100.00%	8.09	100.00%

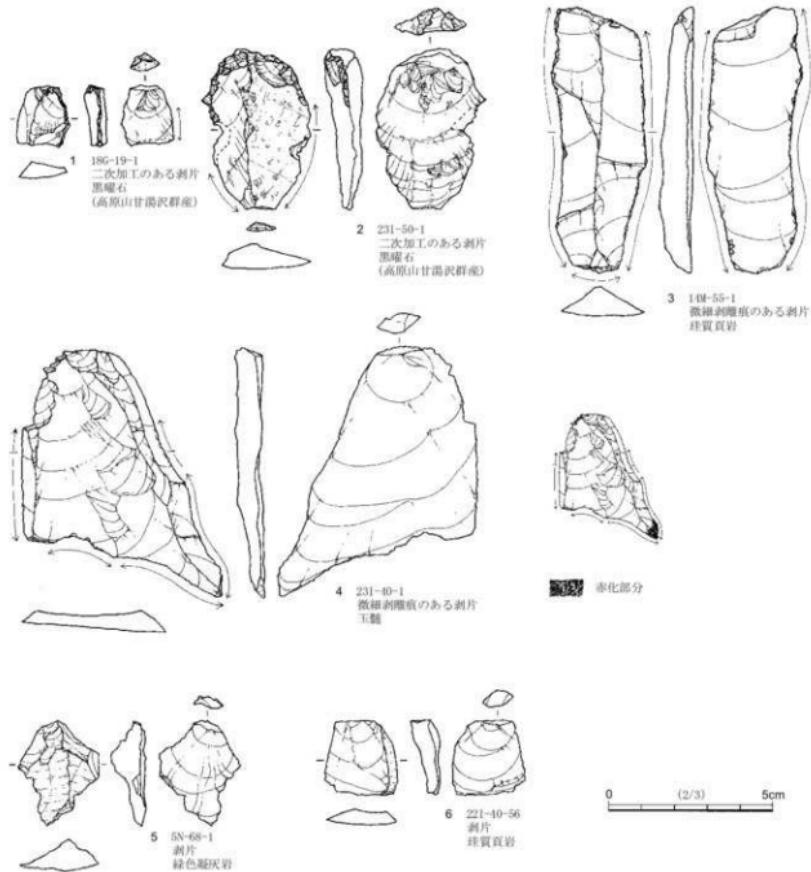
(7) 第2文化層単独出土 (第39・89図、図版11)

1・2は高原山甘湯沢群産の黒曜石を素材にした二次加工のある剥片である。銀灰白色で磨りガラスのような黒曜石であり、鈍い光沢がある。1は調整された自然面打面から連続して剥離された縦長剥片(石刀)のうちの1片である。下部は折れ、側縁部に主要剥離面側から縁辺を潰すような加工が施され、その対縁には微細な剥離痕がみられる。正面左半部は風化剥離面である。2の打面に近い両側縁は主要剥離面側から二次加工され、下半部両縁辺には微細剥離痕が連なる。

3・4は微細剥離痕のある剥片である。3は濃褐色の細かな斑点が散る淡い灰白色の珪質頁岩製であり、

極細粒でわずかに光沢を持つ。全周に刃こぼれのような細かな使用痕がみられるが上部の折れに寸断されている。4は白色半透明の玉髓製であるが、右側縁と打点対縁が収束する端部は鮮やかなオレンジ色となつており、自然面がわずかに残る。縁辺は右側縁・下縁ともに中ほどの刃こぼれが他の部位よりも強い。

5・6は剥片である。5の緑色凝灰岩は剥離面が黄色や青色を帯びた緑色である。光沢はなく、細かくサラサラとした粒子からなる。縁辺の凹凸はフイッシャーと器厚に起因する。6の珪質頁岩の剥離面は明黄褐色でザラつく。自然面は光沢のある黄土色である。同一方向から連続して剥離されたうちの1片である。



第39図 第2文化層単独出土石器

3. 第3文化層

(1) 概要 (第40~52図、第16~18表、図版4・12)

第3文化層は第10~13ブロックの4か所が該当する。ブロックは遺跡北部の台地縁辺に第10ブロック、台地の中ほどの比較的安定した平坦面に第11・12ブロック、南側に第13ブロックが所在する。石器104点の出土した標高は22.672m~24.221mである。現場所見はIX層~IV層だが、断面図への石器投影はIX層~VI層に包含された。生活面はIX層上部~VII層下部にあると考えられる。なお、第11・12ブロックは近接しており、両ブロックで共通する母岩が確認されたため、同時に營まれたブロックとして挙げ、母岩に通し番号を付して報告する。

(2) 第10ブロック (第41~44図、第16表、図版4・12)

分布状況

遺跡北端にあたる5N-62~64・72~74・83・84グリッドの直径約5m内に24(26)点が出土した。標高は22.672m~23.040mである。器種の内訳は削器1点、二次加工のある剥片2点、微細剥離痕のある剥片3(4)点、剥片17(18)点、碎片1点である。石材はトロトロ石2点とチャート22(24)点の2石材のみであり、9割以上をチャートが占める。

4個体10点ある接合資料は全てチャートであり、いずれも出土地点が1.5m以内の近距離で接合する。

出土石器

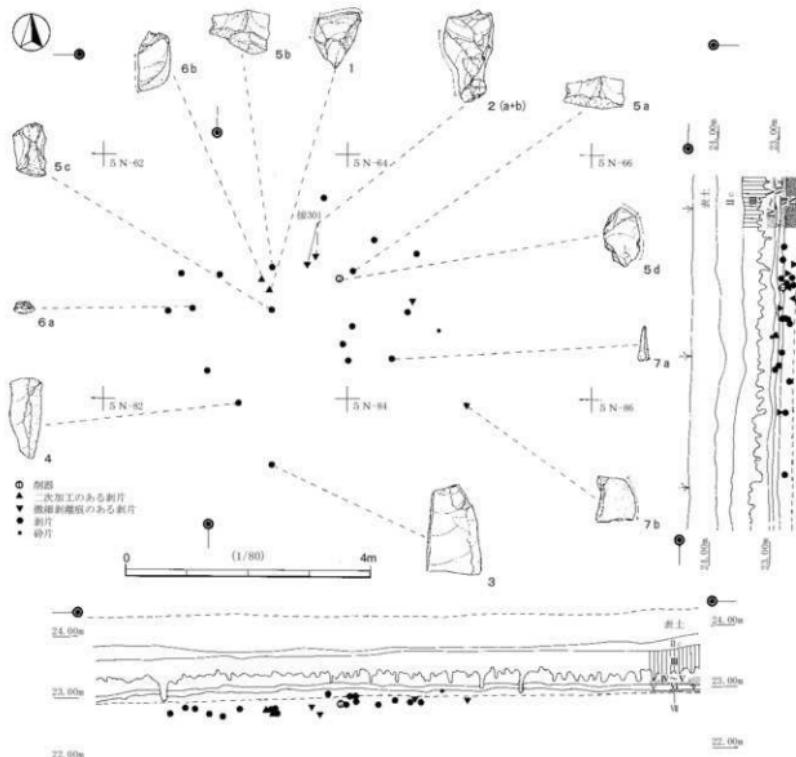
2点のトロトロ石1と24点のチャート1の2母岩のみが分布するブロックである。1・2、5~7はチャート1を母岩とする。特徴は自然面・剥離面とも黒色であり、鈍い光沢と赤褐色の節理面を持つ。3・4はトロトロ石1を母岩とする。剥離面・自然面とも灰白色であるが、新鮮な面は濃い灰色である。風化が早く、稜や縁辺は丸みを帯び、使用痕や加工痕の観察が困難である。

1は二次加工のある剥片である。素材下部を折り取ることによって石器側面を作り出している。下端部は正・裏面から加工され、先端が尖っている。上部は直線状の刃部であり、縁辺に光沢と微細な刃こぼれがみられる。素材下部除去により1の右側面が作出されており、ナイフ形石器の基部とも捉えられるため、刃部を上に据えて図化した。

2は微細剥離痕のある剥片である。背面は多方向から剥離されるが自然面が僅かに残る。主要剥離面は節理の制約を受けて凹状となり、下端での折れもまた、節理に起因するものであろう。左側縁部には刃こぼれが並ぶ。



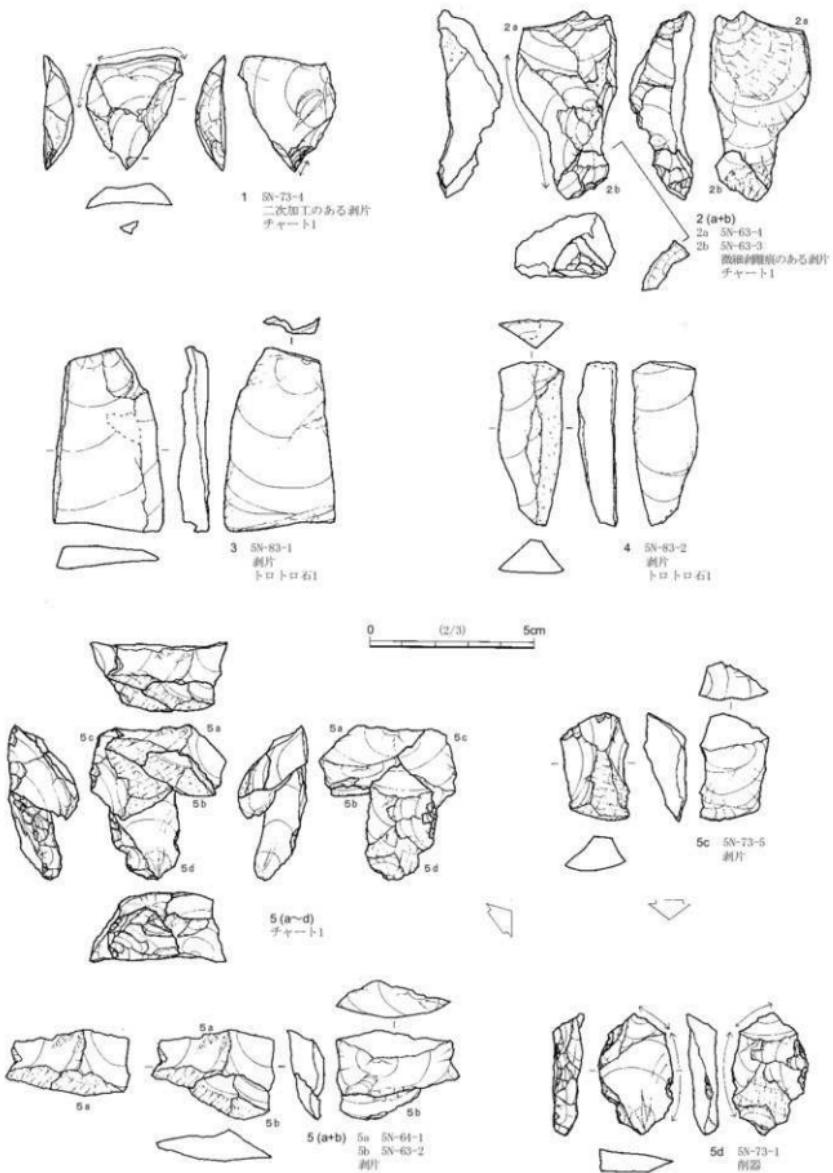
第40図 第3文化層ブロック位置図



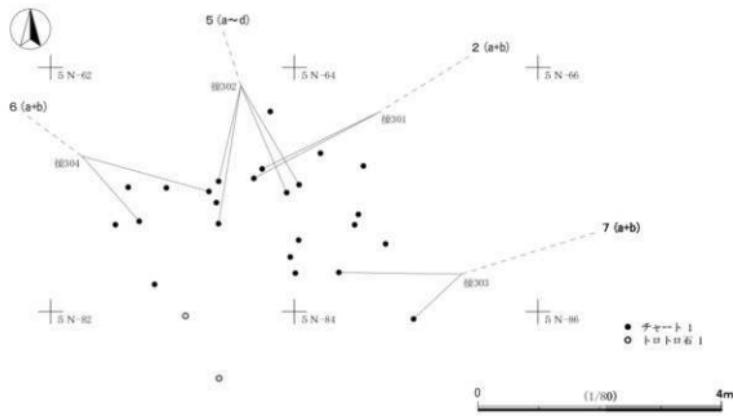
第41図 第3文化層第10ブロック器種別分布

3・4は剥片である。3は規則的に剥離された板状の石刃であり、下部は遺存しない。左側面は自然面である。石材の特性により使用痕の有無を確認できない。4は下部のみ遺存する。折面と末端の一部にガジリがみられる。

5～7は接合資料である。5(接302)は1.5m内で剥片3点と削器1点の計4点が接合した。共通する打面から剥離されており、5a+5b、5c、5dの打角はそれぞれ126°、143°、136°と鈍角である。5dの削器は剥離後、左側縁が急角度(70°～90°)に加工され、右側縁には刃こぼれ状の微細な剥離痕が所々観察される。また主要剥離面は、側縁から器厚を削ぐように剥離される。6(接304)は、横長剥片の一端に正、裏面からの交互剥離が加えられているが、刃部を再生するための加工である可能性がある。直線状の縁辺には微細剥離痕、半円弧状の縁辺には摩耗痕がみられる。7(接303)は剥片と微細剥離痕のある剥片の接合資料である。7を含む剥片が早い段階で剥離された後、打面転移などの工程を経て7bが剥離される。



第42図 第3文化層第10ブロック出土石器（1）



第43図 第3文化層第10ブロック母岩別分布

第16表 第3文化層第10ブロック組成表

母岩 / 器種	削器	二次加工のある剖片	微細剥離痕のある剖片	剥片	碎片	点数	点数比	重量(g)	重量比
トロトロ石1	0	0	0	2	0	2	7.6%	26.00	21.7%
チャート1	1	2	3(4)	15(16)	1	22	92.3%	93.64	78.2%
合 計	1	2	3	17	1	24(26)	100.0%	119.64	100.0%

※()は出土点数

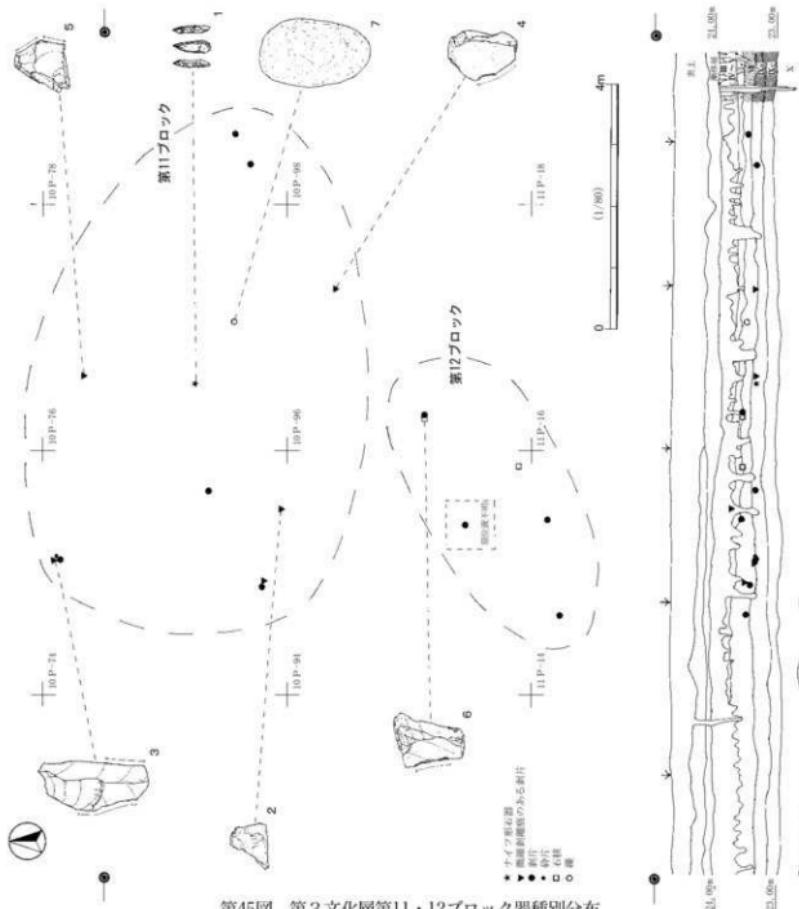


第44図 第3文化層第10ブロック出土石器 (2)

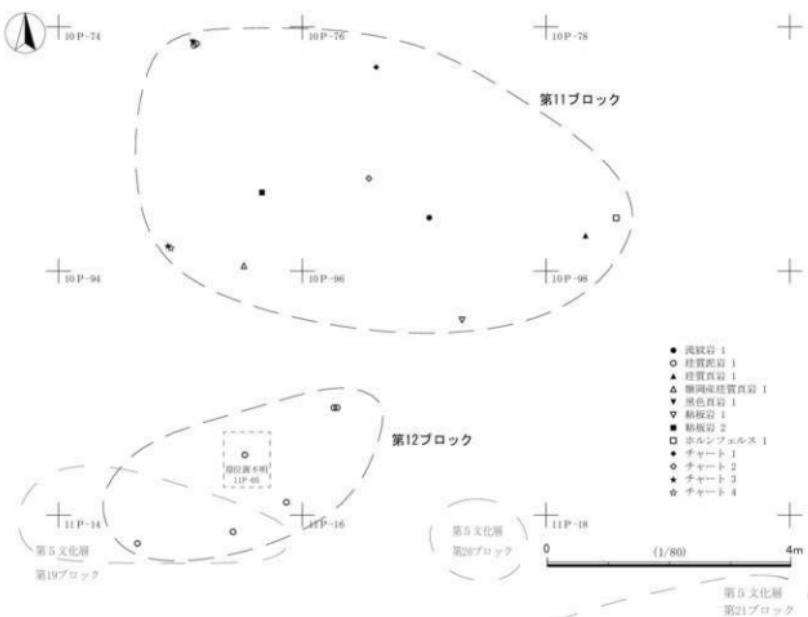
(3) 第11・12ブロック (第45~47図、第17表、図版12)

分布状況

遺跡北東寄りの10P-75・76・84~88・97、11P-05・06・14・15グリッドの直径約9m内から19点が出土した。第11ブロックは北側、第12ブロックは南側に位置する。石器の出土した標高は23.238m~23.686mである。器種の内訳はナイフ形石器1点、微細剥離痕のある剥片5点、剥片9点、碎片1点、石核2点、礫1点である。石材は珪質泥岩8点、粘板岩2点、チャート4点、そして流紋岩・珪質頁岩・嶺岡産珪質頁岩・黒色頁岩・ホルンフェルスが各1点あり、8石材12母岩を数える。珪質泥岩は両ブロックから出土しているが、接合関係はみられない。



第45図 第3文化層第11・12ブロック器種別分布



第46図 第3文化層第11・12ブロック母岩別分布

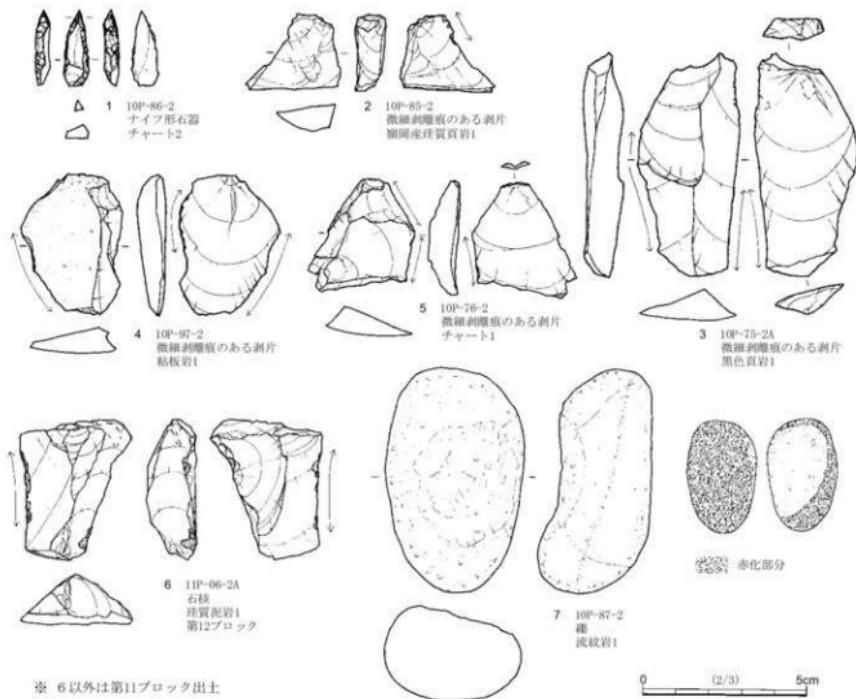
出土石器

1はナイフ形石器である。母岩のチャート2は、緑色を帯びた灰色で玻璃質であり、黒い筋が縦横にみられる。板状の横長片を素材とし、両側縁は主要剥離面側からの細かな調整によって急角度に整えられている。器長は23.1mmと小型ながら、先端は丁寧に加工されて鋭く仕上げられている。

2～5は微細剥離痕のある剥片である。2は、褐色で油脂状光沢のある嶺岡産珪質頁岩1が母岩である。右側面と主要剥離面は一撃で同時に剥離されており、末端は階段状に収束する。縁辺は鋭利であるが、微細な刃こぼれがみられる。3の母岩は黒色頁岩1である。第3文化層では、黒色頁岩はこの1点のみが検出されており、石刀の形態で持ち込まれたと考えられる。両側縁部に微細剥離痕がみられる。4は粘板岩1が母岩である。黒色偏平礫の自然面から剥離された後、縁辺が使用され顕著な刃こぼれが残る。末端は背面に回り込む。5のチャート1は、緑色を帯びた灰色で黒色の筋が走るが、チャート2と違って透明感はない。右縁辺には刃こぼれがあり、上縁辺は27°、下縁辺は22°と薄い刃部となっている。

6は石核である。珪質頁岩1が母岩であり、灰白色で砂粒を含み滑らかであるが、軟質で脆い。素材は使用痕のある大型石刃であり、上下に分割された後、その分割面を打面として背稜を削ぐような打撃が加えられる。第12ブロックから出土した。

7は流紋岩の礫である。全体的に赤みを帯びている。スクリーントーンのない部分は黒色である。いずれも被熱による変色痕であろう。敲打痕や擦痕はみられない。



第47図 第3文化層第11・12ブロック出土石器

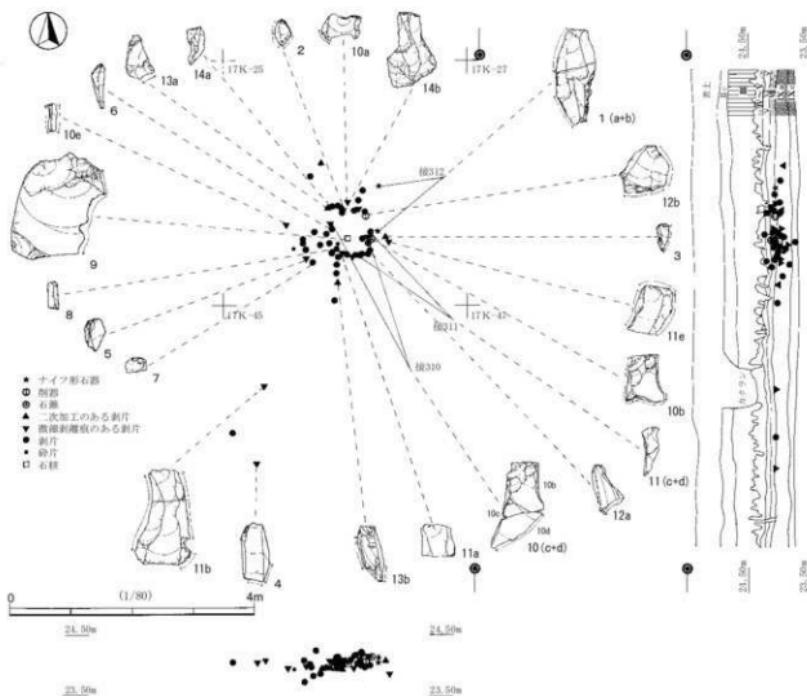
第17表 第3文化層第11・12ブロック組成表

母岩 / 器種	ナイフ形石器 微細剥離痕のある剥片	剥片	碎片	石核	礫	点数	点数比	重量(g)	重量比
流紋岩1	0	0	0	0	0	1	5.26%	121.20	58.36%
珪質泥岩1	0	0	5	1	2	0	8.4211%	18.96	9.13%
珪質頁岩1	0	0	1	0	0	0	5.26%	2.12	1.02%
椎岡産珪質頁岩1	0	1	0	0	0	0	5.26%	4.97	2.39%
黒色頁岩1	0	1	0	0	0	0	5.26%	23.46	11.20%
粘板岩1	0	1	0	0	0	0	5.26%	11.28	5.43%
粘板岩2	0	0	1	0	0	0	5.26%	0.99	0.48%
ホルンフェルス1	0	0	1	0	0	0	5.26%	13.77	6.63%
チヤート1	0	1	0	0	0	0	5.26%	7.12	3.43%
チヤート2	1	0	0	0	0	0	5.26%	0.83	0.40%
チヤート3	0	0	1	0	0	0	5.26%	2.07	1.00%
チヤート4	0	1	0	0	0	0	5.26%	0.92	0.44%
合計	1	5	9	1	2	19	100.00%	207.69	100.00%

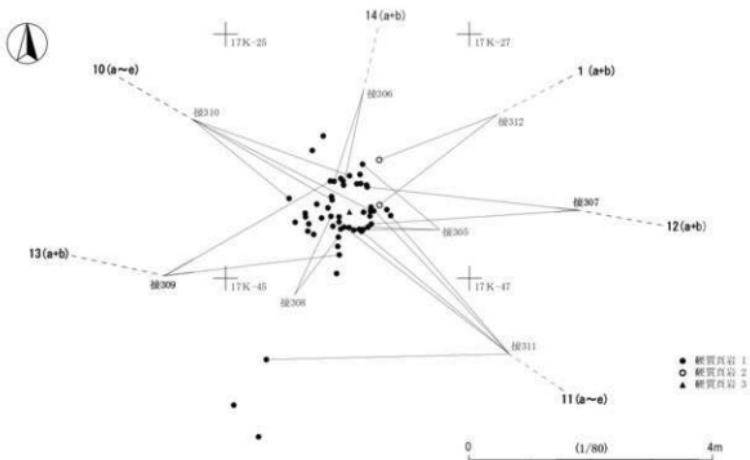
(4) 第I3ブロック (第48~52図、第18表、図版4・12)

分布状況

遺跡の中央南西寄りに位置する17K-25・35・36・45・46グリッドから、51(56)点が出土した。これらは標高23.706m~24.221mに包含される。ブロック北側の直径2m内にほとんどの遺物が集中するが、その中央部は空白部となっている。硬質頁岩のみで構成されるブロックであり、肉眼による観察から3母岩に細別した。出土した56点のうち53点が黒色で油脂状光沢を持つ、極めて良質な硬質頁岩Iである。器種組成はナイフ形石器1(2)点、削器1点、石錐1点、二次加工のある剥片5点、微細剥離痕のある剥片10(11)点、剥片30(33)点、碎片2点、石核1点と多彩であり、このうち主要な器種4点は0.9m以内の近距離から出土している。出土点数の4割以上にあたる8個体23点が接合する。



第48図 第3文化層第I3ブロック器種別分布



第49図 第3文化層第13ブロック母岩別分布

出土石器

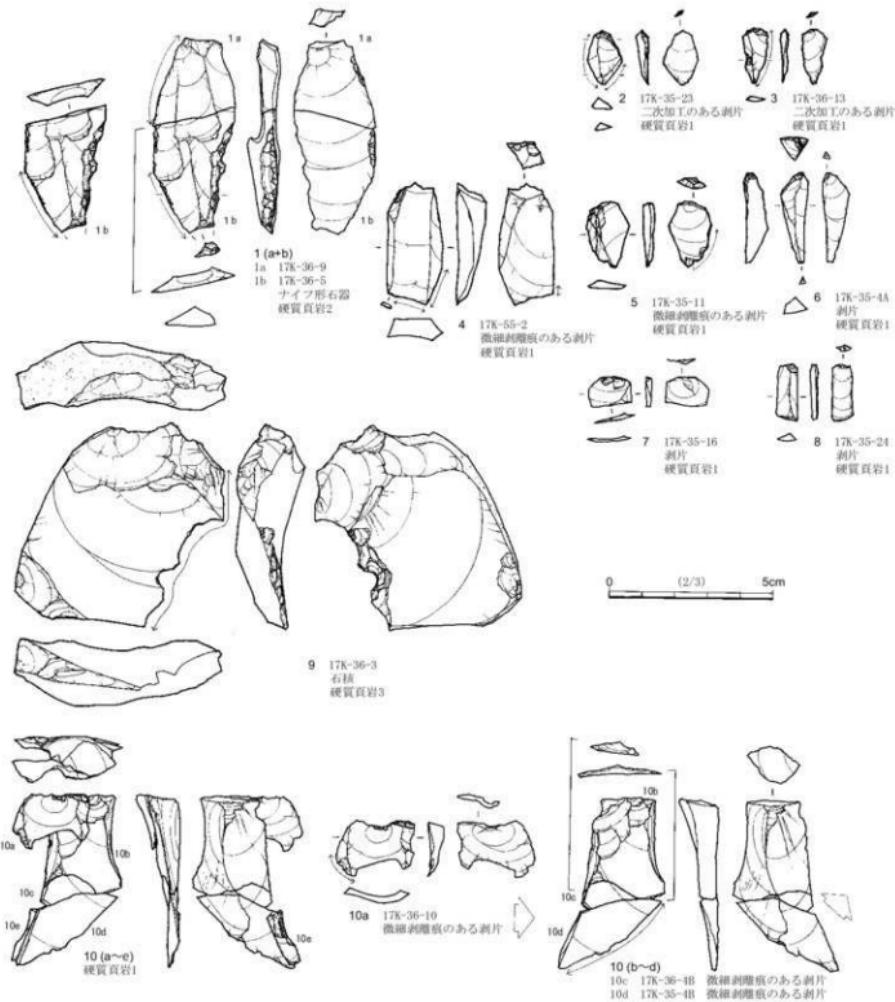
1はナイフ形石器である。母岩の硬質頁岩2は、剥離面が赤褐色で直径0.5mmの黒色斑が点状に散在している。両側縁が末端で収束する縦長剥片が素材であり、右側縁下部に60°～64°の加工が施され、その対縁には使用痕が観察される。上下に分割後、連続した小剥離痕が左側縁の正裏両面に並ぶが、色調・光沢が微妙に異なっており、一部はガジリの可能性がある。なお、図示した石器の母岩は、1は硬質頁岩2、9は硬質頁岩3、それ以外は硬質頁岩1である。

2・3は二次加工のある剥片である。黒色で油脂状光沢のある硬質頁岩1を加工したものである。打面はわずかに残るが、右縁の加工に切られる。左右側縁に微細剥離痕がみられる。5の形状と近似する。小型のナイフ形石器とも捉えられよう。3は長さ16.7mm、厚さ2.4mmほどの小型剥片であるが、左縁辺中ほどには加工痕がみられる。また打点付近には非常に細かな剥離痕が連続しており、角を潰すような加工が施されたか、あるいは使用による潰れが生じたものと思われる。

4・5は微細剥離痕のある剥片である。分布密度の高い集中域から南西に約4m離れた17K-55グリッドに分布する。石器の平面形は長方形状であり、下縁及び右縁下部に微細剥離痕が並ぶが、一部、折れに切られる。5は打面・頭部調整がみられる。左側縁に連続した微細な剥離痕が並び、一部鋸歯縁となる。2と大きさ、形状が近似する。

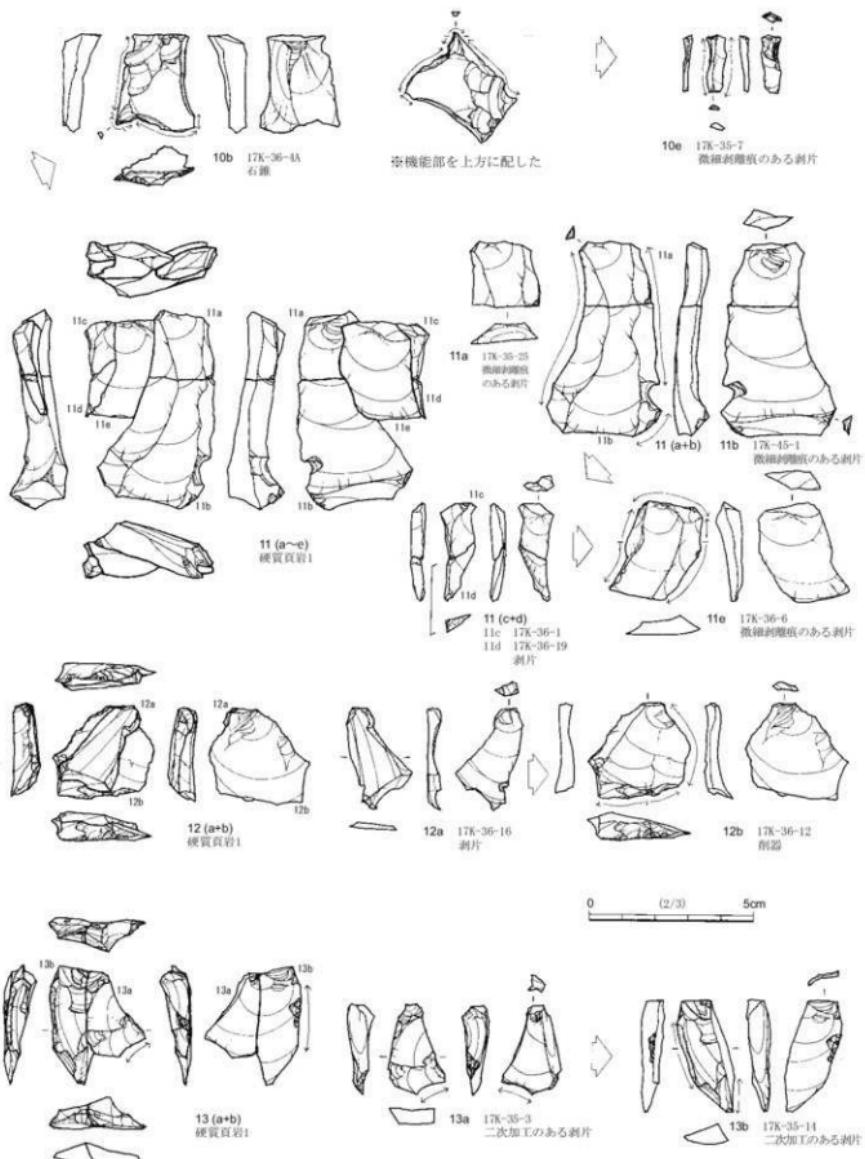
6～8は剥片である。6は集中域の中心に分布する。調整された小口面から打撃が加えられ、素材の棱を背稜とする小型の縦長剥片となっている。背稜の右側は素材時の主要剥離面である。背稜と両側縁には8倍ルーペで観察可能な微細な刃こぼれが所々残るが、使用によるものか否かは分からぬ。7は最大長15mmに満たない小片であるが頭部調整痕がみられる。8の両側縁は平行に走り、背稜はほぼ中心を通る。背面の剥離痕は主要剥離方向と一致しない。器厚は3とほぼ同じである。

9は石核である。母岩の硬質頁岩3は第13ブロックで1点のみの出土である。自然面は赤褐色、剥離面



第50図 第3文化層第13ブロック出土石器（1）

は明黄褐色だが、内側へ向かうほどに褐色となり、光沢を帯びる。原石から打面を作り出したのち、連続して剥離された大型剥片を素材とした石核である。正面側の2面は自然面打面から剥離するが、機能部は右側縁の抉入部分にあると推測される。器面を抉るように正面側から穿たれた凹みの縁辺には微細剝離痕が廻る。なお、同様の石材は、隣接する泉北側第3遺跡第2文化層第7・8ブロックから約200点が出土している。



第51図 第3文化層第13ブロック出土石器（2）

10~14は接合資料である。10(接310)の5点は分布密度の濃いところに集中しており、最長でも1.4mに収まる。10a, 10(b~d), 10eの順に剥離されており、10(b~d)は3点接合した状態で1点の「微細剥離痕のある剥片」であるが、10c, 10dが取られたあと10bの端部が加工され、石錐として利用されている。10eの器面にはうねるような歪みが生じており、熱により変質した可能性が考えられる。両側縁には微細剥離痕がみられる。11(接311)の分布は、11b以外の4点が1mに収まる。11a+11b, 11c+11d, 11eは連続して剥離される。11a+11bは上下に二分され、11bは2.5m離れた17K-45グリッドから出土している。11aは折れた後の角部を中心として使用痕が廻る。12(接307)の2点間は約0.6mである。12aは打点直下折れのため左部のみ残存する。12bの下縁辺は56°~72°で、主要剥離面側から加工された後に使用され、微細剥離痕が隙間なく並ぶ。右側縁は器厚が薄いためかやや凹凸が目立つ。13(接309)の2点の出土地点は1.2m離れる。打点直下で折れた剥片にそれぞれ加工が施されており、刃こぼれか観察される。13aの右下縁辺の使用痕は左部の折れで途切れ、その折面を主要剥離面側からの加工痕が切っている。13bの左側縁は器面に歪みが生じておらず、被熱痕と考えられる。14(接306)の自然面は鉄錆色で、針で刺したような筋条文様がみられる。頭部は調整され、3片以上の縦長剥片が剥離されている。14aが剥離された後も剥片の作出が試みられているが、力は末端までは至らない。このため14bは、荒れた器面を調整する目的で厚く剥離されたものと思われる。



第52図 第3文化層第13ブロック出土石器(3)

第18表 第3文化層第13ブロック組成表

母岩 / 器種	ナイフ形 石器	削器	石錐	二次加工の 微細剥離痕 のある剥片	剥片	碎片	石核	点数	点数比	重量(g)	重量比
硬質頁岩1	0	1	1	5 10(11)	30(33)	2	0	49	94.6%	133.62	68.06%
硬質頁岩2	1(2)	0	0	0 0	0	0	0	1	3.57%	9.63	4.91%
硬質頁岩3	0	0	0	0 0	0	0	1	1	1.79%	53.08	27.04%
合計	1	1	1	5 10	30	2	1	51(56)	100.00%	196.33	100.00%

※()は出土点数

4. 第4文化層

(1) 概要 (第53～56・89図、第19表、図版3・4・13)

第4文化層は第14ブロックが該当する。遺跡の南西端に位置し、石器18点の出土した標高は23.010m～23.440mであり、0.430mの幅を持つ。土層断面への石器投影はできなかったが、調査時の所見や写真で確認できる出土層位はIX層～VI層である。生活面は前述の第3文化層よりもやや新しく、VII層上部～VI層下部にあると考えられる。

(2) 第14ブロック (第54・55図、第19表、図版4・13)

分布状況

19D-96、20D-05～07グリッドの直径約2.6m内に18点が出土した。石材はガラス質黒色安山岩が15点、砂岩、珪質頁岩、玉髓がそれぞれ1点ずつである。器種の内訳は、微細剥離痕のある剥片1点、剥片10点、碎片2点、石核4点、敲石1点であるが、接合はない。

出土石器

1は微細剥離痕のある剥片である。母岩は玉髓1で、自然面は橙色、剥離面は橙～白色半透明である。調整された打面から剥離されているが、力は素直には抜けず、下半部で方向を変え、末端付近でうねりができる。両側縁に微細剥離痕が廻る。

2は剥片である。自然面、剥離面ともに明黄褐色であり、黒色の小さな粒が散見される珪質頁岩1を母岩とする。平坦打面から加えられた打撃により、左部のみ残存する。上線には頭部調整痕に加え、背面からの細かな加工が施されているが、主要剥離面に切られる。縁辺には器厚とフィッシャーに起因する凹凸がみられる。

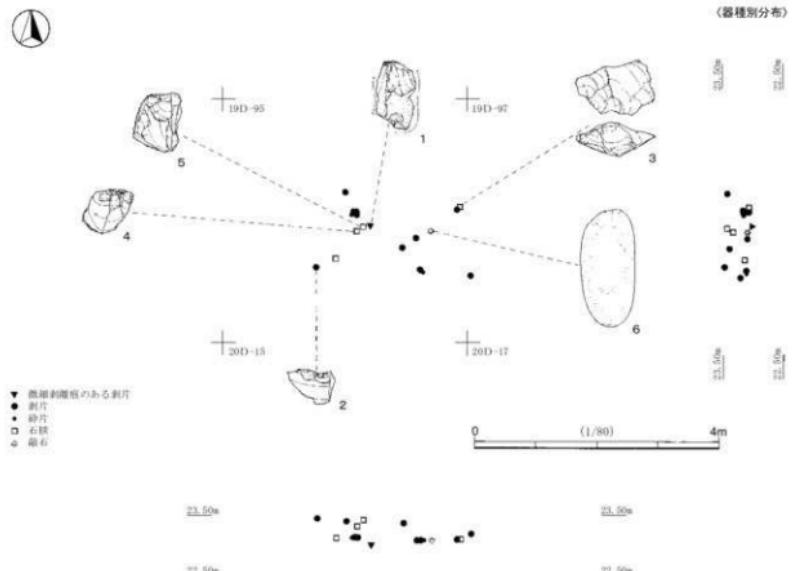
3～5は石核である。3は、ガラス質黒色安山岩2と近似するが、より褐色が強いガラス質黒色安山岩1が母岩である。厚みのある剥片を素材とし、器厚を減ずるような剥離工程を経た後、主要剥離面側から打撃が加えられている。4・5はガラス質黒色安山岩2が母岩である。自然面は、爪で掻いたような細かな筋状の凹凸の中に黄褐色のローム粒が入り込んで、全体が明るい黄褐色となっている。剥離面は青灰色の石基に、黒色で玻璃質の直径1mmほどの斑晶を含む。4は、自然面を薄く削いだ後を打面として同一方向に打撃が加えられており、規格的な剥片作出が行われた痕跡が残る。5は多方向からの打撃により、貝殻状の剥片作出が行われた石核である。

6は敲石である。緑色を帯びた砂岩製の小型楕円礫の両端には、剥落痕や敲打痕がみられる。

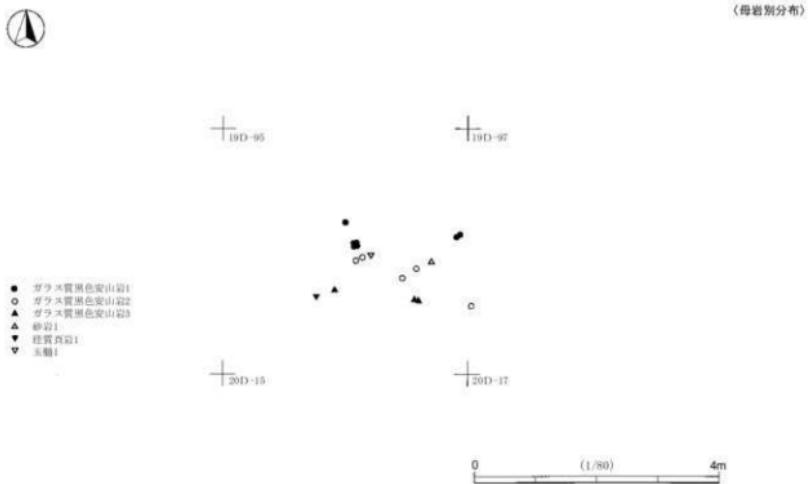


第53図 第4文化層ブロック位置図

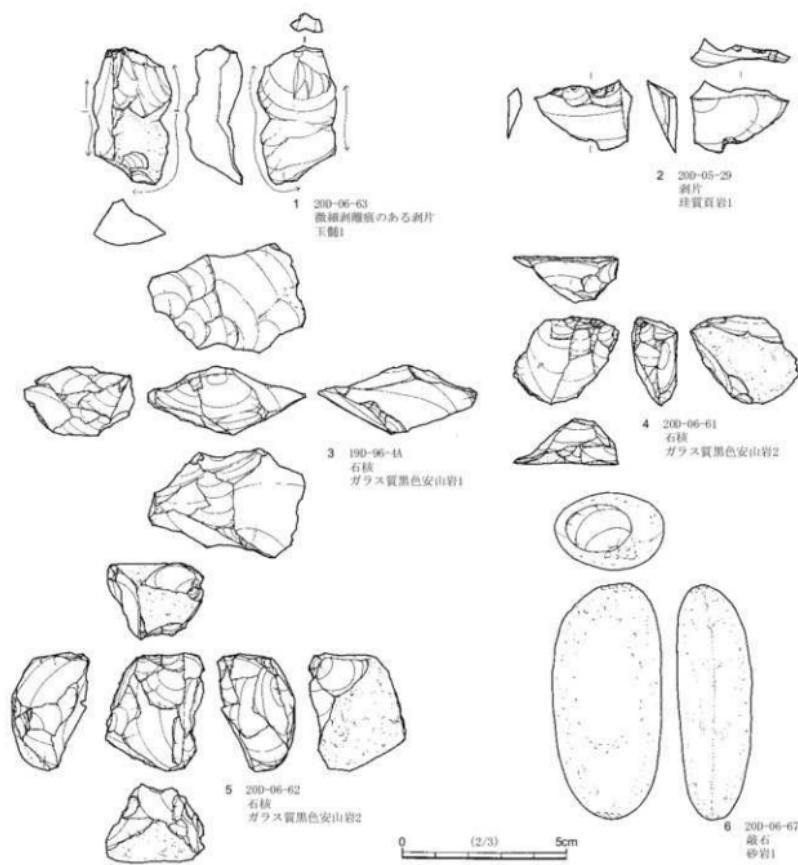
(器種別分布)



(母岩別分布)



第54図 第4文化層第14ブロック石器分布



第55図 第4文化層第14ブロック出土石器

第19表 第4文化層第14ブロック組成表

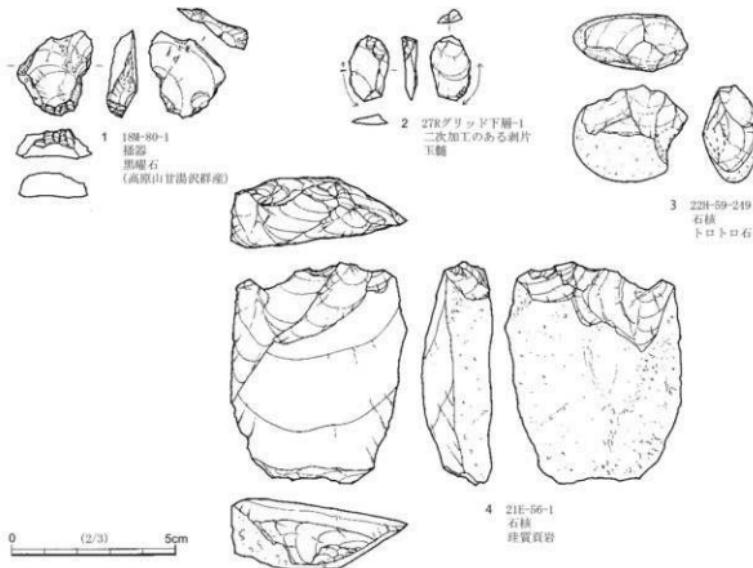
母岩 / 器種	微細剥離痕のある剥片	剥片	碎片	石核	敲石	点数	点数比	重量(g)	重量比
ガラス質黒色安山岩 1	0	5	1	1	0	7	38.89%	27.80	14.62%
ガラス質黒色安山岩 2	0	3	0	2	0	5	27.78%	41.24	21.69%
ガラス質黒色安山岩 3	0	1	1	1	0	3	16.67%	24.64	12.96%
砂岩 1	0	0	0	0	1	1	5.56%	80.24	42.20%
珪質頁岩 1	0	1	0	0	0	1	5.56%	2.80	1.47%
玉髓 1	1	0	0	0	0	1	5.56%	13.42	7.06%
合計	1	10	2	4	1	18	100.00%	190.14	100.00%

(3) 第4文化層単独出土石器 (第56・89図、図版13)

1は高原山甘湯沢群産の黒曜石を用いた搔器である。黒色不透明で、部分的に夾雜物を多く含んでいる。厚みのある素材の打面部分が $82^{\circ} \sim 85^{\circ}$ に加工され、機能部となっている。左上部は欠損している。18M-80グリッドから出土した。

2は玉髓製の二次加工のある剥片である。黄橙色で半透明である。複剥離打面を持ち、左側縁に二次加工痕と微細な刃こぼれがみられる。27Rグリッドから出土した。

3・4は石核である。3はトロトロ石であり、自然面は黄褐色、剥離面は青みのある青灰色、ガジリ部分は暗灰色である。偏平な小円碟の短軸方向から打撃が加えられ、小型の貝殻状剥片作出が試みられている。22H-59グリッドから出土した。4の自然面は赤みの強い明褐色、剥離面はそれにやや緑色を帯び、濃い褐色の斑に入る珪質頁岩である。赤褐色の部分と緑色を帯びる部分は明確に二分される。端部は両平坦面から交互に剥離され、波状の稜線となっている。21E-56グリッドから出土した。



第56図 第4文化層単独出土石器

5. 第5文化層

(1) 概要 (第57~72・89図、第20~28表、図版4・13・14)

第5文化層は第15~21ブロックの7か所が該当する。石器は遺跡の北側の標高22.528m~24.023mから、154(160)点が出土した。調査時の所見はVII層~III層であるが、断面図への石器投影はIX層~IIc層に包含された。生活面はV層上部~IV層下部にあると考えられる。なお第16~18ブロック、第19~21ブロックは、ブロック間で共通する母岩が

確認されたため、同時に営まれたブロックとして捉え、母岩に共通する番号を付して報告する。

(2) 第15ブロック (第58~60、第20表、図版3・4・13)

分布状況

遺跡北端に位置し、5N-53°65'66"、74°75'76"85'96グリッドに、流紋岩4(5)点、黒曜石5(6)点、珪質頁岩4点、チャート1点の計14(16)点が分布する。標高は22.857m~23.383mであり、ほとんどの石器が直径約7mの範囲内からの出土である。黒曜石はすべて蓼科冷山群産だが、肉眼観察により3種類に分けた。器種は、二次加工痕がみられるものもあるが、剥片が主体である。流紋岩と黒曜石の2個体4点が接合する。

出土石器

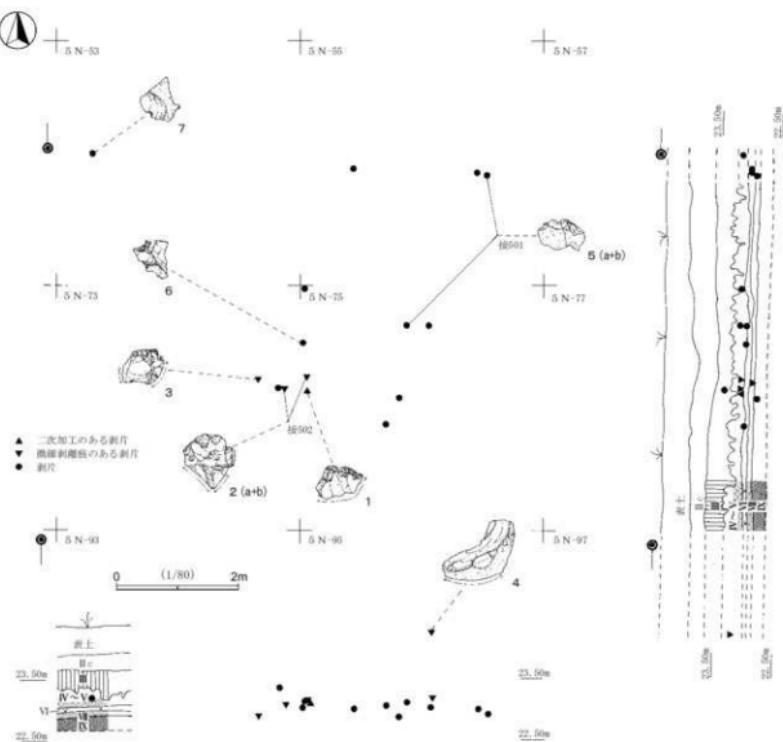
1は二次加工のある剥片である。わずかに赤みを帯びるが黒色半透明で良質な黒曜石1が母岩である。打点対縁の刃こぼれが著しい。左下端部には細かな剥離痕がみられるが、ガジリの可能性がある。

2~4は微細剥離痕のある剥片である。1と同様、母岩は蓼科冷山群産の黒曜石1であるが、綿状の黑色筋と直径0.5mmの灰色の斑晶を含んでいる。自然面を打面として剥離されている。使用痕は両側縁にみられ、2bの欠けもこの使用時に生じたものとみられる。3は黒曜石3が母岩である。夾雜物をほとんど含まず、5mmの厚さでも光を透過する。複剥離打面の稜線上に打点があり、広い対縁が形成される。縁辺は薄く、細かな刃こぼれがみられる。4の珪質頁岩1の剥離面は淡褐色、褐色の2色に分かれ。剥離面がよじれて矩形を呈し、自然面と主要剥離面とが作る縁辺には使用痕が顕著である。

5~7は剥片である。5の母岩は流紋岩1で、自然面から内側に向かうにしたがって赤みが薄まっており、被熱による変色が認められる。2点接合するも、濃淡の色調差からは折れた後の環境の違いがうかがえる。6・7の打面部は欠損している。6の母岩は黒曜石1である。7は赤色を帯びるが透明度の高い黒曜石2を母岩とする。器厚が薄く鋭利な縁辺である。



第57図 第5文化層ブロック位置図

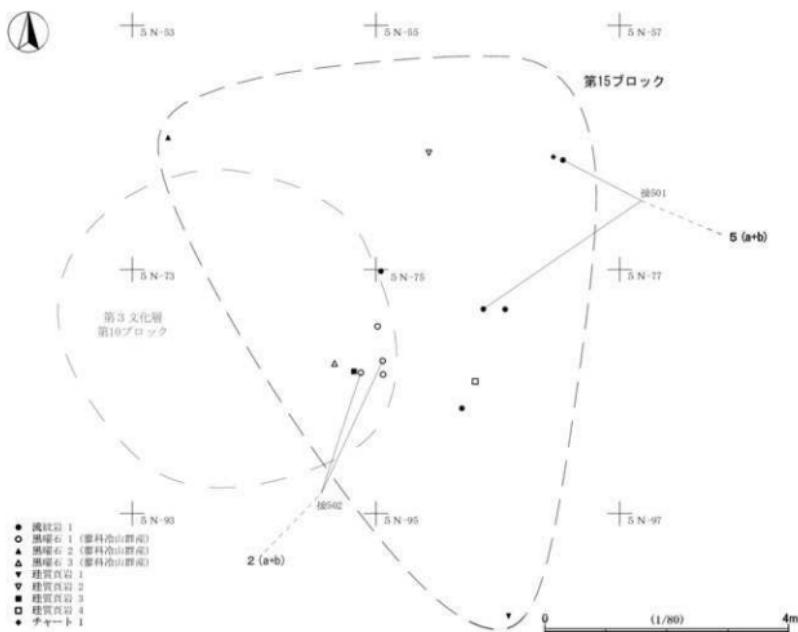


第58図 第5文化層第15ブロック器種別分布

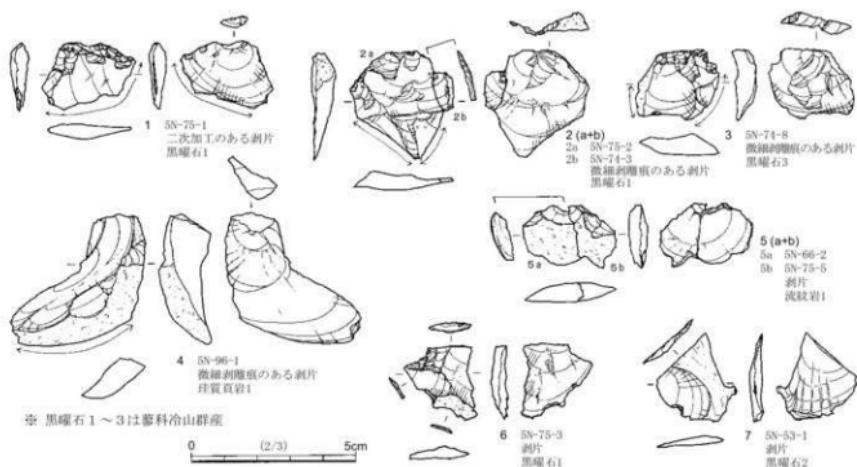
第20表 第5文化層第15ブロック組成表

母岩 / 器種	二次加工のある剝片	微細剝離痕のある剝片	剝片	点数	点数比	重量(g)	重量比
流紋岩 1	0	0	4(5)	4	31.25%	10.42	23.00%
黒曜石 1	1	1(2)	1	3	25.00%	7.47	16.49%
黒曜石 2	0	0	1	1	6.25%	1.26	2.78%
黒曜石 3	0	1	0	1	6.25%	3.27	7.22%
珪質頁岩 1	0	1	0	1	6.25%	13.19	29.11%
珪質頁岩 2	0	0	1	1	6.25%	6.09	13.44%
珪質頁岩 3	0	0	1	1	6.25%	2.09	4.61%
珪質頁岩 4	0	0	1	1	6.25%	0.85	1.88%
チヤート 1	0	0	1	1	6.25%	0.67	1.48%
合 計	1	3	10	14(16)	100.00%	45.31	100.00%

* () は出土点数



第59図 第5文化層第15ブロック母岩別分布



第60図 第5文化層第15ブロック出土石器

(3) 第16~18ブロック (第61~67図、第21~24表、図版3・13・14)

分布状況

遺跡北西に位置する6M-91・93・94、7M-01~04・11・12・17・18・21グリッドから、石器89(92)点が出土した。標高は22.528m~23.136mである。器種の内訳はナイフ形石器2点、削器4点、掻器5点、石錐2点、二次加工のある剥片2点、微細剥離痕のある剥片19点、剥片36(39)点、碎片18点、石核1点である。石材はガラス質黒色安山岩5点、トロトロ石2点、珪質頁岩3(4)点、硬質頁岩77(79)点、チャート2点であり、硬質頁岩が約86%を占める。母岩は3か所のブロックともに共通するが、ブロック間での接合関係は第16・17ブロック間でのみ確認された。

出土石器

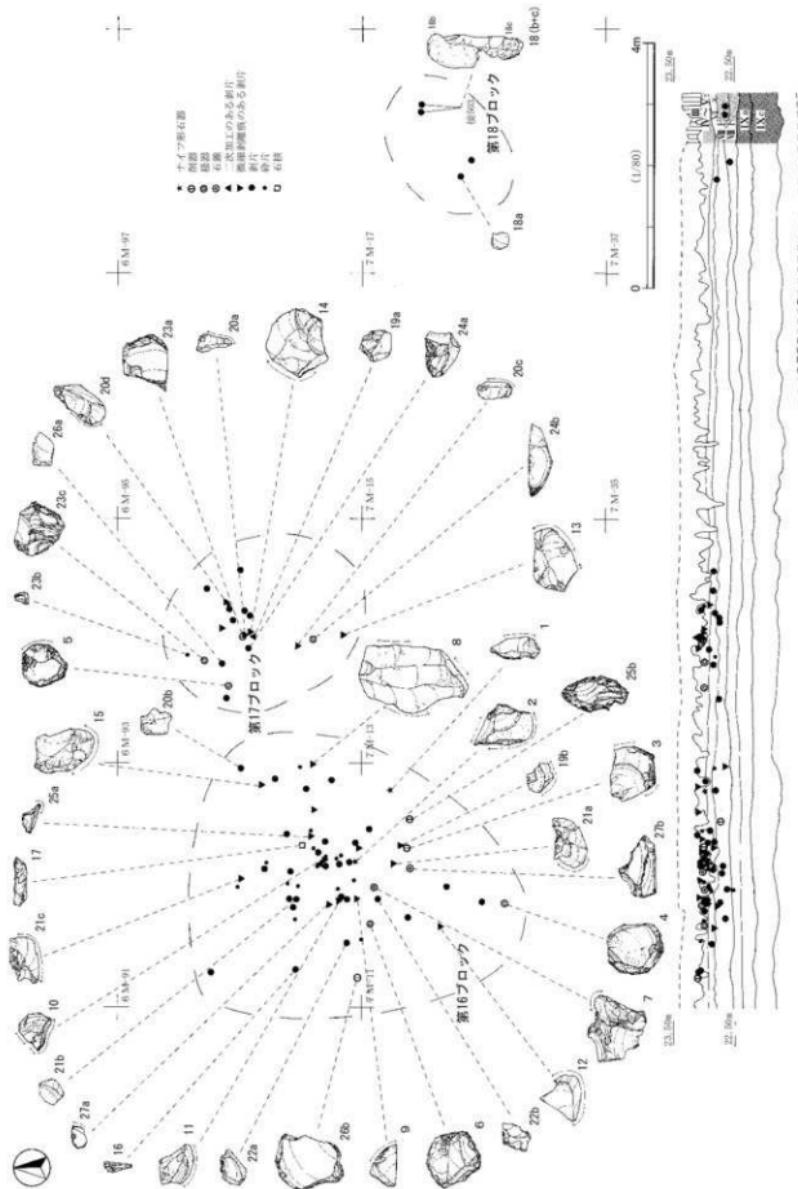
1・2はナイフ形石器である。1の母岩である硬質頁岩11は、褐色で滑らかな光沢を持つ、いわゆるチョコレート頁岩である。縦長剥片の側縁に急角度の剥離が施される。下部に自然面が残る。右縁辺の使用痕が上部の調整痕に切られることから、右上縁部の加工痕は刃部の調整を目的としたものと思われる。2の母岩は硬質頁岩12であり、自然面は黄褐色、剥離面は黒褐色である。主要剥離面の光沢が強い。横長剥片を素材にした切出形のナイフ形石器であり、刃部には刃こぼれがみられる。主要剥離面側からの一撃で急角度の基部が作出されるが、素材打面の一部は残る。右側面を除く縁辺には微細剥離痕が廻る。

3は削器である。自然面は淡い灰褐色、剥離面は自然面よりも濃い褐色の硬質頁岩16が母岩であるが、硬質頁岩7と近似する。左右縁辺は63°~68°に成形されたあと、85°~93°に調整される。右下端部の剥離後、調整された痕跡がないことから、尖端部の欠損後、遺棄されたものと思われる。

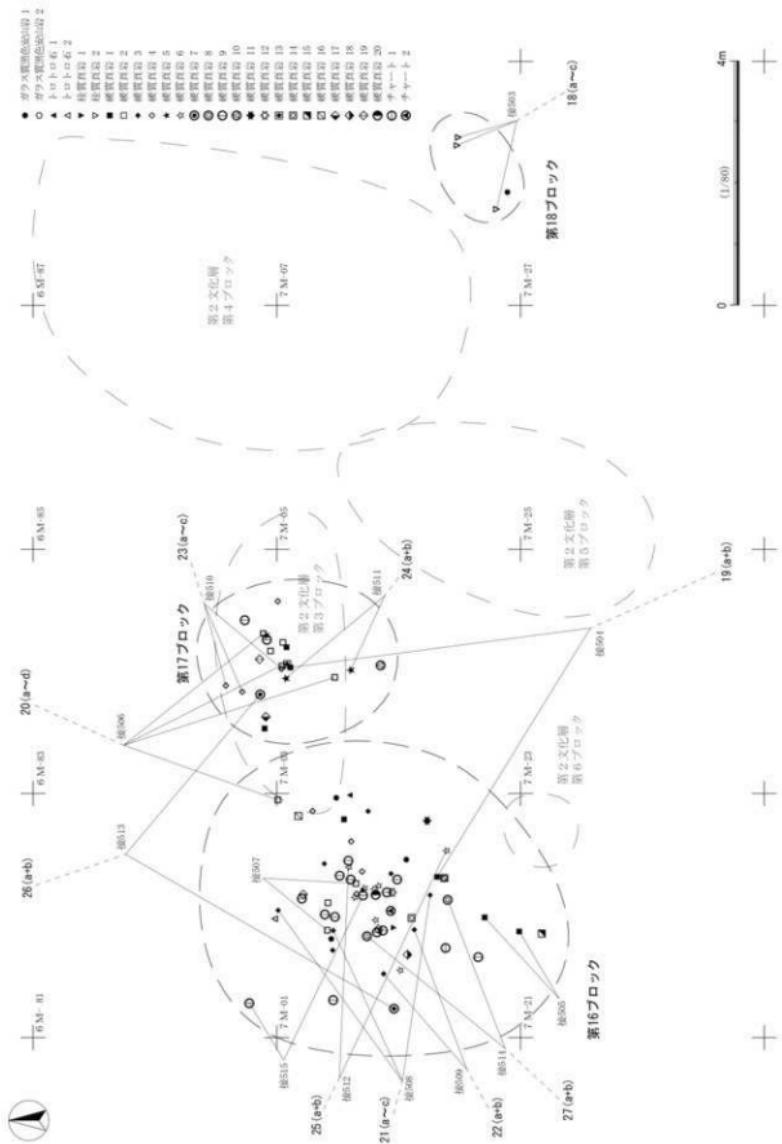
4~6は掻器である。4の母岩である硬質頁岩15は灰白~褐色~黒色と、色調の変化が大きい。近似する母岩はなく、第16ブロックの南端に分布する。板状に整えられた剥片の外周を、主要剥離面側から加撃することで60°~80°の刃部が作り出された円形の掻器である。素材剥片の打点部には、打面に対し垂直に力が加わったため、膨らみを持った打瘤ができているが、除去されることなく、成形、整形とともに丁寧に整えられている。5は淡褐色で光沢が強い硬質頁岩17を母岩とする。硬質頁岩9の一部と近似する。4同様、剥片素材で主要剥離面側を打面とする。周縁は約65°で成形されるが、稜にはさらに加工が施され、83°~93°程の急角度となっている。末端は疣状となり、度重なる加工の痕が残るが、除去には至らない。稜の丸みは磨り潰しによるものであろう。6は硬質頁岩18が母岩である。一部光沢を持ち、節理面は赤みを帯びる。縦長剥片が上下に分割され、打面部が用いられており、4、5同様、主要剥離面側から加工が施されている。成形はやや粗く、素材からすぐりに64°~83°のエッジが作り出される。

7は石錐である。わずかに白色を帯びた褐色で、油脂状の光沢を持つ硬質頁岩14を母岩とする。厚みのある大型の剥片を素材に、周縁から中心に向かう剥離によって主要剥離面側が削がれている。石錐としての機能部は交互剥離によって成形されており、欠損後の微細剥離痕が観察される。

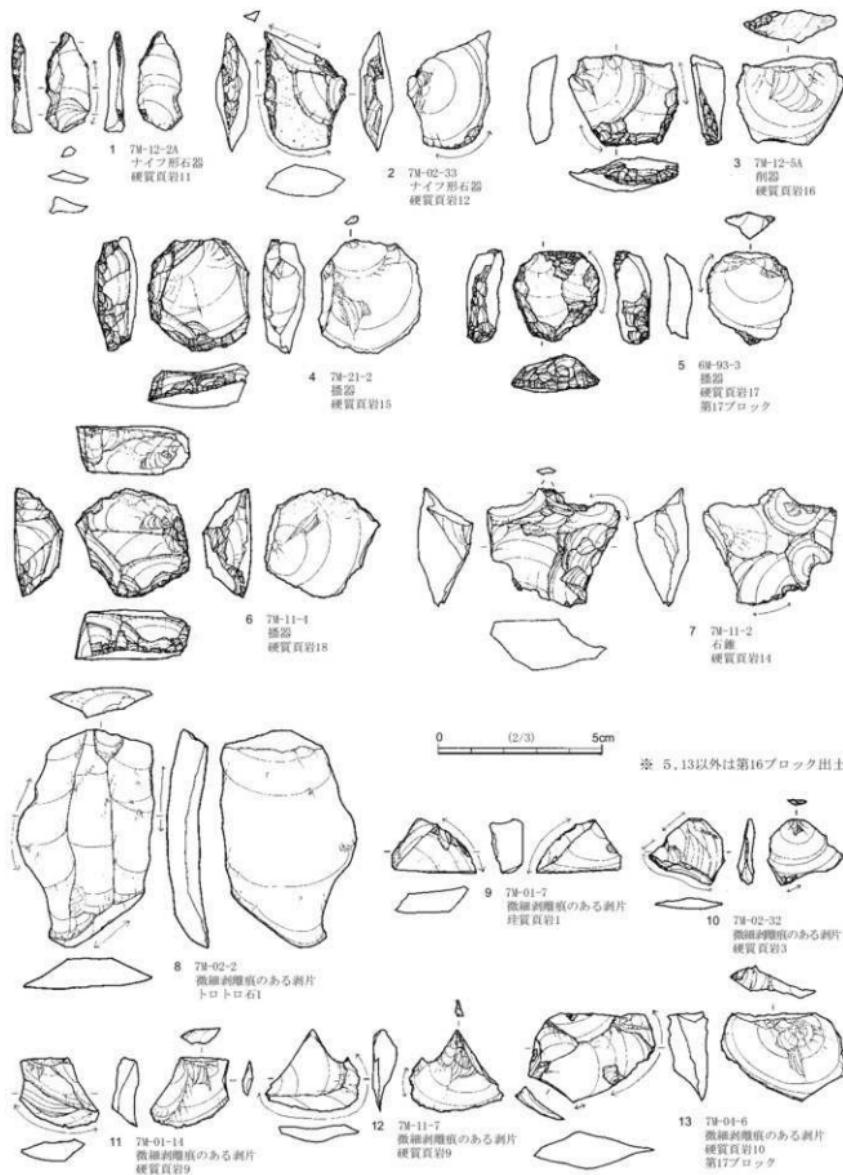
8~15は微細剥離痕のある剥片である。8は灰白色で軟質のトロトロ石1が母岩である。規則的に剥離された石刃の1片であるが、打面部は遺存しない。風化が早いという石材の特徴と相まって、はっきりとした使用痕は捉えられないが、両側縁の凹凸と、下縁辺の微細剥離痕が微かであるか観察される。9の珪質頁岩1は淡い褐色を帯びた灰白色であり、細粒で軽い。左上部は折面である。右側縁に微細剥離痕が並び、所々ガジリに切られる。10は硬質頁岩3が母岩である。左側縁と下縁辺の収束する端部に微細な剥離痕が顕著である。打角は98°であり、22と同一工程で剥離されたものと推測されるが接合しない。11の



第61図 第5文化層第16～18ブロック器種別分布



第62図 第5文化層第16～18ブロック母岩別分布



第63図 第5文化層第16～18ブロック出土石器（1）

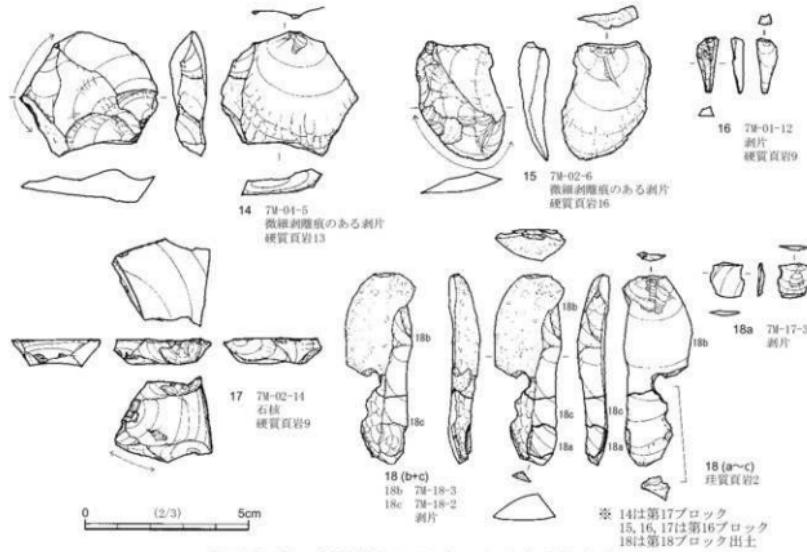
硬質頁岩9は節理面が明黄褐色、剥離面は褐色であり、両面とも油脂状光沢がある。緩やかな弧状の縁辺には刃こぼれが生じている。12も硬質頁岩9である。自然面から剥離されており、弧状の縁辺には刃こぼれがみられる。13は黒褐色で油脂状光沢を持つ硬質頁岩10が母岩である。背面に多方向の剥離痕があり、器面の調整を担った剥片であることがわかる。頭部・打面調整はみられず、縁辺に廻る微細剥離痕は折れに切られる。14の母岩は、自然面が明黄灰色とオリーブ灰色の2色、剥離面が褐色の硬質頁岩13である。2面ある自然面の傾きから、素材礫が斜めに用いられていることがわかる。器面調整剥片だが、周縁に微細な刃こぼれが看取される。15は硬質頁岩16を母岩とする。両面ともボジティブバルブを持つ。器厚は10mmに満たない。打角98°で自然面から剥離され、縁辺に微細剥離痕が並ぶ。

16は剥片である。硬質頁岩9が母岩である。両側縁には8倍ルーペで観察可能な刃こぼれがみられるが、人為的な使用痕ではないと思われる。末端は主要剥離面が回り込んだものである。

17は石核である。母岩の硬質頁岩9は16点出土しているが、17には特に光沢の強い部分が用いられている。素材剥片の平坦面を打面として剥離作業が行われており、下面図左下部には素材時の使用痕が残る。何らかの石器製作を意図した加工が行われたものと推測される。

18~27接合資料である。18(接503)の自然面は緑色を含んだ黒色であり、剥離面は橙褐~緑褐色で、暗赤紫色の直径1mm~3mmの丸い斑点が散在する珪質頁岩2を母岩とする。18bと18cはほぼ同じ場所から、18aは約1.4m離れて出土した。3点とも第18ブロックに帰属する。被熱して弾けたのちの環境の違いによつて色調差が生じたものである。両側縁の細かな剥離痕は被熱や摩耗、風化に起因すると思われる。

19(接504)は、濃淡のある灰褐色で、微光沢を持つ硬質頁岩1が母岩である。19aは第17ブロック、

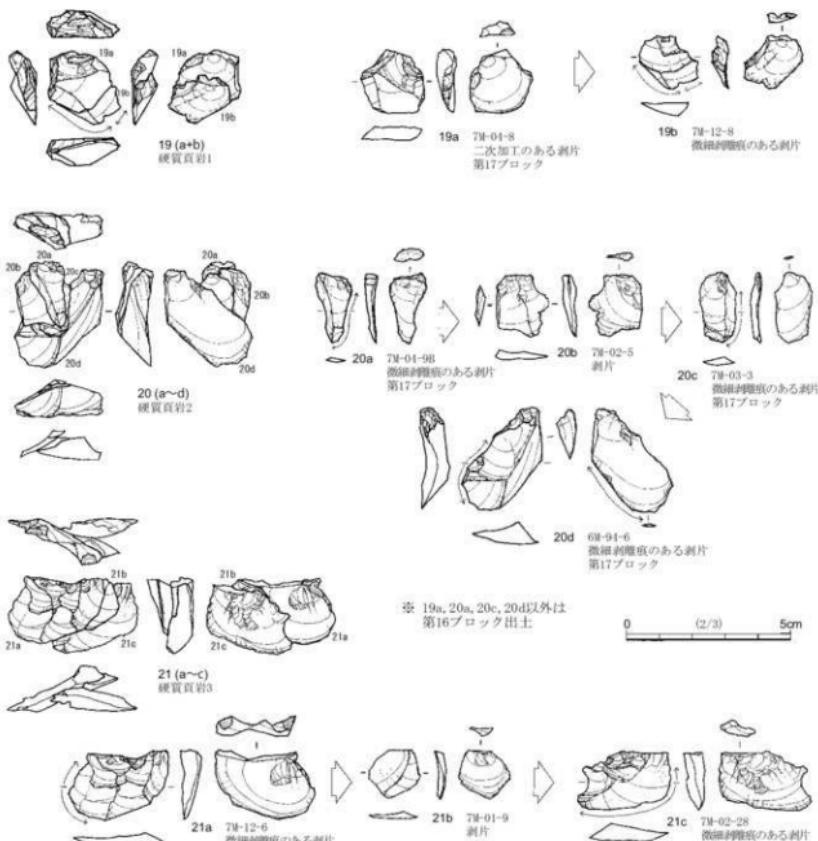


第64図 第5文化層第16~18ブロック出土石器 (2)

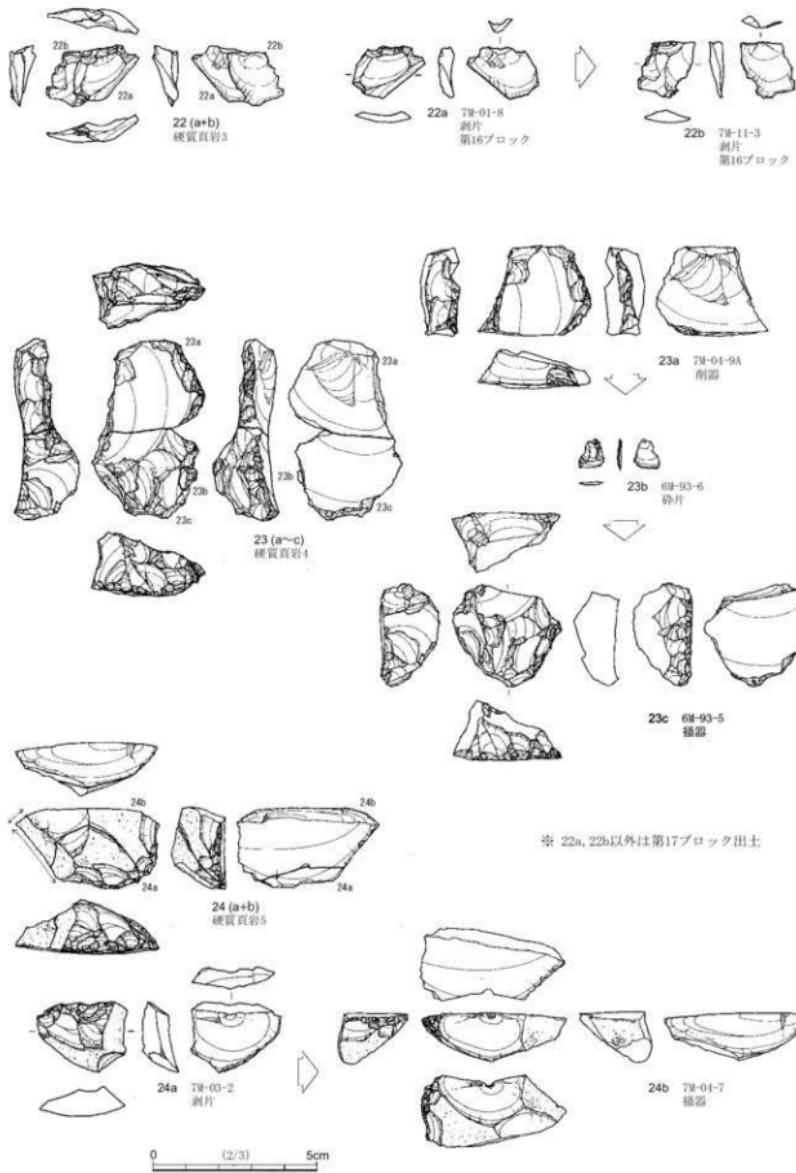
19bは第16ブロックに分布する。19a剥離後に打撃方向を変えて2回以上加撃されており、石器調整剥片同土の接合資料と思われる。19aには主要剥離面を切る側面からの剥離痕が複数みられるが、風化の度合いかが低く、ガジリの可能性がある。19bの微細剥離痕は2点が接合していた時のものであろう。

20(接506)は、褐色で油脂状光沢を持つ硬質頁岩2が母岩である。微細剥離痕のある剥片3点と剥片1点が2.8m四方に分布し、第16・17ブロック間で接合した。共通の打面から20a、20b、剥片、剥片、20c、剥片、剥片、20dの順に剥離される。20bを除く3点に刃こぼれがみられる。

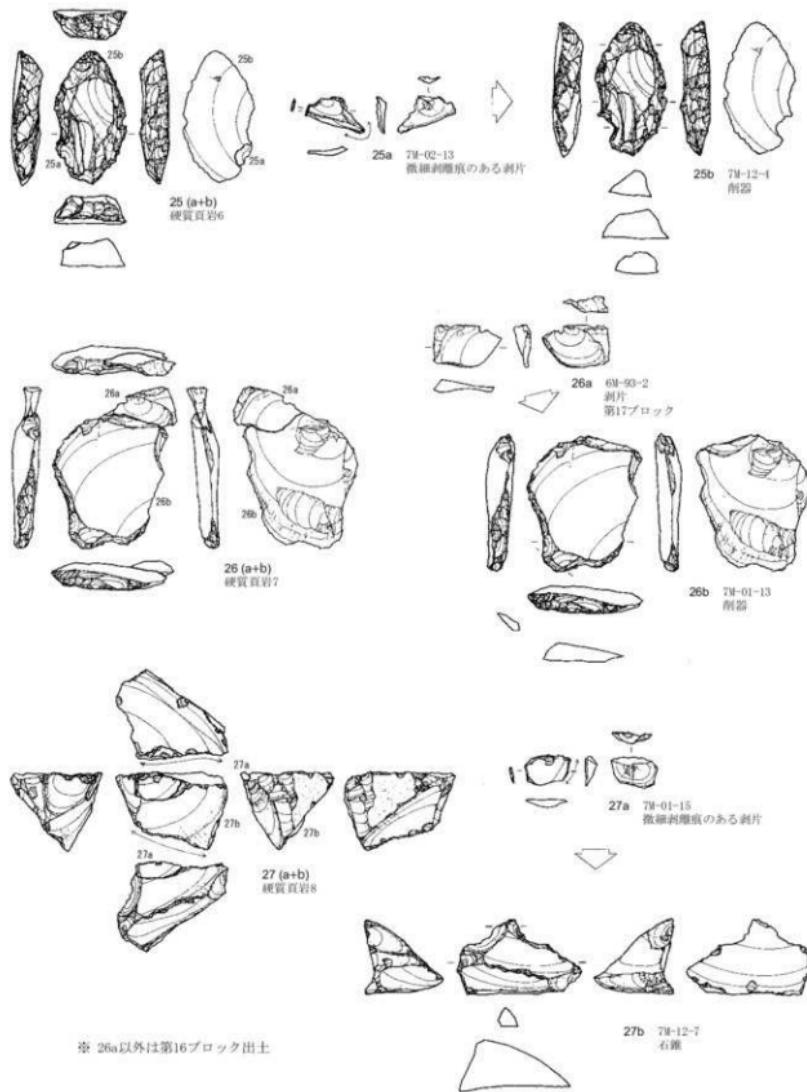
21・22は、第16ブロックから出土した硬質頁岩3の接合資料である。21は(接508)同一打面から21a、剥片、21b、剥片、21cの順に剥離されるが資料には間隙が目立つ。21a、21cの微細剥離痕は、縁辺の薄さとフィッシャーの凹凸に起因する刃こぼれか。22(接509)は同一打面から2点連続して剥離されている。



第65図 第5文化層第16~18ブロック出土石器(3)



第66図 第5文化層第16～18ブロック出土石器 (4)



※ 26a以外は第16ブロック出土

0 (2/3) 5cm

第67図 第5文化層第16～18ブロック出土石器 (5)

23(接510)は、硬質頁岩4を母岩とする。もとは剥片素材の削器であったものがブロック内で2分され、上・下部とも別々に加工が施された資料である。23aの削器は分割後、右側縁下部と折面が急角度に加工される。初期の工程において縁辺が磨り潰されたことにより、丸みのある稜が形成されている。23cは素材の主要剥離面の中ほどを打撃点とするため、76°～83°の急角度剥離によって挿器刃部が作り出されている。かなりリダクションが進んだ状態である。

24(接511)は、硬質頁岩5を母岩とする剥片と挿器の接合資料である。接合時は2点で挿器であったものが、平坦な剥離面から敲打され、挿器刃部の大部分が剥離されている。24aの打点対線には欠けがあり、使用による刃こぼれか自然面ゆえの剥落かは不明である。

25(接512)は、褐色で油脂状光沢を持つ硬質頁岩6を母岩とする。削器と調整剥片の接合資料であり、調整剥片の端部には微細剥離痕がみられる。削器の左側縁は53°～68°、右側縁は75°～84°である。素材打面付近の加工と比べると右側縁がより急角度であり、リダクションが繰り返された結果と推測される。調整剥片には使用痕がみられる。25bから剥離された25aは、25bを調整するための剥片であろうが、目的的剥片として作出された可能性がある。

26(接513)は、自然面が明るい黄褐色、剥離面が褐色の、継状の部分と斑状の部分をもつ硬質頁岩7が母岩である。硬質頁岩16とは自然面の特徴が極めて近似する。26bの削器は第16ブロック西端にあり、高密度域の外縁部から出土している。26aは第17ブロックに分布する。主要剥離面側から二側縁に施された加工は緩やかな抉りとともに尖端が作り出されていたと推測される。折れた後、器形を整えるような調整が加えられている。同様の工程・形態は3の削器にもみられる。

27(接514)の母岩は、濃褐色で油脂状光沢を持ち、裏面に赤みのある風化剥離面が残る硬質頁岩8である。27aは石錐の機能部を調整するために剥がされた小型の剥片であるが、縁辺には微細剥離痕がみられる。

第21表 第5文化層第16ブロック組成表

母岩 / 器種	ナイフ形 石器	削器	挿器	石錐	二次加工の 微細剥離痕 のある剥片	剥片	碎片	石核	点数	点数比	重量(g)	重量比
ガラス質黒色安山岩 1	0	0	0	0	0	0	2	1	0	3	4.55%	0.94 0.49%
ガラス質黒色安山岩 2	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1.52%	0.16 0.08%
トロトロ石 1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1.52%	28.00 14.48%
トロトロ石 2	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1.52%	0.21 0.11%
珪質頁岩 1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1.52%	2.57 1.33%
珪質頁岩 1	0	0	0	0	0	1	2(3)	0	0	3	6.06%	3.62 1.87%
珪質頁岩 2	0	0	0	0	0	0	4	0	0	4	6.06%	2.99 1.54%
珪質頁岩 3	0	0	0	0	0	3	6	1	0	10	15.15%	11.23 5.80%
珪質頁岩 4	0	0	0	0	1	1	2	0	0	4	6.06%	3.64 1.88%
珪質頁岩 6	0	1	0	0	0	1	0	6	0	8	12.12%	9.31 4.81%
珪質頁岩 7	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1.52%	11.62 6.00%
珪質頁岩 8	0	0	0	1	0	1	0	0	0	2	3.03%	13.00 6.71%
珪質頁岩 9	0	0	0	0	0	3	5(6)	4	1	13	21.21%	21.65 11.18%
珪質頁岩 11	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1.52%	1.99 1.03%
珪質頁岩 12	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1.52%	8.48 4.38%
珪質頁岩 14	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	1.52%	17.72 9.15%
珪質頁岩 15	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1.52%	16.38 8.46%
珪質頁岩 16	0	1	0	0	0	1	0	0	0	2	3.03%	15.61 8.06%
珪質頁岩 18	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1.52%	18.60 9.60%
珪質頁岩 19	0	0	0	0	0	0	1	1	0	2	3.03%	0.68 0.35%
珪質頁岩 20	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1.52%	3.08 1.59%
チヤート 1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1.52%	2.04 1.05%
チヤート 2	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1.52%	0.08 0.04%
合計	2	3	2	2	1	13	24	16	1	64(66)	100.00%	193.65 100.00%

() は出土点数

(4) 第19～21ブロック (第68～71図、第25～28表、図版14)

分布状況

第19～21ブロックは遺跡の中央北東寄りに位置し、11P-03・04・13・15・17・19・27～29・38・39グリッドから石器47(48)点が出土した。標高は23.452m～24.023mである。器種の内訳は角錐状石器3点、削器1点、石錐1(2)点、二次加工のある剥片1点、微細剥離痕のある剥片1点、剥片28点、碎片10点、礫・礫片が各1点であり、このうち主要な器種6点は第21ブロックの中心部に集中する。石材はガラス質黒色安山岩16点、黒曜石7(8)点、砂岩1点、頁岩6点、珪質頁岩5点、黒色頁岩2点、ホルンフェルス9点、石材不明1点である。4個体13点が接合し、このうちガラス質黒色安山岩の1個体は第20・21ブロック間で約6.2m離れて接合する。なお、当ブロックから出土した黒曜石の原産地は箱根畠宿群と推定され、角錐状石器、石錐、二次加工のある剥片が各1点と剥片4点を組成している。

出土石器

箱根畠宿群産の黒曜石は高原山甘湯沢群産のものと区別しがたいが、黒曜石1は点状の微細な夾雜物を含有することで肉眼での判別が可能な資料である。第21・22ブロックでは1・4・5が黒曜石1を母岩とする。

1・2は角錐状石器である。1は横長剥片の主要剥離面を打面として両側縁が急角度に剥離され、山高の断面となる。下部は夾雜物からの折れにより欠損する。2の母岩は、褐色を帯びた灰白色の頁岩1である。自然面ではなく、ガジ部分は濃灰色である。硬質な黒色頁岩であろうか。頁岩1は11P-28グリッドに5点が分布しているが、接合関係はない。大型の剥片の平坦面を打面として、素材の主要剥離面を削ぐように連続した打撃が加えられており、直線的な右側縁が形成されている。この後、稜上からの成形が行われるが、左側面が急角度に深く断ち落され、5点の調整剥片とともに残される。

3は削器である。母岩である珪質頁岩1の自然面は、白色でザラザラとした質感のある凝灰岩質であり、微弱だが磁性を持つ。剥離面は黒褐色で堅緻であり、細かな石英粒がみられる。火砕性堆積物中に生成した球形の塊であろう。両側縁は平行に走り、部分的に鋸歯状の加工が施され、左側縁中ほどは二次加工によって緩やかに抉られる。打面は折れにより存在しない。

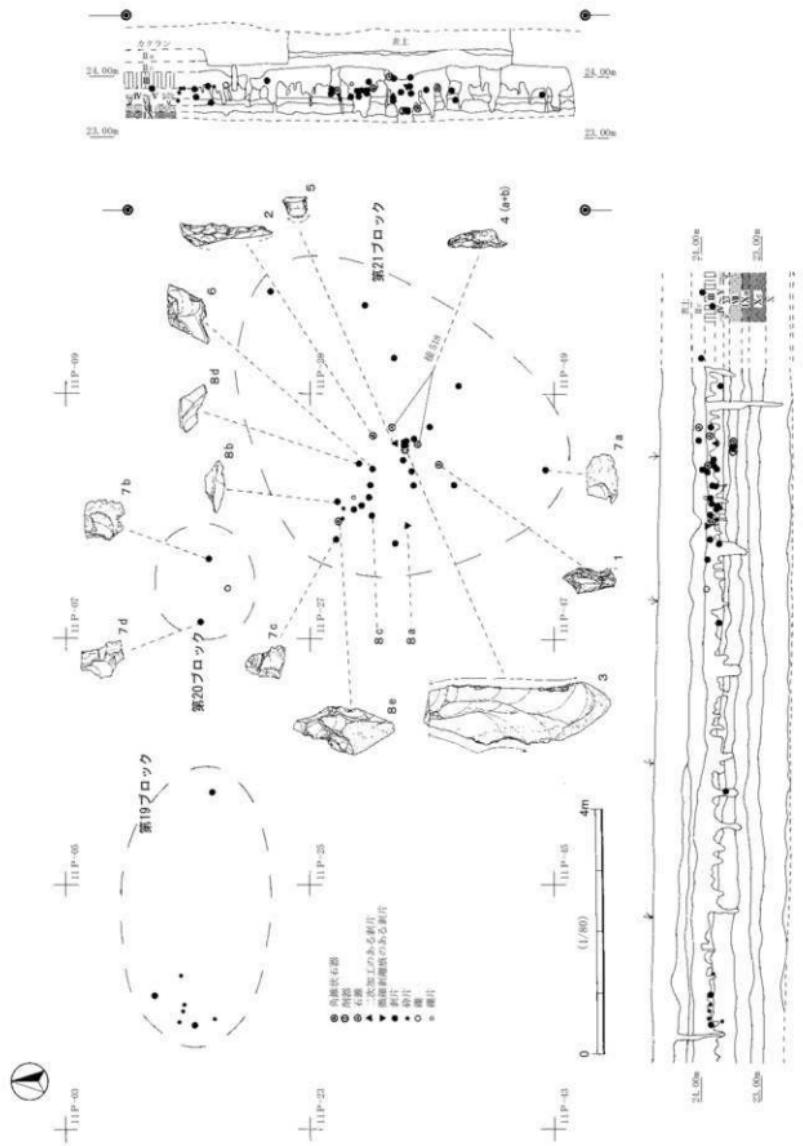
4は石錐である。端部(図では上方)からの衝撃によって、地滑り状に器体中央部で折れている。断面は厚みを持った三角形状であり、剥離の角度は78°～83°である。機能部は両側縁部から緩く抉られたあと、細かく調整される。先端部には使用による潰れと正面側に筋状の衝撃剥離痕がみられる。

5は二次加工のある剥片である。折面を打面とする剥片の主要剥離面側に微細剥離が施されている。黒曜石1には角錐状石器やナイフ形石器があり、これらの調整を目的とする剥片であった可能性が高い。

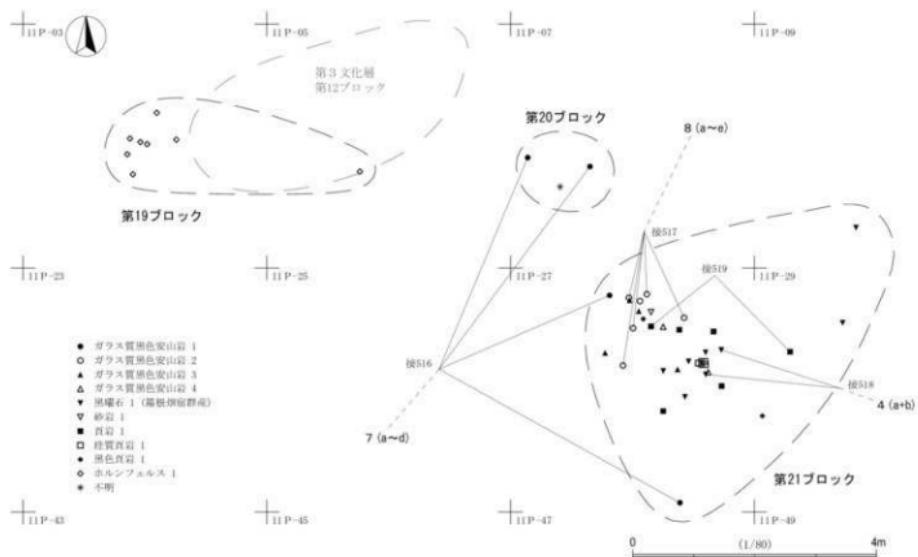
6は剥片である。2の角錐状石器を調整するために剥離された可能性が高い。背面上部から左部にかけて79°～84°の剥離角を持つ小剥離痕が連続する。

7・8は接合資料である。7(接516)はガラス質黒色安山岩1の4点接合資料である。自然面は鉄青色であるが剥離面は青みがかった黒色である。第20ブロックと第21ブロックに2点ずつ計4点が分布し、すべて接合した。同じ打面からは7片以上が剥離される。風化が激しいため、明確な加工痕や使用痕は捉えられない。

8(接517)のガラス質黒色安山岩2は、褐色板状でクレーターのような凹凸のある自然面である。剥離面は紫色を帯びた粘性を感じさせる黒色で、黒く光る斑晶を含む。板状に割れる性質があり、西～北関東



第68図 第5文化層第19～21ブロック器種別分布

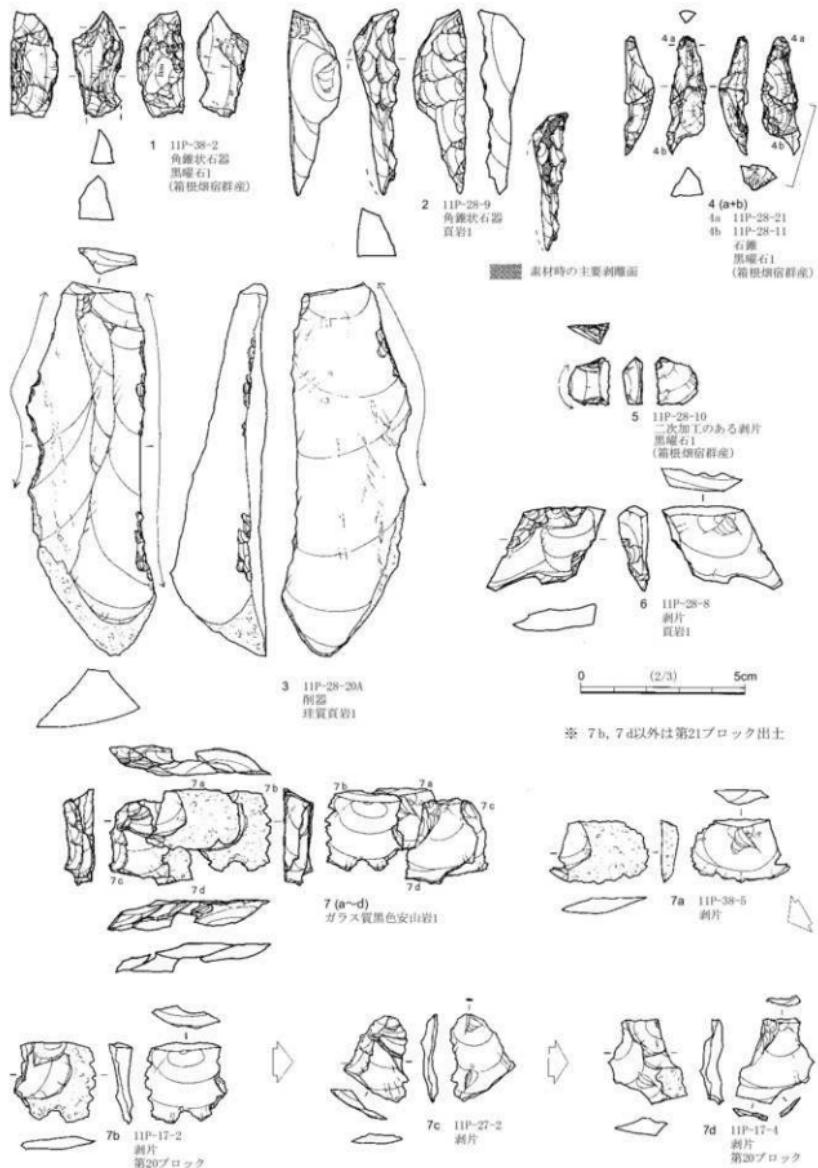


第69図 第5文化層第19～21ブロック母岩別分布

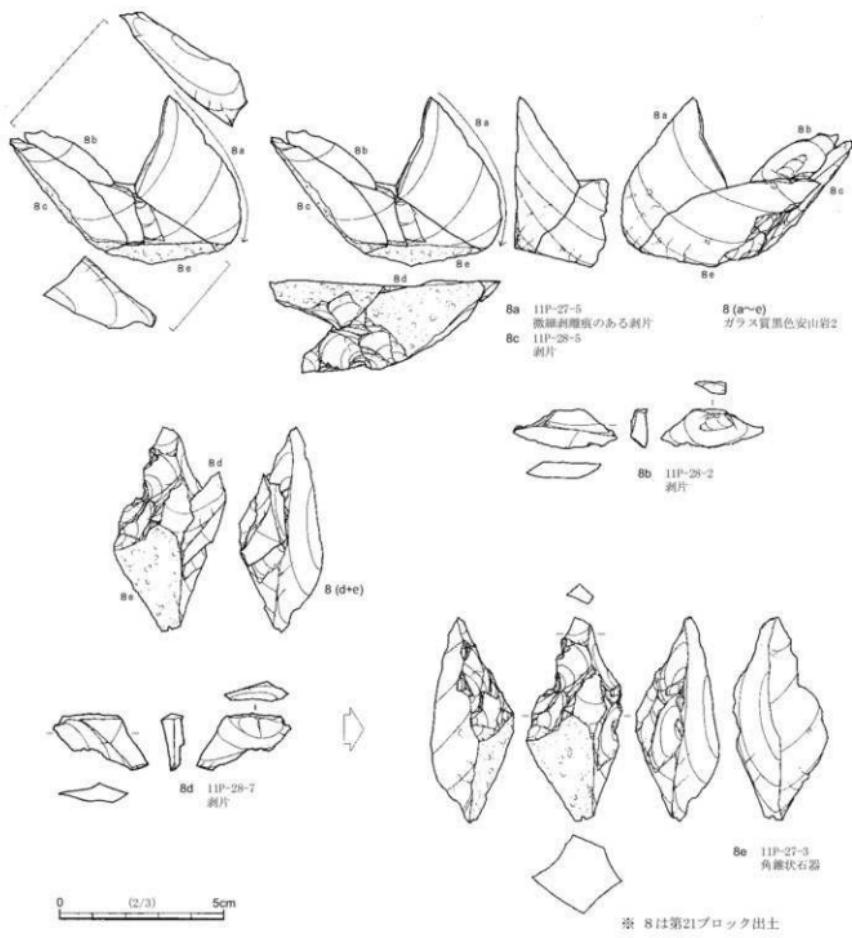
(利根川の流路か)で産出する安山岩と推定される。大型礫が素材であり、初期段階では石の目に沿って厚みのある綾長の素材剥片が作出される。次に、折り取りや粗削りによって目的とする形状に近づけ、平坦面から背稜に向かう打撃が繰り返されて尖端が形成される。多くの角錐状石器は平坦な一面が打面であるが、8eの断面は四角形であり、2面の平坦面を打面としている。

ガラス質黒色安山岩2は6点のうち5点が接合した。6点の分布する範囲は、直徑約1mの円内に取まり、標高差は8cmに満たない。ガラス質黒色安山岩1が広く分布するのに対し、ガラス質黒色安山岩2は狭い範囲にまとまって分布した感があり、8eを作ることを目的とした資料であろうと思われる。なお、ガラス質黒色安山岩1～3は大変近似しており、同一母岩の可能性が高い。

この資料の剥離工程であるが、長軸方向に2分割された大型の剥片が用いられ、8a、8bを含む素材、8c～8eを含む素材に分けられる。8dは角錐状石器である8eの調整剥片であり、8bもまた何らかの石器の調整剥片であると推定される。8b、8dの打角はそれぞれ103°、105°である。8d+8eは角錐状石器と調整剥片の接合状態を示した。折面を打面として急角度で剥離され、8d剥離後、少なくとも3片が剥離される。8eの正面形は菱形を呈し、断面は四角形～五角形である。左下部に自然面を残し、両側縁は裏側から加工される。通常は1枚の平坦面を打面とするが、素材形態から2面を打面にして調整加工が行われている。先端部に上方からの剥離痕がみられるが、打点ではなく、何らかの衝撃を受けて剥がしたものであろう。



第70図 第5文化層第19~21ブロック出土石器 (1)



第71図 第5文化層第19~21ブロック出土石器（2）

第25表 第5文化層第19ブロック組成表

母岩 / 器種	剥片	碎片	点数	点数比	重量(g)	重量比
ホルンフェルス 1	3	6	9	100.0%	160	100.0%
合 計	3	6	9	100.0%	160	100.0%

第26表 第5文化層第20ブロック組成表

母岩 / 器種	剥片	破片	点数	点数比	重量(g)	重量比
ガラス質黒色安山岩 1	2	0	2	66.67%	4.95	81.68%
不明	0	1	1	33.33%	1.11	18.32%
合 計	2	1	3	100.0%	6.06	100.0%

第27表 第5文化層第21ブロック組成表

母岩 / 器種	角錐状石器	削器	石錐	二次加工の痕跡剥離度 ある剥片の ある剥片	剥片	碎片	破片	点数	点数比	重量(g)	重量比	
ガラス質黒色安山岩 1	0	0	0	0	0	2	0	0	2	5.56%	4.04	2.04%
ガラス質黒色安山岩 2	1	0	0	0	1	3	1	0	6	16.67%	53.47	26.94%
ガラス質黒色安山岩 3	0	0	0	0	0	3	1	0	4	11.11%	3.61	1.82%
ガラス質黒色安山岩 4	0	0	0	0	0	2	0	0	2	5.56%	8.90	4.48%
黒曜石 1 基根埋立群産	1	0	1(2)	1	0	4	0	0	7	22.22%	11.73	5.91%
砂 岩 1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2.78%	11.98	6.04%
真 岩 1	1	0	0	0	0	5	0	0	6	16.67%	17.97	9.05%
珪質真岩 1	0	1	0	0	0	2	2	0	5	13.89%	84.92	42.78%
黒色真岩 1	0	0	0	0	0	2	0	0	2	5.56%	1.88	0.95%
合 計	3	1	1	1	1	23	4	1	35(36)	100.0%	198.50	100.0%

※()は出土点数

第28表 第5文化層第19~21ブロック組成表

母岩 / 器種	角錐状石器	削器	石錐	二次加工の痕跡剥離度 ある剥片の ある剥片	剥片	碎片	破片	点数	点数比	重量(g)	重量比		
ガラス質黒色安山岩 1	0	0	0	0	0	4	0	0	0	4	8.33%	8.99	4.36%
ガラス質黒色安山岩 2	1	0	0	0	1	3	1	0	0	6	12.50%	53.47	25.94%
ガラス質黒色安山岩 3	0	0	0	0	0	3	1	0	0	4	8.33%	3.61	1.75%
ガラス質黒色安山岩 4	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2	4.17%	8.90	4.32%
黒曜石 1 基根埋立群産	1	0	1(2)	1	0	4	0	0	0	7	16.67%	11.73	5.69%
砂 岩 1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2.08%	11.98	5.81%	
真 岩 1	1	0	0	0	0	5	0	0	0	6	12.50%	17.97	8.72%
珪質真岩 1	0	1	0	0	0	2	2	0	0	5	10.42%	84.92	41.19%
黒色真岩 1	0	0	0	0	0	2	0	0	2	4.17%	1.88	0.91%	
ホルンフェルス 1	0	0	0	0	0	3	6	0	0	9	18.75%	1.60	0.78%
不明	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2.08%	1.11	0.54%	
合 計	3	1	1	1	1	28	10	1	1	47(48)	100.0%	206.16	100.0%

※()は出土点数

点数比	6.25%	2.08%	4.17%	2.08%	2.08%	58.33%	20.83%	2.08%	2.08%	100.0%
重量(g)	42.25	83.82	2.21	0.91	16.49	46.23	1.161	1.11	11.98	206.161
重量比	20.49%	40.66%	1.07%	0.44%	8.00%	22.42%	0.56%	0.54%	5.81%	100.00%

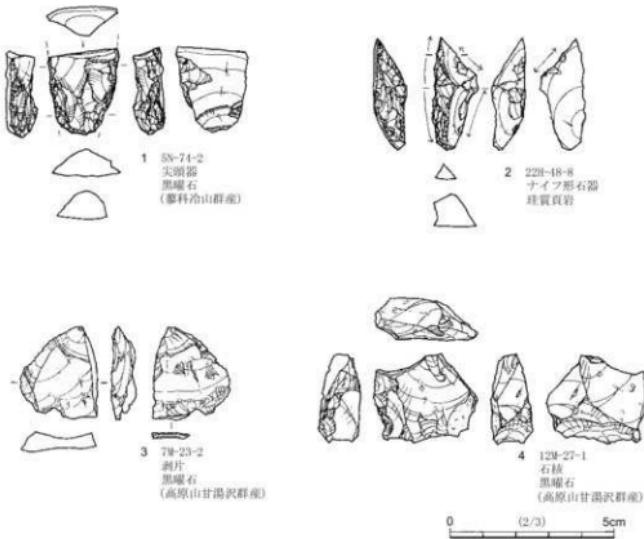
(5) 第5文化層単独出土石器 (第72・89図、図版14)

1は黒曜石製の尖頭器で、黒曜石の推定产地は蓼科冷山群産である。基部として圓化したが、裏面下端部にはめぐれたような痕跡があり、刺突などでおこる衝撃剥離痕の可能性がある。5N-74グリッドから出土した。

2はナイフ形石器である。淡い緑白色の珪質頁岩製で、剥離面には8倍ルーペでかろうじて黒い球形の斑点が確認できる。横長剥片を素材としたいわゆる「切出形ナイフ形石器」であり、断面は中高の三角形だが最大幅では矩形を呈する。左部は正・裏双方から刃つぶし状の加工が施され、一部オーバーハングするが、器面に瘤状に残った膨らみを除去するまでには至らない。刃部には刃こぼれ、両側縁は押し引きなどして角部をすり潰したような痕がみられる。22H-48グリッドから出土した。

3は剥片である。高原山甘湯沢群産の黒曜石であるが、夾雜物が少なく、良質な部分が用いられている。右側面は打点直下の同時折れによる。第16~18ブロックとはほぼ同時期の所産であるが硬質頁岩集中域には帰属しない。7M-23グリッドから出土した。

4は黒曜石製の石核である。黒曜石の原産地は高原山甘湯沢群産と推定される。多方向からの打撃により、求心的な剥離痕が残っている。12M-27グリッドから出土した。



第72図 第5文化層単独出土石器

6. 第6文化層

(1) 概要 (第73~87・89図、第29~32表、図版4・15~17)

第6文化層は第22・23ブロックの2か所が該当する。両ブロックは遺跡の北部と南西に300mほど離れて位置し、石器、礫・礫片はあわせて666(808)点が出土した。標高は22.892m~24.412mである。調査時の所見ではIX層~III層(剥片類はVII層~III層、礫・礫片はIX層~III層)だが、断面図への石器投影はIX層~IIc層に包含された。生活面はIII層にあると考えられる。第23ブロックは礫・礫片が出土点数の約94%を占める。

(2) 第22ブロック (第74~80図、第29表、図版4・15)

分布状況

遺跡の北側にあたる7N-45・55・56・65・66・76・86・87・96~98、8N-17グリッドの長径13.6m、短径5.5mの範囲から石器59(69)点が出土した。平面分布の位置は第3文化層第7ブロックと隣接する。石器の分布する標高は22.892m~23.400mである。器種の内訳は二次加工のある剥片1点、微細剝離痕のある剥片8点、剥片29(31)点、石核3点、礫片18(26)点であり、石材は安山岩2(4)点、流紋岩5点、砂岩6(12)点、頁岩1点、珪質頁岩39(41)点、ホルンフェルス1点、チャート4点、玉髓1点である。出土点数の約60%が珪質頁岩であり、剥片類の約95%を同石材が占める。

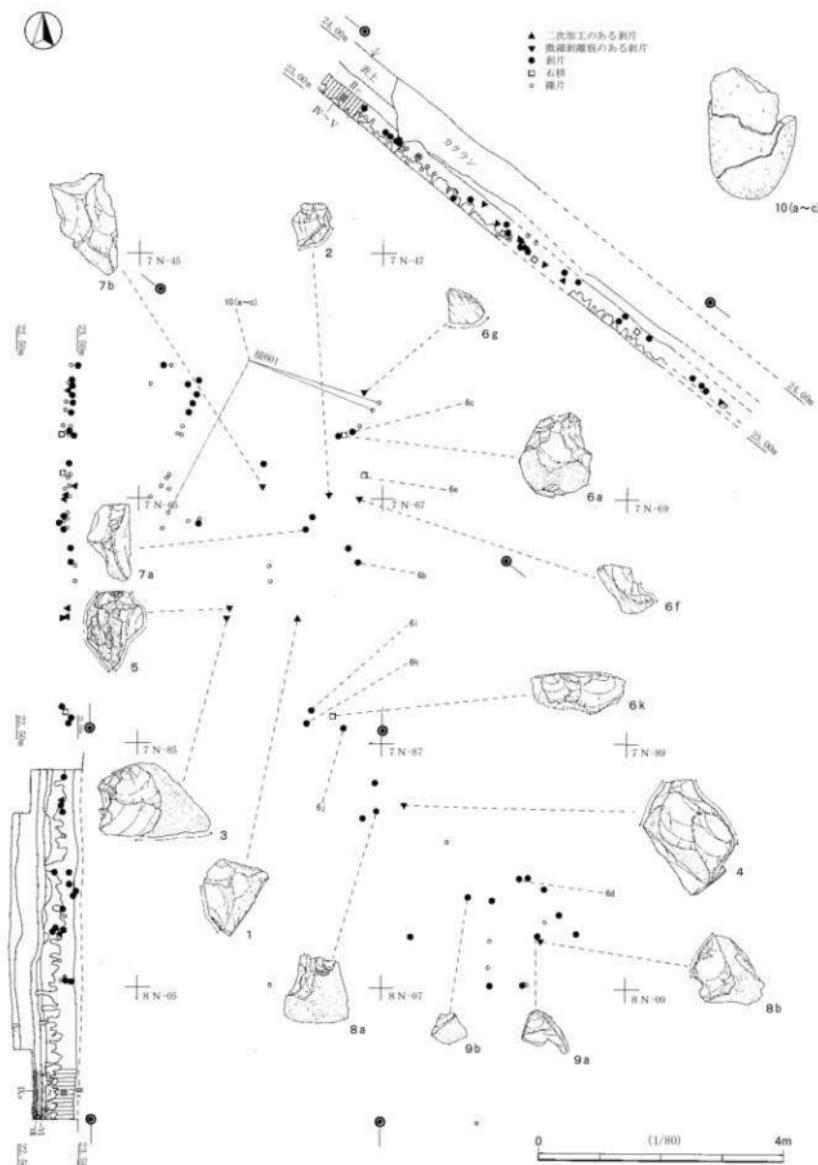
出土石器

1は二次加工のある剥片である。表皮は赤茶けた凝灰岩質だが、中心部分は赤・緑・灰白色の珪質頁岩4が母岩である。側面から主要剝離面のバルブを削ぐような加工が施されている。左側縁下部に細かな剝離痕が連続し、使用による刃こぼれが観察される。

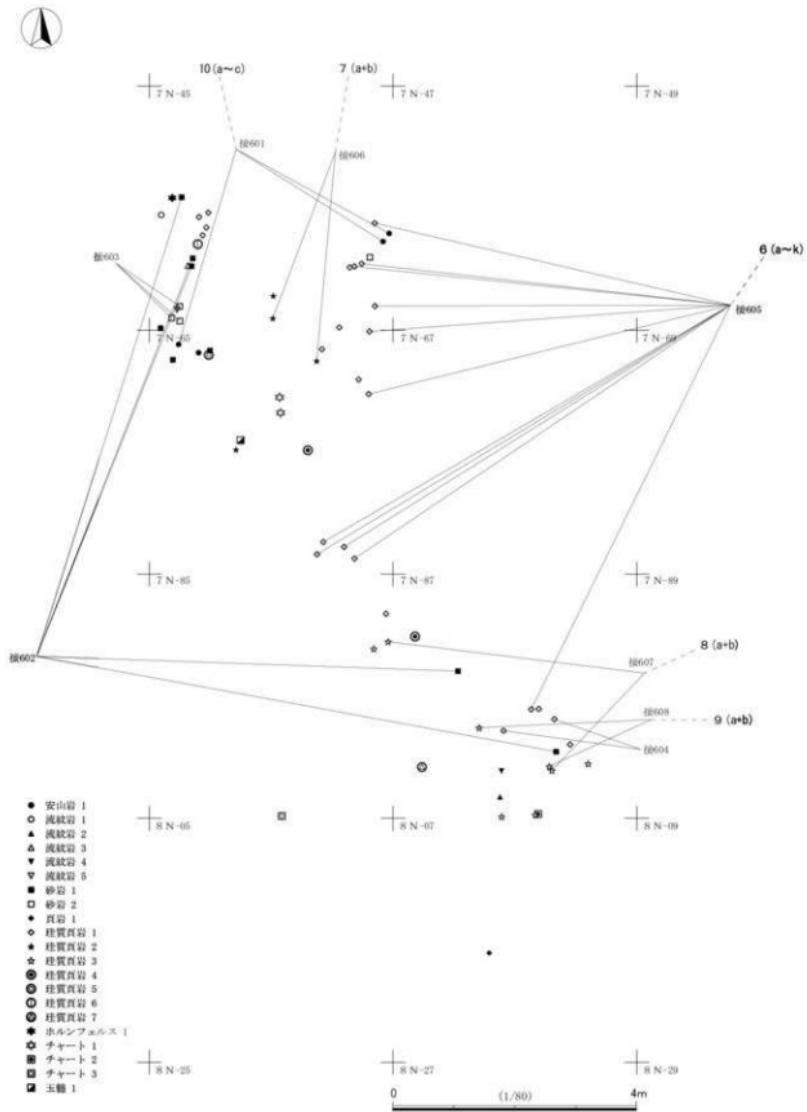
2~5は微細剝離痕のある剥片である。2の自然面は淡褐灰、剝離面は黒と茶の縞状の珪質頁岩1が母岩である。頭部調整及び両側縁に刃こぼれがみられる。3の母岩である珪質頁岩2は、自然面が残る大型の剥片が多い。自然面と剝離面とが作る直線状の縁辺に刃こぼれがみられる。4は1と同一母岩であるが、接合しない。自然面から穿たれた板状剥片であり、薄い縁辺には微細剝離痕がみられる。5の玉髓1は自然面・節理面は黄土色を帯びた淡いベージュ色、剝離面は青みがかった白色~淡黄灰色である。頭部調整があり、両側縁は末端で収束する。打面部を除く全周に微細剝離痕が廻る。



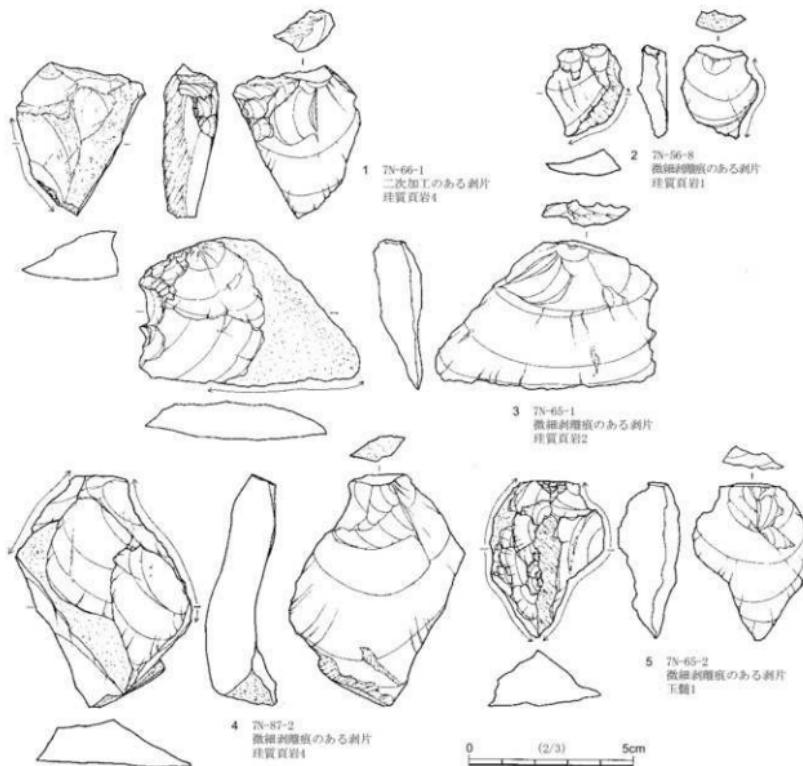
第73図 第6文化層ブロック位置図



第74図 第6文化層第22ブロック器種別分布



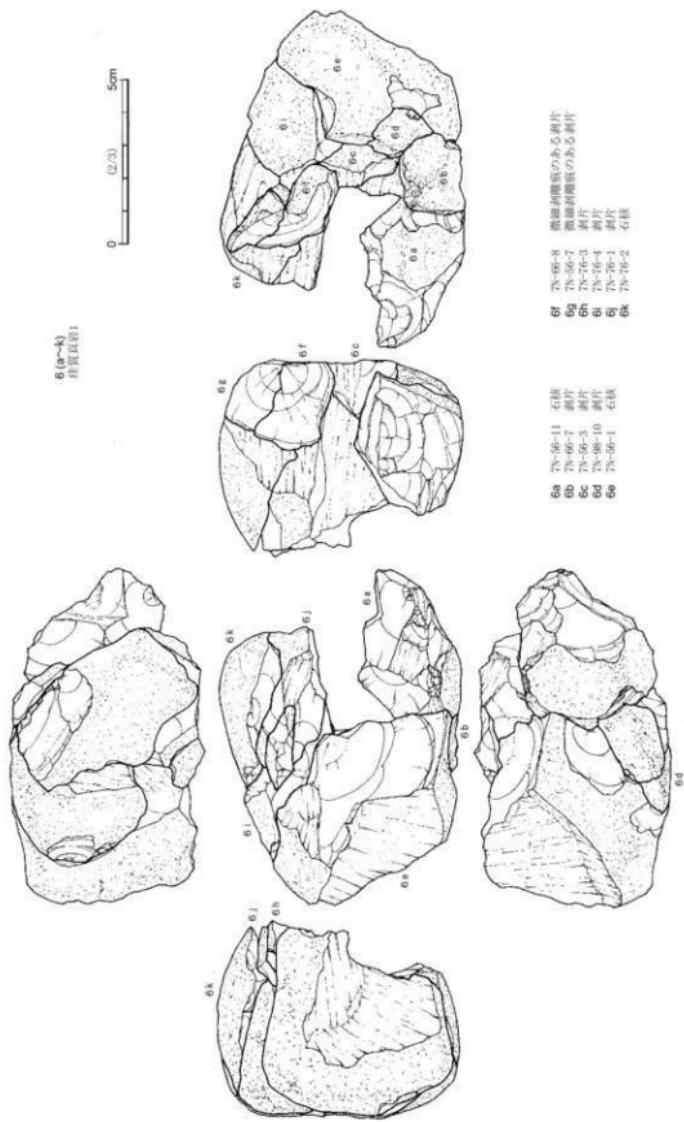
第75図 第6文化層第22ブロック母岩別分布



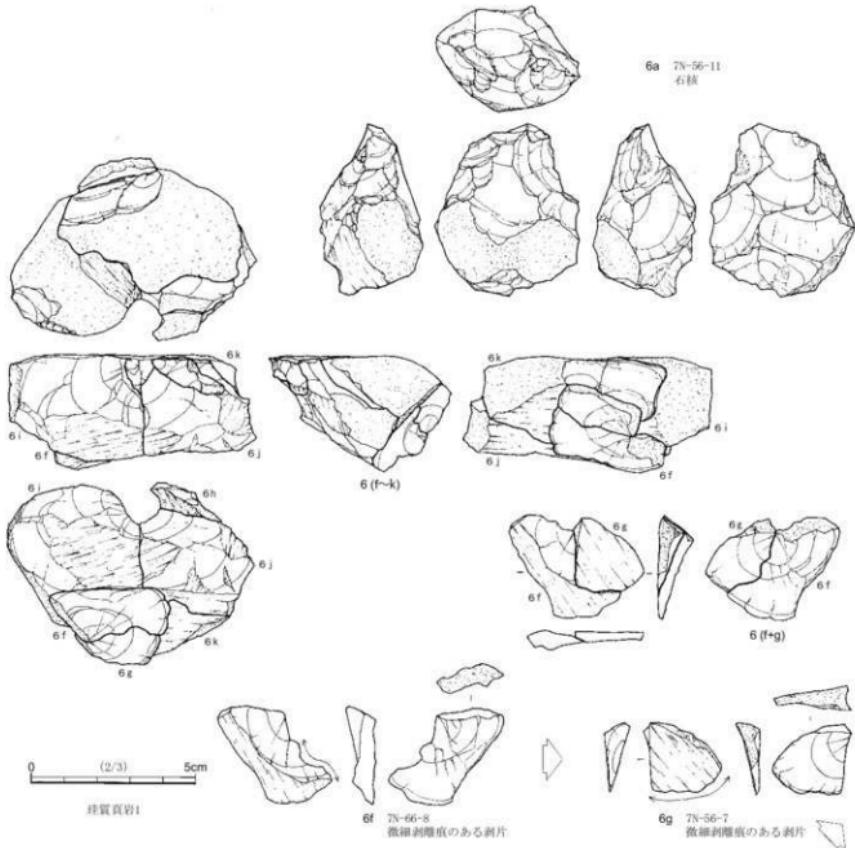
第70図 第6文化層第22ブロック出土石器（1）

6～10は接合資料である。6（接605）は珪質頁岩1が母岩である。自然面は淡～濃褐色で光沢があり、剥離面は褐色と濃灰色が層状となっている。拳大の亜円礫が素材である。母岩は7N-56グリッドを中心にして24点が分布しており、接合した11点の両端の直線距離は8.4mである。発達した節理により剥落や不規則な破片がおこり、剥離工程の新旧が把握できない部分が多い。6a～6dは一撃で剥離され、4点に砕けたものである。このうち6aは素材として選択され、求心的な加工が施されているが、二次加工痕や使用痕は確認できない。途中図として6f～6kを図示した。剥離工程の観点からは6f+6g、6hは別塊に属するが、間隙を埋める石器は検出されなかった。6i+6j、6kは平滑な自然面を打面として剥離されており、同様に3片以上が作り出されているものと推測される。6kの裏面には6f+6gの剥離面を打面として自然面を削ぐような打撃が2回以上加えられている。また、自然面打面からは貝殻状の剥片が複数剥離されている。6fと6gの縁辺には微細な剥離痕がみられる。

7（接606）の母岩は珪質頁岩2である。同一打面から連続して剥離された2片であり、7bには縁辺



第77図 第6文化層第22ブロック出土石器（2）



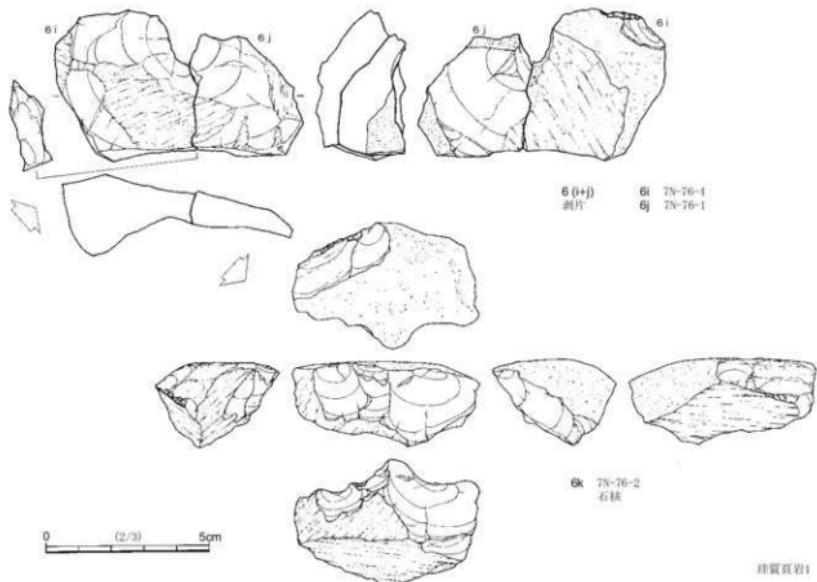
第78図 第6文化層第22ブロック出土石器（3）

に刃こぼれ状の欠けがみられる。

8・9は、自然面が淡い褐色、剥離面は灰色の珪質頁岩3を母岩とする。8は2点接合し、打面と底面が共通する。8bの左上部には刃こぼれが連なる。2点の出土位置は約3.4m離れているが、標高差はない。

9（接608）は剥片2点の接合資料である。9a剥離後、いくつかの工程を経て打面転移され、9bに至る。

10（接601）は、黒色・灰色・白色の斑晶が灰白色の石基に万遍なく入っている安山岩1が母岩である。1.5cmの距離にネオジム磁石を寄せると、自然に貼り付くほどの磁性が強い。安山岩1は7N-56、7N-65グリッドに2点ずつ分布し、3点が接合した。広い面は擦られて平になったものか。端部にうっすらと磨痕のようなものがみられるが、使用痕か否かの判断は困難である。

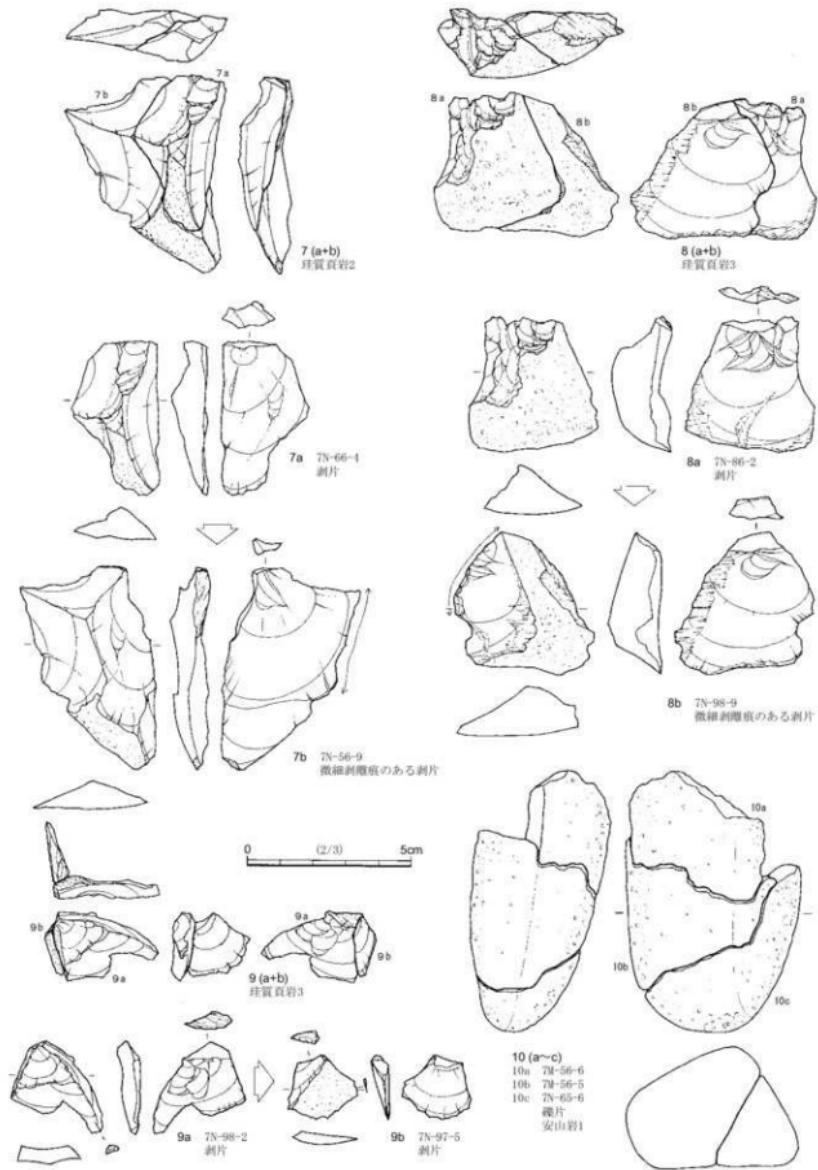


第79図 第6文化層第22ブロック出土石器（4）

第29表 第6文化層第22ブロック組成表

母岩 / 器種	二次加工のある剥片	微細削磨のある剥片	剥片	石核	礫片	点数	点数比	重量(g)	重量比
安山岩 1	0	0	0	0	2(4)	2	5.80%	181.40	12.53%
流紋岩 1	0	0	0	0	1	1	1.45%	40.52	2.80%
流紋岩 2	0	0	0	0	1	1	1.45%	20.72	1.43%
流紋岩 3	0	0	0	0	1	1	1.45%	14.16	0.98%
流紋岩 4	0	0	0	0	1	1	1.45%	76.56	5.29%
流紋岩 5	0	0	0	0	1	1	1.45%	19.76	1.37%
砂岩 1	0	0	0	0	4(8)	4	11.59%	254.59	17.59%
砂岩 2	0	0	0	0	2(4)	2	5.80%	109.48	7.56%
頁岩 1	0	0	0	0	1	1	1.45%	5.49	0.38%
珪質頁岩 1	0	3	16(18)	3	0	22	34.78%	408.77	28.24%
珪質頁岩 2	0	2	2	0	0	4	5.80%	66.75	4.61%
珪質頁岩 3	0	1	7	0	0	8	11.59%	80.76	5.58%
珪質頁岩 4	1	1	0	0	0	2	2.90%	79.28	5.48%
珪質頁岩 5	0	0	1	0	0	1	1.45%	17.95	1.24%
珪質頁岩 6	0	0	1	0	0	1	1.45%	15.43	1.07%
珪質頁岩 7	0	0	1	0	0	1	1.45%	1.32	0.09%
ホルンフェルス 1	0	0	1	0	0	1	1.45%	2.29	0.16%
チヤート 1	0	0	0	0	2	2	2.90%	24.75	1.71%
チヤート 2	0	0	0	0	1	1	1.45%	0.62	0.04%
チヤート 3	0	0	0	0	1	1	1.45%	5.40	0.37%
玉髓 1	0	1	0	0	0	1	1.45%	21.48	1.48%
合計	1	8	29	3	18	59(69)	100.00%	1447.48	100.00%

※ ()は出土点数

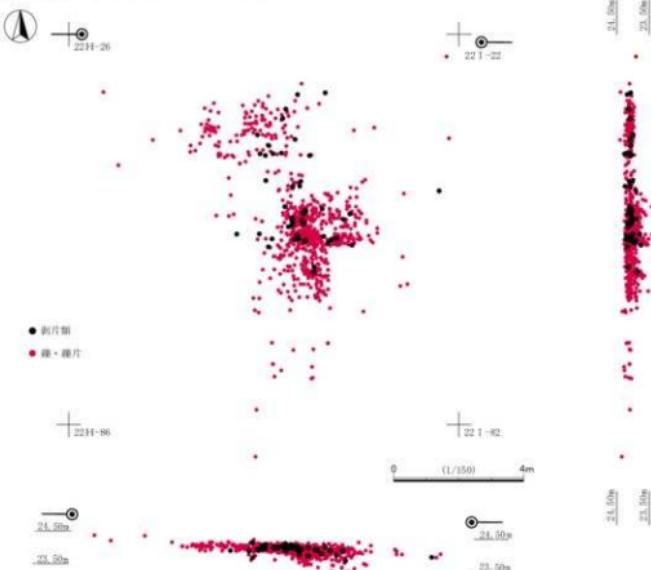


第80図 第6文化層第22ブロック出土石器（5）

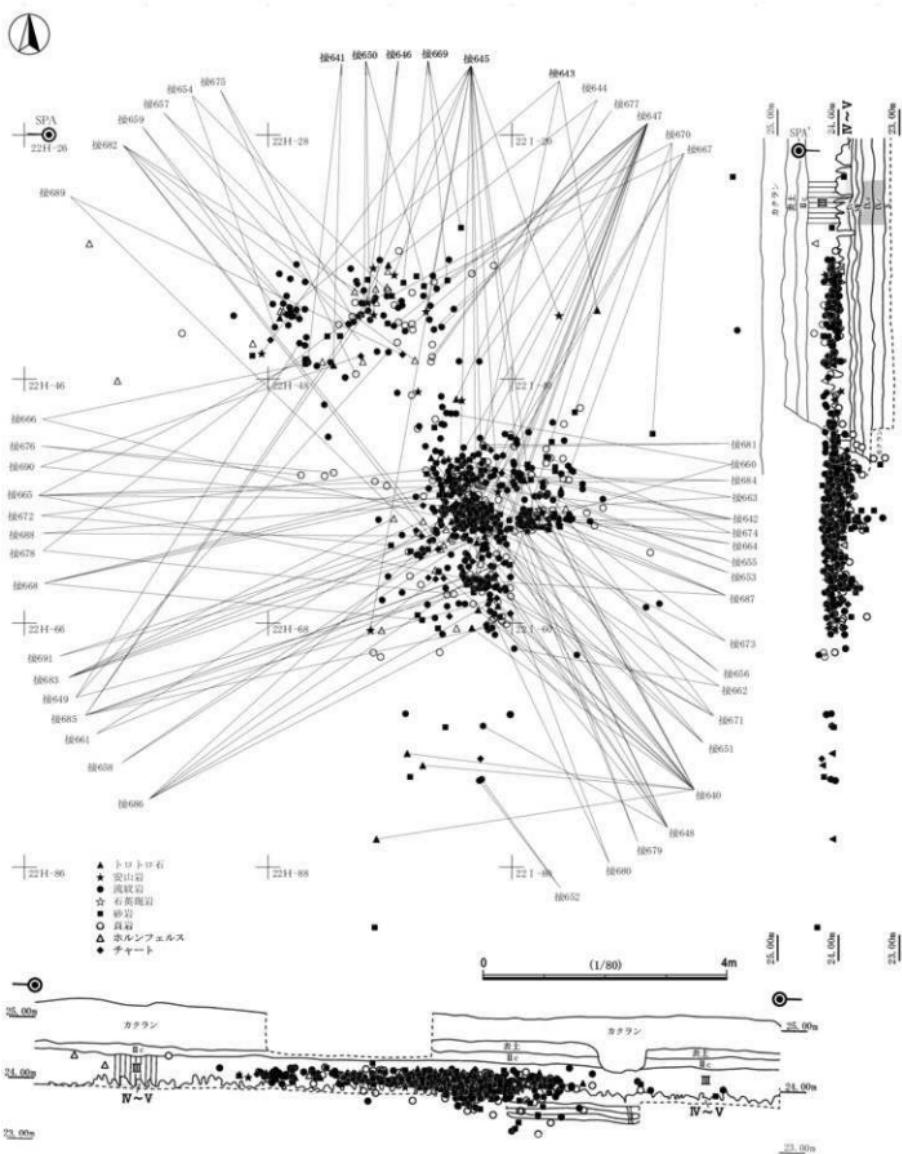
(3) 第23ブロック (第81~86図、第30~32表、図版4・16・17)

分布状況

遺跡の南西に位置する22H・22 I グリッドを中心とした長径13.7m、短径11.3mの範囲から、石器、礫・礫片604 (736) 点が出土した。標高は23.236m~24.400mであり高低差が1.164mあるが、剥片類に限れば23.757m~24.260m、高低差0.503mである。礫片分布の中に剥片類が内包されるような形で分布しているが、両者の垂直分布に差はみられない。セクション図へはⅢ層下部に投影される。器種はナイフ形石器2点、剥片37 (43) 点、碎片1点、礫3点、礫片561 (687) 点であり、礫・礫片が全体の約94%を占める。また、礫片の26%にあたる178点が接合し、52個体となった。自然面と剥離面、接合した礫片の色の違い、脆さや付着物などを被熱痕跡と捉えると、出土した礫片のほとんどにこうした特徴を認めることが可能である(図版16)。出土した石材は、ガラス質黒色安山岩8点、トロトロ石8 (29) 点、安山岩8 (20) 点、流紋岩260 (298) 点、石英斑岩2 (3) 点、黒曜石7点、砂岩85 (106) 点、頁岩142 (155) 点、珪質頁岩6点、硬質頁岩1点、ホルンフェルス28 (37) 点、チャート48 (65) 点、玉髓1点である。このうち剥片類に用いられる石材は、ガラス質黒色安山岩・黒曜石・頁岩・珪質頁岩・硬質頁岩・チャート・玉髓の7石材のみであり、その約46%を頁岩が占める。黒曜石は産地不明の1点を除き、すべて高原山甘湯沢群産である。礫・礫片の石材はトロトロ石・安山岩・流紋岩・石英斑岩・砂岩・頁岩・ホルンフェルス・チャートの8石材であり、約43%が流紋岩である。当ブロックで出土した石材のうち、頁岩とチャートが剥片類と礫類の双方に用いられている。



第81図 第6文化層第23ブロック剥片類、礫・礫片分布状況

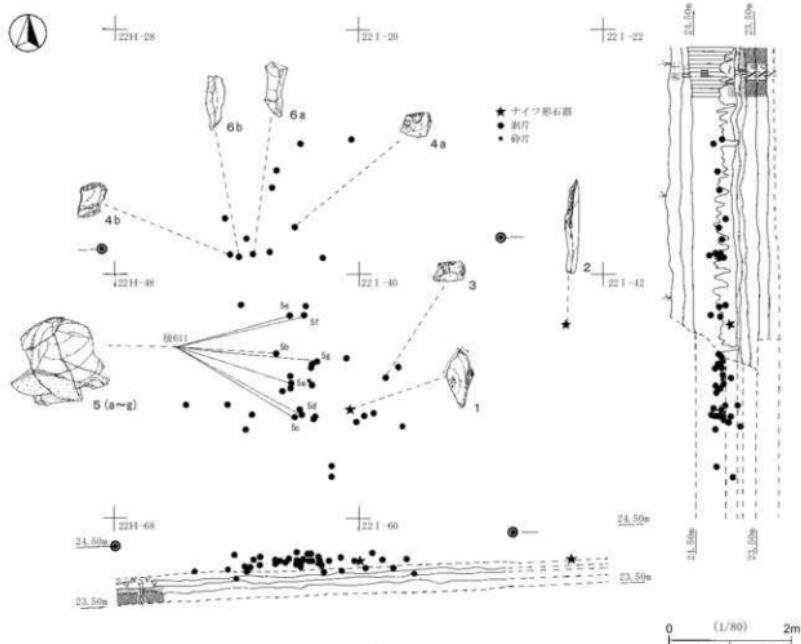


第82図 第6文化層第23ブロック石材別分布(礫・砾片)

第30表 第6文化層第23ブロック礫・礫片重量、接合番号一覧

母 岩 / 器 種	接合番号	礫	礫片	点数	点数比	重量(g)	重量比
ト 口 ト 口 石 1001 接640	0	2(16)	2(16)	232%	16468	2.57%	
ト 口 ト 口 石 1002 接641・642	0	3(7)	3(7)	1.01%	54.13	0.84%	(内訳:接641-2点, 接642-4点, 他1点)
ト 口 ト 口 石 1003 接643・644	0	3(6)	3(6)	0.87%	82.50	1.29%	(内訳:接643-3点, 接644-2点, 他1点)
安 山 岩 1001 接645・646	0	7(19)	7(19)	2.75%	37226	5.81%	(内訳:接645-12点, 接646-2点, 他5点)
安 山 岩	0	1	1	0.14%	4.22	0.07%	
流 紋 岩 1001 接647	0	1(16)	1(16)	2.32%	149.72	2.33%	
流 紺 岩 1002 接648	0	1(7)	1(7)	1.01%	103.47	1.61%	
流 紺 岩 1003 接649	0	1(3)	1(3)	0.43%	150.76	2.35%	
流 紺 岩 1004 接650	0	1(3)	1(3)	0.43%	33.66	0.52%	
流 紺 岩 1005 接651	0	1(3)	1(3)	0.43%	31.90	0.50%	
流 紺 岩 1006 接652	0	1(2)	1(2)	0.29%	96.89	1.51%	
流 紺 岩 1007 接653	0	1(2)	1(2)	0.29%	35.24	0.59%	
流 紺 岩 1008 接654	0	1(2)	1(2)	0.29%	24.10	0.38%	
流 紺 岩 1009 接655	0	1(2)	1(2)	0.29%	28.31	0.44%	
流 紺 岩 1010 接656	0	1(2)	1(2)	0.29%	35.76	0.58%	
流 紺 岩 1011 接657	0	1(2)	1(2)	0.29%	102.5	0.16%	
流 紺 岩 1012 接658	0	1(2)	1(2)	0.29%	45.85	0.72%	
流 紺 岩 1013 接659	0	1(2)	1(2)	0.29%	22.53	0.35%	
流 紺 岩 1014 接660	0	1(2)	1(2)	0.29%	29.91	0.47%	
流 紺 岩 1015 接661	0	1(2)	1(2)	0.29%	21.63	0.34%	
流 紺 岩 1016 接662	0	1(2)	1(2)	0.29%	10.95	0.17%	
流 紺 岩 1017 接663	0	1(2)	1(2)	0.29%	33.05	0.52%	
流 紺 岩	0	242	242	35.07%	2001.75	31.22%	
石 美 地 岩 1001 接664	0	1(2)	1(2)	0.29%	47.34	0.74%	
石 英 斑 岩 1002	1	0	1	0.14%	72.51	1.13%	
砂 岩 1001 接665	0	1(5)	1(5)	0.72%	49.28	0.77%	
砂 岩 1002 接666	0	1(2)	1(2)	0.29%	14.09	0.22%	
砂 岩 1003 接667	0	1(4)	1(4)	0.58%	82.04	1.28%	
砂 岩 1004 接668	0	1(4)	1(4)	0.58%	39.55	0.62%	
砂 岩 1005 接669	0	1(3)	1(3)	0.43%	35.33	0.55%	
砂 岩 1006 接670	0	1(3)	1(3)	0.43%	67.98	1.06%	
砂 岩 1007 接671	0	1(4)	1(4)	0.58%	77.51	1.21%	
砂 岩 1008 接672	0	1(2)	1(2)	0.29%	6.70	0.10%	
砂 岩 1009 接673	0	1(2)	1(2)	0.29%	12.38	0.19%	
砂 岩 1010 接674	0	1(2)	1(2)	0.29%	19.22	0.30%	
砂 岩	0	75	75	10.87%	526.97	8.22%	
頁 岩 1001 接675	0	1(2)	1(2)	0.29%	62.96	0.98%	
頁 岩 1002 接676	0	1(2)	1(2)	0.29%	14.56	0.23%	
頁 岩 1003 接677	0	1(2)	1(2)	0.29%	13.07	0.20%	
頁 岩 1004 接678	0	1(2)	1(2)	0.29%	22.15	0.35%	
頁 岩 1005 接679	0	1(2)	1(2)	0.29%	22.09	0.34%	
頁 岩 1006 接680	0	1(2)	1(2)	0.29%	24.96	0.39%	
頁 岩 1007 接681	0	1(2)	1(2)	0.29%	2.90	0.05%	
頁 岩	1	119	120	17.39%	782.78	12.21%	
ホルンフェルス 1001 接682	0	1(5)	1(5)	0.72%	85.98	1.34%	
ホルンフェルス 1002 接683	0	1(5)	1(5)	0.72%	25.81	0.40%	
ホルンフェルス 1003 接684	0	1(2)	1(2)	0.29%	20.81	0.32%	
ホルンフェルス	1	24	25	3.62%	221.37	3.45%	
チ ャ 一 ト 1001 接685	0	1(7)	1(7)	1.01%	103.91	1.62%	
チ ャ 一 ト 1002 接686	0	1(5)	1(5)	0.72%	43.22	0.67%	
チ ャ 一 ト 1003 接687	0	1(4)	1(4)	0.58%	53.85	0.84%	
チ ャ 一 ト 1004 接688	0	1(2)	1(2)	0.29%	27.52	0.43%	
チ ャ 一 ト 1005 接689	0	1(2)	1(2)	0.29%	23.10	0.36%	
チ ャ 一 ト 1006 接690	0	1(2)	1(2)	0.29%	11.70	0.18%	
チ ャ 一 ト 1007 接691	0	1(2)	1(2)	0.29%	8.38	0.13%	
チ ャ 一 ト	0	39	39	5.65%	246.47	3.84%	
合 計		3	561(687)	564(690)	100.00%	6412.01	100.00%

※ ()は接合前の点数である



第83図 第6文化層第23ブロック器種別分布（剥片類）

出土石器

第23ブロックでは黒曜石が7点出土し、6点が高原山甘湯沢群産と同定された。夾雜物の多寡により母岩を分け、6点は黒曜石1とし、夾雜物が少ないものを黒曜石2と付した（写真図版16・17参照）。1・3・4は黒曜石1を母岩とする。

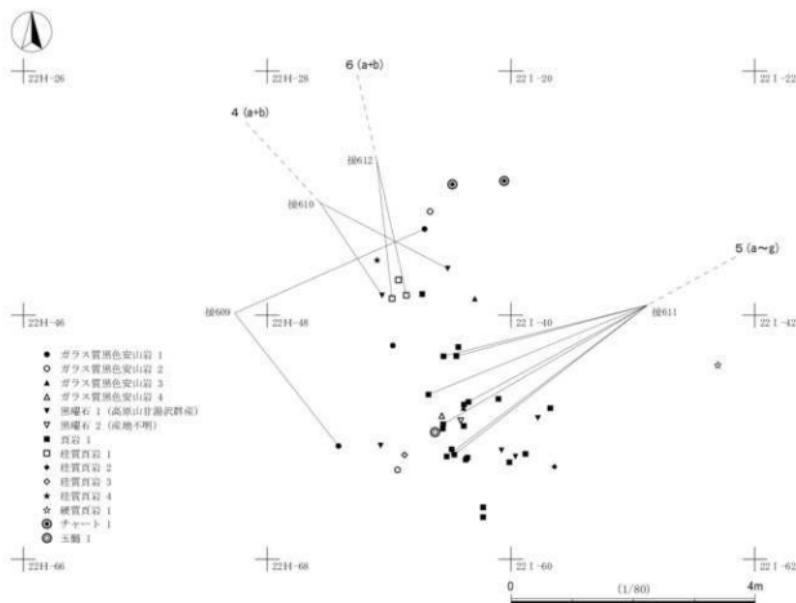
1・2はナイフ形石器である。1は横長剥片の打撃軸を横位に設置し、両側端が基部と機能部となっている。線状の打面が刃部として用いられ、広い打点対縁が急角度剝離で調整されている。刃部先端の刃こぼれは再調整の後、さらに使用されている。2はブロック唯一の硬質頁岩である。大型で厚みのない剥片の小口面を打面とした削片、あるいは石刃が素材であり、刃部と打面が加工されている。

3は削片である。下部のみ残存する。

4（接610）の右肩～右縁上部に素材時の使用痕である微細剝離痕が並ぶ。これを石核として用い、4a、4bの順で剝離される。剝離後の加工、使用痕は看取されない。

5（接611）赤みがかった灰白色の頁岩1は21点が検出され、22H-49グリッドから出土した5点と22H-59グリッドの2点が接合した。明確な打点ではなく、人為的な剝離とは判じがたい。濃淡入り混じっており、破碎後の被熱や風化による変色痕がみられる。

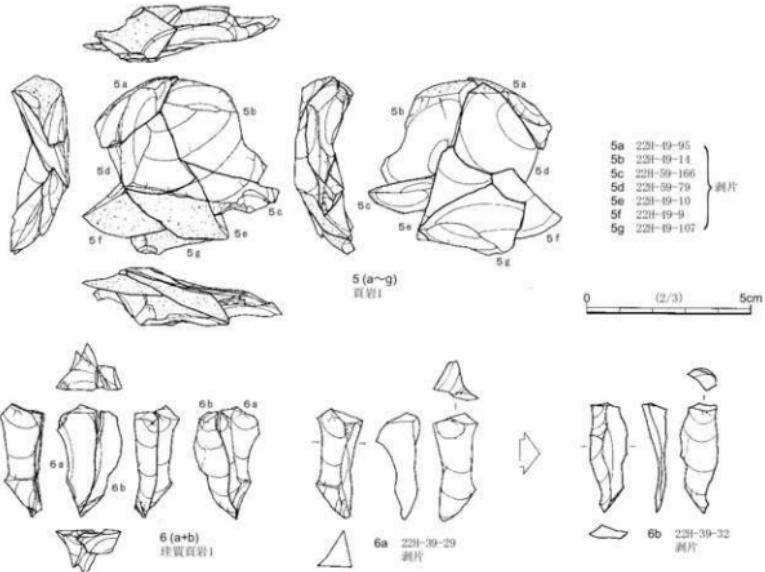
6（接612）の母岩は、剥離面が明るい黄褐色の珪質頁岩1である。同一打面から連続して剝離された削片2点が接合した。二次加工、使用痕はみられない。



第84図 第6文化層第23ブロック母岩別分布(剥片類)



第85図 第6文化層第23ブロック出土石器(1)



第86図 第6文化層第23ブロック出土石器（2）

第31表 第6文化層第23ブロック組成表（1）

母岩 / 器種	ナイフ形石器	剥片	碎片	礫	礫片	点数	点数比	重量(g)	重量比
ガラス質黒色安山岩 1	0	3	0	0	0	3	0.41%	8.01	0.12%
ガラス質黒色安山岩 2	0	2	0	0	0	2	0.27%	26.33	0.40%
ガラス質黒色安山岩 3	0	2	0	0	0	2	0.27%	5.20	0.08%
ガラス質黒色安山岩 4	0	1	0	0	0	1	0.14%	3.50	0.05%
トロトロ石	0	0	0	0	8(29)	8	3.94%	301.31	45.9%
安山岩	0	0	0	0	8(20)	8	2.72%	376.48	5.73%
流紋岩	0	0	0	0	260(298)	260	40.49%	2865.73	43.63%
石英斑岩	0	0	0	1	1(2)	2	0.41%	119.85	1.82%
黒曜石 1	1	5	0	0	0	6	0.82%	7.80	0.12%
黒曜石 2 産地不明	0	0	1	0	0	1	0.14%	0.25	0.00%
砂岩	0	0	0	0	85(106)	85	14.40%	931.05	14.17%
頁岩 1	0	15(21)	0	0	0	15	2.85%	77.88	1.19%
頁岩	0	0	0	1	126(133)	127	18.21%	945.47	14.39%
珪質頁岩 1	0	3	0	0	0	3	0.41%	5.88	0.09%
珪質頁岩 2	0	1	0	0	0	1	0.14%	0.27	0.00%
珪質頁岩 3	0	1	0	0	0	1	0.14%	11.99	0.18%
珪質頁岩 4	0	1	0	0	0	1	0.14%	0.58	0.01%
硬質頁岩 1	1	0	0	0	0	1	0.14%	3.16	0.05%
ホルンフェルス	0	0	0	1	27(36)	28	5.03%	359.97	5.39%
チャート 1	0	2	0	0	0	2	0.27%	4.32	0.07%
チャート	0	0	0	0	46(63)	46	8.56%	518.15	7.89%
玉髓 1	0	1	0	0	0	1	0.14%	1.36	0.02%
合計	2	37	1	3	561	604(736)	100.00%	6568.54	100.00%

※()は出土点数

点数比	0.27%	5.84%	0.14%	0.41%	93.34%	100.00%
重量(g)	6.05	150.23	0.25	140.48	6271.53	6568.54
重量比	0.09%	2.29%	0.00%	2.14%	95.48%	100.00%

第32表 第6文化層第23ブロック組成表(2)

《剥片類組成表》

母岩 / 器種	ナイフ形石器	剥片	碎片	点数	点数比	重量(g)	重量比
ガラス質黒色安山岩 1	0	3	0	3	6.52%	8.01	5.12%
ガラス質黒色安山岩 2	0	2	0	2	4.35%	26.33	16.82%
ガラス質黒色安山岩 3	0	2	0	2	4.35%	5.20	3.32%
ガラス質黒色安山岩 4	0	1	0	1	2.17%	3.50	2.24%
黒曜石 1 高麗山社産 黒曜石 2 高麗山社産 黒曜石 3 高麗山社産 黒曜石 4 高麗山社産	1	5	0	6	13.04%	7.80	4.98%
真珠質真珠岩 1 真珠質真珠岩 2 真珠質真珠岩 3 真珠質真珠岩 4 真珠質真珠岩 5 真珠質真珠岩 6 チヤート 1 玉髓 1	0	0	1	1	2.17%	0.25	0.16%
合 計	2	37	1	40(46)	100.00%	156.53	100.00%

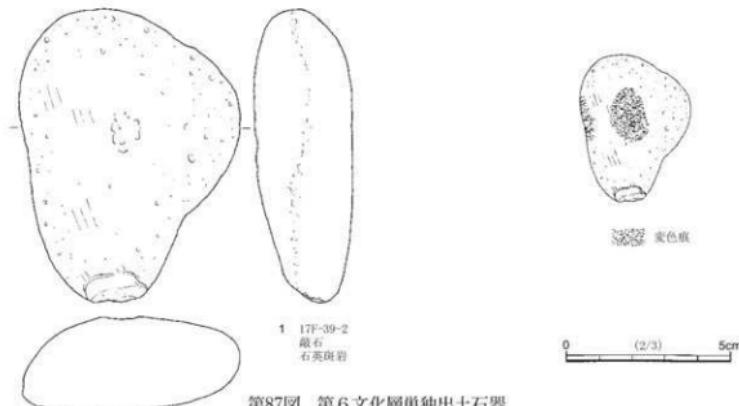
《礫・礫片組成表》

石 材 / 器種	礫	礫片	点数	点数比	重量(g)	重量比
トロトロ石	0	8(29)	8	42.0%	301.31	4.70%
安山岩	0	8(20)	8	2.90%	376.48	5.87%
流紋岩	0	260(298)	260	43.19%	2865.73	44.69%
石英斑岩	1	1(2)	2	0.43%	119.85	1.87%
砂岩	0	85(106)	85	15.36%	931.05	14.52%
真珠岩	1	126(133)	127	19.42%	945.47	14.75%
ホルンフェルス	1	27(36)	28	5.36%	353.97	5.52%
チヤート	0	46(63)	46	9.13%	518.15	8.08%
合 計	3	561	564(690)	100.00%	6412.01	100.00%

※()は出土点数

(4) 第6文化層単独出土石器(第87・89図、図版17)

1は石英斑岩製の敲石である。原礫面は全体的に黄褐色であり、角張った石英粒を多く含む。下端と平坦面、右側縁の一部に器面の荒れがみられるが、器形に大きな変化はない。また正面の平坦面には茶褐色、左側面に濃い茶褐色の変色痕がみられる。17F-39グリッドからの出土である。



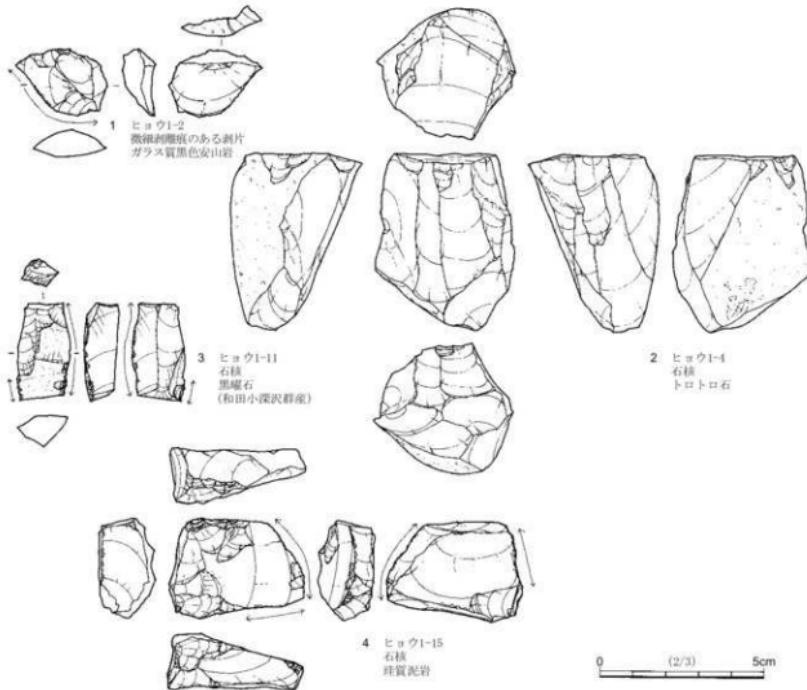
第87図 第6文化層単独出土石器

第3節 単独出土 (第88・89図、第33表、図版17)

平成6年度の調査時に表採資料として取り上げられた石器である。帰属グリッド、出土層位は不明であるが、石器の石材や形状などの特徴から旧石器時代に属すると判断したものであり、4点を図化した。

1は微細剥離痕のある剥片である。剥離面は灰褐色で、黒く光る斑晶が陳らに入るガラス質黒色安山岩製である。打点対縁には微細剥離痕がみられ、右下端には主要剥離面側からの打撃により表面を薄く削ぐような加工が施されている。

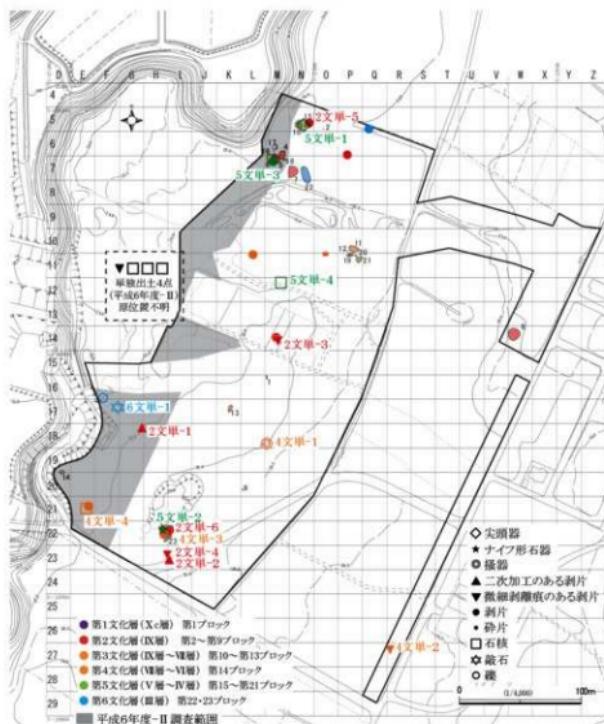
2～4は石核である。2はトロトロ石製で、石基は明るい灰色、斑晶は黒色で微量である。裏面に鉄錆色の自然面が僅かに残る。原礫の一端を剥いで打面とし、石核を回しながら連続して打撃が加えられ、7点以上の縦長剥片が作出されているが、遺跡内の検出はない。3は和田小深沢群産の黒曜石製である。雲状の白色斑が入るが、夾雜物ではなく、透明感がある。背面に風化した剥離面を持つ。両側縁の刃こぼれは素材時のものであり、剥離作業によって切られる。4の珪質泥岩は灰白色でサラサラとした質感である。板状の素材の小口面を打撃し、小型の剥片が作り出されたようであるが、接合する資料はない。右下端が急角度調整されており、掻器のような機能が想定される。また、角部や稜上には微細剥離痕が廻る。



第88図 単独出土石器

第33表 単独出土石器組成表

石材 / 器種	微細削離痕のある剥片	石核	点数	点数比	重量(g)	重量比
ガラス質黒色安山岩	1	0	1	25.00%	4.10	3.45%
トロトロ石	0	1	1	25.00%	92.16	77.44%
黒曜石 和田小深沢群産	0	1	1	25.00%	4.80	4.03%
珪質疊岩	0	1	1	25.00%	17.95	15.08%
合 計	1	3	4	100.00%	119.01	100.00%



第89図 単独出土石器分布（文化層別分を含む）

第3章 縄文時代

第1節 概要（第4図）

泉北側第2遺跡（II）で検出された縄文時代の遺構は縄文時代早期末炉穴1群3基、同中期後半の住居跡1軒、時期不明の陥し穴1基、土坑1基である。この他、古墳時代前期の住居覆土中などから後期の土器片が出土しているが、該当する時期の遺構は調査範囲内では見つかっていない。遺物包含層はI9D～F、20D・Eグリッドを中心とした範囲で認められ、草創期後半の撚糸文土器、早期前半の沈線文土器、前期後半の浮島・興津式土器などがやまとまって出土した。

第2節 遺構と遺物

1. 遺構

115号住居跡（第90図、図版5・27）

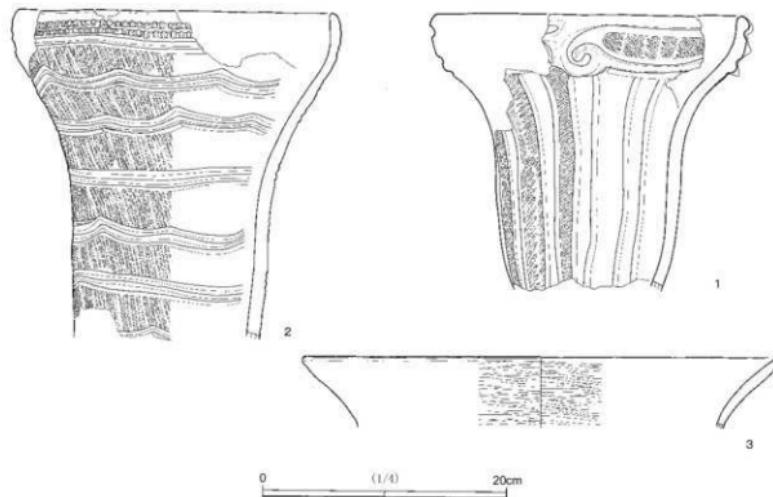
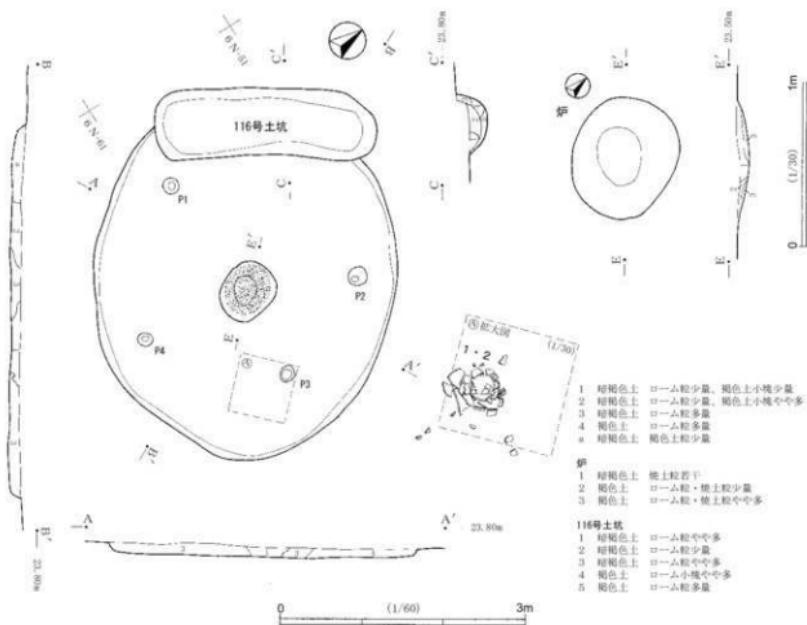
6N-51～61に位置し、主軸方位を北西にとる。116号土坑と重複し、本住居跡が古い。形状は多少歪な楕円形であり、規模は長径4.10m、短径3.65m、掘り込みは10cmと浅く、ソフトローム層中に構築されている。覆土は褐色ないし暗褐色土で、全体に径1cm弱のロームブロックを多く含むという特徴がある。床面は踏み固められた痕跡が少ない。炉は住居跡のほぼ中央に位置し、長軸75cm、短軸61cm、深さ7cmで、焼土の堆積は少量で、底面もあまり焼けていない。柱穴は4本確認され、深さはそれぞれP1が14cm、P2が16cm、P3が4cm、P4が5cmで、その配置状況も規則的とはいえず、柱穴の可能性を指摘するに留める。

出土遺物は住居跡南東床面上に深鉢形土器が入子状に出土したほかは若干の土器片のみであった。なお、重複する土坑内からも大型破片が出土しているが、本来は本住居跡に伴うと思われることから一緒に掲載した。

土器1・2は、2の内側に1が入子状になって出土した。ともに深鉢形土器であり、底部は当初から欠いていたと思われる。1はキャリバー形の器形をなす。口縁部は1/4が遺存し、胴部は完存する。口縁部に隆起による渦巻文と楕円区画文が配置される。隆起は渦巻部分で断面三角形に近いが、楕円区画部分は断面蒲鉾形である。胴部にはR Lの単節縄文を地文とし、垂下する沈線の間を磨消している。磨消部帯と縄文帯の間隔は狭く、磨消部帯は1周12単位である。2は緩いキャリバー形の器形をなす。口縁部は1/2が遺存し、胴部は完存する。口縁部には2本の沈線を巡らし、その沈線の上に2段の刺突列を施している。胴部は細かいLの撚糸文を地文とし、胴部上半に緩い2段の連弧文、頸部以下は横線と連弧文が交互に施されている。連弧文と横線とともに3本1単位の太い沈線で施され、沈線間は磨消されている。3は無文の深鉢形土器口縁部であり、後世の土坑掘削時に破損した可能性がある。やや外反する口縁部で内外面にミガキが施されている。特に内面は丁寧である。胴部は失われていてわからないが、両耳壺であろう。

116号土坑（第90図、図版5）

縄文時代中期の115号住居と重複するが、本土坑が新しい。形状は隅丸長方形であり、規模は長径2.7m、短径0.7mである。断面は浅い楕形である。覆土は褐色ないし暗褐色で、ロームブロックを含んでいる。縄文土器を含んでいることから、調査時では縄文時代の所産として報告されており、一応該期の遺構のな



第90図 115号住居跡・116号土坑及び出土遺物

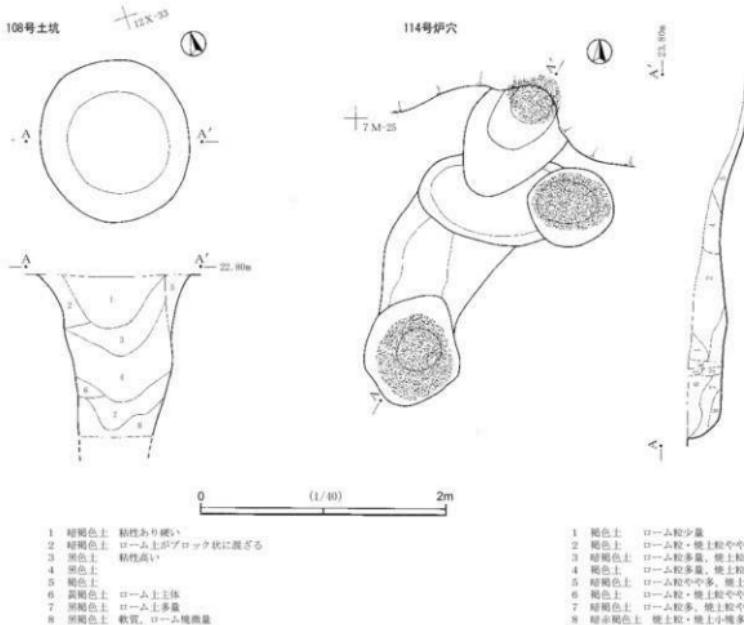
かに加えているが、115号住居の遺物が混じった可能性が高く、後世の遺構の可能性もある。

108号土坑（第91図、図版5）

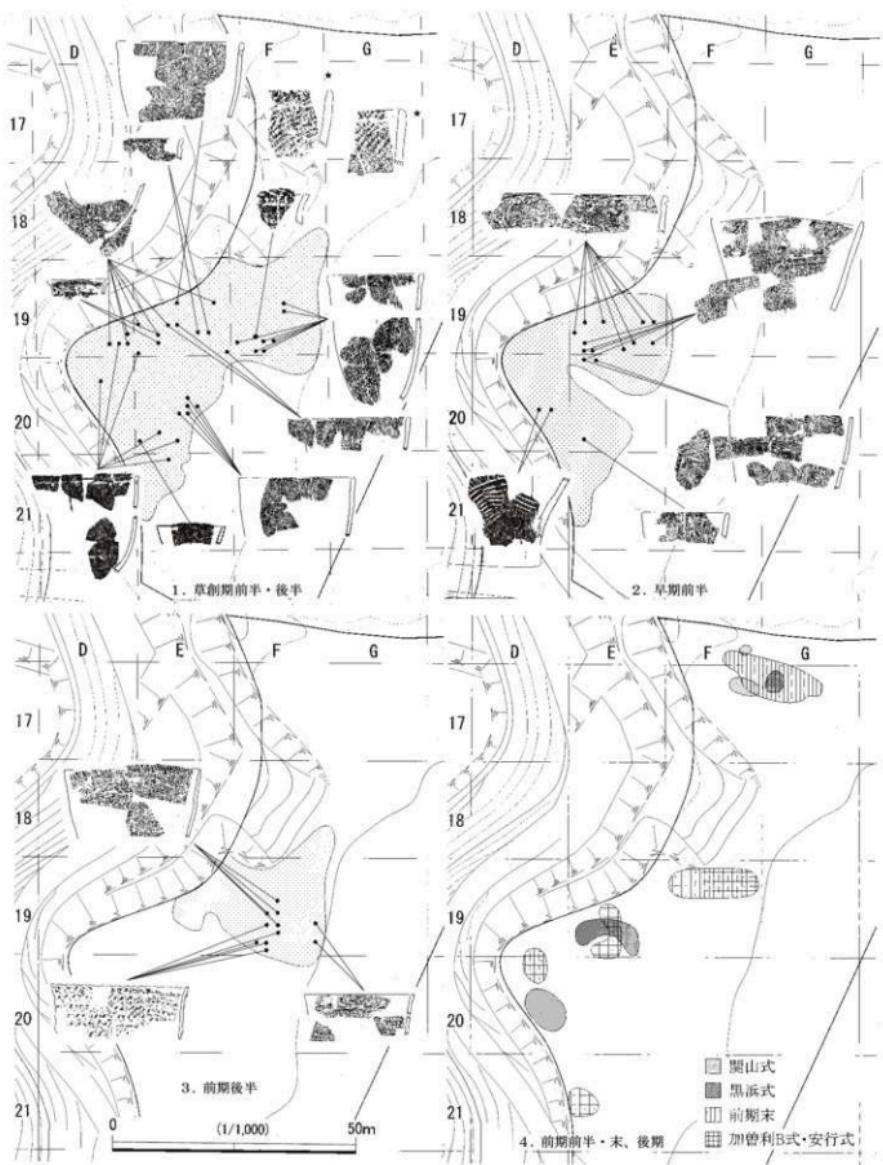
12X-32～33に位置する。陥し穴と思われる。長径1.3m、短径1.2mの楕円形をなし、深さは1.2m以上となる。覆土はU字状の堆積を示し、上部は黒色ないし暗褐色土、下部は褐色土次いで明褐色土となり、ロームブロックを含んでいる。遺物は出土しなかった。

114号炉穴（第91図、図版6）

7M-25に位置する。縄文早期の炉穴群である。南北約3.0m、東西約1.5mの不定形をなし、3か所の燃焼部があり、3基の重複と考えられる。確認面であるソフトローム面からの掘り込みは最も深い所で約30cmである。燃焼部中央の焼土の厚みは各々およそ15cm程度である。掲載に堪えない条痕の付いた小土器片が覆土上部から出土した。



第91図 108号土坑・114号炉穴



第92図 繩文土器時期別分布・接合状況

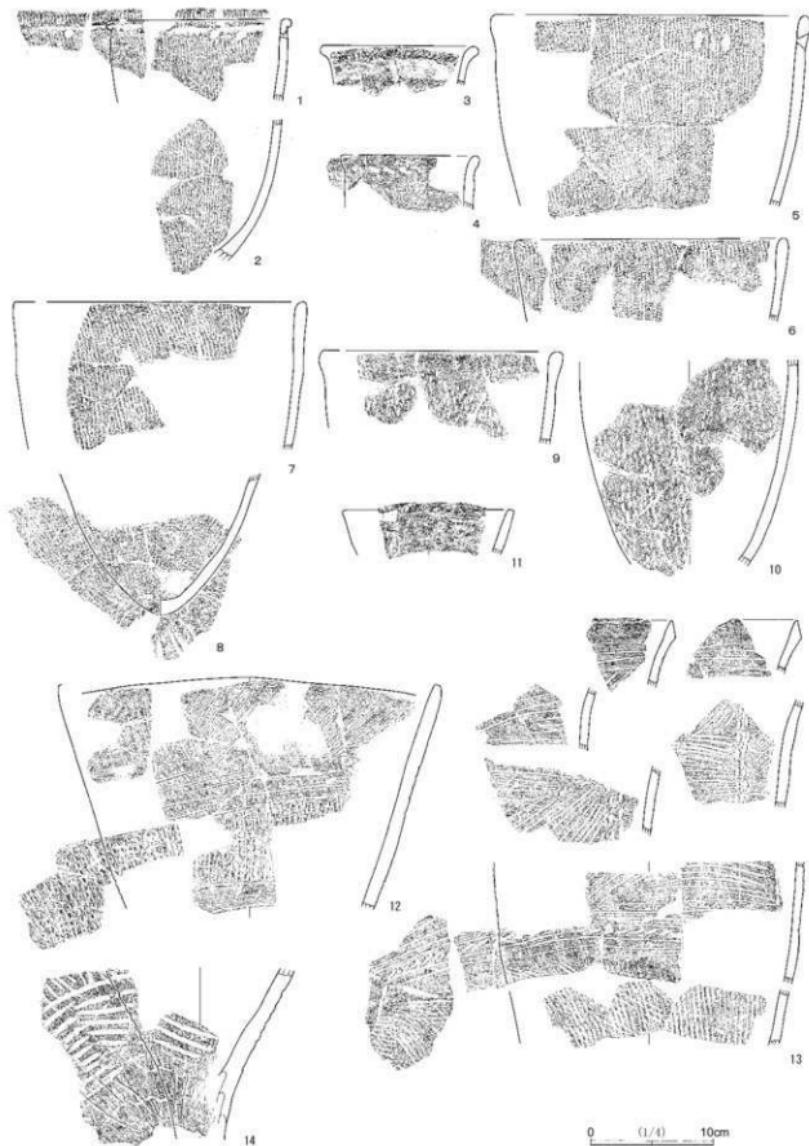
2. 遺物包含層（第92～111図、図版18～26）

16F・G、17F・G、18F、19D～F、20D・E、21D・Eグリッドにおいて縄文時代の遺物包含層が認められた。時期的には草創期前半から後期後半までにわたり、時期ごとに出土量及び分布状況が異なっていた。約400点が出土した草創期後半の撚糸文土器は19D・E、20D・Eグリッドの西側の谷に向かつて突出した台地上を中心に広い範囲で出土した（第92図1）。約1,200点が出土した早期前半の沈線文土器も撚糸文土器の分布と重なるが、より狭い範囲に集中していた（同図2）。また、約800点が出土した前期後半の浮島・興津式はこれらと分布がずれ、19E・Fグリッドを主体に17F・Gグリッドからも少量出土した（同図4）。その他の時期の土器出土量は20点～30点程度の少量で、前期前半の関山式は16F・17Fグリッドのうちのごく狭い範囲に、同じく黒浜式は隣接する17Gグリッド及び19Eグリッド、19D・20Dグリッドのごく狭い範囲から出土した。前期末に属する土器は16F・17Gグリッドの関山式及び黒浜式の分布と重なり、後期加曾利B式・安行式は19F・19E・20D・21Eグリッドの台地縁辺寄りから散漫に出土した（同図3）。石器、礫・礫片は158点出土し、その大部分が草創期後半から前期後半の土器分布域である19D～F、20D・E、21Dグリッドに集中する。

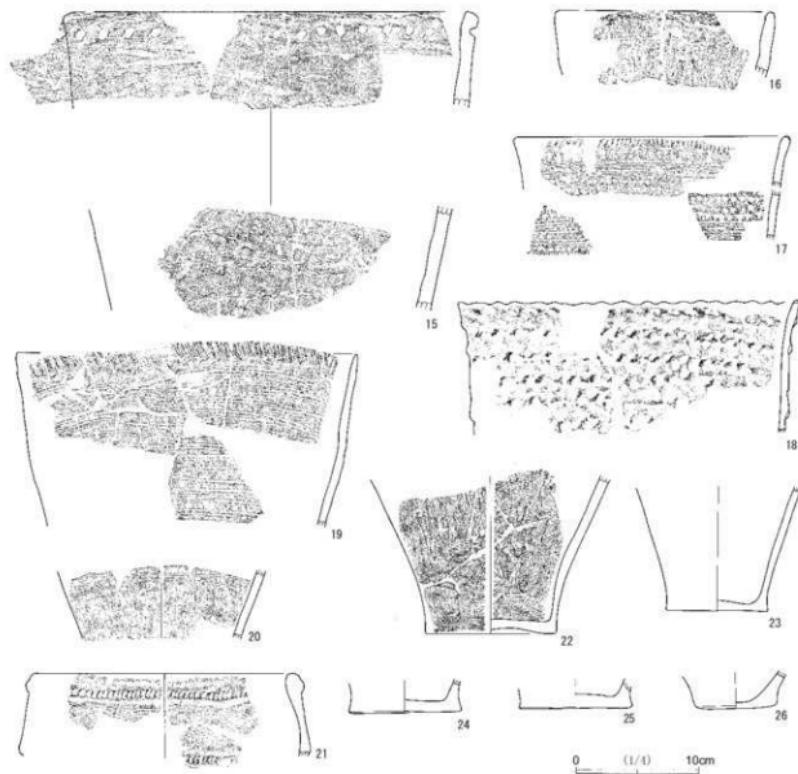
土器（第93～106図、図版19～26）

第95図1～3は草創期前半に属すると思われる。1は口縁部が外反し、口端直下には幅4mmの段が付く。器厚は4mm～5mmと薄く、べこべこと波を打つ点は草創期前半の特徴を示している。焼成は比較的堅致である。平坦な口端上には細くて撚りのゆるいRの縄を斜めに4mm間隔で押捺している。口縁部には同じ縄の押捺が口端直下から縦位に5mm～8mmの間隔で3条認められるが、左端の押捺は口端直下の段下部分が飛んでいる。段部及び拓影下端には縄の押捺前の施文である回転縄文らしき文様が残る。2・3は同一個体と思われる。直口口縁で、口縁端部の断面は丸みを帯びる。器厚は7mmとやや厚い。焼成は甘く、表裏面とも器壁が荒れているが、特に裏面が著しい。文様はRLの縄の横位回転施文で、口縁端部にまでかかるが、裏面には認められない。

第93図1～11、第95図4～43は草創期後半の撚糸文土器で、このうち第95図4～7は井草1式である。4は口縁が強く肥厚、外反し、口縁端部と口頸部に斜位回転のRLの縄文を施す。5は口端にRLの押捺、その直下にRLの横位回転縄文を施し、口頸部に同じくRLの横位回転縄文を施す。肥厚した口縁下には指頭圧痕が認められる。6は口端に縦位回転のRLの縄文、口頸部に同一原体による横位回転縄文を施す。7は口頸部から胴部にかけての破片で、口頸部には横位回転の、胴部には斜位回転のRLの縄文を施す。第93図3・4も井草1式と思われる。3は推定口径12cmの小型土器で、口縁が強く肥厚外反する。口端にはRLの横位回転縄文を施すが、口頸部は無文で拓影右端に縄文がわずかに認められる。4も推定口径11cmの小型土器で、口縁が肥厚する。まったくの無文であるが、口縁下に井草1式特有の指頭圧痕が認められる。第93図1・2、第95図8～17は井草2式である。第93図1・2は同一個体で、推定口径15cmを測る。丸く肥厚した口縁とその下全面にRLの撚糸文を施す。1対の梢円形の補修孔が認められる。8～17はいずれも口端直下にRLの横位回転縄文、その下に同一原体で斜位回転縄文を施す。口縁の肥厚具合は明瞭なものから不明瞭なものまでさまざまである。第93図5～8、第95図18～34は夏島式で、撚糸文土器の中では主体的に出土した。5は推定口径25cm、6は同じく22cmで、ともに斜位回転のRL縄文を密接して施す。5には1対の縦長に開けられた補修孔が認められる。7は推定口径23cmを測り、撚りの緩いRの撚糸文を施す。8は密接したRL縄文を施した砲弾形の底部破片である。底部先端を中心として土



第93図 遺物包含層出土土器（1）



第94図 遺物包含層出土土器（2）

器使用時に付いた同心円を描く擦痕が顕著に残る。18は口端頂部から胴部にかけて斜位施文の縄文を連続して施している。縄文は細かいR Lである。19～28は口端直下から縄文を施す通有の夏島式で、いずれもR L縄文の斜位回転施文である。このうち、21～23、24・25はそれぞれ同一個体である。29～32はR L縄文を密接施文するものの、器壁が乾燥した状態で施文したためか縄文はごく浅い。胎土も長石・石英の細砂を多く含み、他の夏島式とは異なる。次の稻荷台式に近い一群であろう。33・34は密接したRの撚糸文を施す。35～39は稻荷台式である。35・36は口縁が肥厚しない直口口縁で、斜位回転のR L縄文の一部に狭い無文部が認められる。37は太めのR L縄文を疎らに施す。38は絡条体条痕、39は横位回転のR Lを疎らに施す。39はやや時期が下るかもしれない。第93図9・10、第95図40～42は稻荷台式以降の撚糸文末期の土器である。9・10は同一個体で、他にも20点以上の破片があるが、これ以上接合しなかつ

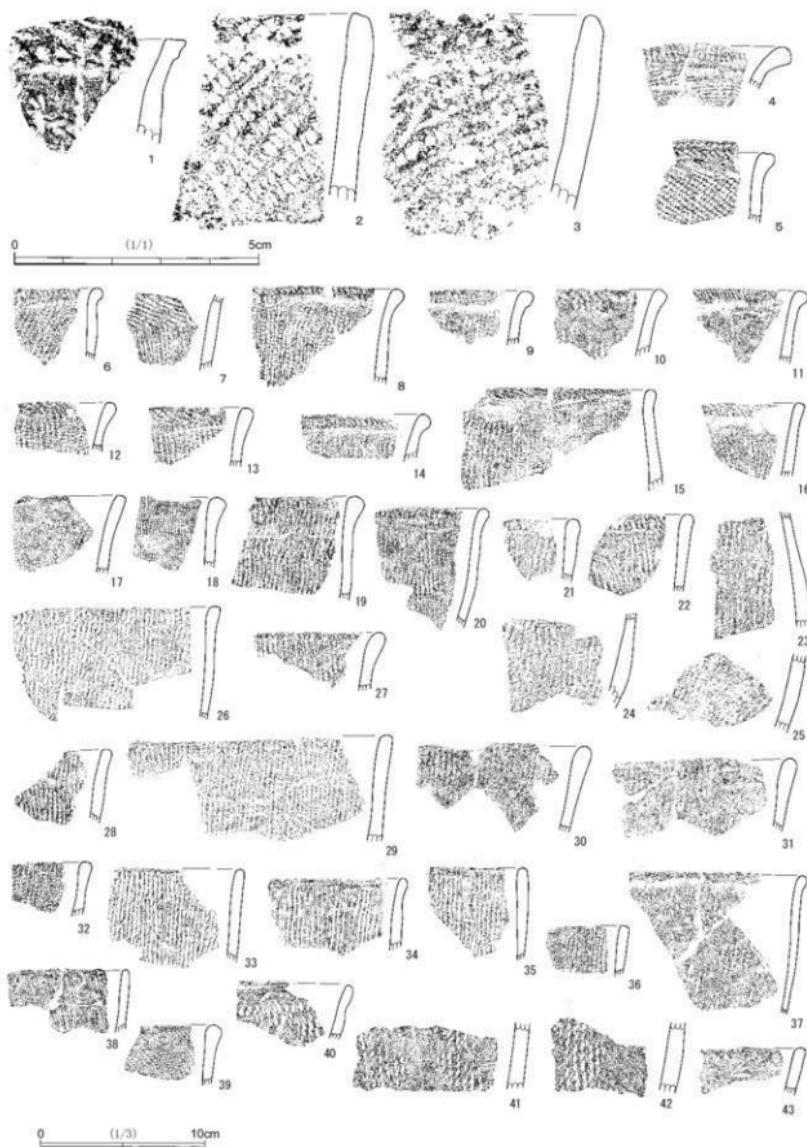
た。推定口径19cmを測る。やや肥厚した口縁下に太く粗いLの撚糸文を浅く施す。胎土中に長石、石英の細砂が多く含む。40はやや肥厚した口縁下に太いRの絡条体を一旦押捺した後、続けて回転施文している。41・42は同一個体で、LRの撚糸文を帶状に施す。第93図11、第95図43は撚糸文土器に伴う無文土器で、11は口縁断面がやや角張り、43は丸みを帯びた直口口縁である。

第93・94図12～16、第96図44～第101図254は早期前半の沈線文土器で、今回調査分の主体をなす。このうち、第96図44～50は三戸式である。44～46は小型土器の同一個体で、1条～3条の細沈線帶区画を挟んで右傾と左傾の斜沈線を繰り返し施す。47は斜沈線が入った帶状文が認められる。48・49は多条の細沈線帶区画間に縱位太沈線を施すものであろう。50は口縁を内削ぎし、その先端に指頭による深い圧痕を加えている。その下には貝殻条痕を施す。51～53はいわゆる凹線文で、三戸式ないしはその直前に位置付けされている。

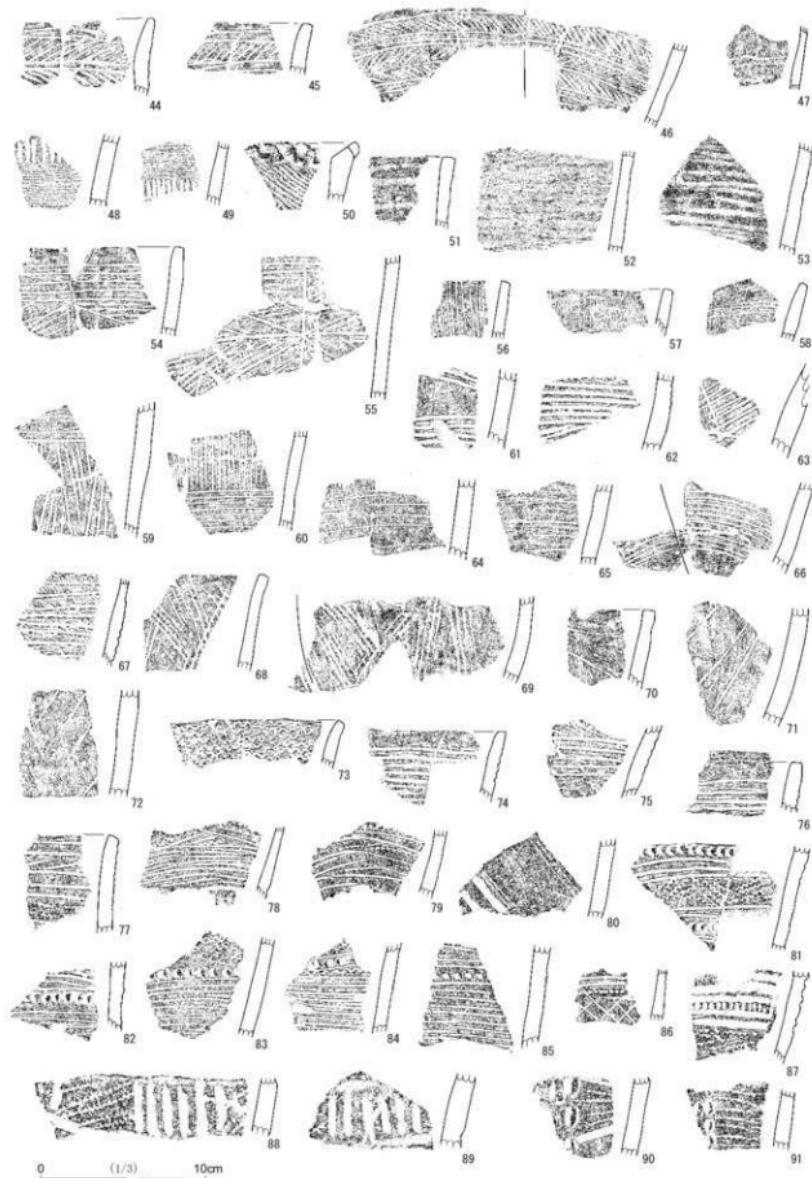
第93図12～14、第96図54～第100図216は田戸下層式である。細沈線や貝殻腹縁文、刺突文などの文様要素の組み合わせによって分類したが、小細別を示すものではない。56～72は細沈線のみで文様が構成されるものである。56～58は口縁部破片で、角頭状の口縁断面をもつ。59・60は多条の細沈線帶区画間に幅広の鋸齒状文様や縱位集合沈線を施すものであろう。61・62は多条の細沈線帶区画と斜線文が認められる。63は横位と右傾の区画沈線内に左傾の集合沈線を施す。64～66は細沈線帶区画のみが残る。64・65は沈線の間隔が不ぞろい、66は等間隔である。67は地文に細い貝殻条痕が認められる。68・69は同一個体で、全体に鋸齒状文を施すようである。70～72は間隔の開いた斜線文を施す。

54・55、73～91は沈線による区画内に貝殻腹縁圧痕を充填したものである。54・55・74・75は同一個体で、区画文様は米字状の構成を取る。73は外削ぎの口縁断面で、口縁部に大型の貝殻による腹縁圧痕文帯をもつ。76は角頭状の口縁端部にも貝殻腹縁圧痕を施す。77・78は沈線による区画が狭い。79・80は沈線に沿つて貝殻腹縁圧痕を施す。81～83・85・86は細沈線帶区画内に刺突列が加飾されたもので、81・82は同一個体である。86には貝殻腹縁圧痕下に格子目文様を施す。84は細沈線帶区画の文様を区画する沈線に刺突列が加飾されている。87～90は太沈線との組み合わせである。88・89は同一個体で、太沈線による狭い区画帶間に縱位の太沈線と貝殻腹縁圧痕を充填する。90は垂下する2列の刺突文も見られる。91は垂下する2列の刺突列と貝殻腹縁圧痕のみの組み合わせである。

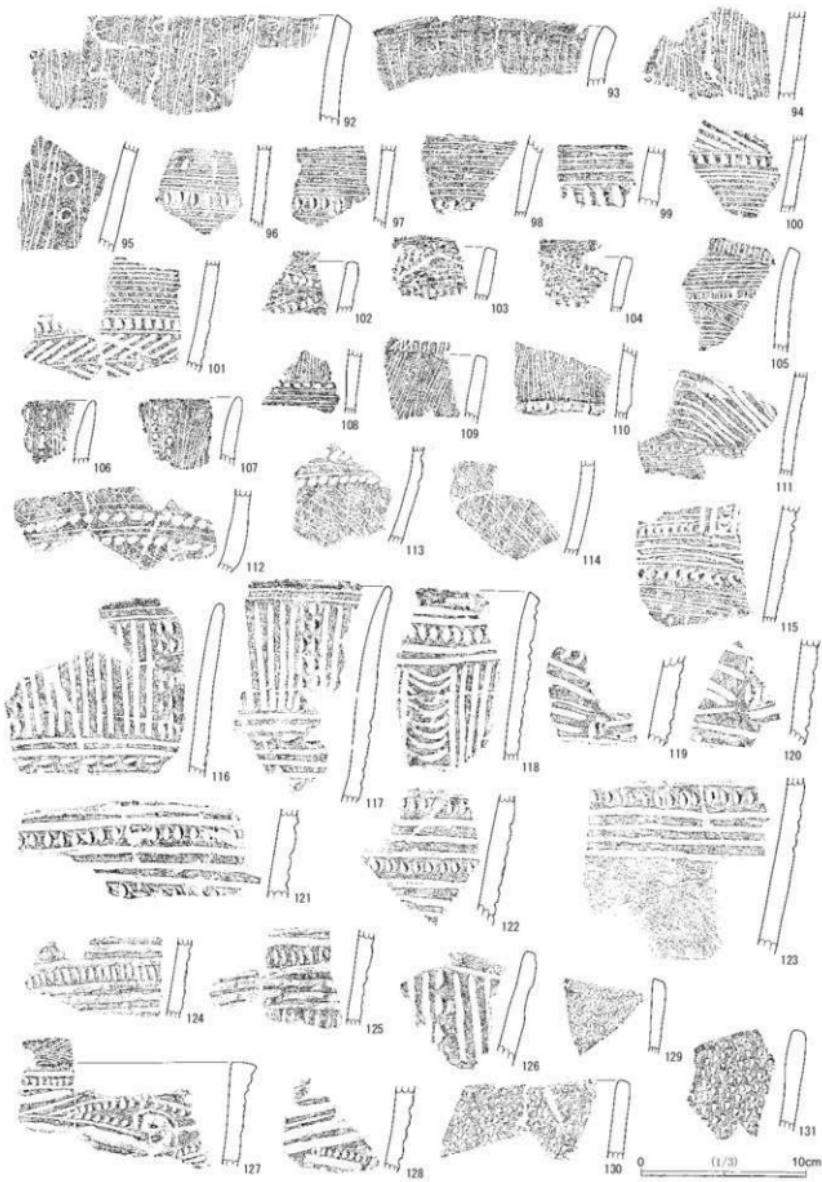
第93図12・13、第97図92～115は細沈線と刺突文の組み合わせを主とするものである。12は推定口径31cmを測り、緩い山形状の波状口縁をもつと考えられる。口縁部文様帶に鋸齒状文を置き、その下に雜な細沈線による区画帶を挟んで刺突文帶を配する。刺突文帶は1条ないし2条の縱位沈線で分削されている。鋸齒状文の沈線、刺突文帶内の縱位沈線は区画沈線の上にかぶり、各文様帶は厳密に区別されていない。13は30点ほどの破片があるが、これ以上接合しなかった。おおよそ全体の文様構成が分かる。器形は口縁断面が外削ぎとなり、その下がややくびれて、軽く膨らむ胴下部になると思われる。文様は口縁下に細沈線帶を施して区画し、胴上部の幅広の文様帶には2列の刺突文で縱分割した後、集合沈線による弧状文様や三角形状の文様を施している。この文様帶の下部は刺突列を挟んだ細沈線帶で区画し、胴下部は貝殻条痕を全面に施している。92～95は同一個体で、いずれも口縁部破片である。同部位の破片が他に20点ほどあるが、接合しなかった。大型の土器であったと思われる。外削ぎの口縁断面で、鋸齒状沈線間に円形竹管文が垂下している。96～101は細沈線帶区画に刺突文が加飾されたものである。96・97、100・101は同一個体で、100・101には区画帶の上下に太沈線による斜線や矢羽根状文が認められる。102～104は小



第95図 遺物包含層出土土器（3）



第96図 遺物包含層出土土器（4）



第97図 遺物包含層出土土器（5）

型土器の同一個体である。口端上に細沈線による斜線文を付け、口縁部には刺突文と沈線の組み合わせで三角形状の文様を施す。105は波状口縁で、口端に沈線による刻みを付ける。口縁部文様は横位の集合沈線と刺突を挟んだ沈線が2方向に認められる。106～108、109・110はそれぞれ同一個体である。いずれも口縁部に鋸歯状文を施す。111は細沈線帯区画に沿って刺突文を施し、その上に太沈線による曲線文様を配する。112～114も同一個体で、2列の刺突文と細沈線が区画帯を構成し、その上下に格子目文を施す。115は太沈線と刺突文の組み合わせによる縦位区画が見える。

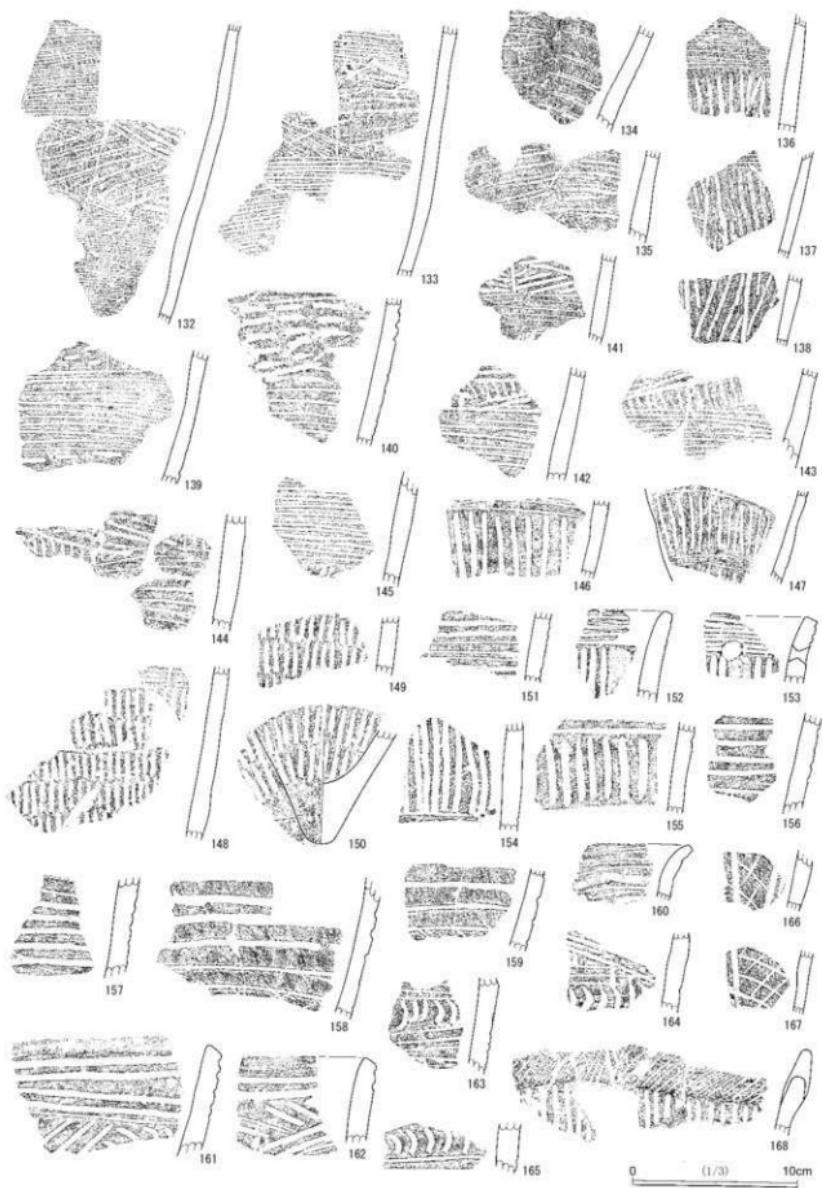
116～128は太沈線と刺突文の組み合わせを主とするもので、刺突文が区画帯に沿うものと区画帯間の幅広の文様帯内で用いられる場合とがある。116・117は同一個体で、口縁直下の区画帯は2本の細沈線である。118は口縁部区画帯下には太沈線による弧状文が認められる。119・120の刺突文は文様帯内を縦分割するものである。127・128は同一個体で、厚みのある口端には細沈線による矢羽根状文を施す。口縁部には細沈線、太沈線、刺突文による菱形区画内に太沈線による蔽手状文を配する。129～131は同一個体で、全面に刺突文を施す。

第98図132～168は細沈線と太沈線の組み合わせによるものである。132～135は同一個体で、密接した細沈線帯間に浅い太沈線により菱形状の文様を施す。134・135はその胸下部の破片である。139・140は同一個体で、139の拓影上端に縦位区画沈線と太い短沈線の充填が認められ、140には細沈線帯間に太い短沈線のみを施す。141～145は細沈線帯と太沈線による三角形ないし菱形区画内に太い短沈線を充填している。なお、142～145は同一個体である。146～150、152～155は細沈線帯間またはその下の胸下部に縦位の太い短沈線を施す。このうち、146・147、148～150、152・153は同一個体である。151、156～159は細沈線帯と太沈線帯の両方を施し、158・159の拓影下端には格子目文が認められる。160は細沈線帯内に1本の太沈線が入る。161・162は太沈線による区画文に太い短沈線を充填しており、細沈線は区画文、充填文に添えて用いられている。163～165は細沈線による区画文に太い短沈線を充填している。このうち、163と164は同一個体である。166・167も同一個体で、縦位の太沈線間に格子目の細沈線を充填する。168は波状口縁で、幅広の口縁には細沈線による斜線文を、口縁下の軽くくびれた部分には縦位の太沈線を施す。なお、口縁の波頭部下には爪形状の刺突文が縦に2段付く。

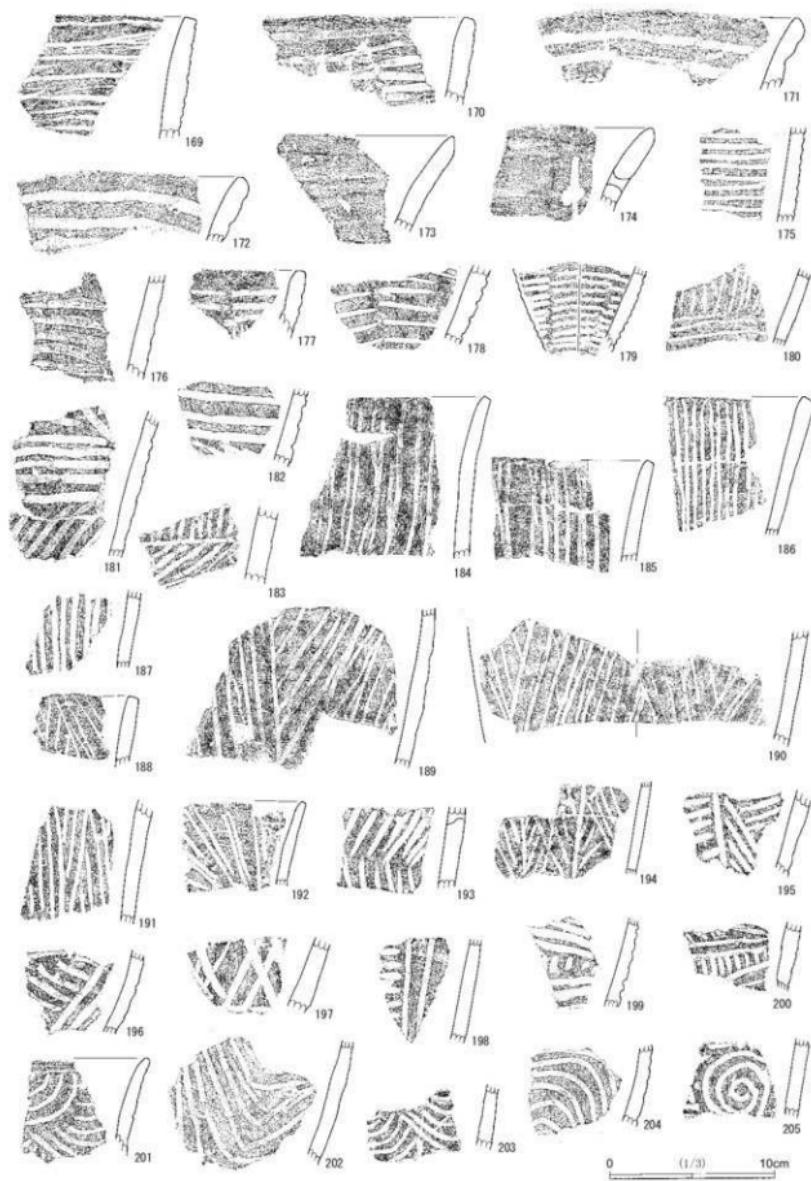
第93図14、第99図169～205は太沈線のみで文様を施すものである。169～173、175・176は横位方向に多条の太沈線を施す。177～179は同じ横位、多条でも短沈線である。174は縦位の太沈線が1条のみ認められ、補修孔がある。180～182は横位、多条の太沈線帯の上下に異方向の太沈線を施す。第93図14は底部付近の大型破片であるが、横位、多条の短沈線帯を最下段の文様とし、その上に鋸歯状の太沈線を施す。183の左傾する太沈線帯は三角形区画内に充填されるようである。184～187は縦位の太沈線を施す。184と185は同一個体である。189～191は鋸歯状、192は放射状、193は矢羽根状の文様を施す。189と190は同一個体である。194～197は多方向の太沈線による複雑な文様を構成している。198～200は太沈線による区画内に太沈線の短刻が入る。201～205は曲線文様を施すもので、205は渦巻文となっている。

206～216は貝殻条痕を施したものである。格子目状の装飾的な文様となるものと単方向の単純文様の両者がある。このうち、207と208には補修孔があり、212と213は同一個体である。

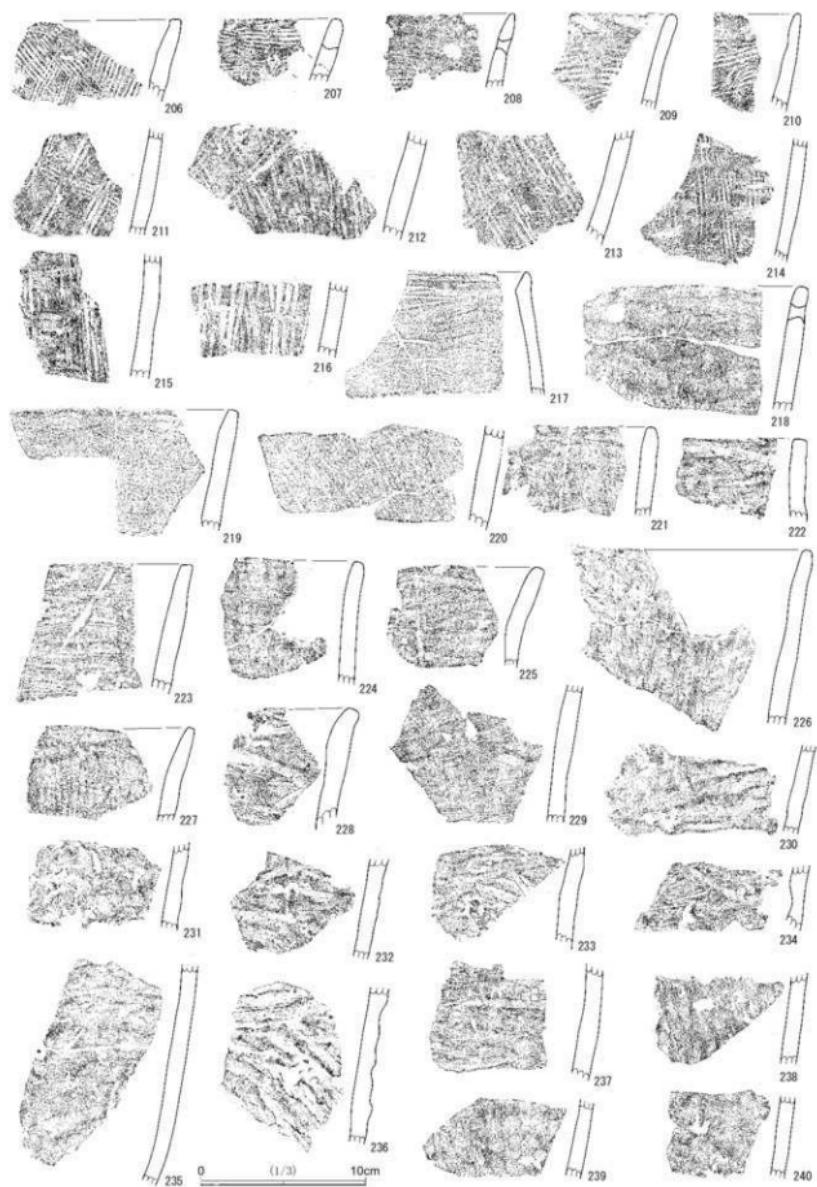
第94図15・16、第100図217～240は無文のものである。いずれも上記沈線文土器と胎土は変わらず、織維を含んでいない。15は推定口径33cmを測る。3点の大型破片は接合しない。口縁部に先端の丸い棒状工具による刺突列を施し、器面には横位方向の擦痕が顕著である。16は推定口径17cmの小型土器である。



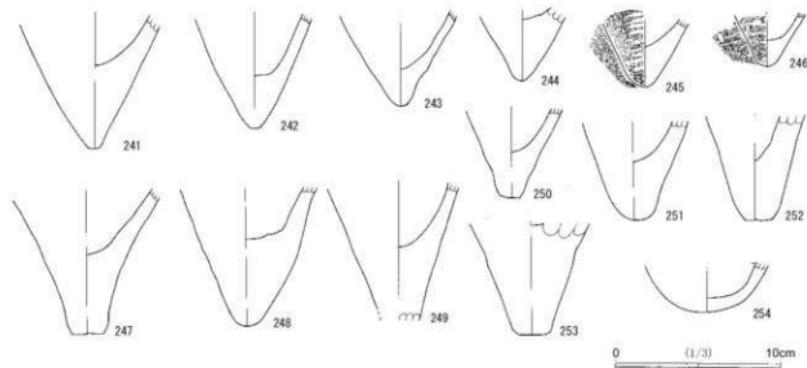
第98図 遺物包含層出土土器（6）



第99図 遺物包含層出土土器（7）



第100図 遺物包含層出土土器 (8)



第101図 遺物包含層出土土器（9）

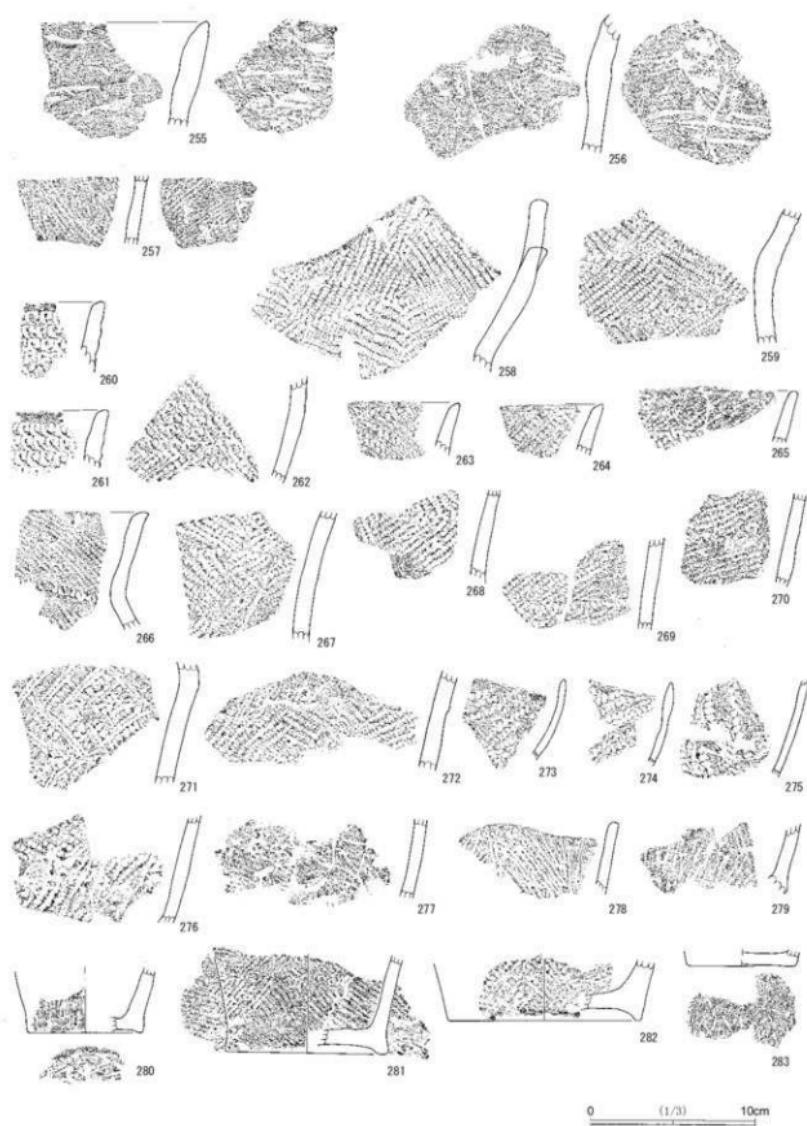
器面調整が雑で、縦位方向の調整痕が部分的に認められる。217～240では、器面調整の度合いは破片によつてさまざまである。218・221・220・229は全面に丁寧な磨きがかけられている。225～227は粗い磨き、230・232・236は粗くなられたのみで器面に凹凸が残る。その他は擦痕が顕著に残る。この擦痕は、228では幅約2cmのへら状工具によって付けられていることが分かった。なお、223・234・236・240には幅9mm～14mmの竹管状工具による刺痕が残る。

第101図241～254は上記沈線文土器の底部である。鋭角の尖底が大部分で、245・246は小型土器の底部と思われる。254は唯一の丸底である。

第102図255～257は早期後半の茅山式系土器である。255・256は同一個体で、表裏とも無文で部分的に貝殻条痕が付く。厚手で、繊維の含有はやや多い。257は薄手で、表裏とも条痕が付き、繊維の含有は少ない。

258～270は前期前葉の関山式である。258・259は同一個体で、波状口縁の頂部を内側にへこませている。縄文はR LとL Rで菱形に施しており、一部は環付縄が認められる。260～262は同一個体で、口縁部にR Lの環付縄が多段に付き、262の胴部ではその下にL { RLとL { LRを施す。263・264も同一個体で、R { LRとL { RLを羽状に施す。265は口縁下にL R、その下に環付縄のR Lを施す。266はR Lの縄文で、くびれ部分に環付縄が認められる。267・268も同一個体で、菱形構成を取り、一部に環付縄が認められる。269・270も同一個体で、269には環付縄が拓影上端に1段、下端に2段認められる。

273～280は前期中葉の黒浜式である。272・273は同一個体で、付加条縄文が菱形構成を取る。付加条の原体は0段多条の太いL Rを軸縄としてLを2本付加した付加条第1種及び同種の軸縄R LにR 2本を付加したものである。272にはこの付加条縄文帯の下に通常のRL・LRの羽状縄文を施す。273～275も同一個体で、きわめて薄手の作りが特徴的である。口縁部にはLR、胴部にはRL縄文を施す。縄文は太めである。276はRLとLRの羽状縄文、277は細かいRL縄文である。278は山形の波状口縁をもつ小型土器で、平行沈線で葉脈状文を施す。279・280は同一個体で、底部直上及び底面には鋭いへらによる沈線を施す。279の拓影上端にはRの縄文が認められる。



第102図 遺物包含層出土土器 (10)

281～283は関山式ないし黒浜式の底部である。281は0段多条のR LとL Rの縄文で不規則な羽状構成をとる。283も羽状構成をとるが、器壁が2次焼成で荒れているため縄文原体は不明である。いずれも上げ底である。

第94図17～19、第103図284～第105図374は前期後半から中期初頭にかけての土器で、その主体は浮島式・興津式である。

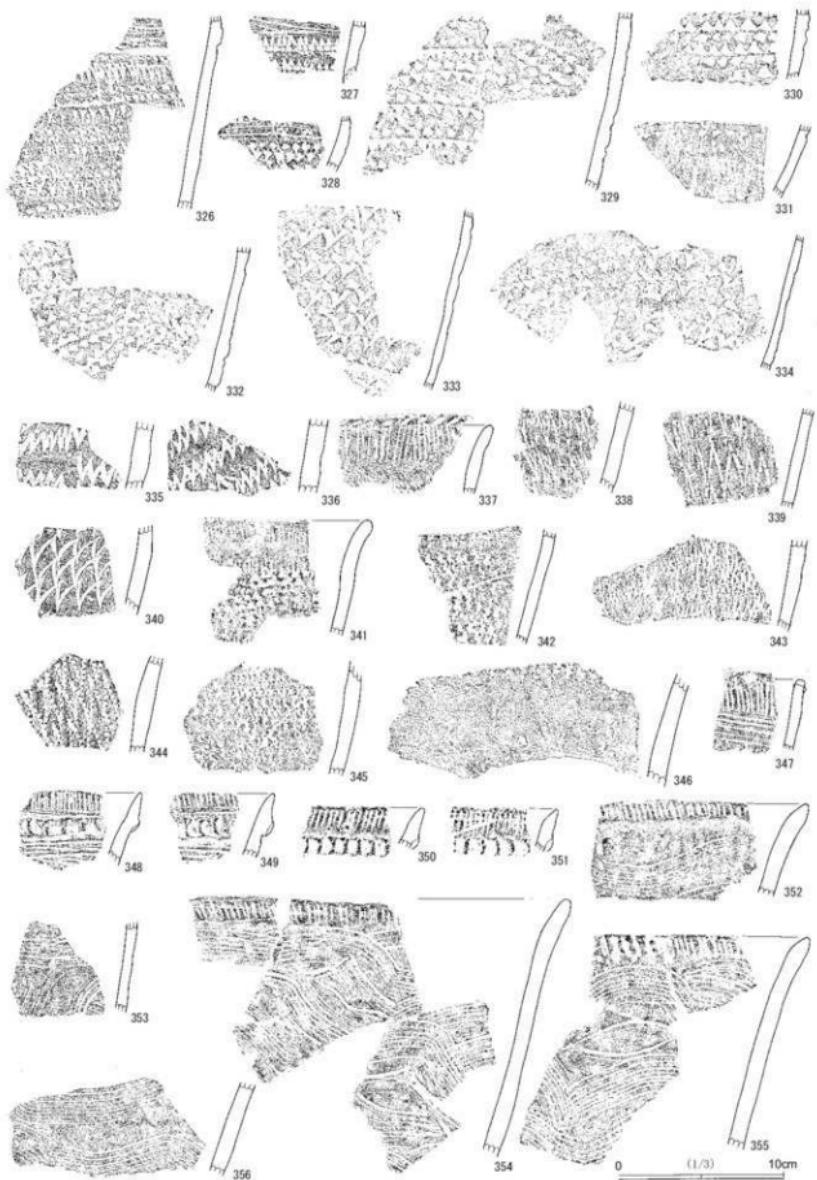
284～289は諸職a式である。284～286は同一個体で、284には2尖の口縁突起が残る。半截竹管による平行沈線で区画された中に爪形文を施す。287・288も同一個体で、2段の平行沈線下に細いが撚りのゆるいR Lの縄文を施す。289はよく似た縄文を施す底部から胴下部の破片である。

第94図17～19、第103・104図290～346は浮島式である。290～292は同一個体で、半截竹管内側による刺突文を全面に施す。290の口縁部付近は横位、291では横位方向と縦位に1列、292では斜位に2方向施している。19・293～303・305は半截竹管もしくはへらによる沈線文様を施したものである。19は推定口径28cmを測る大型破片で、口縁は不規則に波打ち、端部は薄くなる。半截竹管で口縁部条線帯と以下の平行沈線文を施す。293は推定口径10cmの楕円形の小型土器で、口縁部にはへらによる細く乱雑な沈線文様を、体部には半截竹管によるD字状の刺突列を施す。口縁端部には細かな刻みが付く。294は推定口径14cmの小型土器で、半截竹管による弧状文様を施す。295も同様の文様である。296・297・299は1本描きの細く鋭い沈線が認められ、296・299には口縁端部に多截竹管による刻みが付く。298・300～303は半截竹管による乱雑な沈線文様を施す。口縁部破片はいざれも指頭圧痕や半截竹管による条線帯が付く。304・305はミニチュア土器で、304は口縁に半截竹管による条線帯が付き、305は乱雑な沈線文様下に波状貝殻文が認められる。306～310は無文土器で、306・307は口縁端部に刻みが付く。308には輪積みの段が残る。309の口縁部の平行沈線は器面調整により磨り消されている。311は折り返し口縁に半截竹管による条線帯が付く。18・312～317・322・333は凹凸文の土器である。18は推定口径28cmを測り、口縁端部には指頭圧痕が付く。316・317の口縁には半截竹管の背によるとと思われる太めの条線帯が付く。322は平行沈線文と有節線文、323は平行沈線文が組み合わされている。17・318～334は三角文を施したものである。17は推定口径22cmで、口縁端部に刻みを付け、その下に半截竹管による有節線文を2段、平行沈線を2段、さらにその下に三角文を施す。同一個体の胴部破片では三角文と有節線文が3段認められ、これらの文様が多段に繰り返されると考えられる。318～321は同一個体で、口径30cmを優に超える大型の個体である。口縁部に折り返しの段を持ち、そこに半截竹管による深い刺突列が付く。その上下には平行沈線文を配し、胴部は全面が三角文になると思われる。324・325は同一個体で、324は口縁に半截竹管刺突による条線帯と三角文が、325には三角文と平行沈線文が認められる。326は口縁部の段に有節線文と沈線文を、胴部に多段の三角文を施す。327・328は平行沈線文と三角文が認められる。329～332は同一個体で、横位ないしは斜位に三角文を施す。333・334も同一個体である。335～346は波状貝殻文を施すもので、335・336、337～339、341・342はそれぞれ同一個体である。337・341には口縁に半截竹管による条線帯が見られ、337の口端にはさらに刻みが付く。

347～360は興津式である。347～359は櫛歯条線文を施した興津1式で、348・349、350・351、352～355はそれぞれ同一個体である。348～351の凹凸文は浮島式の凹凸文に比べて角形の整ったものになっていて、352～355の条線文様は波状文を描くが、紡錘形や三角形、菱形状の空白部が所々にあって、全体的に何らかの意匠を意図しているかもしれない。360はいわゆる磨消貝殻文で、興津2式である。1点の



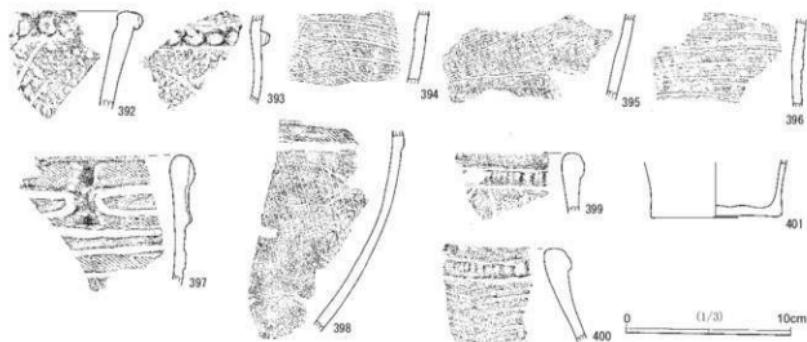
第103図 遺物包含層出土土器 (11)



第104図 遺物包含層出土土器 (12)



第105図 遺物包含層出土土器 (13)



第106図 遺物包含層出土土器 (14)

みの出土である。

361～370は前期末から中期初頭の縄文を施す土器である。361・362は同一個体で、R Lの細かい縄文に一部波状貝殻文を施す。363は折り返し口縁で、両端に結節をもつL Rの粗い縄文を施す。365・366は同一個体で、両端に結節をもつ結束第2種の羽状縄文を施す。367・368、369・370もそれぞれ同一個体である。367には末端に結束が見られる。

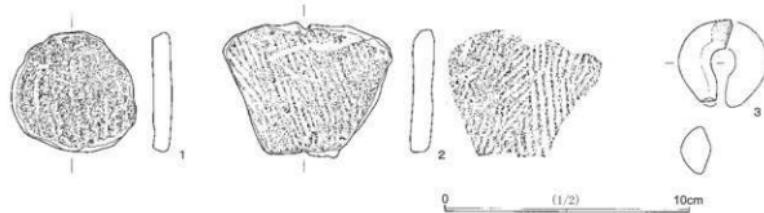
371・372は諸磯c式の同一個体である。371は背の高い三角形状の突起破片で、拓影右側には綫長の透かしが認められる。373は十三菩提式で、結節のある浮線文を多条に施す。374は条線帯が付く折り返し口縁下に、沈線で棒状に区画した中に3段の連続山形文を施す。五領ヶ台式に属しよう。

375～379は中期の土器である。375～377は勝坂式の同一個体、378は加曾利E3式の橋状突起、379は加曾利E4式の微隆起線文土器である。

第94図20・21、第105・106図380～400は後期の土器である。380は称名寺2式、381・382は堀之内1式、383～385の縄文のみのものは堀之内2式の粗製土器であろう。386は加曾利B1式の精製土器の小片である。387～389は裏面に沈線が複数条入る鉢ないし浅鉢土器である。387は口縁に刻みを付け、その下に3条の沈線と櫛齒状工具によるコンパス文を施す。裏面は口端に刻みを付け、その下に1条の凹線、5条の沈線、1条の沈線を間隔をあけて施す。388は低い波状口縁をもつ。表面は口縁部に広い無文帶を設け、その下は上端が磨り消された縄文である。裏面は波状部の口端に刻みを付け、直下の2条凹線のうち、上部の凹線は波状部にのみ刺突を加え、これを粘土紐で囲んでいる。凹線以下は9条の沈線である。390～393は加曾利B式の紐線文系の粗製土器である。390の紐線はきわめて細く、低い。20、394～396も加曾利B式の粗製土器であろう。397・398は安行1式の同一個体である。21・399・400は安行2式の粗製土器で、399の口縁部文様は縄文を充填した意匠文様になる。

土製品（第107図1～3、図版20）

1は土製円板である。燃糸文土器の破片を利用したもので、当該期は夏島式が主体的であることから、同期と思われる。22.2gを量る。2は土器片鍤である。表裏条痕の茅山式系土器の破片を利用したもので、周縁は打ち欠き、糸掛けは磨りによる。39.3gを量る。当該時期には土器片鍤の使用は知られていないことから、後の時期に作られたものであろう。3は块状耳飾りの半欠品である。前期浮島・興津式期の所産であろう。



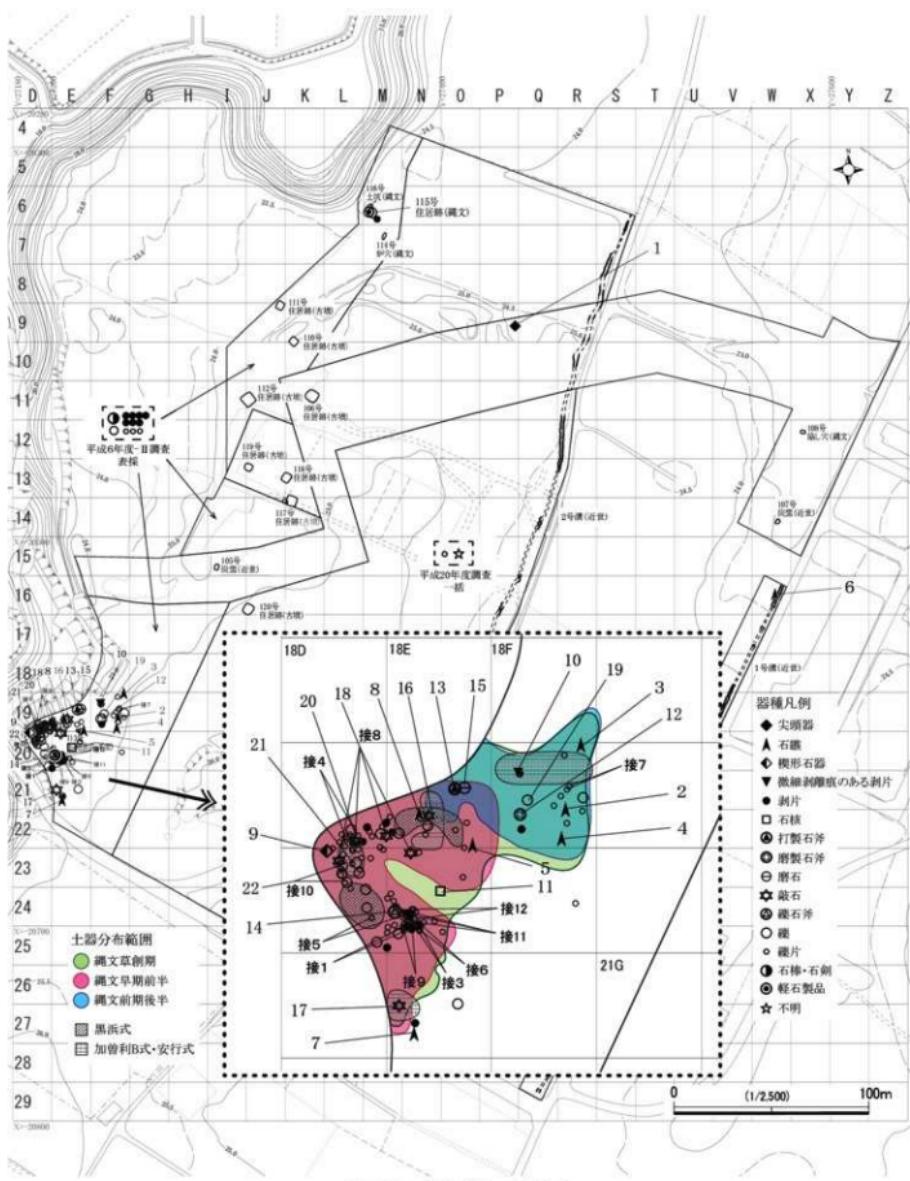
第107図 遺物包含層出土土製品

石器（第108～111図、第34表、図版18）

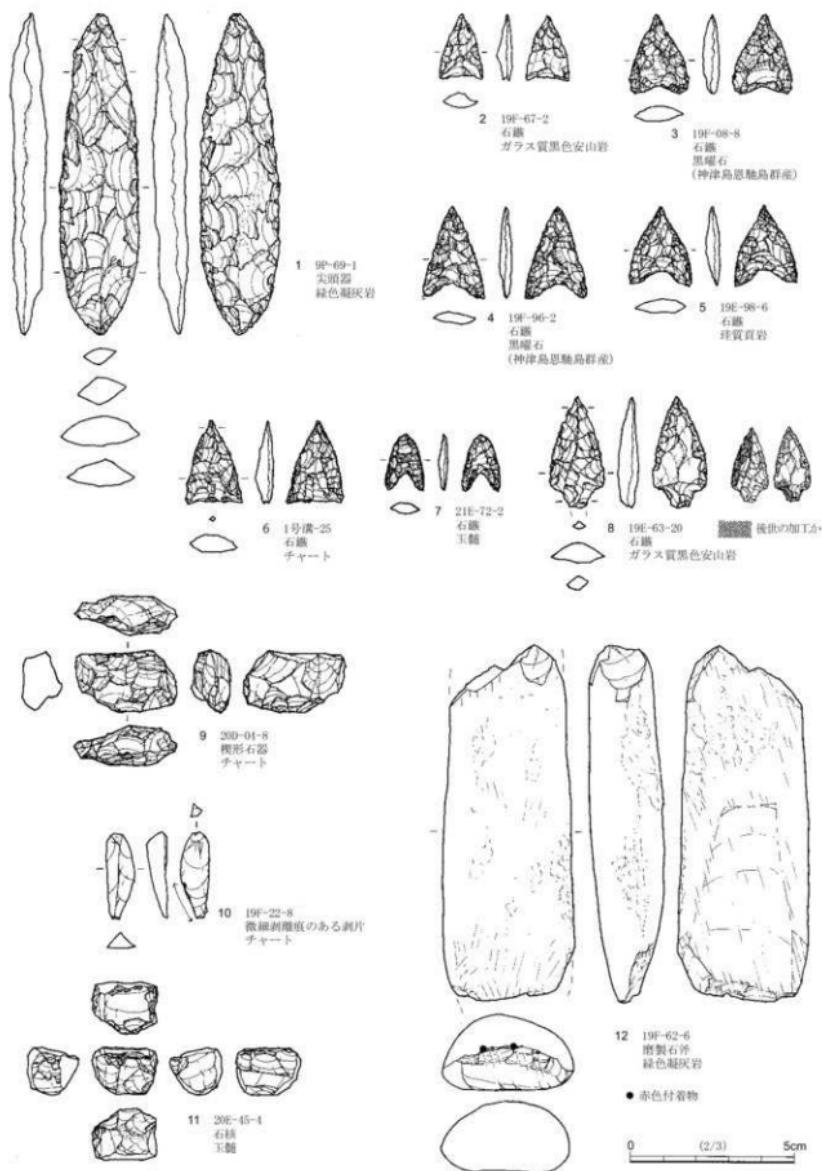
縄文時代に帰属する石器について器種別に報告する。出土点数158点のうち礫・礫片が116点と73%を占めており、製品や剥片類に礫を含めた22点を実測した。石器の大半は遺跡南西部（19D～19F、20D・20E、21Eグリッド）に張り出した台地突端部から出土しており、燃糸文や沈線文が施された土器、浮島・興津式土器の集中域と重なることから、縄文時代早期～前期後半の所産と推定される。この集中域では、石鏃、楔形石器、剥片類、石核、石斧類、礫・礫片が出土しており、石鏃はすべて完形である。また、遺跡内に疊らに分布する石器の中には、精緻な加工が加えられた細身の尖頭器が出土している。これら、一部の特徴的な石器や礫については第7章第2節のまとめの項にも掲載した。

1は尖頭器である。緻密で均質だが、光沢や艶ではなく、緑色を帯びた灰白色の緑色凝灰岩製であり、調査時の欠損部分は明るい青灰色である。最大長は98.0mmであり、最大幅は下方1/4にある。精美な柳葉形であるが、上部が折れた後に再加工されたために側後にわずかな段差が生じている。

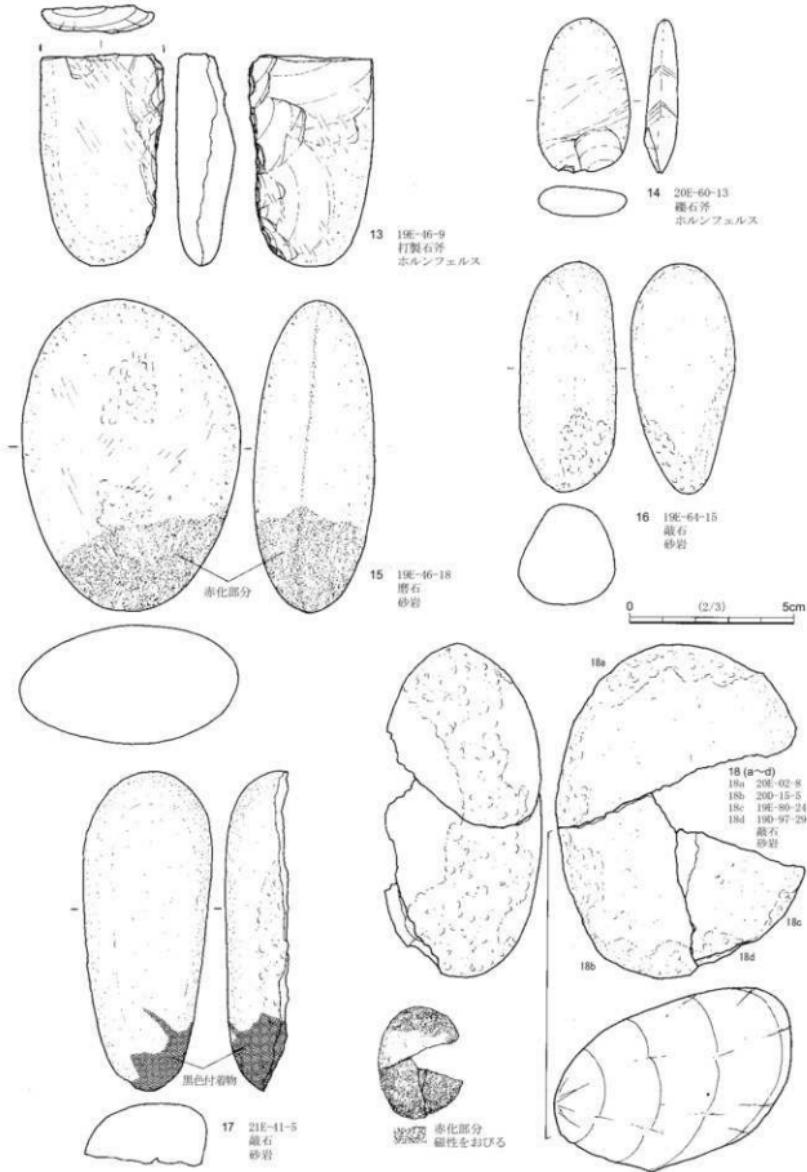
2～8は石鏃である。2はガラス質黒色安山岩製で、二等辺三角形の平基であり、正面の下方2/3の位置に最大厚がある。周縁部からの加工が及ばず、凸部が残されている。3・4は神津島恩馳島群産の黒曜石製であるが、3は玻璃質で器厚の薄い部分では光を透過し、夾雜物が少量混じる。基部の抉りは弱く、脚部は丸みを持つ。先端は両側縁から調整され、尖鋭である。4の黒曜石は青灰色を帯びた黒色であり、夾雜物はなく、光を透過しない。精美な二等辺三角形だが、左脚部はわずかに欠損する。5は、淡い黄褐色で細粒、微光沢がある珪質頁岩製である。側縁はやや膨らみを持ち、緻密な加工で整えられている。6はわずかに緑色を帯びた灰色のチャート製である。器厚の薄い部分は光を透過する。二等辺三角形の平基鏃であり、器面は稜を感じさせないほど滑らかに整形される。近世の溝から検出された。7は微かに橙色を帯びた白色半透明であり、硬質堅緻な玉髓製である。最大長は17.2mm、基部の抉りは約6mmである。



第108図 縄文時代の石器分布



第109図 繩文時代の出土石器（1）



第110図 繩文時代の出土石器（2）

側縁を延長して推定される形状とは異なり、丸みを持った先端となっている。幅や厚さを維持しつつ先端を再加工したものと考えられる。8はガラス質黒色安山岩製の有茎石鏃である。茎部先端は欠損する。断面が三角形状を呈する。左縁辺と返しの部分には色の違いが確認できる。

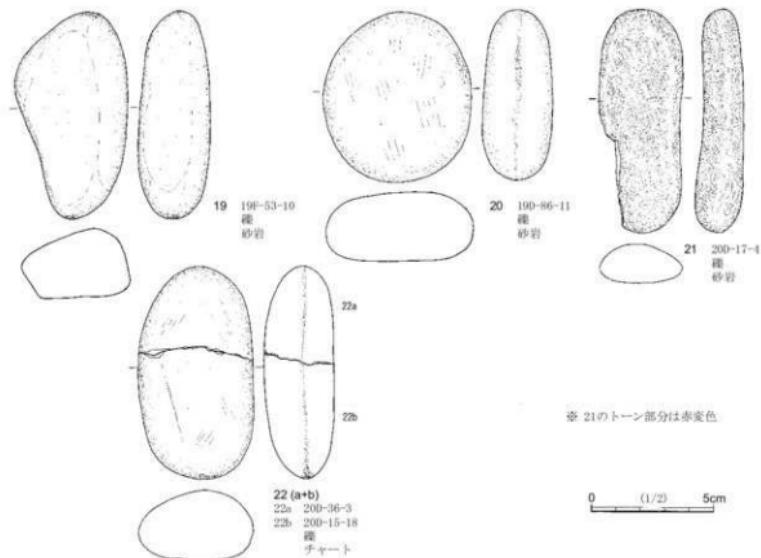
9はチャート製の楔形石器である。多方向からの打撃により荒れた器面となっている。右側面の加工は上下面より古いが、左側の剥離痕は比較的新しく、何らかの機能部が存在した可能性がある。

10は微細剥離痕のある剥片である。石材はチャートであり、自然面を打面にして剥離されている。背面には主要剥離と同一方向からの剥離痕がある。右下縁辺に微細剥離痕がみられる。

11は玉髓製の石核である。丸みのあるサイクロロ状で、角、及び縁辺がすり潰されたような打面と、正面、左側面、裏面に作業面を持つ。表土層付近から出土しており、後世の燧石である可能性がある。

12は磨製石斧である。礫面は青みのある緑灰色で、剥離面は粒状で砂質だが、弱い磁性がある緑色凝灰岩製である。上、下部とも欠損するが、剥離後も器面は滑らかに整えられる。偏平な棒柱状礫の下端部に剥離と擦りで刃部を作出した斧型の石器である。なお、刃部には、光沢のある赤い付着物が点状に残る。

13は打製石斧である。灰色で均質な砂岩起源のホルンフェルス製である。遺物集中域ではなく、遺跡西側の台地縁辺から出土した。偏平な長楕円礫を素材とし、片側縁に加工が施されている。上部が折れた後も側縁から再調整される。



第111図 繩文時代の出土石器（3）

14は、黄灰色と灰色が縞状の文様を成すホルンフェルス製の礫石斧である。遺跡西方の台地縁近くから出土した。厚みのない偏平礫を利用したもので、下方からの剥離2面がみられる。器面の中ほどに斜めに2条、ほぼ平行に浅い溝状痕が並んでいる。

15は磨石である。厚みのある砂岩の楕円礫で、平坦面には2か所、礫面が削れた部分があるが、器形の凹みはほとんどない。下部には赤色の液体に浸されたような変色痕がみられる。磁性はない。

16～18は砂岩製の敲石である。16は幅と厚みがほぼ同じ、小型の円柱状礫が利用されている。自然面は褐灰色だが、下端部敲打痕は灰白色である。17の下端部には黒色付着物がみられる。磁性はない。18は、全体が赤化し、礫面には剥落が目立つ。接合した4片は台地の縁に点在していた。砂岩であるが21同様、赤化部分には磁性があり、焼けていない部位に磁性はない。敲き痕の有無には影響されず、被熱によって磁性が生じると推測される。赤化、磁性を持つ部分をスクリーントーンで示した。

19～22は礫である。明確な使用痕や加工痕は観察できなかったが、当遺跡で特徴的な4点を図化した。19は薄い黄褐色の砂岩である。明確な敲打痕や擦痕はないが、左側面下部は平坦で滑らか、微光沢がある。磁性はない。20の平面は円形、断面は楕円形状の砂岩である。平坦面は平滑であるが、側縁は弱い敲打痕のようなものが廻る。21は偏平な砂岩の長楕円礫である。自然面は赤化して、所々剥落する。被熱により剥がれたものか。18同様、赤化部分に磁性が生じている。22はチャートの礫片が2点接合した。22aは22bよりも黒みが強く、折れたのちに被熱した可能性がある。

第34表 繩文時代石器組成表

石 材 / 器 様	尖頭器	石器	楔形石器	骨角制器	石片	石核	打制石斧	磨製石斧	磨石	研石斧	礫石	礫片	石棒・石剣	軽石・製品	不明	点数	点数比	重量(g)	重量比	
ガラス質黑色安山岩	0	2	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	3.16%	41.87	0.71%	
トロトロ口石	0	0	0	0	0	(1)	0	0	0	0	0	0	3	0	0	4	3.80%	75.36	1.27%	
安 山 岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5(7)	0	0	0	5	4.43%	267.11	45.1%
真 級 岩	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	5(23)	0	0	0	29	20.25%	895.56	15.14%
石 英 斧 岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	4	2.53%	521.14	8.81%	
馬 壇 石	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	12.7%	2.86	0.05%	
黑 壇 石 泥灰岩質砂岩	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.63%	1.45	0.02%	
浮 岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0.63%	28.77	0.40%	
閃 錫 岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	12.7%	103.98	1.76%	
綠 色 灰 岩	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2	12.7%	201.59	3.41%	
基 皮 岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0.63%	21.30	0.36%	
礫 砂 岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0.63%	86.35	1.46%	
砂 岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6(18)	0	0	6	19.20%	191.10	33.32%	
泥 岩	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	3	0	0	4	2.53%	42.47	0.72%	
青 岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	12.7%	29.62	0.50%	
珪 貨 砂 岩	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.63%	4.95	0.08%	
珪 貨 硅 岩	0	1	0	0	3	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	5	3.16%	75.06	1.27%	
粘 板 岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	0	0	0	6	3.80%	66.91	1.13%	
ホルンフェルス	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1	5	0	0	8	5.06%	683.46	11.55%	
綠 泥 片 岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	2	12.7%	251.72	4.25%	
角 破 片 岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0.63%	1.42	0.02%	
チ ャ ト	0	1	1	1	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	24	17.72%	448.53	7.60%	
玉 鋸	0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1.90%	11.24	0.19%	
不 明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.63%	81.36	1.36%	
各 計	1	7	1	1	16	1	1	1	3	1	20	86	1	1	1	143(58)	100.00%	5916.22	100.00%	

() は出土点数

第4章 古墳時代・古代

第1節 概要（第4図、第35・36表）

泉北側第2遺跡（II）では、古墳時代前期に属する住居跡8軒と奈良・平安時代の藏骨器を伴う土坑1基が検出された。このうち、古墳時代の前期に属する住居跡群については昭和57・58年度調査区では70軒が見つかっており、今回の報告分を併せると計78軒となる。一部弥生時代に遡る可能性のある遺構も数軒みられるが、その他は古墳時代前期初めに属し、重複例や近接例が少ないとから比較的短期間に営まれた集落と推測される。

なお、既述したように調査は多年度にわたっており、かつ調査地点も分散しているが、古墳時代の遺構は北西部にまとまっているのに加え、年度を越えた通し番号で振られていることから、遺構番号順に記載することとする。また、住居跡一覧表（第35表）、出土土器観察表（第36表）は章末に掲載した。

第2節 遺構と遺物

106号住居跡（第112図、図版6）

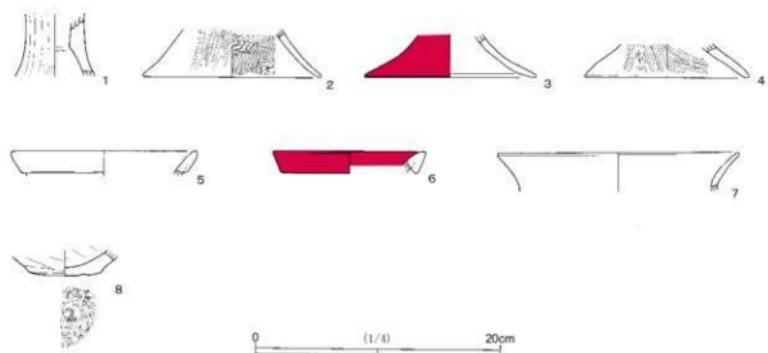
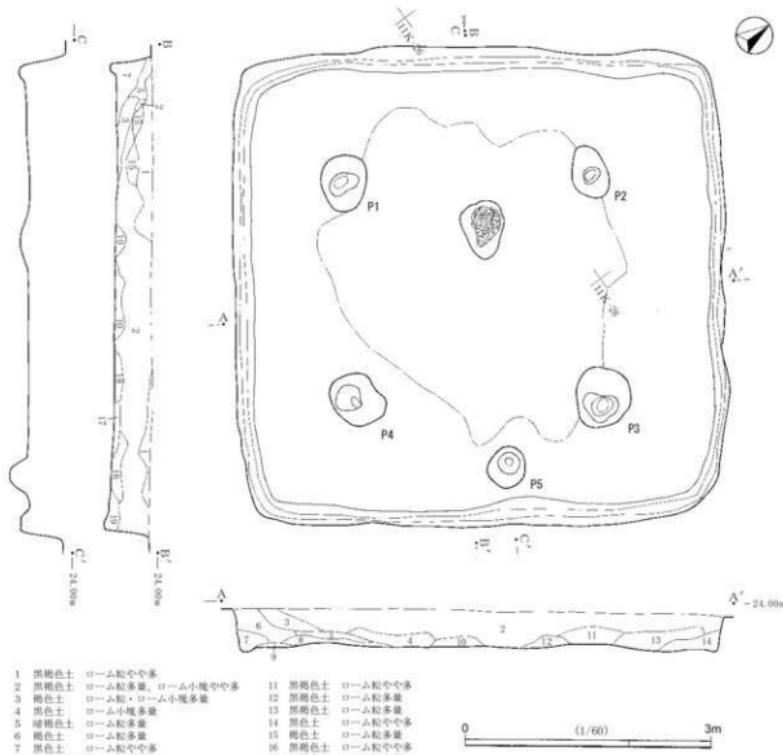
11K-27・28付近に位置し、主軸方位を北西にとる。形状は多少横長の隅丸方形であり、規模は長径6.00m、短径5.85mである。炉は中央北寄りに位置する。柱穴は4本確認され、各々対応する位置にある。南東壁際のピットは出入口に伴う梯子穴と思われる。住居床面には4本の柱穴を結ぶように硬化面が確認された。生活に伴う踏みしめ面と考えられる。覆土は凹レンズ状の堆積を示し、壁際から底面が褐色土、その他は黒褐色～暗褐色土である。全体に径1cm弱のロームブロックを多く含むという特徴がある。

出土遺物は土師器で占められるが、何れも小片を復元・図示した。1は高環脚部、2～4も高環脚部で末広がりの形状をなす。5・6は二重口縁の壺口縁部、7はくの字状口縁の壺口縁部である。8は甕底部であり、底面には木葉痕がみられる。

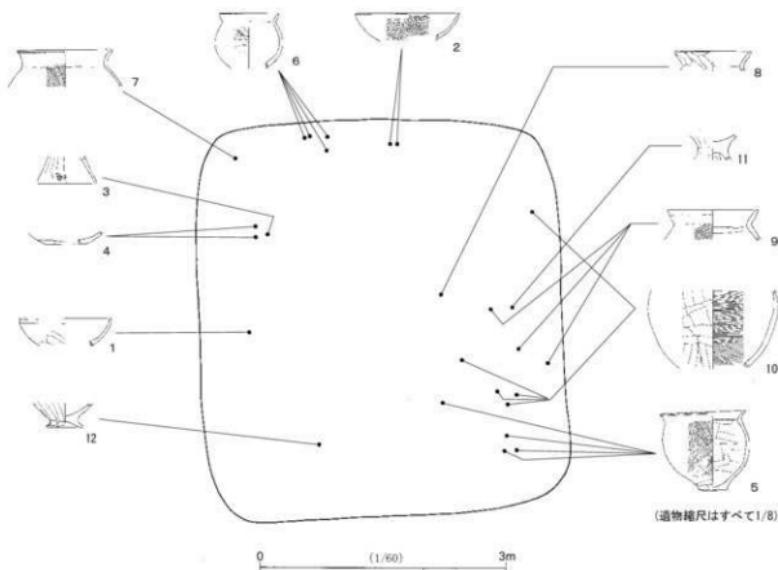
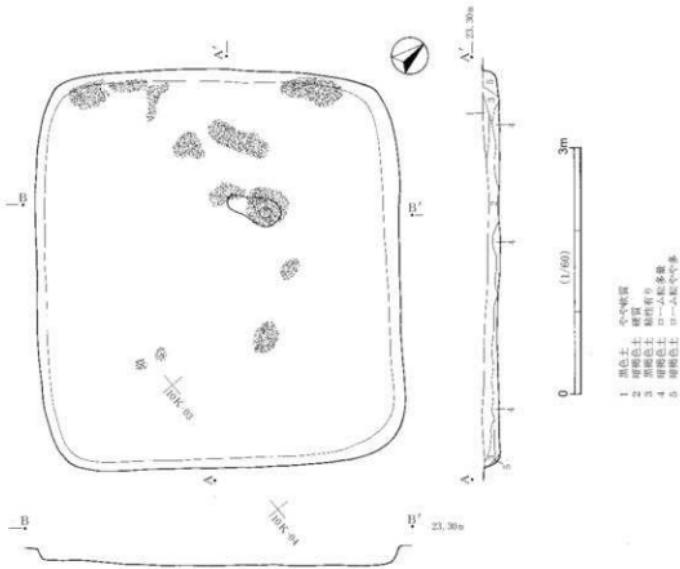
110号住居跡（第113・114図、図版6・27）

9J-93に位置し、主軸方位を北西にとる。形状は多少縦長の隅丸方形であり、規模は長径4.75m、短径4.30mである。炉は中央北寄りに位置する。柱穴また出入口に関係するピットは確認出来なかった。住居床面の硬軟の区別は不明瞭であった。覆土は凹レンズ状の堆積を示し、壁際から底面にかけて部分的に焼土の堆積が認められ、その上を黒色土次いで暗褐色土が覆っていた。遺物は北東壁寄りに集中個所がみられ、火災住居の産みに土器が投棄されたものと思われる。

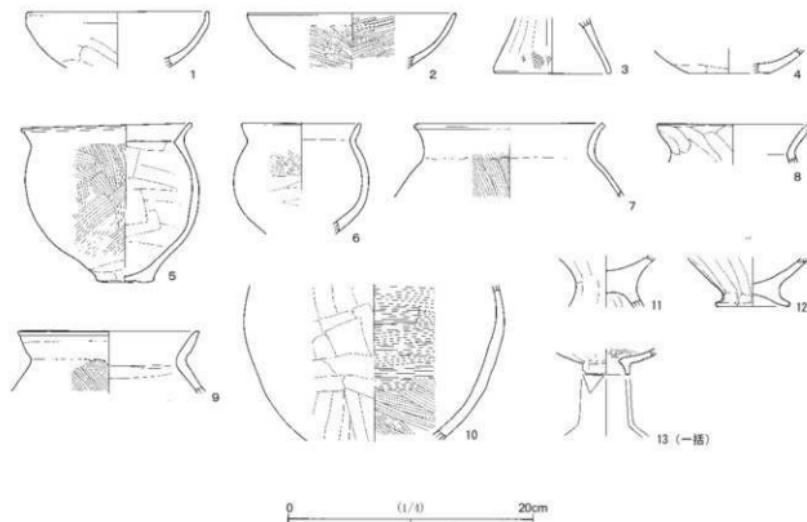
出土遺物は土師器で占められ、5を除いては破片を復元・図示した。1～3は高環であり、この内、1・2は環部、3は脚部である。4～9は甕で、4の底部片以外は口縁部が遺存する。5～7はくの字状口縁で、刷毛目調整の小型甕である。8も小型甕で、口縁端部には強いナデによって面が作り出されている。10は壺胴部、11・12は台付甕脚部である。13は器台の受部から脚接合部にかけての破片で、脚部に三角形ないし方形の透し孔が認められる。



第112図 106号住居跡及び出土遺物



第113図 110号住居跡及び遺物出土状況



第114図 110号住居跡出土遺物

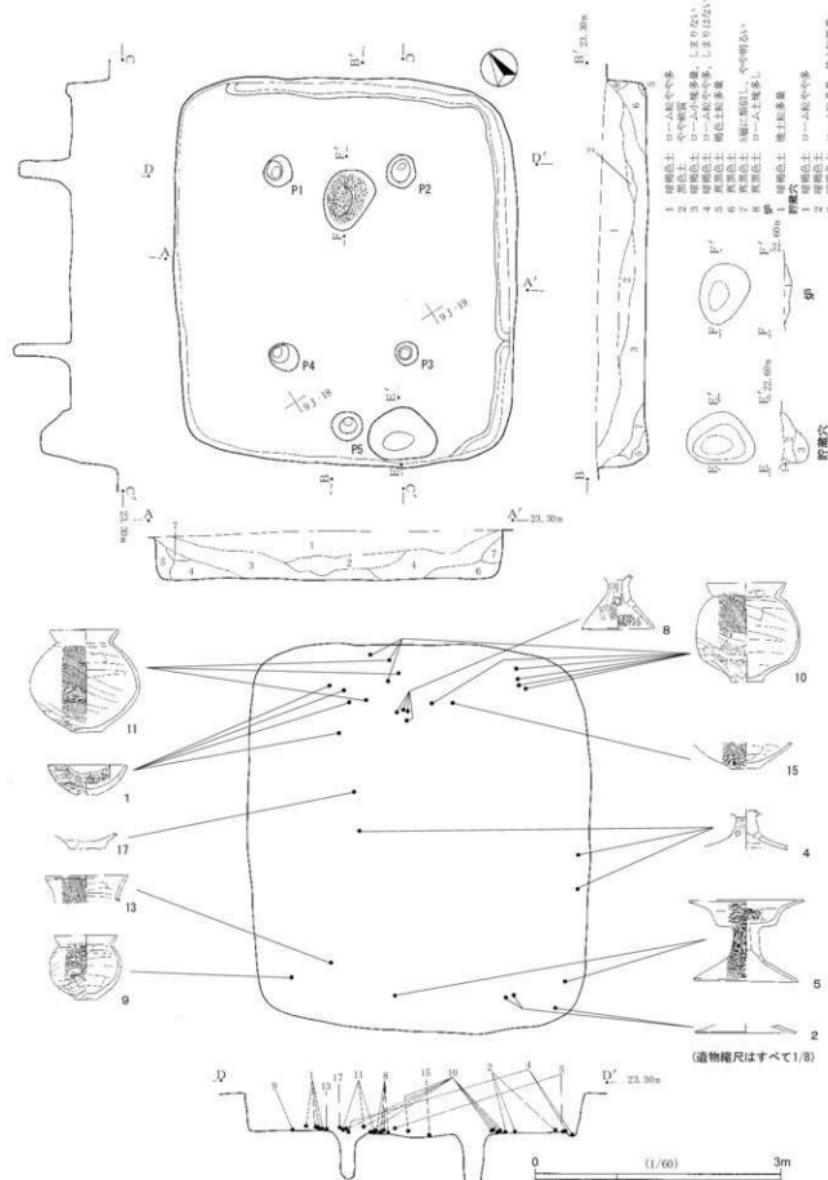
111号住居跡（第115・116図、図版6・27）

9 J-08に位置し、主軸方位を北東にとる。形状は多少縦長の隅丸方形であり、規模は長径4.7m、短径4.2mである。炉は中央北東寄りに位置する。柱穴は4本確認されたが、向かって左右が内側に寄っている特徴がある。南西壁際のピットは出入口に伴う梯子穴と思われ、その右手に隣接して貯蔵穴がある。住居床面はとりたてて硬化面は確認されなかった。覆土は凹レンズ状の堆積を示しており、下から黒色土、暗褐色土、黒色土、暗褐色土という堆積順序であった。遺物は多く廐屋窪地の中位、黒色土層中に散乱するかたちで出土した。完形品は限られていることから、その多くは廐屋に投棄された結果であろう。

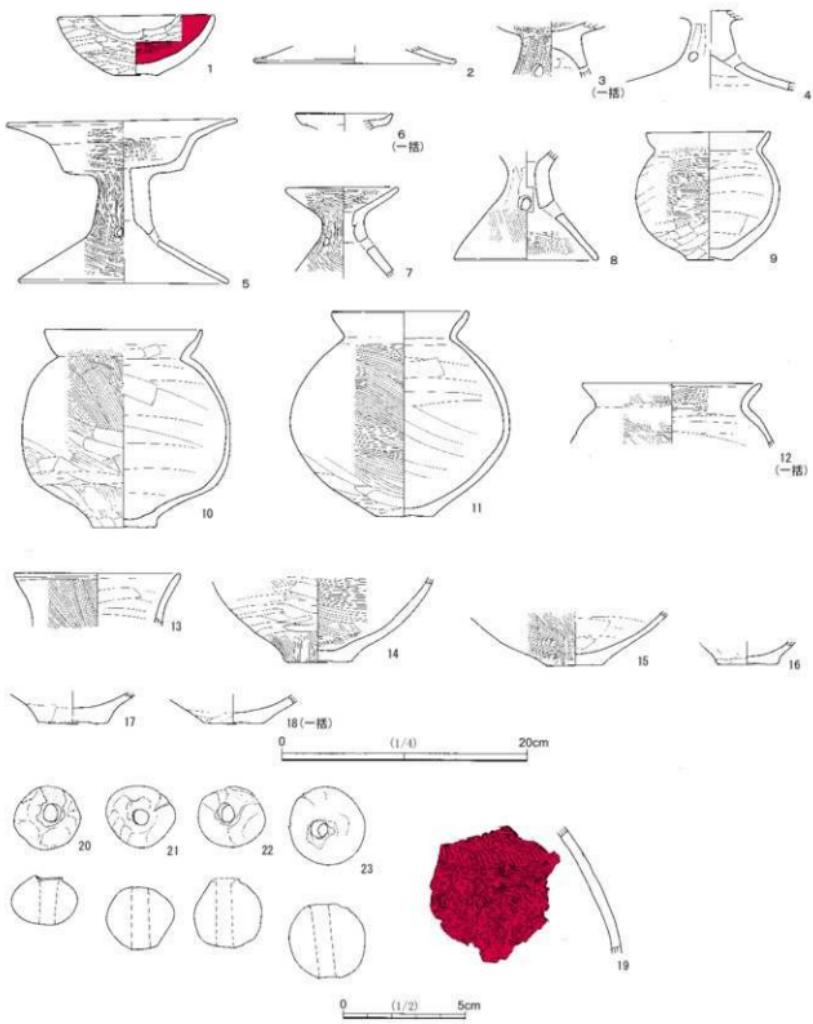
出土遺物は土師器、土玉である。1・5・9が完形ないしほば完形であった。1は小型で厚手の鉢で、内外面へラミガキした後、丹塗りしたようで、僅かに付着面がみられる。2～4は高環脚部で、2・4は掘が大きく聞く形状である。5は壺結合器台で、脚部中央に孔を有する。6～8は小型器台であるが、この内6は受口状の口線をなすものである。9は小型、10・11は中型の刷毛調整甕であり、何れも口線部が僅かに受口状となる。12はくの字状口線刷毛調整甕である。13は広口の壺と思われる。14・15は刷毛調整甕底部、16～18はヘラナデ調整甕底部である。19は櫛描文をもつ裝飾壺胴部上位片であろう。20～23は土玉であり、20は横長、21以降は縦長である。

112号住居跡（第117・118図、図版6・28）

11 J-30～31に位置し、主軸方位を北東にとる。形状は多少縦長の隅丸方形であり、規模は長径6.35m、短径5.80mである。炉は中央北東寄りに位置する。柱穴は4本、対応する位置に確認され、何れも径が狭



第115図 111号住居跡及び遺物出土状況



第116图 111号住居跡出土遺物

いという特徴がある。南西壁際中央には主軸に並行して根太痕らしき溝が走り、その右手にビットがある。ビットはその径や深さ（床面から16cm）、前面に硬化面があることから、出入口に伴う梯子穴と思われる。住居床面は部分的に硬化面が見られたが、壁際に認められるなど他と違った様子を示している。覆土は約20cm程度遺存するのみながら、床面中央～南東にかけて焼土の堆積がみられた。火災住居と考えられる。遺物はこの焼土層から出土した群（2・3・6・8・11・12・19）とそれより上位層から出土した群があるが、後者にしても接合関係からすると、それほどの時期的な差はないものと思われる。何れにせよ、その総てが破損品ないし破片であることからして、焼失後の廃屋に不要品を投棄した結果かと推測される。

遺物はすべて土器である。1・2は高環壺部、3・4は器台壺部、5は器台脚部である。この内、4の器台は厚手かつ平口縁の特色ある器台である。6は口縁部が直立する特徴的な壺で、7は有段口縁の甕で、ともにいわゆる北陸系土器に類似する。8は折返口縁の大型鉢あるいは高壺の口縁部である。9は小型の無頸壺と思われる。10は弥生土器の系譜を引く波状口縁甕口縁部である。11～16はくの字状口縁甕の口縁から胴部であり、このうち15は明瞭な刷毛調整がみられる。なお、16は対応する胴部らしき個体が存在する。17・18は甕底部である。19は上部を欠くが、ミニチュア土器と思われる。

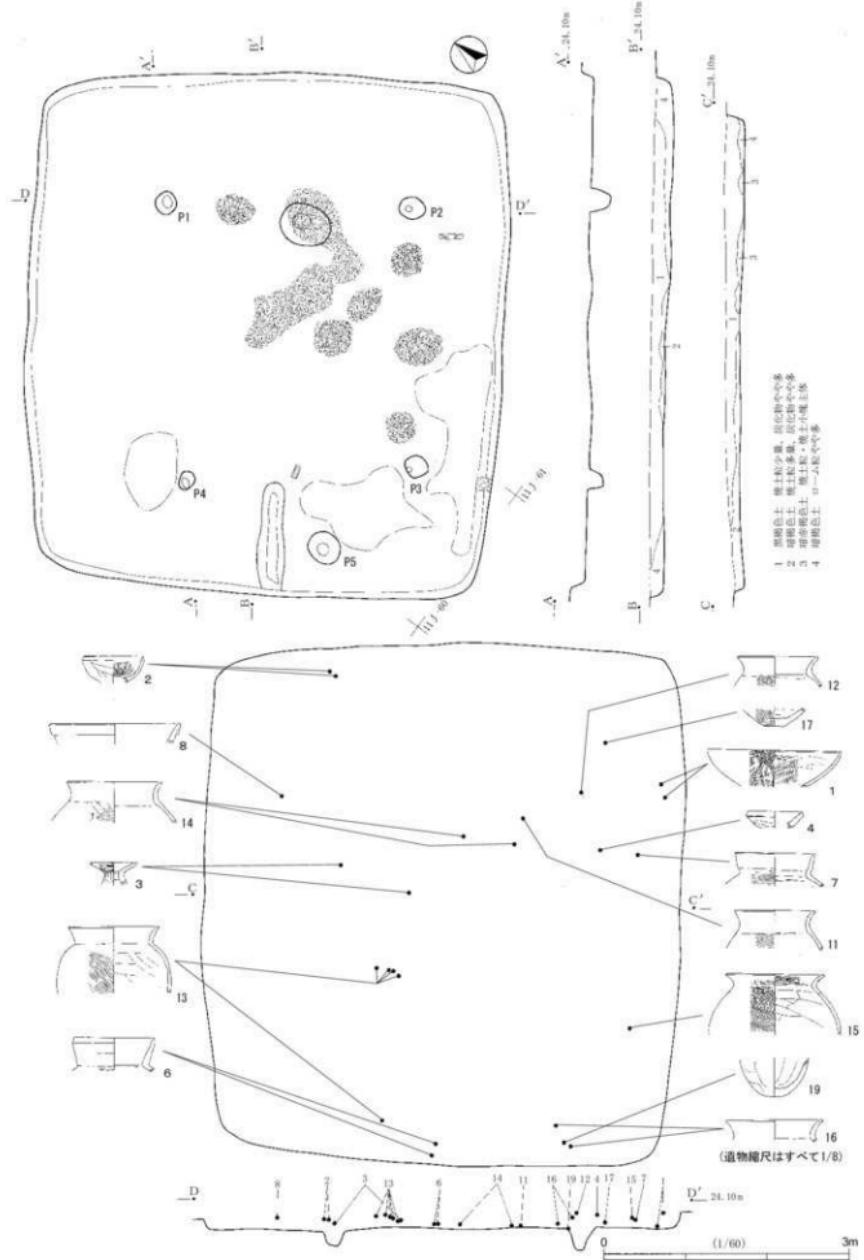
117号住居跡（第119・120図、図版6・7・28）

14K-01に位置し、主軸方位を北北西にとる。形状は隅丸方形であり、規模は長径4.50m、短径4.30mである。炉は中央北東寄りに位置する。柱穴は確認されなかった。南西壁寄り中央のビットは出入口に伴う梯子穴と思われ、その右手コーナー寄りに貯蔵穴がある。住居床面はこの出入口ビットから炉を含む住居中央部一帯に広く硬化面が確認された。覆土は凹レンズ状の堆積を示し、暗褐色ないし黒褐色の土層（厚み約20cm）からなる。遺物は炉内から高環壺部（3）、壺胴部中位以下（11）、口縁部を欠く甕（12）が近接して遺存したほかに、住居中央部や南壁・東壁際でも床面レベルから出土（1・6・10）しており、これらが廃棄時に伴う所産といえる。その他は覆土中位から上位より出土した。

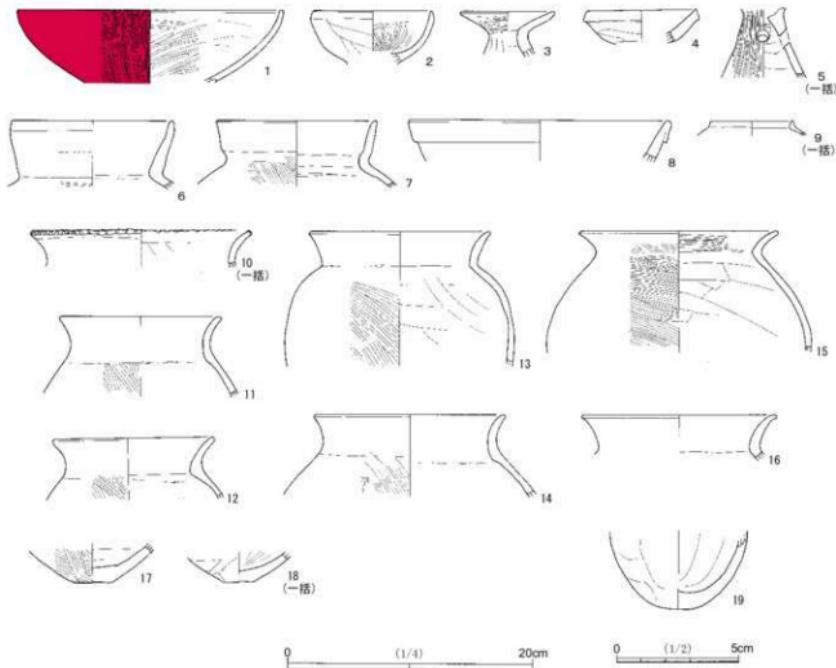
出土遺物は土器と石製品である。1～3は大小の高環壺部、4は同脚部、5～7は小型鉢の口縁部から胴部の破片である。8は同一個体と思われる折返口縁の壺である。9は口縁が直に開く折返口縁の壺である。10は瓢形になろうかと思われる壺頭部である。11・12はそれぞれ壺と甕胴部以下の完形品である。なお、12は外面刷毛調整でかつ底面に木葉痕がみられる。13は壺底部、14は甕口縁部である。15は軽石製の砥石である。淡い灰白色で、大小の気泡がくまなく入るが、表面の感触は滑らかで丸みを帯びる。7mmに達する深い溝は2面で確認できる。直徑5mm程の穴は1面にのみ顯著であり、垂直方向に5か所、斜め方向に2か所みられる。管状の工具による刺突痕であろう。

118号住居跡（第121図、図版7）

13K-42～51に位置し、主軸方位を北西にとる。形状は多少歪な隅丸方形であり、規模は長径4.85m、短径4.55mである。炉は中央北西寄りに位置する。柱穴は確認されなかったが、北東および南東壁寄りに深さ30cm前後のビットがあり、あるいは柱穴として用いられた可能性もある。また、南東壁寄りには径60cm×40cm程の高まりが認められ、ビットは付随しないもののそこから硬化面が始まっていることなど、出入口に伴う施設の可能性が高い。住居床面はこの高まりから中央部に広く硬化面が確認された。覆土は底面に暗褐色土が薄くのっているほかは黒色土層で占められ、遺物が少ないと自然堆積の様相を



第117図 112号住居跡及び遺物出土状況



第118図 112号住居跡出土遺物

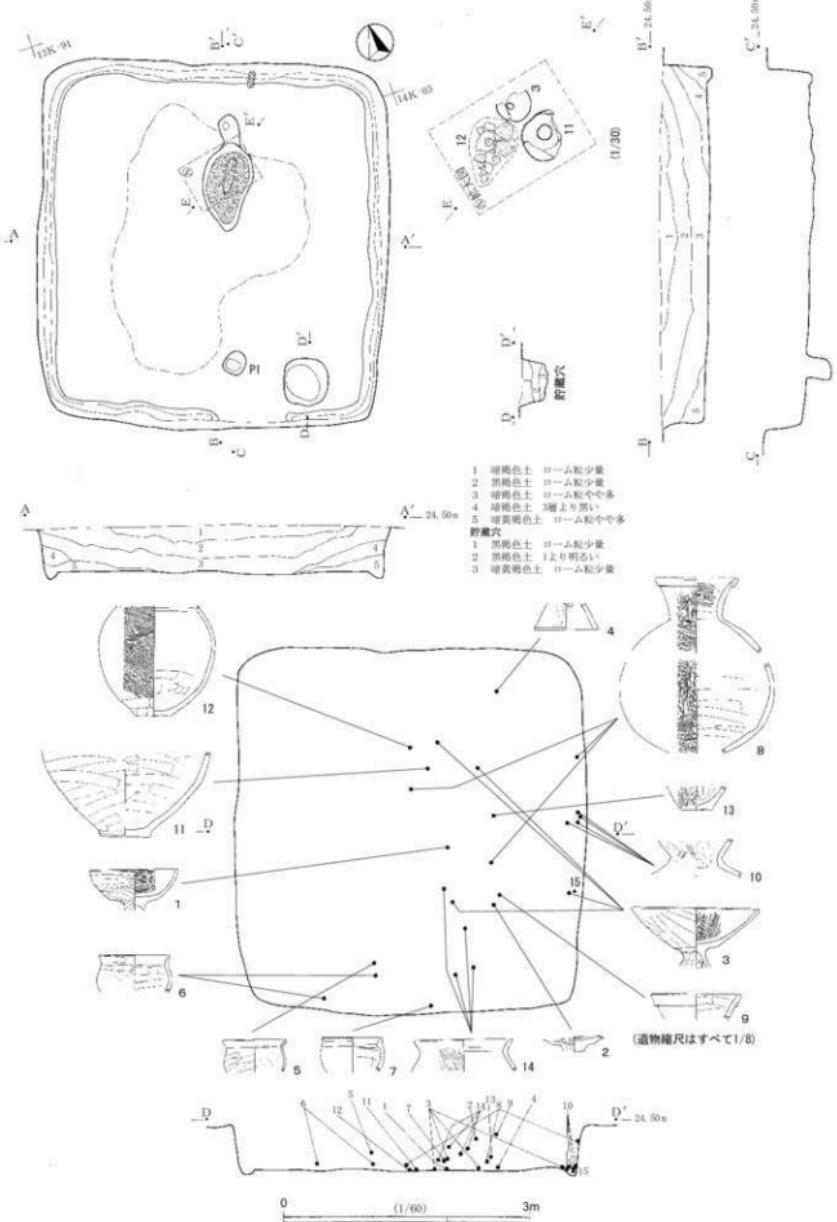
示していると思われる。遺物は覆土中上下にわたって散在するかたちで出土した。

出土遺物は土師器であり、すべて破片を復元・図示した。1は高環脚部、2は甕底部である。

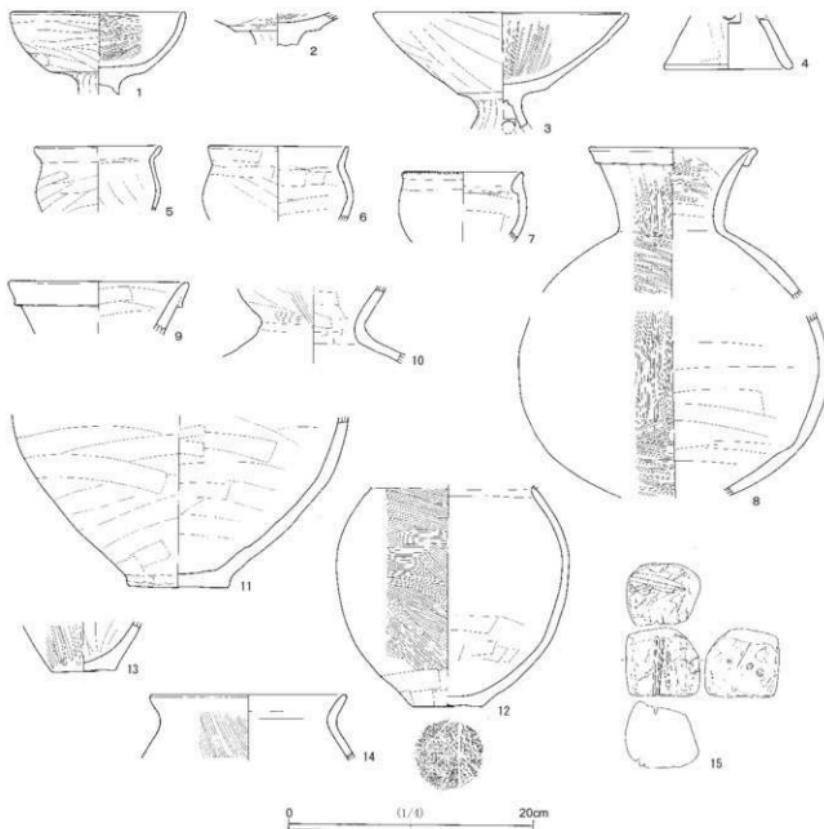
119号住居跡（第122・123図、図版7・28）

13J-10に位置し、主軸方位を北西にとる。形状は多少歪な隅丸方形であり、規模は長径4.20m、短径4.05mである。炉は中央北西寄りに位置する。柱穴は確認されなかったが、北東壁寄りに深さ25cmのピットがあり、柱穴の可能性がある。南東壁寄り中央には80cm×65cm程の高まり（高さ約5cm）が認められ、その片隅に深さ45cmのピットが存在する。出入口に伴う梯子穴と思われる。住居床面はこの高まりから炉を含む中央部に広く硬化面が確認された。覆土は凹レンズ状の堆積を示し、ロームブロックを含む下層の黄褐色土と暗褐色を呈する中・上層からなる。遺物は量的には散在する状況であり、床面5cm～10cmの間（黄褐色土層上面）でまとめて出土した。

出土遺物は土師器である。1は器台、2は丹塗りの器台脚部である。3・4は直口縁の壺のそれぞれ口



第119図 117号住居跡及び遺物出土状況

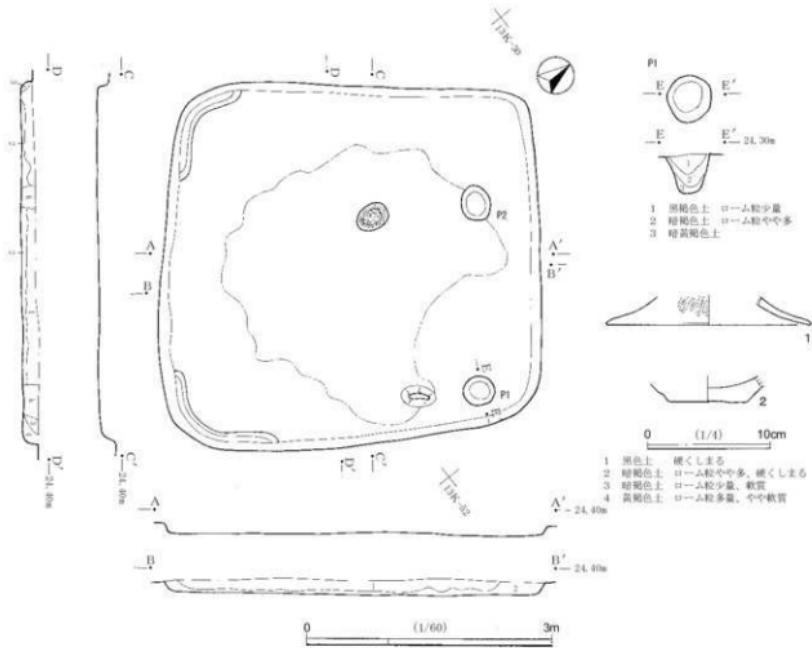


第120図 117号住居跡出土遺物

縁部と胴部であろう。6は瓢形壺で、同一個体とおもわれる口縁部と胴部下位を図示した。7も同様に、くの字状台付甕口縁部と底部を図示した。5・8はくの字状甕口縁部であり、5は刷毛目調整、8は丁寧なヘラナデ調整がみられる。なお、8は胎土に黄灰色のスコリアを多く含む。9は台付甕底部で、同様なスコリアを多く含む。10は甕底部である。

120号住居跡 (第124・125図、図版7・29)

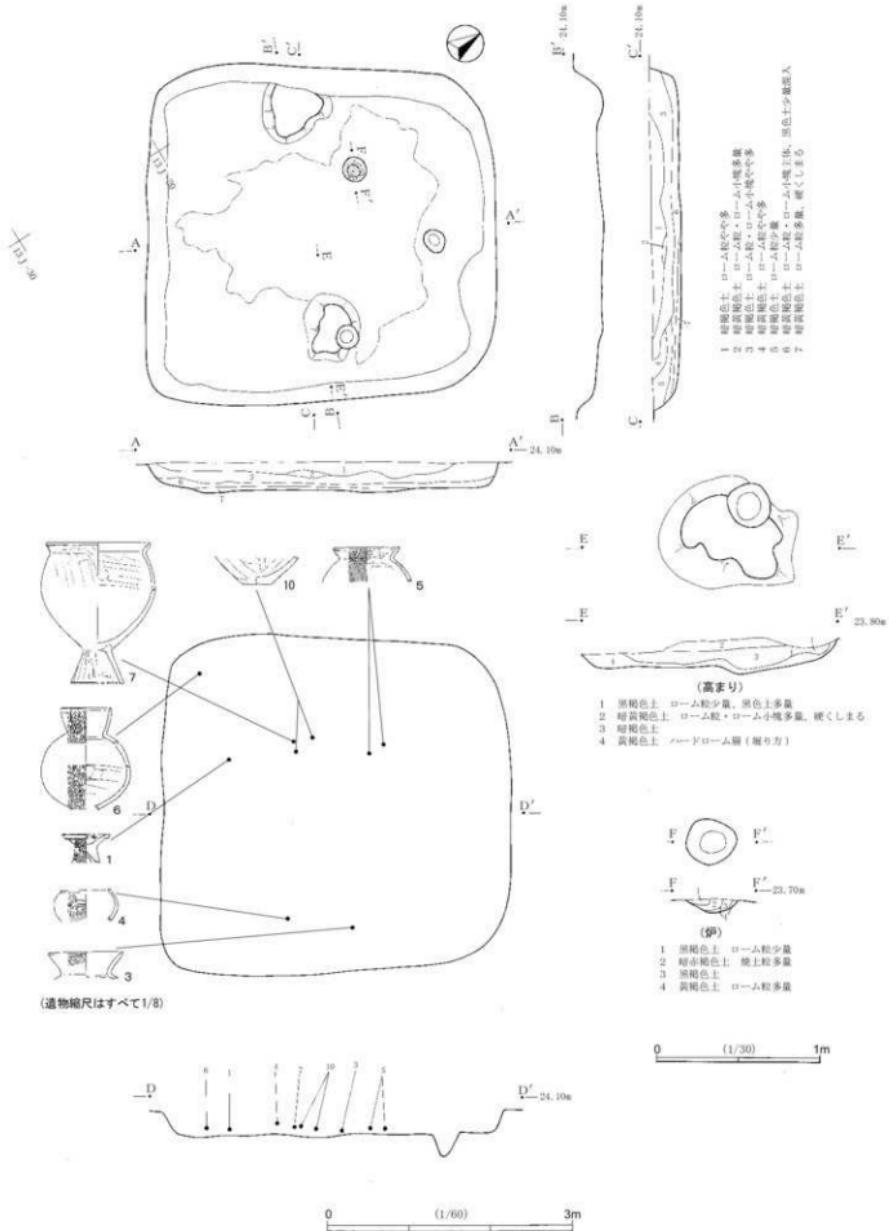
16J-81に位置し、主軸方位を北東とする。形状は方形であり、規模は長径4.9m、短径4.5mである。



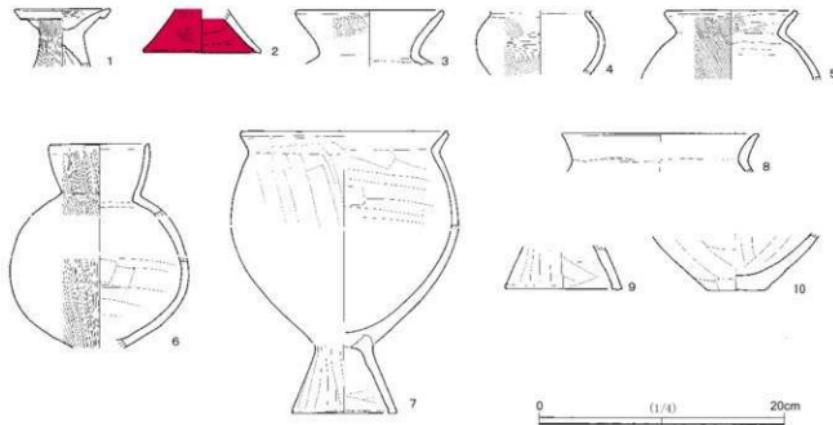
第121図 118号住居跡及び出土遺物

炉は中央北東寄りに位置する。柱穴は確認されなかった。また、出入口に伴うピットや貯蔵穴も同様である。住居床面はとりたてて硬化面らしき範囲は確認出来なかつた。覆土は壁寄りを除きほぼ水平堆積で、下位から暗褐色土次いで黒褐色土へ推移する。完形から半個体の遺物の多くが住居南西の床面から出土した一方、破片は覆土中で、かつ散在することなど、住居廃絶後は自然堆積の過程を辿ったと思われる。

出土遺物は土師器であり、報告したうち、8・9を除いては完形ないし完形に近い個体であった。1は高环坏部完形品であり、対応する脚部が見あたらないことなど、あるいは意図的な欠損かもしれない。2は弥生時代の系譜を引く折返口縁壺であり、口縁下端には繩文原体の押捺が巡る。3以降は甕である。3～6はくの字状口縁甕で、外面は3がヘラナダ調整、4～6は刷毛調整による。なお、4は胎土が灰黄色であり、他の甕とは際立った違いをみせている。また、6の脚部上位の円孔は焼成後の意図的な穿孔である。7は算盤形の脚部を有する甕、8は直立口縁に近い広口の甕である。9は底部である。



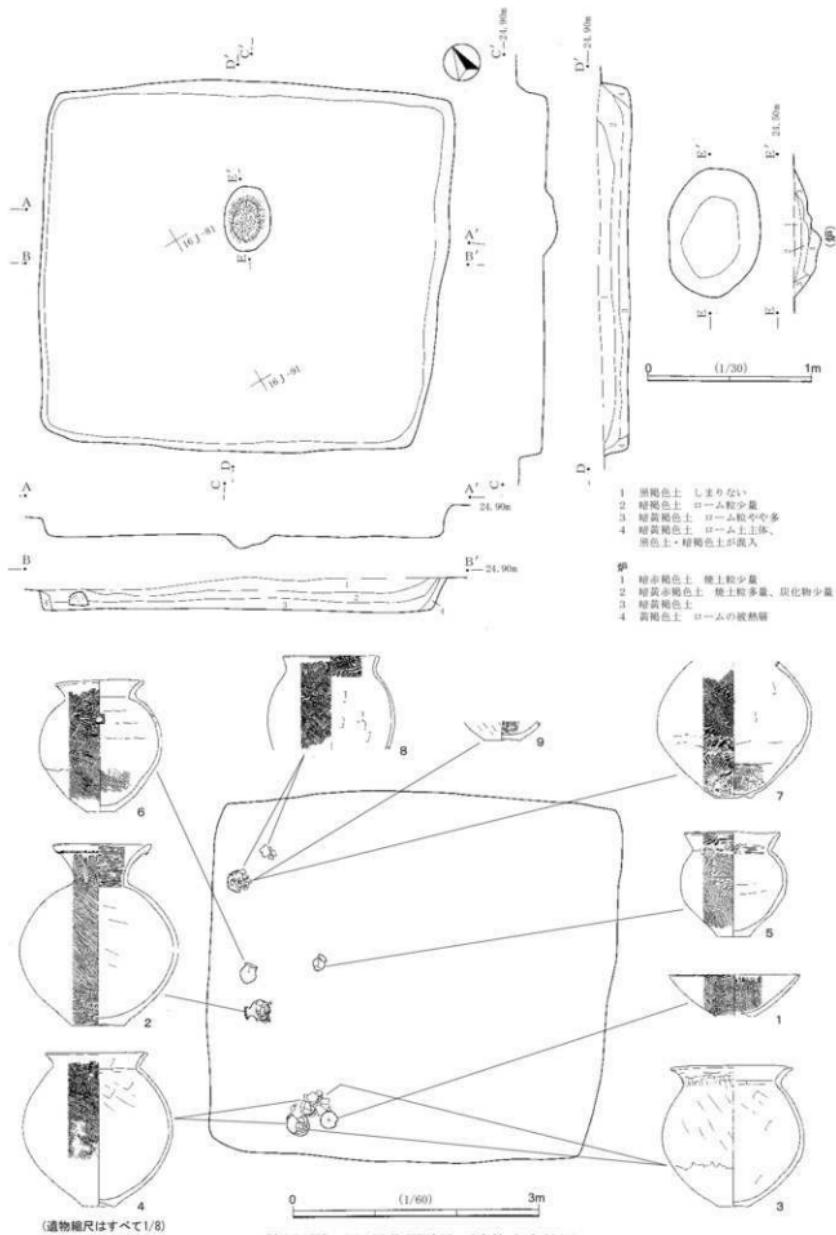
第122図 119号住居跡及び遺物出土状況



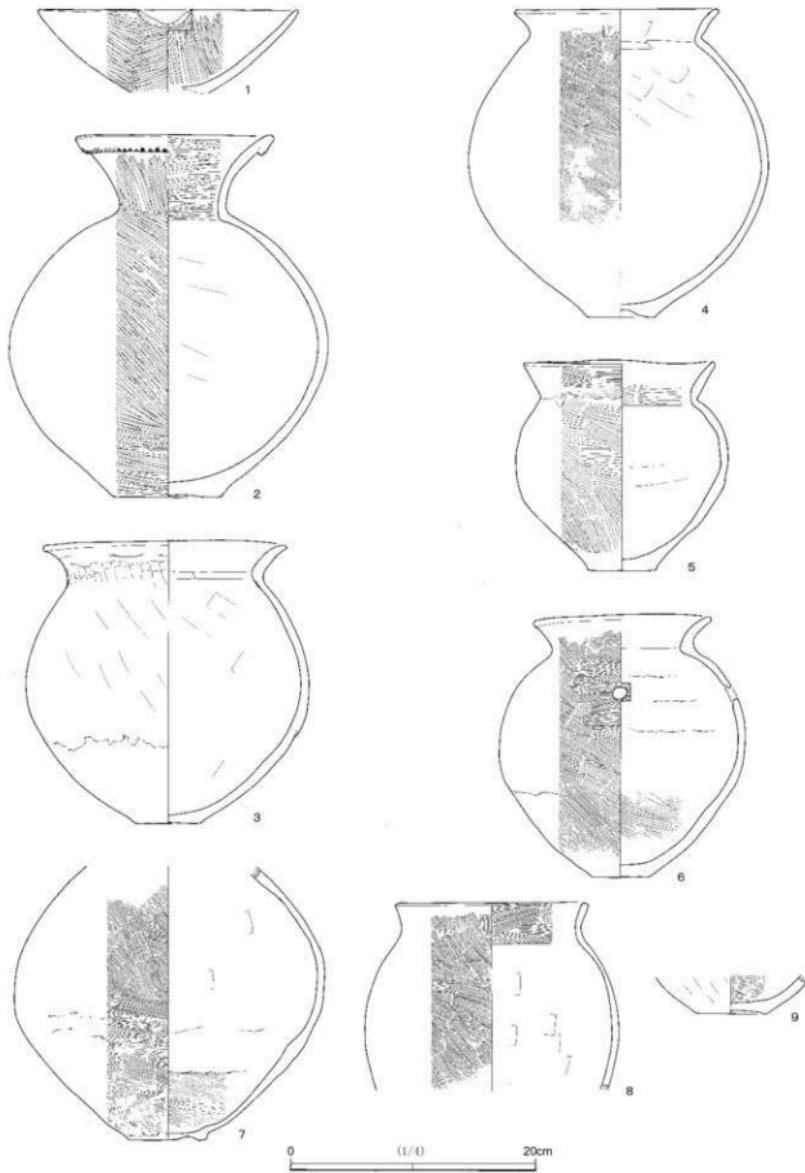
第123図 119号住居跡出土遺物

第35表 古墳時代竪穴住居跡一覧表

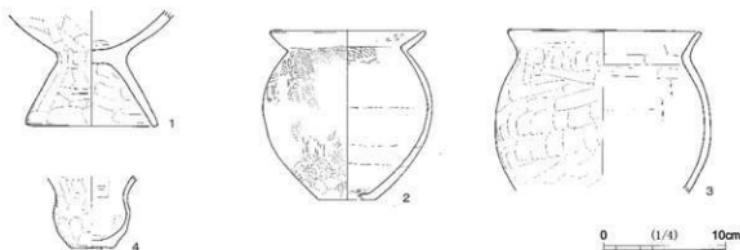
遺構No.	神社	図版	時期	平面形	規模(m)		主軸方位 〔度〕	壁 [cm]	柱穴深 [cm]	燃焼施設	貯藏穴(cm)	グリッド	出土遺物
					長×幅×深	形状							
106号 住居跡	112	6	前期	隅丸 方形	5.9×6.0×0.4	N-54-W	直	P1-81 P2-51 P3-64 P4-61	中央N 構内	炉	—	11K-27	高杯1, 壺2, 壺2
110号 住居跡	113	6	前期	隅丸 方形	4.7×4.3×0.4	N-55-W	緩	—	中央N 構内	炉	—	9J-98	高杯3, 壺1, 壺6, 台付壺2, 不明1
111号 住居跡	115	6	前期	隅丸 方形	4.7×4.2×0.4	N-30-E	直	P1-55 P2-61 P3-68 P4-69	中央N 構内	椭円 出入口右脇 83×65×32	9J-08	环1, 高杯4, 器台3, 壺1, 壺12, 土玉4	
112号 住居跡	117	6	前期	隅丸 方形	6.3×5.8×0.3	N-55-E	緩	P1-18 P2-26 P3-23 P4-23	中央N 構内	炉	—	11J-30	高杯1, 器台4, 壺4, 壺9, 壺3, 壺1
117号 住居跡	119	7	前期	隅丸 方形	4.5×4.3×0.6	N-22-E	直	—	中央NE 構内	方 出入口右脇 60×55×20	14K-01	高杯4, 壺3, 壺5, 壺3	
118号 住居跡	121	7	前期	隅丸 方形	4.8×4.5×0.2	N-55-W	緩	P1-18 P2-5	中央NW 構内	炉	—	13K-42	高杯1, 壺1
119号 住居跡	122	7	前期	隅丸 方形	4.2×4.0×0.4	N-56-W	緩	P1-25 P2-46	中央NW 構内	炉	—	13J-10	器台2, 壺2, 壺4, 台付壺2
120号 住居跡	124	7	前期	方形	4.9×4.5×0.4	N-35-E	直	—	中央NE 構内	炉	—	16J-81	高杯1, 壺1, 壺7



第124図 120号住居跡及び遺物出土状況



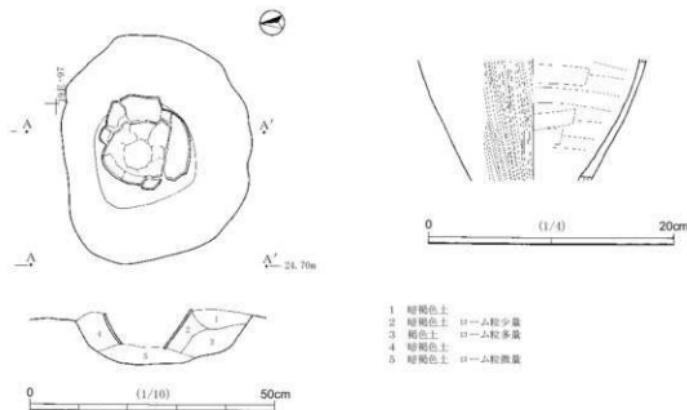
第125图 120号住居跡出土遺物



第126図 遺構外出土遺物

113号土坑 (第127図、図版7・29)

調査区南西端の19E-97に位置する。奈良・平安期の藏骨器を伴う土坑である。径約40cm、深さ10cmながら、確認面自体が下がっていることから、本来はもう少し大きな土坑とみてよい。土器は坑底に暗褐色土を均した後、据えたものと考えられる。底部を欠いており、上部は耕作等で消滅したものと思われる。僅かに遺存した胸部は薄手で、内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後、ミガキが施されている。時期等は明確でないが、常縦型の壺であろう。



第127図 113号土坑及び出土遺物

第36表 出土器物観察表(1)

()現存・復元値

検査番号	遺構	器質	器種	遺存 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	最大径 (cm)	色調 [内/外]	胎土	調製 [内/外]	備考	〔出土状況〕
112-1	106号 住居跡	土師	高坪	5	-	-	(5.1)	-	に赤い黄緑 白色粒子	ヘラツテ/ナツテ ヘラツテ/ナツテ	高坪脚部, 既成は良好, 内外面ともに煤付着 〔床面〕		
112-2	106号 住居跡	土師	高坪	5	-	(14.1)	(3.9)	-	に赤い赤褐色	ヘラツテ/ナツテ ヘラツテ/ナツテ	高坪脚部, 内外面ともに部分的に煤付着 〔床面〕		
112-3	106号 住居跡	土師	高坪	5	-	(14.1)	(3.6)	-	に赤い黄緑	ヘラツテ/ナツテ ヘラツテ/ナツテ	高坪脚部, 内外面ともに部分的に煤付着 〔床面〕		
112-4	106号 住居跡	土師	高坪	5	-	(13.5)	(2.7)	-	に赤い橙	黒色・赤色・ 白色粒子 黒色多	18%/(18%) 18%/(18%)	高坪脚部, 内外面ともに部分的に煤付着 〔一括〕	
112-5	106号 住居跡	土師	壺	5	(15.2)	-	(2.1)	-	に赤い黄緑	黒色・赤色粒子 黒色多	ナツテ/ナツテ ナツテ/ナツテ	複合口縁の壺口縁部, 内外面ともに若干摩耗 〔一括〕	
112-6	106号 住居跡	土師	壺	5	(12.4)	-	(1.3)	-	に赤い橙	赤色粒子 多	ナツテ/ナツテ ナツテ/ナツテ	複合口縁の壺口縁部, 内外面ともに赤彩あり 〔一括〕	
112-7	106号 住居跡	土師	壺	5	(19.5)	-	(3.2)	-	に赤い黄緑	黒色・赤色・ 白色粒子 黒色多	ナツテ/ナツテ ナツテ/ナツテ	壺の口縁部, 内外面ともに部分的に煤付着 〔一括〕	
112-8	106号 住居跡	土師	壺	5	-	(6.0)	(1.9)	-	明褐色	白色・透明 砂粒 多	ヘラツテ/ナツテ ヘラツテ/ナツテ	壺の底面, 内外面無釉あり〔一括〕	
114-1	110号 住居跡	土師	高坪	5	(14.7)	-	(4.2)	-	に赤い橙	白色砂粒 多	ナツテ/ナツテ ナツテ/ナツテ	高坪の外周, 既成は良好, 内外面ともに部分的に煤付着〔床面〕	
114-2	110号 住居跡	土師	高坪	5	(16.9)	-	(4.5)	-	明褐色	白色砂粒 多	18%/(ナツテ) 18%/(ナツテ)	高坪の外周, 既成は良好, 内外面部分的に煤付着〔床面〕	
114-3	110号 住居跡	土師	高坪	5	-	(11.3)	(4.6)	-	壺	赤色・白色 粒子・白色 砂粒 多	ナツテ/ナツテ ナツテ/ナツテ	壺の脚部, 既成は良好, 内外面部分的に煤付着〔床面〕	
114-4	110号 住居跡	土師	壺	5	-	(6.6)	(2.1)	-	壺	赤色・白色 粒子 多	ヘラツテ/ナツテ ヘラツテ/ナツテ	小型壺の底部, 既成は良好, 内外面二次被熱による剥落が顕著〔床面〕	
114-5	110号 住居跡	土師	壺	75	13.9	4.7	13.1	脚部	に赤い橙	赤色粒子・ 白色砂粒 多	ヘラツテ/ナツテ ヘラツテ/ナツテ	ロ絞り「U」の字状の小型壺, 既成は良好, 内外面全面に薄く煤付着〔床面〕	
114-6	110号 住居跡	土師	壺	45	(9.7)	-	(9.0)	脚部	に赤い橙	赤色粒子 多	ヘラツテ/ナツテ ヘラツテ/ナツテ	ロ絞り「U」の字状の小型壺で底部は欠損, 既成は良好, 内外面ともに摩擦顯著〔床面〕	
114-7	110号 住居跡	土師	壺	5	(15.1)	-	(6.1)	-	壺	白色・赤色・ 黑色砂粒 多	ナツテ/ナツテ ナツテ/ナツテ	白色・赤色・ 黑色砂粒 多	ロ絞り「U」の字状の小型壺で底部は欠損, 既成は良好, 内外面に輪積痕が残る〔床面〕
114-8	110号 住居跡	土師	壺	5	(12.4)	-	(3.3)	-	に赤い橙	赤色粒子・ 白色砂粒 多	ナツテ/ナツテ ナツテ/ナツテ	小型壺の口縁部, 既成は良好, 外面厚く煤付着〔床面〕	
114-9	110号 住居跡	土師	壺	5	(14.8)	-	(5.1)	-	に赤い黄緑	白色粒子 多	ナツテ/ナツテ ナツテ/ナツテ	小型壺の口縁部, 既成は良好, 外面に輪積痕が残る〔床面〕	
114-10	110号 住居跡	土師	壺	20	-	-	(12.2)	脚部	に赤い黄緑	赤色粒子 多, 白色砂粒 多	18%/(ナツテ) 18%/(ナツテ)	ロ絞り「U」の字状の小型壺, 既成は良好, 内外面ともに部分的に煤付着〔床面〕	
114-11	110号 住居跡	土師	台付 壺	5	-	(4.3)	-	に赤い橙	赤色粒子 多	ナツテ/ナツテ ナツテ/ナツテ	既成は良好, 内外面二次被熱による煤付着〔床面〕		
114-12	110号 住居跡	土師	台付 壺	10	-	(6.1)	(4.0)	-	に赤い橙	白色・透明 砂粒 多	ナツテ/ナツテ ナツテ/ナツテ	既成は良好, 内外面二次被熱による煤付着〔床面〕	
114-13	110号 住居跡	土師	不明	5	-	(3.9)	(2.2)	-	に赤い黄緑	白色砂粒 多	ヘラツテ/ナツテ ヘラツテ/ナツテ	底部に穿孔あり, 既成は良好, 内外面二次被熱による煤付着〔床面〕	
116-1	111号 住居跡	土師	鉢	95	12.5	3.5	4.9	脚部	に赤い黄緑	白色粒子 少 ナツテ/ナツテ ナツテ/ナツテ	ロ絞り「U」の字状に欠く, 内面僅かに丹波の付着面が見られる〔床面〕		
116-2	111号 住居跡	土師	高坪	5	-	(16.6)	(1.4)	-	明褐色	白色粒子 多, 黑色素	ヘラツテ/ナツテ ヘラツテ/ナツテ	瓶が大きく開く高坪の脚部片, 既成は良好, 内外面部分的に煤付着〔床面〕	
116-3	111号 住居跡	土師	高坪	25	-	-	(4.5)	-	に赤い黄緑	赤色粒子 少 ナツテ/ナツテ ナツテ/ナツテ	高坪の外周下端から脚部上端にかけての破片, 脚部には穿孔3箇所あり〔一括〕		
116-4	111号 住居跡	土師	壺	30	-	-	(6.5)	-	壺	白色粒子, 白色砂粒 多	ヘラツテ/ナツテ ヘラツテ/ナツテ	瓶が大きく開く高坪の脚部片, 脚部には穿孔3箇所あり〔床面〕	
116-5	111号 住居跡	土師	壺	89	(18.5)	(17.5)	(13.5)	-	に赤い橙	白色・赤色 粒子・白色砂 粒 多	18%/(ナツテ) 18%/(ナツテ) 18%/(ナツテ)	有段の高坪, 既成は良好, 脚部全面に剥離があり薄く煤付着〔床面〕	
116-6	111号 住居跡	土師	器台	5	(9.7)	-	(1.4)	-	に赤い黄緑	白色粒子, 白色砂粒 多	ナツテ/ナツテ ナツテ/ナツテ	受口狀の口縁部片, 既成は良好, 内外面ともに煤付着〔一括〕	
116-7	111号 住居跡	土師	器台	40	(9.0)	-	(7.5)	-	に赤い黄緑	赤色粒子 ナツテ/ナツテ ナツテ/ナツテ	18%/(ナツテ) 18%/(ナツテ) 18%/(ナツテ)	脚部には穿孔3箇所あり〔不明〕	
116-8	111号 住居跡	土師	器台	70	-	(11.7)	(9.1)	-	に赤い黄緑	白色粒子 少 ナツテ/ナツテ ナツテ/ナツテ	ナツテ/ナツテ ナツテ/ナツテ	脚部には穿孔3箇所あり〔床面〕	
116-9	111号 住居跡	土師	壺	100	10.1	3.8	10.6	脚部	壺	白色砂粒 多 ヘラツテ/ナツテ ヘラツテ/ナツテ	ナツテ/ナツテ ナツテ/ナツテ	小型の刷毛目焼の完形品, 口縁部横に 受口状を呈す, 既成は良好, 内外面ともに部分的に厚く煤付着〔床面・床底〕	
116-10	111号 住居跡	土師	壺	75	(12.7)	5.3	(16.2)	脚部	に赤い赤褐色 白色粒子, 白色砂粒 多	ナツテ/ナツテ ナツテ/ナツテ	中型の刷毛目焼, 口縫部僅かに受口状を呈す, 既成は良好, 外面脚部中位全面に煤付着〔床面・床底〕		

第36表 出土器物観察表(2)

件名番号	遺構	器質	器種	遺存 (%)	口径 [cm]	底径 [cm]	高さ [cm]	最大径 [cm]	色調 [内/外]	釉土	調型 [内/外]	備考	〔出土状況〕
116-11 111号 住居跡	土師	甕	甕	75	(11.0)	4.7	16.8	脚部 (18.0)	に赤い赤褐色 白色・赤褐色 白色砂粒 粒多	白色・赤褐色 白色砂粒 粒多	ハナナ-/ハナナ/ ハナナ-	中型の削毛目甕、口縁部僅かに受口状を呈す、焼成は良好、内面同部中央全面に焼付着〔床面・床直〕	
116-12 111号 住居跡	土師	甕	甕	5	(14.5)	-	(5.3)	-	明褐色	白色砂粒。 白色砂粒。	ハナナ-/ハナナ/ ハナナ-	「く」の字状口縁部削毛目調整甕、焼成は良好、同じ同一個体の可能性有り〔一括〕	
116-13 111号 住居跡	土師	甕	甕	5	(13.4)	-	(4.4)	-	橙	赤色・白色 白色・白色 白色砂粒 粒多	ハナナ-/ハナナ/ ハナナ-	口縁部が広口で脚部がやや細身の甕の 縁部片、焼成は良好〔床直〕	
116-14 111号 住居跡	土師	甕	甕	15	-	(5.5)	(6.9)	-	に赤い赤褐色 白色砂粒。 白色砂粒 多	白色砂粒。 白色砂粒 多	ハナナ-/ハナナ/ ハナナ-	「く」の字状口縁部削毛目調整甕の底部片、焼成は良好 〔下層〕	
116-15 111号 住居跡	土師	甕	甕	10	-	(4.5)	(4.4)	-	に赤い橙	白色砂粒。 白色砂粒。	ハナナ-/ハナナ/ ハナナ-	削毛目調整甕の底部片、焼成は良好 〔床面〕	
116-16 111号 住居跡	土師	甕	甕	5	-	5.0	(1.9)	-	明赤褐色	白色砂粒。 白色砂粒 多	ハナナ-/ハナナ/ ハナナ-	「く」の字状口縁部削毛目調整甕の底部片、焼成は良好 〔下層〕	
116-17 111号 住居跡	土師	甕	甕	5	-	(5.7)	(2.6)	-	に赤い黄褐色	赤色砂粒	ハナナ-/ハナナ/ ハナナ-	「く」の字状口縁部削毛目調整甕の底部片、焼成は良好 〔床直〕	
116-18 111号 住居跡	土師	甕	甕	5	-	(5.0)	(2.4)	-	に赤い褐色	白色砂粒。 白色砂粒 多	ハナナ-/ハナナ/ ハナナ-	「く」の字状口縁部削毛目調整甕の底部片、焼成は良好 〔一括〕	
116-19 111号 住居跡	土師	甕	甕	5	-	-	(7.2)	-	に赤い黄褐色	赤色砂粒	ハナナ-/ハナナ/ ハナナ-	外面赤褐色の装飾漆觸部上位片、焼成は良好、 外面上には波状文・斜文刻・削毛目が施されて いる〔一括〕	
118-1 112号 住居跡	土師	高坏	高坏	10	(21.3)	-	(6.0)	-	赤褐色	白色砂粒 多	ハナナ-/ハナナ/ ハナナ-	内面全体ともに赤褐色の高坏部片、焼成は良 好で外側面とともに焼付着〔床面・中層〕	
118-2 112号 住居跡	土師	高坏	高坏	10	(9.6)	-	(4.4)	-	明赤褐色	白色砂粒 多。 白色砂粒 少	ヨウ/ハナナ/ ヨウ	台面部、内面下部等々がモコモコと 削毛目削痕から脚部上端、脚部内部削痕顎著 〔下層〕	
118-3 112号 住居跡	土師	器台	器台	50	7.4	-	(3.8)	-	橙	白色砂粒。白 色砂粒 多	ハナナ-/ハナナ/ ヨウ	台面部から脚部上端、脚部内部削痕顎著 〔下層〕	
118-4 112号 住居跡	土師	器台	器台	10	(8.9)	-	(2.7)	-	明赤褐色	白色砂粒。 赤色砂粒 多	ハナナ-/ハナナ/ ハナナ-	台面部、直に開く平口縫〔中層〕	
118-5 112号 住居跡	土師	器台	器台	5	-	-	(5.6)	-	に赤い赤褐色	白色砂粒 少	ハナナ-/ハナナ/ ヨウ	台面部、遺存が少ないため穿孔は1箇所 のみ確認〔一括〕	
118-6 112号 住居跡	土師	甕	甕	10	13.0	-	(5.4)	-	橙	白色砂粒。 赤色砂粒 少	ハナナ-/ハナナ/ ハナナ-	口縁部・底がやや内凹し、多少の段を作なし て直角する、輪積痕有り〔床直〕	
118-7 112号 住居跡	土師	甕	甕	15	12.9	-	(5.3)	-	に赤い橙	白色砂粒。 赤色砂粒 少	ハナナ-/ハナナ/ ハナナ-	同じ様に口縁前面上部がやや内凹し、多少 の段を作なしで直立する、輪積痕有り〔下層〕	
118-8 112号 住居跡	土師	林	林	5	(21.0)	-	(3.4)	-	に赤い黄褐色	白色砂粒 少	ハナナ-/ハナナ/ ハナナ-	折叢口縁の壺口部片〔下層〕	
118-9 112号 住居跡	土師	甕	甕	5	(6.5)	-	(1.2)	-	明赤褐色	白色砂粒 多	ハナナ-/ハナナ/ ヨウ	小型無輪窓の口縁部片〔一括〕	
118-10 112号 住居跡	土師	甕	甕	5	(17.8)	-	(3.1)	-	に赤い橙	白色砂粒。 赤色砂粒 少	ハナナ-/ハナナ/ ハナナ-	波状口縁窓の口縁部片〔一括〕	
118-11 112号 住居跡	土師	甕	甕	5	(12.9)	-	(6.6)	-	に赤い赤褐色	白色砂粒。	ハナナ-/ハナナ/ ハナナ-	口縁「く」の字状の甕、頸部に輪積痕が残る 〔床面〕	
118-12 112号 住居跡	土師	甕	甕	5	(12.9)	-	(5.1)	-	橙	白色砂粒。 透明感強 透明感強 多	ハナナ-/ハナナ/ ハナナ-	口縁「く」の字状の甕、頸部に輪積痕が残る 〔上層〕	
118-13 112号 住居跡	土師	甕	甕	10	(14.5)	-	(11.0)	-	に赤い黄褐色	赤色砂粒 少	ハナナ-/ハナナ/ ハナナ-	口縁「く」の字状の甕、頸部に輪積痕が残る 〔上層・中層〕	
118-14 112号 住居跡	土師	甕	甕	5	(15.4)	-	(6.7)	-	に赤い赤褐色	白色砂粒。 赤色砂粒 多	ハナナ-/ハナナ/ ハナナ-	口縁「く」の字状の甕、頸部に輪積痕が残る 〔床面・床直〕	
118-15 112号 住居跡	土師	甕	甕	10	(15.9)	-	(9.9)	(21.5)	に赤い橙	泥、混入物少 ない	ハナナ-/ハナナ/ ハナナ-	口縁「く」の字状の甕、明瞭なハケ目調整が 施されている〔中層〕	
118-16 112号 住居跡	土師	甕	甕	5	(15.8)	-	(3.2)	-	に赤い黄褐色	赤色砂粒 少	ハナナ-/ハナナ/ ハナナ-	口縁「く」の字状の甕、頸部に輪積痕が残る 〔中層・下層〕	
118-17 112号 住居跡	土師	甕	甕	5	-	(2.8)	(2.2)	-	に赤い赤褐色	赤色砂粒 少	ハナナ-/ハナナ/ ハナナ-	甕の底部片〔下層〕	
118-18 112号 住居跡	土師	甕	甕	5	-	(2.5)	(2.4)	-	灰赤褐色	白色砂粒	ハナナ-/ハナナ/ ハナナ-	甕の底部片〔一括〕	
118-19 112号 住居跡	土師	ニラフ	ニラフ	45	-	-	(3.2)	-	に赤い黄褐色	赤色砂粒	ハナナ-/ハナナ/ ハナナ-	焼成は良好、内面二次被熱による煤付着 〔床面〕	
120-1 117号 住居跡	土師	高坏	高坏	55	14.1	-	(6.8)	-	に赤い橙	白色砂粒 多	ヨウ/ハナナ/ ヨウ	筒状の内部は既完形成、焼成は良好、内面 封緘が頗者、外面部部分的に煤付着〔床面〕	
120-2 117号 住居跡	土師	高坏	高坏	10	-	-	(2.1)	-	に赤い黄褐色	赤色砂粒	ヨウ/ハナナ/ ヨウ	高坏の研磨片、焼成は良好、内面や封緘、 被削面は厚塗灰が頗者〔床面〕	
120-3 117号 住居跡	土師	高坏	高坏	55	20.5	-	(9.7)	-	に赤い赤褐色	白色砂粒	ヨウ/ハナナ/ ヨウ	筒状の研磨片、研磨面には厚塗灰が頗者、 焼成は良好、内面底面やや割離、内外面とも に煤付着〔床面〕	
120-4 117号 住居跡	土師	高坏	高坏	30	-	(10.5)	(4.4)	-	に赤い黄褐色	黑色砂粒。 白色砂粒	ハナナ-/ハナナ/ ハナナ-	筒状の研磨片で穿孔は1箇所のみの確認、 焼成は良好、被削面及び底部面にも厚塗灰が頗 者〔床面〕	
120-5 117号 住居跡	土師	钵	钵	20	(10.2)	-	(5.4)	脚部	橙	赤色砂粒。 白色砂粒 多	ハナナ-/ハナナ/ ハナナ-	小型鉢の口縁部から脚部4器厚では薄い、 焼成は良好、一部輪積痕が有る〔中層〕	
120-6 117号 住居跡	土師	钵	钵	10	(11.4)	-	(6.1)	脚部	に赤い赤褐色	白色砂粒。 白色砂粒 多	ハナナ-/ハナナ/ ハナナ-	小型鉢の口縁部から脚部片、焼成は良好、 内面面ともに煤付着〔下層〕	
120-7 117号 住居跡	土師	钵	钵	10	(9.6)	-	(5.7)	脚部 (10.5)	に赤い黄褐色	赤色砂粒	ハナナ-/ハナナ/ ハナナ-	小型鉢の口縁部に押縫灰がかかるに見ら れる、焼成は良好、被削面及び内外面とも に厚塗灰が頗者〔下層〕	

第36表 出土器物観察表(3)

()現存・復元品

検査番号	構造	器質	25種	保存率 [%]	口径 [cm]	底径 [cm]	高さ [cm]	最大径 [cm]	色調 [内/外]	粉土	調型 [内/外]	備考 [出土状況]
120-8	117号 住居跡	土師	壺	25 10	13.6 —	—	(12.3) (14.9)	—	に赤い黄緑 白色砂粒 少	ハナダ/ ハナダ/ カサ	折双口縁の壺で、同一個体であるが接合面 がない。焼成は良好、胴部内面は剥離層 [上層・下層]	
120-9	117号 住居跡	土師	壺	5	(14.6)	—	(4.2)	—	に赤い黄緑 赤色粒子 多	ハナダ/ ハナダ/ カサ	折双口縁の壺の口縁部分、焼成は良好、内 外面ともに一部剥離あり [上層]	
120-10	117号 住居跡	土師	壺	10	—	—	(6.4)	—	に赤い黄緑 赤色粒子	ハナダ/ ハナダ/ ナ	壺の底部、焼成は良好、内外面ともに一 部剥離あり [床面]	
120-11	117号 住居跡	土師	壺	40	—	8.2	(14.0)	(27.6)	に赤い黄緑 赤色粒子 多	ハナダ/ ハナダ/ カサ	壺の腹部中央から底盤部分、焼成は良好、内 外面は剥離、外表面は黒色が顕著 [床面]	
120-12	117号 住居跡	土師	甕	70	—	5.8	(18.1)	(19.1)	赤色・白色 粒子・白色砂 粒 多	ハナダ/ ハナダ/ カサ	瓶部から口縁部分を欠損、焼成は良好、内 外面は剥離層、底盤外表面本乾燥あり [床面]	
120-13	117号 住居跡	土師	壺	10	—	5.3	(4.1)	—	に赤い黄緑 白色砂粒 少	ハナダ/ ハナダ/ カサ	壺の口縁部分、焼成は良好、内外面ともにや や摩耗 [中層]	
120-14	117号 住居跡	土師	甕	5	(14.8)	—	(6.4)	—	に赤い黄緑 白色砂粒 少	ハナダ/ ハナダ/ カサ	甕の口縁部分、焼成は良好、内外面ともに や摩耗、輪縁部が残る [中層]	
121-1	118号 住居跡	土師	高坪	5	—	(16.8)	(2.3)	—	に赤い黄緑 赤色・白色砂 粒 多	ハナダ/ ハナダ/ ナ	高坪部分でかなり摩滅している、焼成は 良好 [床直]	
121-2	118号 住居跡	土師	甕	5	—	6.5	(2.1)	—	に赤い黄緑 赤色粒子 少	/?/?	底部片内面は煤が厚く付着し、黒色、燒 成は良好 [床直]	
123-1	119号 住居跡	土師	器台	70	(7.8)	—	[4.8]	—	褐色	ナダ/ ナダ		
123-2	119号 住居跡	土師	器台	5	—	(9.7)	[3.5]	—	黃褐色(褐色)	ナダ/ ナダ	内外面赤彩	
123-3	119号 住居跡	土師	甕	5	(11.8)	—	[4.5]	—	に赤い褐色 白色砂粒 多	ナダ/ ナダ		
123-4	119号 住居跡	土師	甕	10	—	—	[5.3]	(10.4)	に赤い褐色 白色砂粒 多	ナダ/ ナダ		
123-5	119号 住居跡	土師	甕	10	(10.4)	—	[5.7]	—	褐色	ナダ/ ナダ		
123-6	119号 住居跡	土師	甕	75	8.0	—	[16.7]	(14.7)	褐色	ナダ/ ナダ	後で底部に脊孔としてある	
123-7	119号 住居跡	土師	台付 甕	10	(16.7)	[8.0]	[7.3] [5.2]	—	に赤い黄緑 白色砂粒 多	ハナダ/ ハナダ/ カサ		
123-8	119号 住居跡	土師	甕	5	(15.9)	—	[3.2]	—	褐色	ナダ/ ナダ		
123-9	119号 住居跡	土師	台付 甕	5	—	(9.5)	[3.4]	—	褐色	ナダ/ ナダ		
123-10	119号 住居跡	土師	甕	5	—	(4.8)	[4.7]	—	に赤い赤褐 色	ナダ/ ナダ		
125-1	120号 住居跡	土師	高坪	50	21.2	—	[6.8]	—	淡褐色	ナダ/ ナダ	口縁部に打ち大きさあり 牙として使用か	
125-2	120号 住居跡	土師	甕	100	14.8	9.0	29.6	—	明淡褐色	ナダ/ ナダ/ カサ	折り返し口縁下部に手織りの布を帯びた工具 による押捺あり	
125-3	120号 住居跡	土師	甕	100	19.7	5.4	23.1	—	褐色	ナダ/ ナダ/ カサ		
125-4	120号 住居跡	土師	甕	100	16.4	5.1	25.1	—	褐色	ナダ/ ナダ/ カサ	胴部に焼成後の穿孔あり	
125-5	120号 住居跡	土師	甕	100	15.4	5.5	17.1	—	白褐色	ナダ/ ナダ/ カサ		
125-6	120号 住居跡	土師	甕	100	14.1	4.6	21.6	—	褐色	ナダ/ ナダ/ カサ		
125-7	120号 住居跡	土師	甕	80	—	6.3	[22.3]	—	褐色	ナダ/ ナダ/ カサ		
125-8	120号 住居跡	土師	甕	70	15.3	—	[15.3]	—	褐色	ナダ/ ナダ/ アリ		
125-9	120号 住居跡	土師	甕	5	—	5.8	[3.3]	—	に赤い黄緑 色	ナダ/ ナダ/ アリ		
126-1	遺構外	土師	高坪	55	—	10.7	[9.4]	—	に赤い黄緑 色	ナダ/ ナダ/ カサ		
126-2	遺構外	土師	甕	70	(12.8)	(4.6)	13.8	—	に赤い赤褐 色～赤褐色	ナダ/ ナダ/ カサ		
126-3	遺構外	土師	甕	30	(15.8)	—	[13.1]	—	に赤い黄緑 色	ナダ/ ナダ/ カサ	常規型の甕の胴部下部で底部を欠く 骨壺器と思われる	
126-4	遺構外	土師	壺	40	—	3.4	[5.9]	—	に赤い褐色 白色砂粒 多	ナダ/ ナダ/ カサ		
127-2	113号 土瓦	土師	甕	30	—	—	[10.0]	—	に赤い褐色 白色砂粒 多	ナダ/ ナダ/ カサ		

第5章 近世

第1節 概要（第4図）

泉北側第2遺跡（II）では県道千葉・竜ヶ崎線に沿って走る1号溝とその西側約100mを南北に並列する2号溝が検出された。共に楕円形ピットを溝底に連続させるもので、一部未調査区間はあるものの、ほぼ途切れなく調査範囲内を縦貫しているものと思われる。但し、2号溝はその北側先端で溝が細くなっているから、さらにビットも断続する状況であるから、範囲外まで延びているかどうかは断定出来ない。

第2節 遺構と遺物

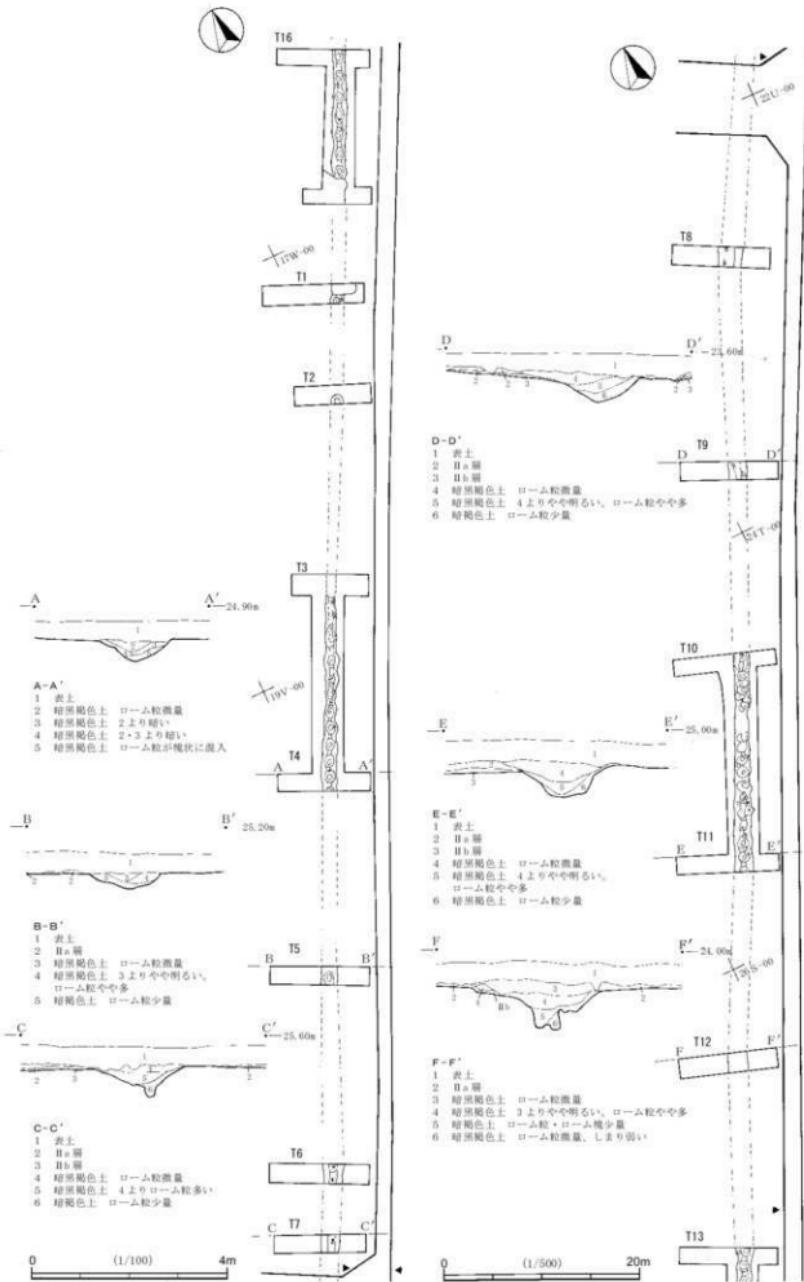
1号溝（第128～130図、図版8・30）

県道千葉・竜ヶ崎線から約3m～4m西側を並行するように走る。溝の規模は幅1.5m～2.0mで、溝底には径1m程の楕円形ピットが連続して設けられている。深さはこのピット底で50cm前後（一部に70cm）ながら、溝本来の深さは20cm～30cmにすぎない。ピット間は数十cmの間隔をあけて設けられている例が多い。しかし、間隔のない場合もあってその様子は一定しない。

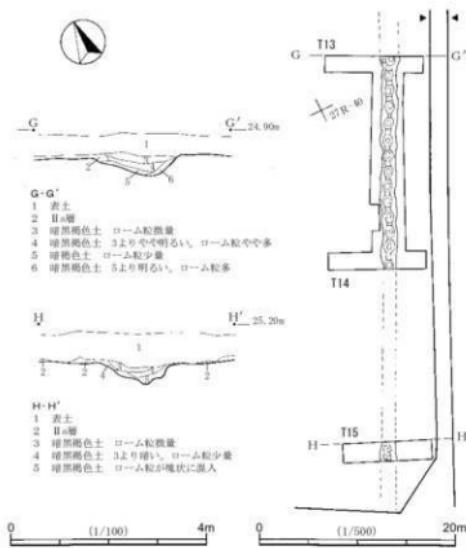
この溝に土手が伴うかどうかについては、東側県道寄りのトレンチセクションでは一様に表土から直接ソフトローム層に移っているか、僅かの漸移層（黄褐色土）を経てローム層に至っているのに対し、西側では漸移層そのものの遺存が東側より良好である。このことから、西側に本来土手が並列していたと考えられ、耕作が進んだ後も僅かな高まりとして残ったと推測される。それが漸移層の遺存に結びついたのであろう。

溝の覆土は底面近くの黒褐色土から中位、上位と移るに従いより強い黒色土となる。構築後は自然堆積に任せた結果と思われる。遺物は主に南側の25S・00（T10・T11）～27R・00（T13・T14）に該当するトレンチ内から出土した。いずれも溝底に付くようなものではなく、覆土中位から下位のレベルでみつかっている。なお、同一個体と思われる鉢片（3・4）が約60mの距離をおいて出土した。

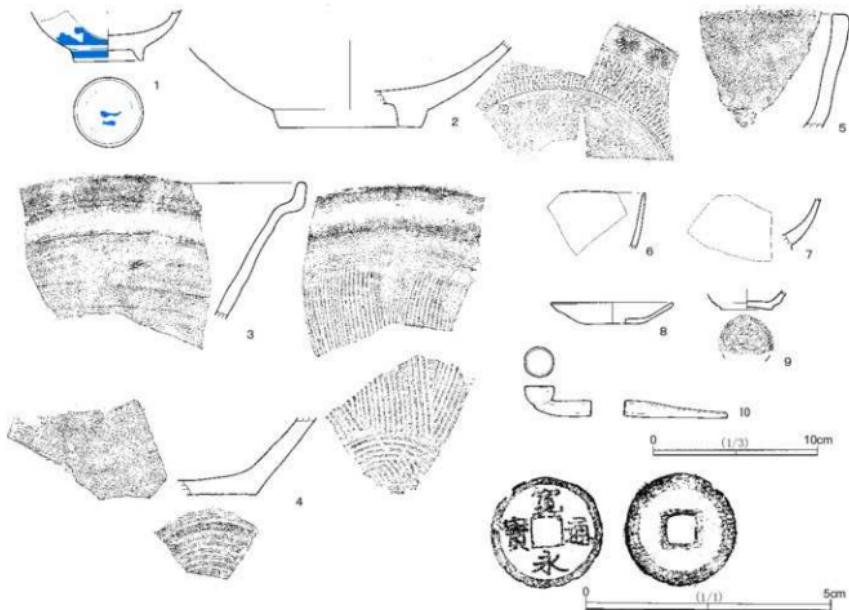
出土遺物は近世陶磁器、熔炉、銭貨、煙管、それに僅かの繩文土器片であった。1は肥前磁器碗底部であり、外面に呉須による文様（草花文か）が描かれる。いわゆる「くらわんか茶碗」であろう。2は内面に押印と櫛目がみられる三島手唐津大皿底部片であり、底部を除き鉄釉と灰釉（長石釉含むか）を二重に刷毛塗りする。7は唐津碗底部片であり、赤褐色の胎土に灰釉（長石釉含むか）を刷毛塗りする。3・4は同一個体と思われる瀬戸・美濃鉄釉壺鉢である。6は京・信楽系の筒型碗口縁部片である。5は熔炉口縁部片であり、外面に煤が厚く付着する。熔炉はこの他に把手部を始め、何点かの破片がみられる。8・9はカワラケであり、胎土は共に明赤褐色である。10は真鍮製の煙管火皿・雁首と吸口部である。雁首内部に羅字木質部が遺存する。11は銭貨である。外郭径2.25cm、内郭径5.5mm、銭厚0.9mmの寛永通寶（古寛永）である。この他図示はしなかったが、瀬戸・美濃鉄釉香炉片と思われる陶器片等がある。以上、いずれも破片という制約はあるが、出土陶磁器の年代は18世紀後半に位置付けられるものであり、他の遺物もそれに準じて考えてよいであろう。



第128図 1号溝(1)



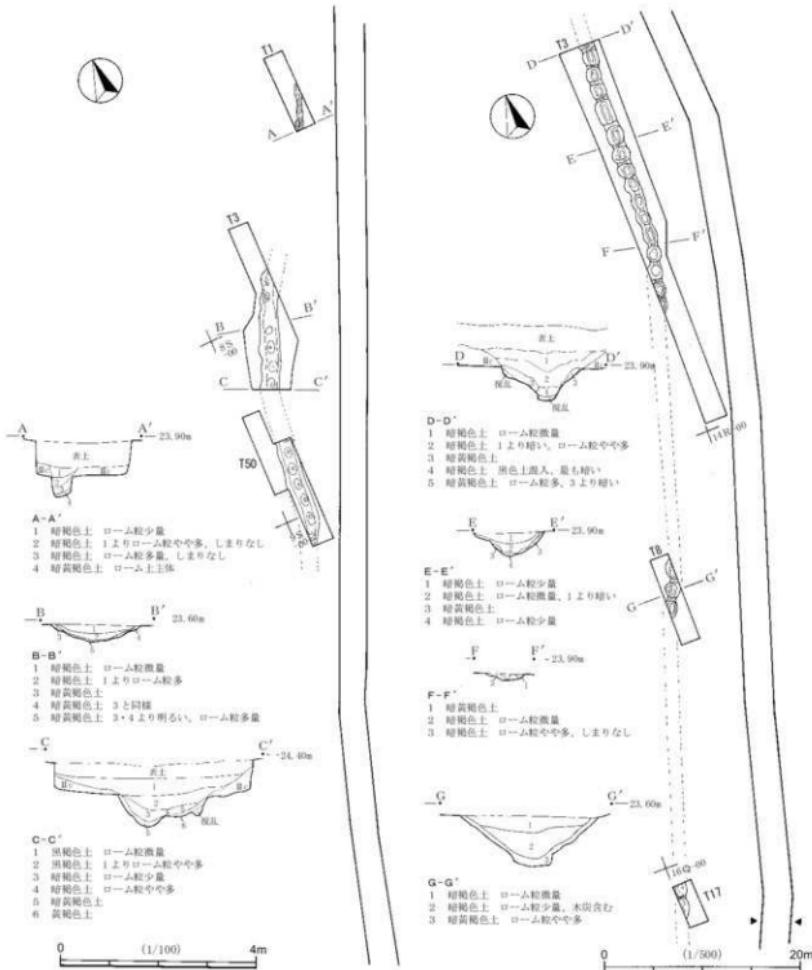
第129図 1号溝 (2)



第130図 1号溝出土遺物

2号溝 (第131・132図、図版8)

南北に通る農道から6m～7m西側をほぼ並行して走るが、8Sグリッド付近でわずかに蛇行している。溝の規模はD-D'・N-N'セクションでは表土下で幅2.5m～3.2m、深さ80cmを測る。溝底には最大で長さ2m、幅80cm、深さ20cmのピットが連続して設けられているが溝が細くなる北端部付近では小型化して間隔も開いてくる。なお、土手が伴っていた痕跡は認められなかった。遺物は出土しなかった。



第131図 2号溝 (1)



T16-2
II-II' 21.50m

T16-2
II-II'

T25-2
I-I'

H-H'
II-II' 21.50m

- 1 細褐色土 ローム粒微量
- 2 細褐色土 ローム粒や多
- 3 細褐色土 ローム粒少量
- 4 細黃褐色土
- 5 細黃褐色土 ローム粒少量

- 1 細褐色土 ローム粒微量
- 2 細褐色土 ローム粒微量、
1よりやや多い
- 3 細褐色土 ローム粒少量
- 4 細黃褐色土 ローム粒少量

0 (1/500) 20m

J-J'
I-I' 24.40m

- 1 細褐色土 ローム粒微量、しまりなし
- 2 細褐色土 1より多い、ややしまりあり
- 3 細黃褐色土 ローム粒多量

K-K'
K-K' 23.70m

- 1 細褐色土 ローム粒微量、しまりなし
- 2 紵褐色土 1より多い、ややしまりあり
- 3 細褐色土 ローム粒多量
- 4 細黃褐色土

L-L'
L-L' 24.60m

- 1 細褐色土 ローム粒微量
- 2 細黃褐色土 ローム粒多量、炭化物少量
- 3 細褐色土 ローム粒微量
- 4 細褐色土 3よりやや多い、ややしまりあり
- 5 細黃褐色土 ローム粒多量弱

M-M'
M-M' 24.70m

- 1 細褐色土 しまりなし
- 2 細黃褐色土 ローム粒微量、1よりしまりなし
- 3 細褐色土 ローム粒微量
- 4 黒褐色土 ローム粒少量、比較的しまりあり
- 5 細黃褐色土

N-N'
N-N' 25.10m

- 1 細褐色土 ローム粒少量、炭化物多量
- 2 細褐色土 ローム粒や多、1よりやや明るい
- 3 細褐色土 もっと多い、ややしまりなし
- 4 細黃褐色土

0 (1/100) 4m



T48
J-J'

T47-2
K-K'

T57
T56-2
K-K'

T63
T62
L-L'

M-M'

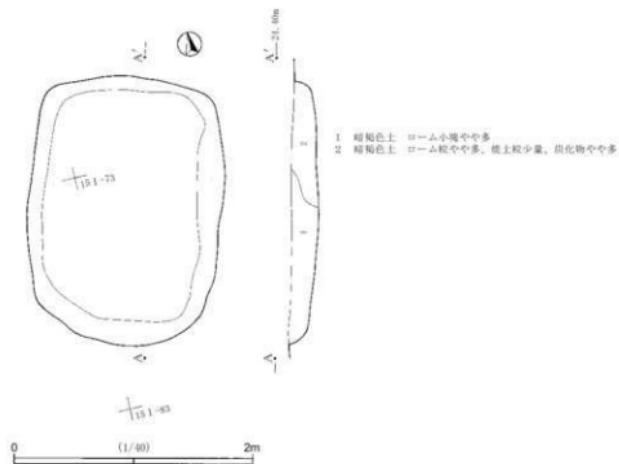
T72
N-N'



第132図 2号溝(2)

105・107・108号炭窯 (第133図、図版5・8)

調査区北東の10V・14W・15Iで計3基の炭窯が確認されている。覆土の状況、とりわけ底面付近に炭化材や焼土を多く含むことを根拠に炭窯と判断した。共に形状的には小判形ないし楕円形で、深さは30cm程である。炭窯の規模と確認調査の密度からして、調査範囲内にはさらに多くの炭窯が営まれたものと思われる。個別の挿図はこのうちの105号のみ掲載し、他は割愛した。



第133図 105号炭窯

第6章 黒曜石の産地推定結果について

1. 分析方法

黒曜石の産地同定は明治大学黒曜石研究センターの池谷信之氏に分析を依頼した。蛍光X線分析より得られた元素の強度を用いて以下の2つの方法により産地を決定している。

①判別図法 [図による産地推定]

蛍光X線分析法により得られた各元素の蛍光X線強度から下記の4つの指標を計算する。

指標1 Rb 分率 = Rb 強度 × 100 / (Rb 強度 + Sr 強度 + Y 強度 + Zr 強度)

指標2 Mn 強度 × 100 / Fe 強度

指標3 Sr 分率 = Sr 強度 × 100 / (Rb 強度 + Sr 強度 + Y 強度 + Zr 強度)

指標4 log (Fe 強度 / K 強度)

指標1・2と指標3・4をそれぞれX軸とY軸とした2つの判別図を作成し、原産地黒曜石の散布域と遺跡出土黒曜石の照合によって産地を決定する。

②判別分析 [多変量解析による産地推定]

判別図法による産地推定結果を検証するために、多変量解析の一手法である判別分析を行っている。判別分析では遺跡出土の資料1点ごとに、各原産地との距離（マハラノビス距離と呼ばれる）を計算し、資料との距離がもっとも小さい産地がその資料の産地であると推定される。またそれぞれの産地とのマハラノビス距離から、資料が各原産地に属する確率も計算され、その数値が1に近いほど推定結果の信頼性が高くなる。

2. 分析結果 (第134図)

泉北側第2遺跡(II)では出土した黒曜石33点全点を分析した結果、5地点の産地が同定された。資料が小さいため測定不可とされた資料2点、非黒曜石と判別された1点を除いた30点は、蓼科冷山、和田小深沢、高原山甘湯沢、箱根烟宿、神津島恩馳島の5地点の黒曜石と同定された。

旧石器時代

第1文化層 IX層下部 第1ブロック 高原山甘湯沢群産剥片素材石核1点42.58g

第2文化層 IX層 単独出土 高原山甘湯沢群産 二次加工のある剥片2点、計14.43g

第4文化層 VII層～VI層 単独出土 高原山甘湯沢群産 挖器1点4.52g

第5文化層 V層～IV層下部 第15ブロック 蓼科冷山群産5(6)点。器種内訳：二次加工のある剥片1点、微細剥離痕のある剥片2(3)点、剥片2点、計12.00g。第21ブロック 箱根烟宿群産7(8)点。

器種内訳：角錐状石器1点、石錐1(2)点、二次加工のある剥片1点、剥片4点、計11.73g。

単独出土 蓼科冷山群産尖頭器1点 4.84g。高原山甘湯沢群産剥片1点、同石核1点、計12.93g。

第6文化層 III層 第23ブロック 高原山甘湯沢群産7点。器種内訳：ナイフ形石器1点、剥片5、碎片1点、計8.05g (7点中1点は産地が測定できなかつたものであるが、6点と至近にあること、石基・斑晶の特徴に相違点がみられないことから、原産地を一にする同一母岩として扱つた)。

単独出土 表採資料、和田小深沢群産 石核1点4.80g。

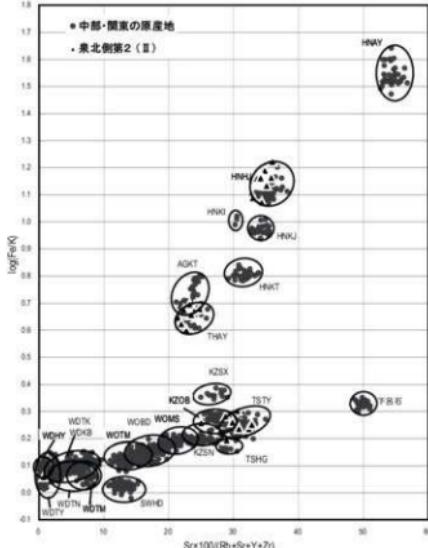
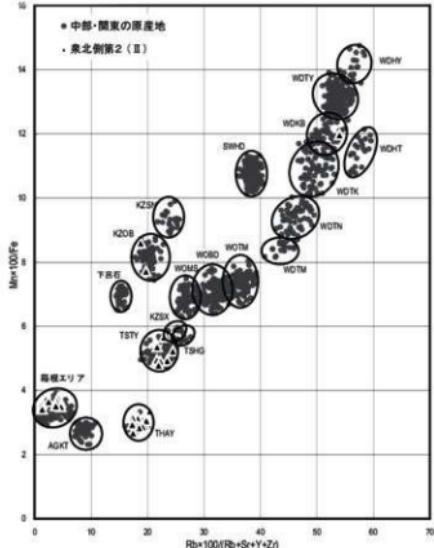
縄文時代 神津島恩馳島群産 石鐵2点、計2.86g。

泉北側第2遺跡(II)分析結果(1)

泉北側第2遺跡(II)分析結果(2)

No	文化層	ブロック	出土品番号	埋蔵番号	品目名	遺跡地	判別群	形態分析					馬	馬/Tn	馬/S	馬/K	一致
								種類	頭頂	海面	横幅	底面	種類				
1	5	10	SN-53-1	7	2	TSTY	TSTY	8.42	1.00	T9D	16.27	0.00	23.47	4.93	29.20	1.58	○
2	5	5	SN-54-14-1	-	1	TSTY	TSTY	4.95	1.00	T9D	18.00	0.00	21.16	4.80	28.87	1.73	○
3	5	5	SN-54-14-2	2a	1	TSTY	TSTY	10.00	0.88	T9D	19.40	0.00	21.20	4.80	28.87	1.73	○
4	5	15	SN-54-6	3	2	TSTY	TSTY	5.91	1.00	K29	18.88	0.00	21.47	4.98	29.90	1.57	○
5	5	15	SN-54-7	2a	1	TSTY	TSTY	3.94	0.97	K29	5.81	0.03	22.94	5.67	29.81	1.63	○
6	5	15	SN-54-7	2a	1	TSTY	TSTY	3.25	1.00	K29	17.85	0.00	22.25	4.92	28.80	2.01	○
7	5	15	SN-54-7	6	1	TSTY	TSTY	7.01	1.00	T9D	20.73	0.00	21.36	4.79	28.78	1.70	○
8	1	1	THAY	THAY	1	THAY	THAY	6.34	1.00	A07	121.75	0.00	20.42	3.37	21.45	4.44	○
9	4	2文層	THAY-00-1	1	1	THAY	THAY	3.47	1.00	A07	121.10	0.00	18.29	3.15	23.21	4.54	○
10	8	22	23H-39-10	4a	1	不可	THAY	10.83	1.00	A07	102.24	0.00	17.58	2.86	22.48	2.09	○
11	8	23	23H-49-10	4a	1	THAY	THAY	7.38	1.00	A07	144.40	0.00	19.52	2.63	24.24	4.79	○
12	8	23	23H-49-10	-	2	不可	THAY	10.49	1.00	A07	141.79	0.00	18.36	2.87	23.55	2.65	○
13	8	23	23H-50-4	-	1	THAY	THAY	5.58	1.00	A07	93.19	0.00	18.28	3.13	22.69	4.00	○
14	8	23	23H-59-13	1	1	THAY	THAY	2.27	1.00	A07	126.32	0.00	18.79	3.07	22.44	4.71	○
15	8	23	23-40-48	3	1	THAY	THAY	9.08	1.00	A07	118.44	0.00	18.16	2.87	23.83	4.75	○
16	2	2文層	THAY-59-1	2	1	THAY	THAY	7.31	1.00	A07	93.38	0.00	17.39	3.15	23.20	4.98	○
17	上層	上層	19H-09-9	3	1	KZOB	KZOB	16.87	1.00	K29	33.87	0.00	18.79	8.60	24.99	1.82	○
18	上層	上層	19H-09-2	4	1	KZOB	KZOB	3.68	1.00	K29	42.08	0.00	18.74	7.72	25.73	1.92	○
19	上層	上層	21H-42-2	-	1	HHNU	HHNU	30.18	1.00	HHNU	1.00	0.00	2.48	3.66	34.79	15.92	○
20	上層	上層	西層	-	1	多島島石子	多島島石子	623.72	1.00	HHNU	671.41	0.00	6.49	3.49	39.17	6.11	FNLSE
21	上層	上層	ヒコウ1-1	3	1	WOKB	WOKB	5.90	1.00	WOKT	19.87	0.00	33.98	11.97	0.72	1.15	○
22	5	21	19H-09-1	8	1	HHNU	HHNU	18.21	1.00	HHNU	93.91	0.00	2.75	3.55	34.10	16.05	○
23	5	21	19H-09-1	4b	1	HHNU	HHNU	19.82	1.00	HHNU	93.91	0.00	1.28	3.26	34.04	16.01	○
24	5	21	19H-09-18	-	1	HHNU	HHNU	12.14	1.00	HHNU	74.00	0.00	4.63	3.63	34.16	14.57	○
25	5	21	19H-09-19	-	1	HHNU	HHNU	17.00	1.00	HHNU	81.05	0.00	1.24	3.42	35.18	14.61	○
26	5	21	19H-09-21	4a	1	HHNU	HHNU	31.23	1.00	HHNU	186.88	0.00	4.16	3.76	35.86	16.73	○
27	5	21	19H-09-5	-	1	HHNU	HHNU	4.85	1.00	HHNU	23.38	0.00	3.39	2.67	34.32	11.85	○
28	3	21	19H-09-2	1	1	HHNU	HHNU	4.86	1.00	HHNU	21.40	0.00	4.45	3.10	32.95	12.31	○
29	3	21	19H-19-2	-	1	HHNU	HHNU	11.19	1.00	HHNU	88.88	0.00	3.76	3.32	35.06	13.64	○
30	5	5文層	19H-09-1	4	1	THAY	THAY	4.12	1.00	A07	95.09	0.00	18.52	2.84	21.92	4.21	○
31	5	5文層	THAY-03-3	3	1	THAY	THAY	6.12	0.00	A07	82.96	0.00	11.42	2.67	22.30	4.74	○
32	2	2文層	19H-19-1	1	1	THAY	THAY	3.49	0.00	A07	94.31	0.00	17.30	2.94	23.46	4.56	○

33	6	23	23H-10-2	-	1	THAY	THAY	0.83	1.00	A07	145.84	0.00				○
----	---	----	----------	---	---	------	------	------	------	-----	--------	------	--	--	--	---



第134図 黒曜石产地推定結果一覧

第7章　まとめ

第1節　旧石器時代（第135図、第2・3表）

旧石器時代に属する遺物として1,436点の石器が出土した。これらは石器が包含される層準や調査担当者の所見、整理作業を経て大きく6枚の文化層に分けられた。以下、各文化層から出土した石器群について補足・検討し、まとめとする。第135図では主要石器を抜粋した。略号は第2・3表を参照されたい。

第1文化層

IX層下部から、高原山甘湯沢群産の黒曜石1点と栃木県西荒川流域（文献1）から持ち込まれたと推測される珪質頁岩の計4点が出土した。黒曜石は比較的大型の剥片素材の石核であり、珪質頁岩製石刃3点のうち2点は接合する。接合しない1点も他の2点と同じ特徴を有しており、同一母岩であることは明らかである。縦縫に刃こぼれがみられるものもあるが、加工・使用痕とする根拠は薄く、遺跡内で剥離された形跡は捉えられなかった。出土状況は珪質頁岩製石刃3点が重なるようにして検出され、これらから北へ2.4mほど離れた場所から黒曜石製石核が出土した。

第2黑色帶下部から石器が出土し、同様の石材がみられる遺跡には、東峰御幸畠東遺跡（空港No2遺跡）（文献2）第1文化層、中山新田I遺跡（文献3）などがある。両遺跡とも出土点数が1,000点を超えており、泉北側第2遺跡（II）とはブロックの様相を異にする。あたかも、これらの大きな石器集中地点で製造・粗削りされた石刃や石核が小分けにされて当遺跡に運びこまれたが、活用されずに忘れ去られた、という印象を持った。栃木県の石材原産地と下総台地を結ぶ下野一北総回廊を基軸として、石器製作遺跡から消費する遺跡へと持ち運ばれる道筋の途中に当ブロックが存在したものと推測される。

第2文化層

石器が包含される層序は立川ロームのIX層からIII層までと幅広いが、母岩の分布状況や石器の特徴などからIX層中～上部に生活面があったと推定される一群を第2文化層とした。第2～9ブロックの8か所と8点の単独出土を加えた332点がこの文化層に帰属する。6Mグリッドから7Mグリッドに分布する北側の5か所のブロックには共通する母岩が多く、接合関係が認められるため、同時期に形成されたひとつの中集域として捉えられよう。原礫面を多く残す大型のチャート、珪質頁岩の塊から剥片剥離作業が行われたことを示す接合資料には、縦長の剥片を素材としたナイフ形石器、削器が含まれるものや、同一母岩の別個体資料が存在する。また、直径5mm～10mm程の同心円状斑紋を含んだ玻璃質黄緑色の石材＝火山豆石凝灰岩（49頁註1参照）を用いた石核が出土している。これらの特徴的な石材の産地が特定されれば、往時の人の辿った経路を知る手かりとなる可能性がある。遺跡の最東端の第8ブロックの石材は、127点のうち93%がガラス質黒色安山岩であり、11個体32点の接合資料はすべてガラス質黒色安山岩である。

第3文化層

第10～13ブロックの101点と単独出土の3点を加えた104点がIX層～VII層にかけて分布する。第13ブロックでは硬質頁岩のみ56点が出土しており、器種はナイフ形石器、削器、石錐、二次加工のある剥片や石核など、多岐にわたる。母岩はいわゆるチョコレート頁岩と黒色緻密な硬質頁岩に分けられ、8個体23点に接合関係がみられる。なお、直線距離にして150m南西方向に位置する泉北側第3遺跡（文献4）第2文化層第7・8ブロックでも硬質頁岩の数量が突出しており、出土した214点中147点は使用・加工痕が観察された。同石材の石刃と、原石から貝殻状の剥片が剥離される工程が確認されており、両遺跡における

硬質頁岩の利用の仕方に共通するところが多い。

第4文化層

VII層～VI層に包含されるのは第14ブロック18点と単独出土6点の計24点である。集中域では4石材6母岩が確認され、文化層全体では8石材、うちガラス質黒色安山岩は62.5%である。出土点数に比して石核の割合が高く、6点を数える。最終形状が多面体となるもの、剥片を素材としたもの、一端に交互剥離が行われたものなど、異なった剥離方法がみられる。砂岩楕円礫の敲石1点が共伴する。

第5文化層

第16～21ブロックの156点と単独出土の4点を加えた計160点がV～IV層下部に包含される。下総台地においては土層の堆積状況からV層、IV層、III層の分層が困難な地域が多い。火山の噴火に伴う堆積物の層が比較的薄いこと、ソフトロームが下層にまで混入することが一因である。このため、火山灰の堆積状況が良好な群馬県や神奈川県の層序と器種分布に照らし合わせた分層は行わず、調査時の所見に従う形で報告したが、第15ブロック、第16～18ブロック、第19～21ブロックの3地点の生活面には時期差があるものと考えられる。

主要な器種では挿器、削器がそれぞれ5点、角錐状石器3点、ナイフ形石器3点などが検出された。第16・17ブロックでは石材に硬質頁岩が多用されている。自然面が残る石片は少なく、削器とその調整剥片、挿器同士の接合資料など、製品の形で遺跡内に持ち込まれ、石器のメンテナンスが行われたと推測される。

第6文化層

III層から808点が出土した。遺跡北側の第22ブロックと南西側の第23ブロックの2か所が帰属する。両ブロックとも礫群を構成し、北側は出土点数69点のうち26点(38%)、南側は736点のうち687点(93%)が礫・礫片である。特に南側のブロックについては、分布が広範囲に及びながらも2か所のまとまりを見せる。礫片には赤く変色した部分や焼けたような灰色を呈するものが多く、約26%にあたる52個体178点が接合した。これらは円礫の状態で遺跡に運び込まれ、熱を受けて破碎したものと推測される。礫群を構成する上位3種の石材は、多い順に流紋岩、頁岩、砂岩である。

礫・礫片を除いた器種では、ナイフ形石器や、二次加工痕・微細剥離痕のある剥片、碎片、石核、敲石が出土している。剥片類の石材は珪質頁岩、頁岩、ガラス質黒色安山岩、高原山甘湯沢群産黒曜石などが用いられ、玉髓、ホルンフェルス、チャートが僅かに混じる。

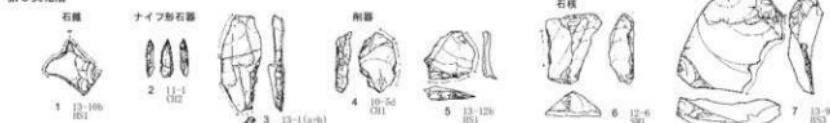
引用・参考文献

- 1 田村 隆・国武貞克・吉野真如 2009『下野一北総回廊外縁部の石器石材（第1報）－特に珪質頁岩の分布と産状について』千葉県史研究11号 千葉県史料研究財団
- 2 緑千葉県文化財センター 2004『新東京国際空港埋蔵文化財調査報告書XIX－東峰御幸畠東遺跡（空港No62遺跡）－』
- 3 緑千葉県文化財センター 1986『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書IV－元割・聖人塚・中山新田I－』
- 4 緑千葉県教育振興財団 2011『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XXIII－印西市泉北側第3遺跡（下層）－』

第1文化層 (石器の通し番号に続く数字は、ブロック - 本文掲図番号を表す。石材の略号は第3表を参照のこと。)



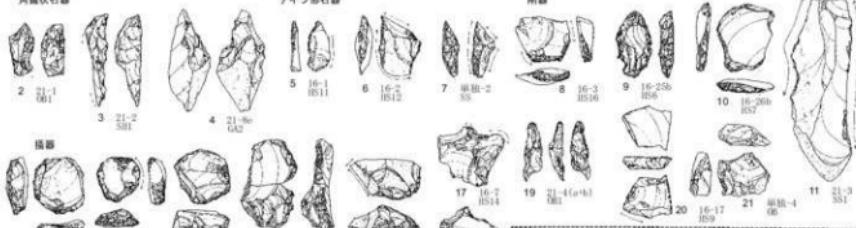
第3文化層



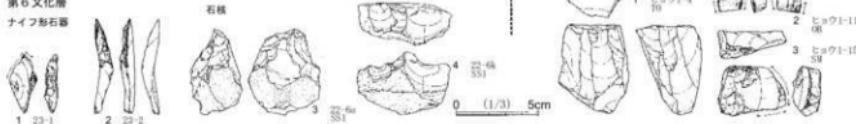
第4文化層



角錐状石器



第6文化層



第135図 旧石器時代主要石器 (S=1/3)

第2節 繩文時代（第136図）

住居跡1軒、炉穴1群3基、陥し穴1基、住居跡と切り合った時期不明の土坑1基の遺構と草創期前半から後期にわたる遺物包含層を検出した。

住居跡は、長山編年（文献1）によれば、加曾利E3（古）式第2段階に相当しよう。連弧文土器を入れ子で出土した土器は、口縁部文様帶の渦巻文がしっかりと巻き込まれるが、渦巻部分の隆帯が断面三角形に近く、胸部文様帶の磨消懸垂文も磨消部の幅がやや広く、当該期と見るのが妥当であろう。昭和57・58年度の調査（文献2）では称名寺式期及び堀之内I式期の住居跡が各1軒検出されたのみで、この時期の住居跡は検出されておらず、単独で営まれたと考えられる。炉穴は伴出土器による時期の確定ができなかつたが、前回調査では西側の主谷に面した台地縁辺に展開しており、かなり離れた位置になる。

包含層出土土器では、草創期前半の押圧繩文・回転繩文土器が注目される。千葉ニュータウン開発地域内では、これまで草創期前半の土器出土事例は6遺跡あり、本遺跡が7例目となった。6遺跡の内訳は以下のとおりである。

- ①瀬戸遠蓮遺跡 隆起線文（文献3）
- ②地国穴台遺跡 隆起線文（文献3）
- ③榎峠遺跡 爪形文（文献3）
- ④高根北遺跡 押圧繩文・回転繩文（文献4）
- ⑤雨古瀬遺跡 押圧繩文・回転繩文（文献4）
- ⑥林跡遺跡 隆起線文（文献5）

このうち、同じ押圧繩文・回転繩文土器でも高根北遺跡・雨古瀬遺跡のそれは、井草1式直前の様相を示しているのに対し、本遺跡のものはそうした様相が認められず、より古い位置付けがなされよう。

次の草創期前半の燃糸文土器は、約400点の内主体となるのは夏島式で、次いで井草2式が多くあった。約1,200点と最も多く出土した早期前半の沈線文土器は田戸下層式が大部分で、文様要素の組み合わせによって分類したが、時間的幅が認められる。しっかりとした細沈線帶の間に貝殻文などを充填した米字状・菱形様の区画文様をもつ第96図54・55・59・60、第98図132・133・139～144は古段階、外反する外削ぎ状の口縁下がくびれる器形を持つ第93図13、第98図168や菱形区画に沿った太沈線の末端が蕨手状に巻き込む第97図127は新段階に相当しよう（文献6）。その他の大部分は新段階に属するものと思われる。なお、沈線文土器には擦痕が器面に顕著に残るもののがしばしば見られる。その擦痕の工具については長らく不明であったが、第100図228の無文土器の器面にこの工具の先端圧痕が見つかった（図版30）。擦痕が開始される個所、3個所のうち工具の先端圧痕が残る個所が2個所ある。その部分を観察すると工具は幅約2cm、先端がわずかに湾曲しててきわめて細かいササラ状に削けており、このササラ目が工具を引きすることによって擦痕を生ぜしめている。工具の厚さは1mm～2mm程度のごく薄いものと思われる。具体的には竹べらのような工具が想起されよう。

約800点の出土量であった前期後半の浮島・興津式土器は、三角文を施した浮島3式が多く見られ、他の貝殻文や凹凸文の土器も多くは浮島3式に属しよう。なお、第105図362は貝殻文と繩文が同時施文されており、興味深い。

土製品のうち、土器片錐は早期後半の茅山式系土器を利用したものであった。繊維を少量含み、焼成堅敏な表裏条痕の土器片に磨りによる糸掛けが認められる。この時期には土器片錐の使用は確認できていな

いから、後世の縄文人が手頃な破片を拾って土器片錐に加工したとしか考えられない。同じ千葉ニュータウン内で現在整理中の印西市大割水溜遺跡では撚糸文土器片を土器片錐としたものがある。見たこともない文様をもつ土器片を拾った縄文人は、どのような思いで土器片錐に加工したのであろうか。

石器の大半は遺跡南西部(19D、19E、19F、20D、20Eグリッド)に張り出した台地突端から出土しており、撚糸文や沈線文が施された土器の集中域と重なることから、ほとんどが縄文時代早期の所産と推定される(第92・108図)。この項では、その他の時代に帰属する2点の石器と、礫・礫片について述べる。

緑色凝灰岩を使った尖頭器は、9P-69グリッドから出土している(第109図-1)。均質緻密だが、光沢や艶はなく、風化面は緑色を帯びた灰白色、調査時に欠けた部分は明るい青灰色である。神奈川県相模原市南部に源を持つ目黒川流域にみられる石材に近似する。最大長は98.0mm、最大幅は下方1/4にある。精美な柳葉形であるが、上部が折れた後に再加工されたために、側稜にわずかな段差が生じている。類似する形状を持つ尖頭器が出土した遺跡には、県外では神奈川県上草柳第3地点遺跡(文献7)漸移層～B・B0上部、同寺尾遺跡(文献8)第I文化層、柏ヶ谷ヲサ遺跡(文献9)第I文化層aなどが挙げられる。千葉県内では四街道市木戸先遺跡(文献10)、富里市南大溜袋遺跡(文献11)、柏市元割遺跡(文献12)に類例がある。至近では、西に約150m離れた泉北側第2遺跡(文献2)1次調査でも同様の尖頭器が出土している。旧石器時代から縄文時代に移行する時期の所産と推定される。

19E-63グリッドから出土した石鎌は、もとは鉈齒縁辺と返し、舌部を持つ縄文時代草創期の有舌尖頭器である(第109図-8)。この石器が出土した付近からは撚糸文土器、沈線文土器、黒浜式土器、加曾利B式土器が出土していること、風化剥離面と再加工部分に色調差がみられること(再加工部分は青みがかっている)から、草創期に残された石器を後代の縄文人が加工し直した可能性が高い。

敲石や磨石には、ざらつきや変色、光沢、弾けなどを見受けられる。礫・礫片の中にもこれらに似た痕跡が観察できたが、人為的なものか否かの見極めが困難であること、剥片剥離や何らかの加工作業が行われたとしても、石器に傷がつくことは限らないことから、加工工具として機能していたと思われる礫を図化した。礫・礫片123点のうち102点が砂岩、流紋岩、チャートであり、縄文時代の礫群に多用される石材である。自然面、礫内部とも赤・黒色化したものが多く、一般的に被熱痕跡といわれている。中でも砂岩は本来、磁性がほとんどないか極微弱であるが、赤化した部位には磁性が生じ、被熱の強弱による磁性の差が確認できる。現在のところ、砂岩礫の接合資料30点余りを検証したに過ぎないが、今後は礫・礫片の色や感触以外にも、砂岩礫の磁性が被熱の有無を識別する手がかりとなる可能性がある。なお、磁石を用いた識別方法は中村由克氏の『磁石鑑定法』(文献13)を踏襲した。

引用・参考文献

- 1 長山明弘 2010 「加曾利E(新)式における土器系列の研究(1) -「連弧文土器」から「Y字状文土器」へ-」『古代』第124号
- 2 勝千葉県文化財センター 1991 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書X-泉北側第2遺跡-』
- 3 勝千葉県土地公社 1974 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書II-瀬戸遠蓮遺跡・地国穴台・桜峠遺跡ほか-』
- 4 勝千葉県土地公社 1976 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書IV-高根北遺跡・雨古瀬遺跡ほか-』
- 5 勝千葉県文化財センター 1992 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書X-林跡遺跡-』
- 6 西川博孝 1987 「田戸下層式土器-千葉県内新出土例を加えた検討-」『古代』第83号
- 7 中村喜代重・堤 隆・服部隆博他 1984 「一般国道246(大和・厚木バイパス)地域内発掘調査報告書II」(上草柳調)

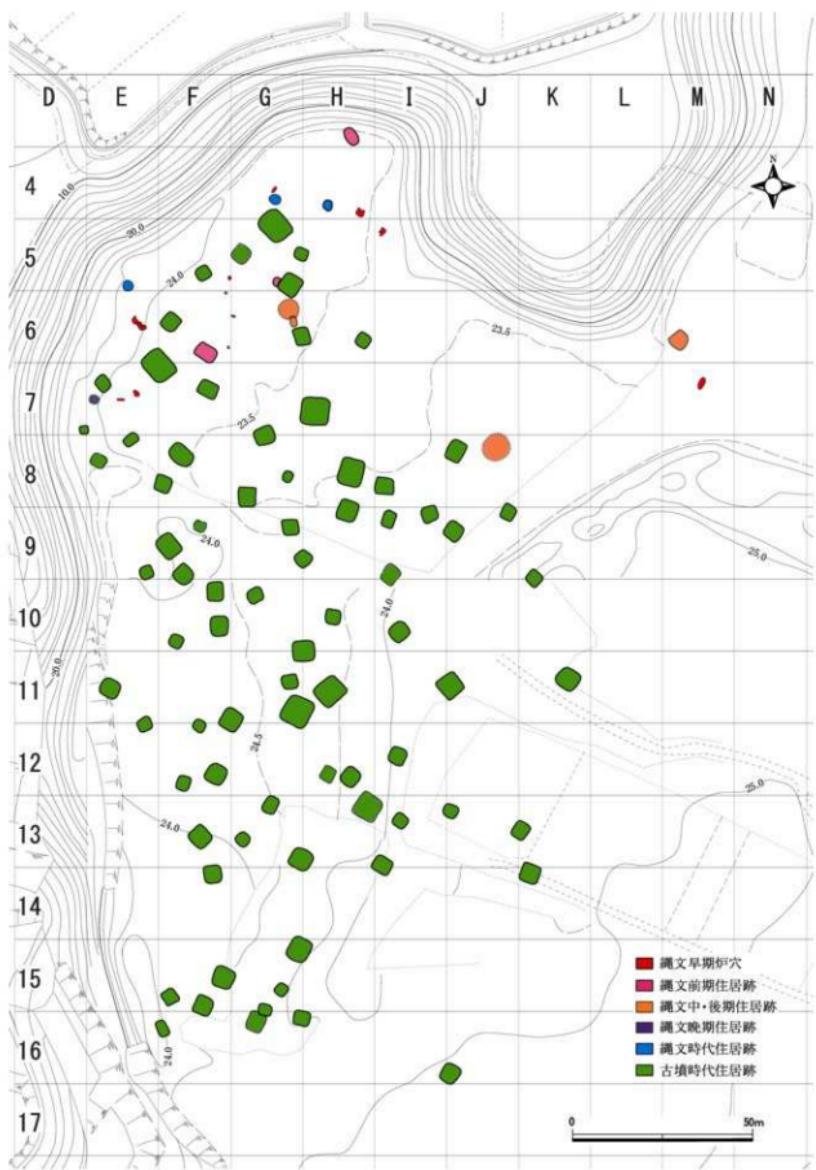
- 査地区) 大和市文化財調査報告書第15集
- 8 白石浩之 1980『神奈川県埋蔵文化財調査報告書18 寺尾遺跡』神奈川県教育委員会
 - 9 堤 隆他 1983『第Ⅰ文化層a』『柏ヶ谷長フサ遺跡』
 - 10 林田利之 1994『木戸先遺跡』御成台団地宅地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書印旛郡市文化財センター
 - 11 戸田哲也 2004「南大畠袋遺跡」『千葉県の歴史資料編考古1 (旧石器・縄文時代)』258-261頁勝千葉県史研究財團
 - 12 勝千葉県文化財センター 1986『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書IV-元潮・聖人塚・中山新田I-』
 - 13 中村由克 2011「旧石器時代における石斧の石材鑑定」『野尻湖ナウマンゾウ博物館研究報告』第19号 pp. 33
野尻湖ナウマンゾウ博物館

第3節 古墳時代（第136図）

泉北側第2遺跡はその西側が昭和57・58年の兩年度にわたって広く調査されており、報告書も刊行されている（文献1）。それに拠れば、古墳時代の遺構として、竪穴住居跡70軒、掘立柱建物跡1棟が報告されており、285m²に1軒（およそ17m四方弱）という割合になり、比較的密な遺構検出状況といつてよい。今回報告の調査区はその東側隣接地に相当するが、遺構は既調査区に近接した地域で散発的に見つかったのみで、密度としては極めて薄いものであった。つまり、当調査区では泉北側第2遺跡古墳時代集落の東側東端部を調査したということができる。集落そのものは南側に一部延びる可能性もあるが、古墳時代の集落規模としては昭和50年代と今回の成果でほぼ終息するものと思われる。

集落規模は西側を含め、南北220m、東西140mの範囲に及ぶことが判明した。それほど時期差のない集落の全体が明らかになった事例として特筆される。その時期的な幅は出土土器の編年観からして、弥生時代の延長にある土器群を伴う印西市松崎II遺跡（文献2）以後であり、かつ定型的な小型丸底土器が伴う印西市向新田遺跡（文献3）以前の様相であるとともに間違いないと思われる。既に西側の報告でも指摘されているとおり、同一時期ないし短期間に営まれた集落として問題なく、今回の結果でもそれを追認出来た。しかし、住居間の近接する事例や方位の差（主に北西）など、そこにはある程度の年代的な幅があることも事実で、さらに住居規模の大小や柱穴の有無など、住居の質的な差も含めた全体構成、つまり集落の変遷に迫るには周辺の遺跡はもとより広域的かつ多角的な分析を要することである。今回の報告は外縁部の確定、つまりその全体像が明らかになったという点に大きな意義を見出すことが出来るであろう。

出土遺物はそのほとんどが土器であった。その組合せとして、高壺、器台、大小の甕・壺が主要なものながら、他に瓢形壺や鉢などがみられる。高壺には脚部が開き壺底部に稜を有するもの、また、甕はくの字状口縁の平底甕が主体である。一方、壺は単純な折返口縁のものが主体となる。なお、小型丸底土器や瓢形壺、波状口縁の甕、鉢はきわめて少ない。全体的には伊勢湾沿岸系統の土器が主流ながら、西側調査区の報告で指摘された北陸系の甕・壺等は当調査区の112号住居跡出土土器にも認められ、有段で口縁が大きく屈曲する高壺（111号住居跡）もその系統とみてよいかもしれない。なお、透穴を有し、脚部との接合部分が外に張り出す器台は当調査区では確認出来なかった。周辺では印西市船尾町田遺跡（文献4）等で北陸系の壺・甕、器台が出土しているが、時期的に重なることから、前期前半の一時期における様相とすべきかもしれない。土器以外では、土玉程度であり、西側調査区でみつかった銅鏡、鉄鏡等の金属製品は当調査区では出土しなかった。



第136図 縄文時代・古墳時代遺構分布図

引用・参考文献

- 1 勝千葉県文化財センター 1991『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書X—泉北側第2遺跡—』
- 2 勝千葉県文化財センター 2003『松崎地区内陸工業用地造成整備事業埋蔵文化財調査報告書I—松崎II遺跡—』
- 3 勝千葉県文化財センター 2002『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XV—向新田遺跡—』
- 4 勝千葉県文化財センター 1984『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書VII—船尾町田遺跡—』

第4節 近世

調査範囲内では約100mの間隔をおいて南北に並列する2条の溝が検出された。1号溝は本遺跡の南に隣接する泉北側第3遺跡のS D004につながり、2号溝は同じくS D002bにつながると考えられる。調査段階ではこれらは野馬堀と判断されたが、そうだとすればそれは印西牧の消長と関連することになる。以下、その点について検討する。

印西牧は小金牧の一つであったが、寛文10(1670)年過ぎに行われた新田開発によって和泉～多田羅田を結ぶ以東(惣深新田および周辺村々持添新田)が大きく開発されることになった(文献1ほか)。今回の調査区域はこの開発範囲に含まれるが、開発以前の段階では牧の北側縁辺部に相当する(千葉県文書館蔵「小金牧大絵図」文献14巻頭図版に掲載)。つまり、検出された溝が寛文以前の古い牧に対応するかどうかが問題となろう。

まず、1号溝については出土遺物から江戸時代でも18世紀後半以降の所産であることから否定されよう。次ぎに2号溝については、出土遺物がなく、時期決定に難があるが、規模・構造等類似する点から時期的にそれほどの差はないものと推測する。そうであれば、少なくとも牧に伴う野馬堀とは考えられず、初期の牧に伴う野馬土手・野馬堀の実態が不分明であるという点を差し引いても、牧との関連は認めない。これは周辺の野馬土手の調査例との比較からも言いうことである。

それでは、この遺構の性格をどうみたらよいだろうか。遺跡一帯は鹿黒村集落裏手の台地に相当するが、元々水の便に乏しい土地柄であり、延宝4(1676)年の検地以降、その經營は不安定であったらしく、近世の石塔銘に拠れば「田圃之荒廃」が進んだという(文献2・3)。しかし、18世紀の後半以降には領主側の年貢の減免や復興政策がなされており、一定の成果もあげている(文献4)。検出した溝はその頃の産物であり、畠地の經營上からなされたとすれば、害獸除けの溝であり土手であった可能性を指摘したい。もちろん、根切溝や植栽痕跡という考え方もあるが、ピット列の規模などから否定的である。經營が安定すればこのような溝は必要なく、掘り返した痕跡や人為堆積が窺えないのはその結果であろう。さらに考えて言えば、より谷側の1号溝から内陸の2号溝へと開発の進展に応じて土手・溝の移動が行われたとも考えられる。1号溝で出土した遺物はそれが19世紀代であったことを物語っているのではないか。

なお、前掲絵図にみえる木下街道は惣深木戸東側先から斜めに北上し、鹿黒外れに至っている。現在の県道とは明らかに走行が異なっており、不自然である。それがいつまでかは不明ながら、かつては2号溝に沿って街道が走っていた可能性があることを指摘したい。

引用・参考文献

- 1 印西町 1992『印西町史 史料集 近世編三』
- 2 印西町教育委員会 1983『草深地区調査報告書』印西町石造物第三集
- 3 印西町教育委員会 1984『草深地区の特色ある石造物』印西町石造物第四集
- 4 佐々木克哉 2003『天保改革期水野・浜松藩下総領による農村復興仕法』『千葉県史研究』第11号別冊近世特集号
財團千葉県史料研究財团
- 5 印西町 1987『印西町史 史料集 近世編二』
- 6 千葉県教育委員会 1988『木下街道・なま道』千葉県歴史の道調査報告書六
- 7 松戸市立博物館 1994『馬と牧』平成6年度松戸市立博物館特別展図録
- 8 財團千葉県文化財センター 2004『泉新田野馬塀』
- 9 千葉県教育委員会 2006『房総の近世牧跡』
- 10 (公財)千葉県教育振興財团 2013『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XXVIII-白井市復山谷遺跡(上層)・
印西市泉北側第3遺跡(上層)・荒野前遺跡(上層)一』

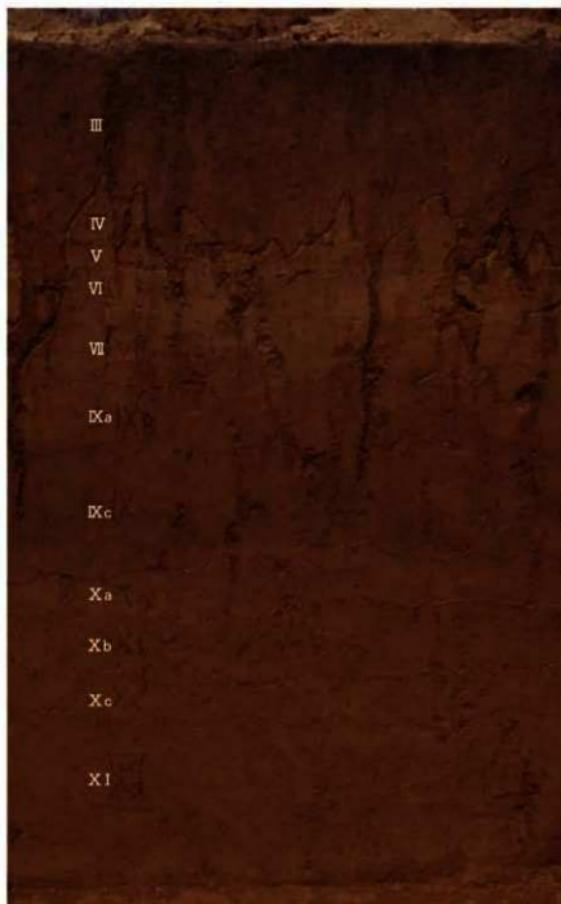
写 真 図 版



道路幅員等空等真



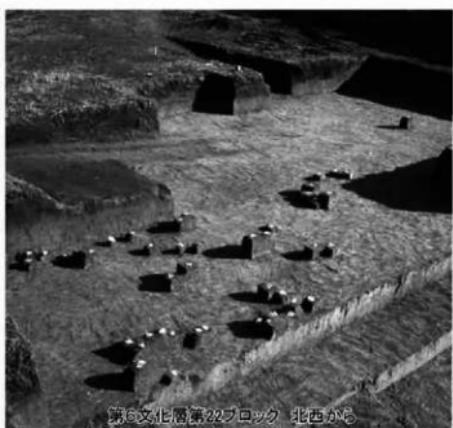
確認調査状況
南区 東から



土層断面
13J-06グリッド北壁

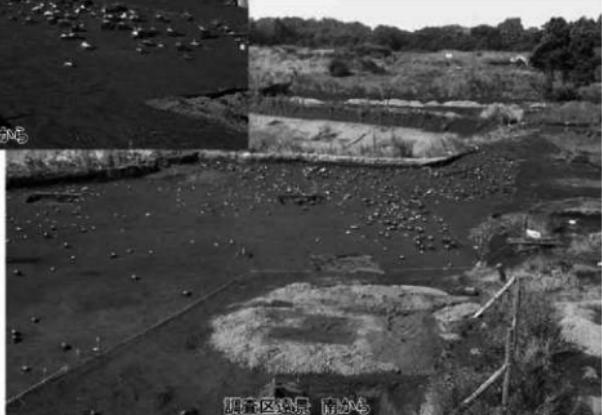


図版4





調査区遠景 南東から



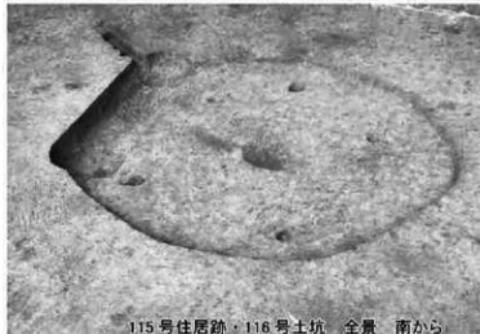
調査区遠景 南から



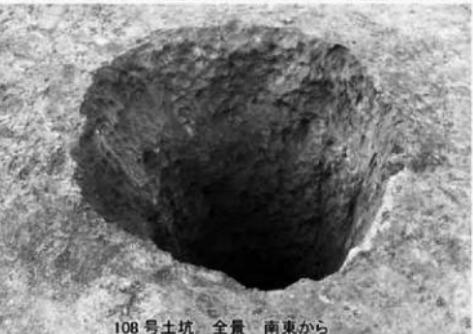
115号住居跡・116号土坑 遺物出土状況 南から



115号住居跡 遺物出土状況 南から

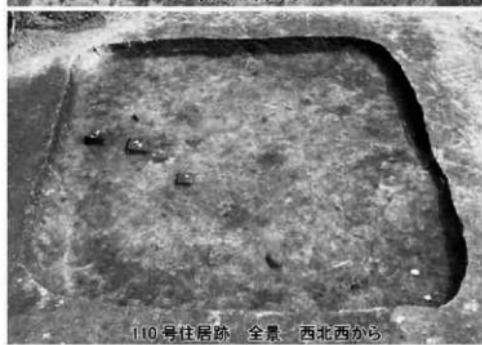
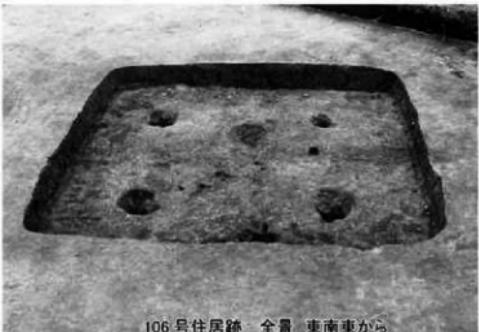


115号住居跡・116号土坑 全景 南から



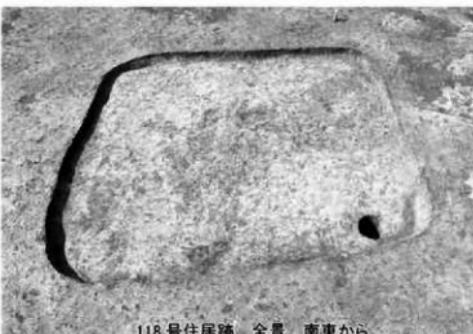
108号土坑 全景 南東から

図版6





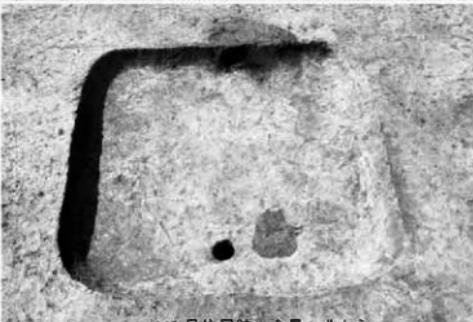
117号住居跡 全景 北東から



118号住居跡 全景 南東から



119号住居跡 遺物出土状況 北東から



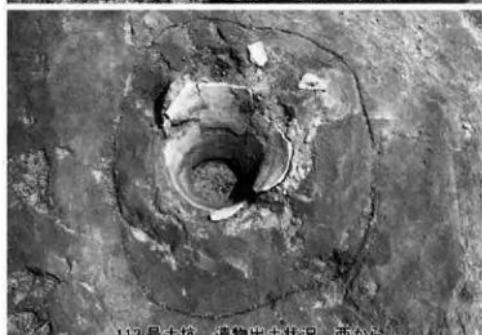
119号住居跡 全景 北から



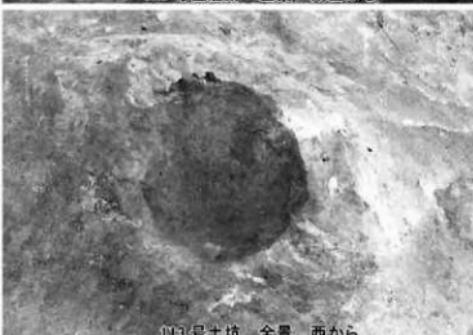
120号住居跡 遺物出土状況 南から



120号住居跡 全景 南西から

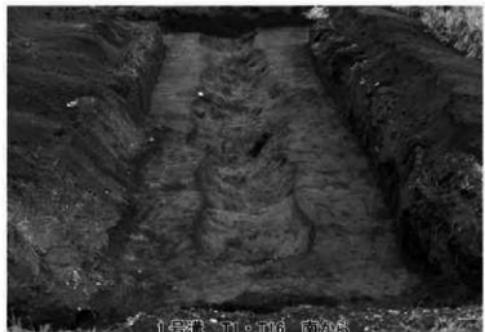


113号土坑 遺物出土状況 西から



113号土坑 全景 西から

図版8



1号溝 T1・T16 南から



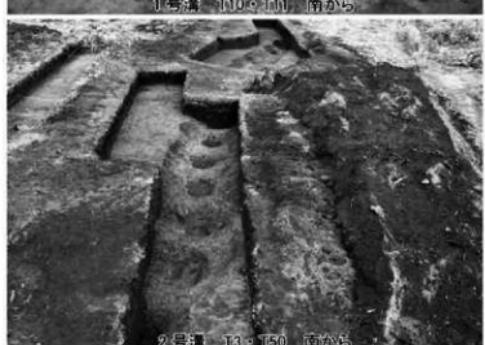
1号溝 T3・T4 南から



1号溝 T10・T11 南から



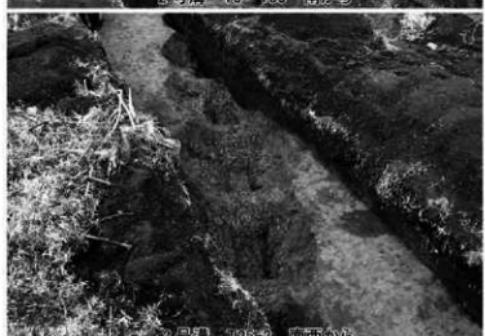
1号溝 T13・T14 南から



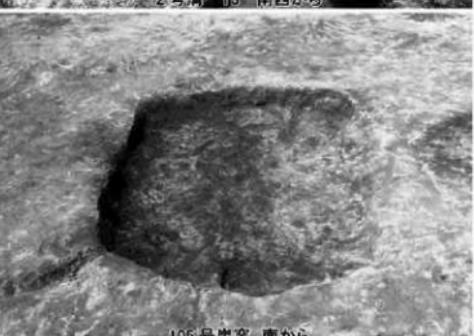
2号溝 T3・T50 南から



2号溝 T3 南西から



2号溝 T35-2 南西から



105号窓 南から

第1文化層 第1ブロック



第2文化層 第2ブロック



第3～6ブロック



第7ブロック



第1・第2文化層出土石器(1) (S=3/4)

図版 10

第2文化層 第7ブロック



第3~7ブロック



第2文化層出土石器 (2) (S=3/4)

第2文化層 第8ブロック



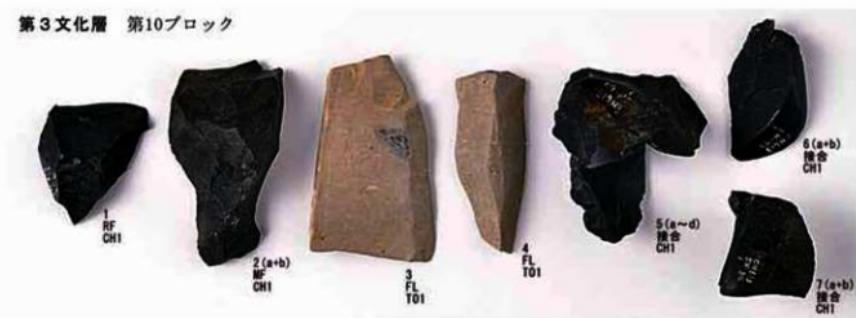
第9ブロック

第2文化層 単独



第2文化層出土石器 (3) (S=3/4)

第3文化層 第10ブロック



第11・12ブロック



第13ブロック



第3文化層 単独



第4文化層 第14ブロック



第4文化層 単独



第5文化層 第15ブロック



第16~18ブロック



第4・第5文化層出土石器 (1) (S=3/4)

図版 14

第5文化層 第16~18ブロック



第19~21ブロック



第5文化層 単独



第5文化層出土石器(2) (S=3/4)

第6文化層 第22ブロック



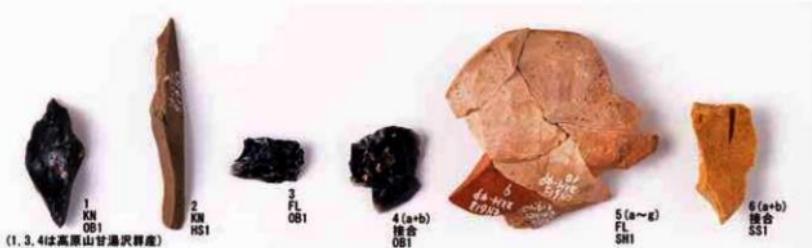
第6文化層出土石器 (1) (S=3/4)

第6文化層 第23ブロック



第6文化層出土石器 (2) (S=1/2)

第6文化層 第23ブロック



単独出土



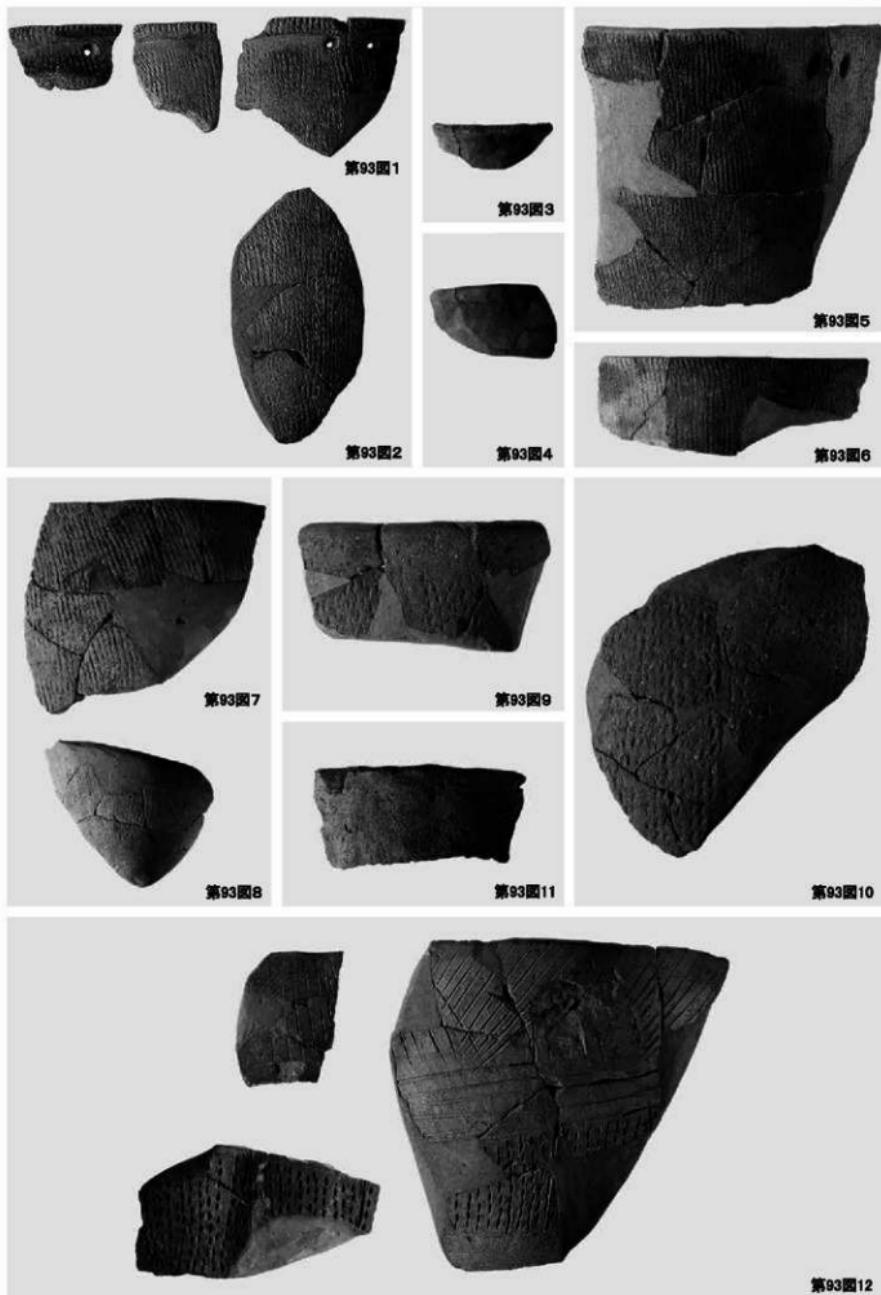
第6文化層出土石器 (3)・単独出土石器 (S=3/4)

図版 18

縄文時代の石器



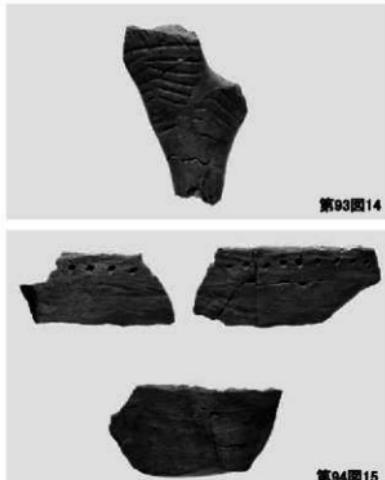
縄文時代以降出土石器 (1~14はS=3/4、15~22、117号住居跡-15はS=1/2)



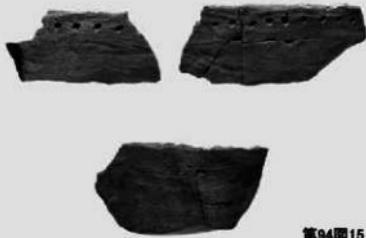
遗物包含层出土土器（1）



第93図13



第93図14



第94図15



第94図16



第94図17



第94図18



第94図19



第94図20



第94図21

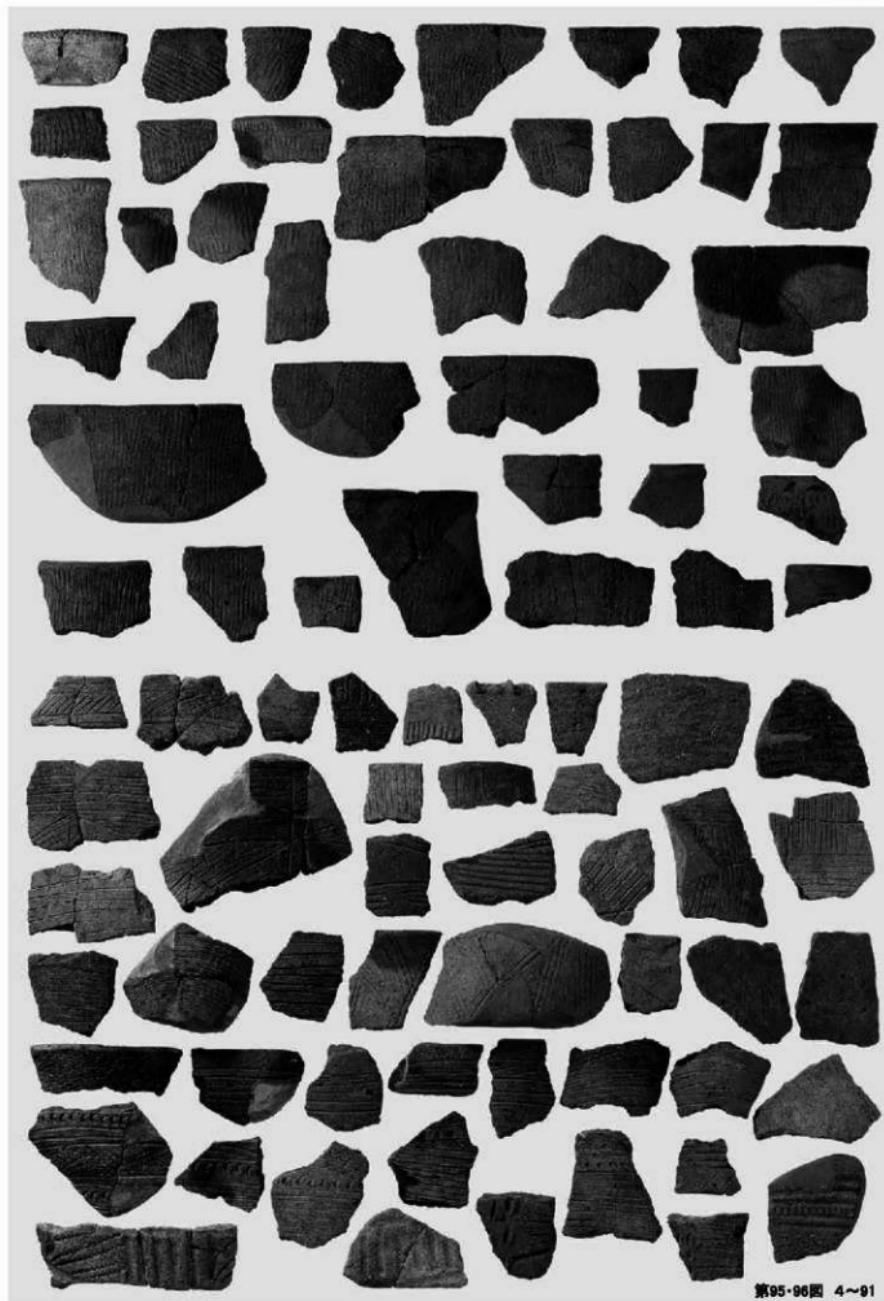
第96図46



第95図1~3

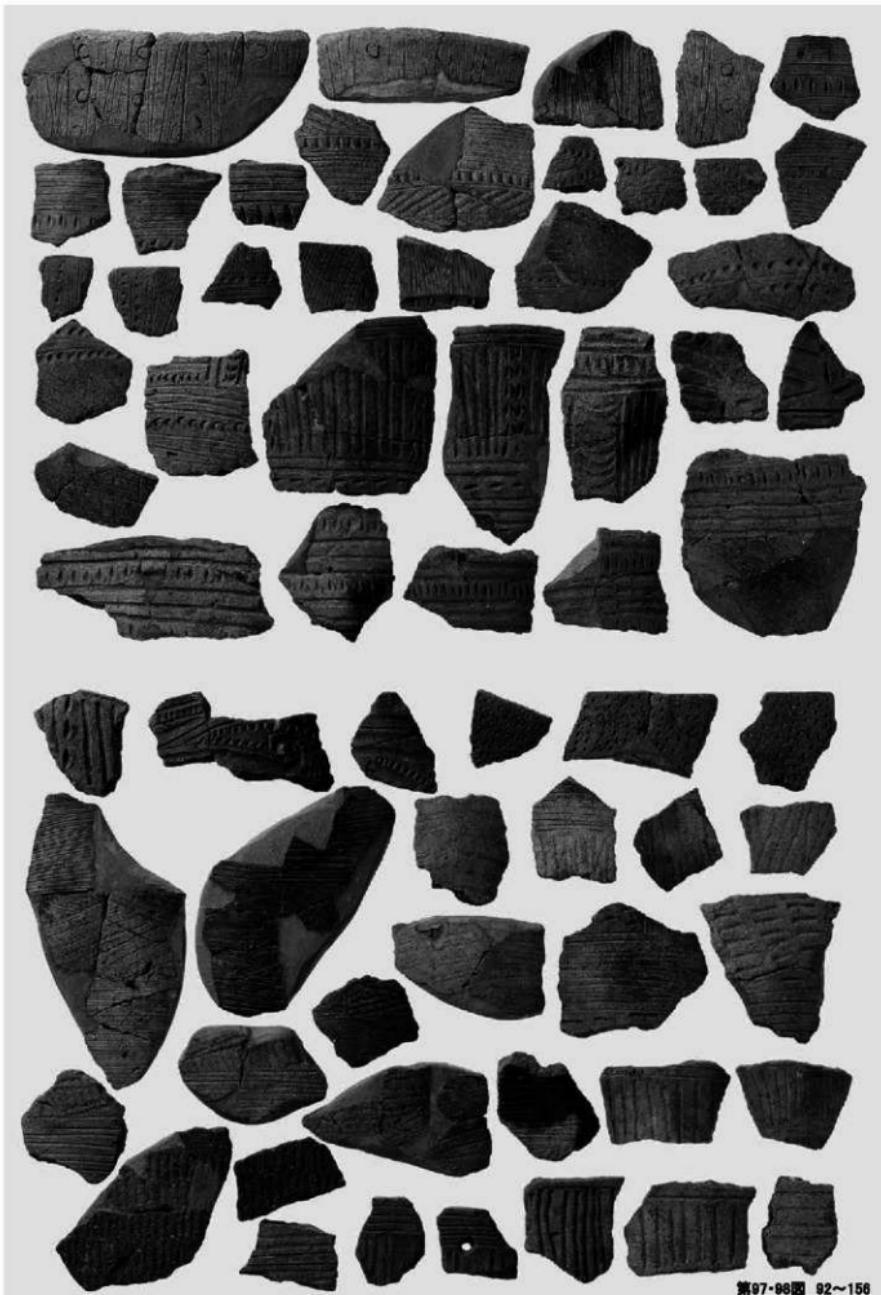


第107図1~3



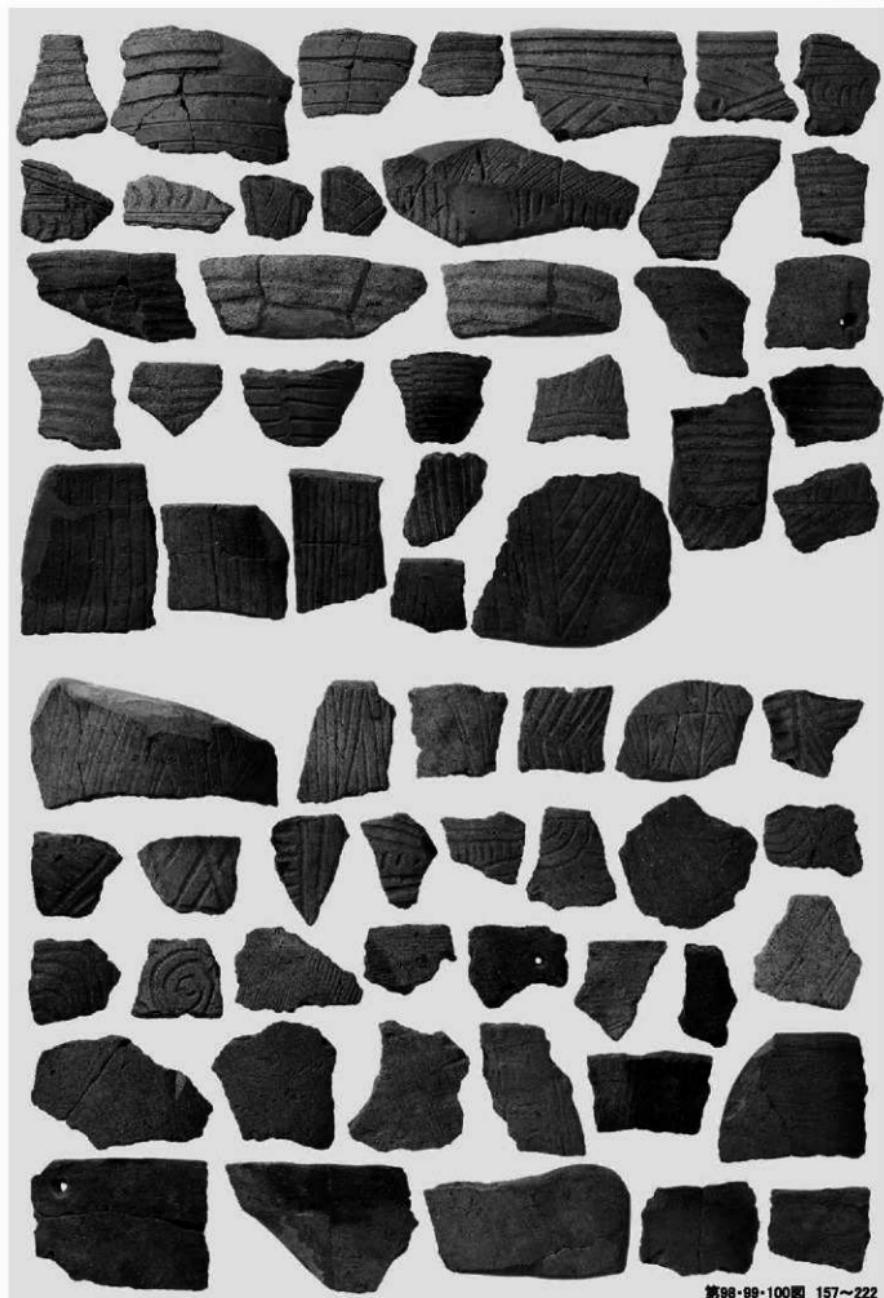
第95~96图 4~91

遗物包含层出土土器 (3)



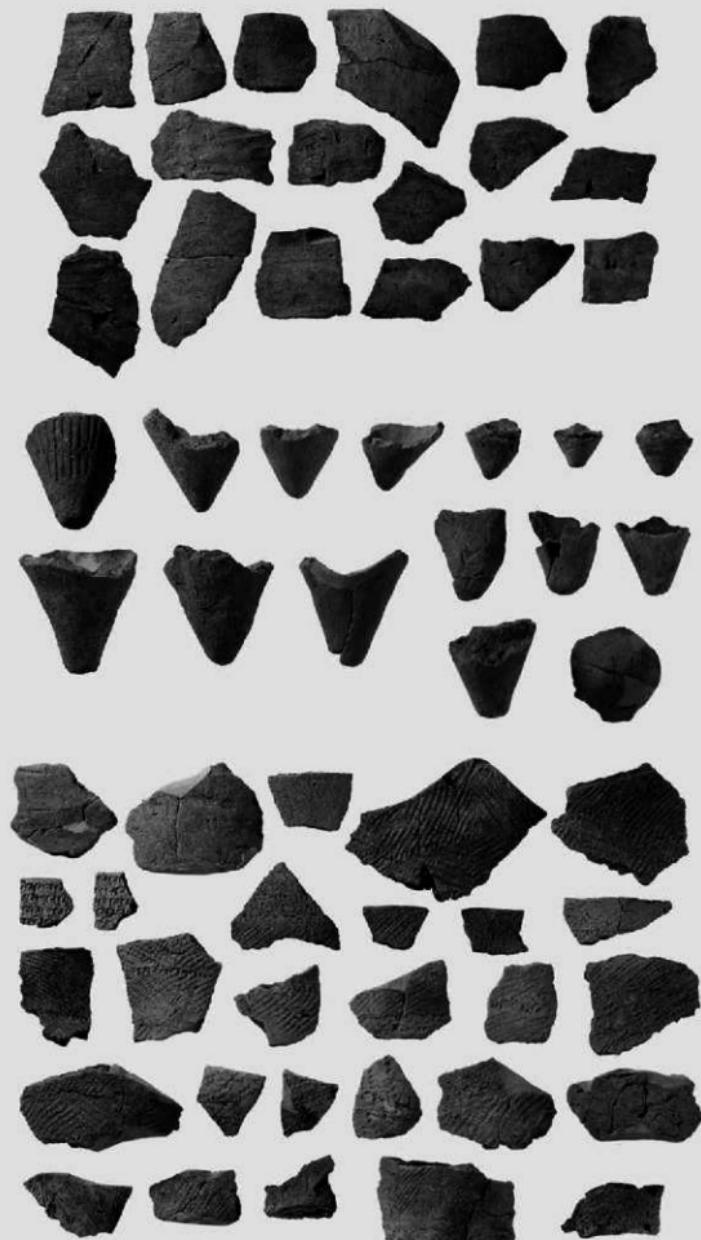
第97~98圖 92~156

遺物包含層出土土器 (4)



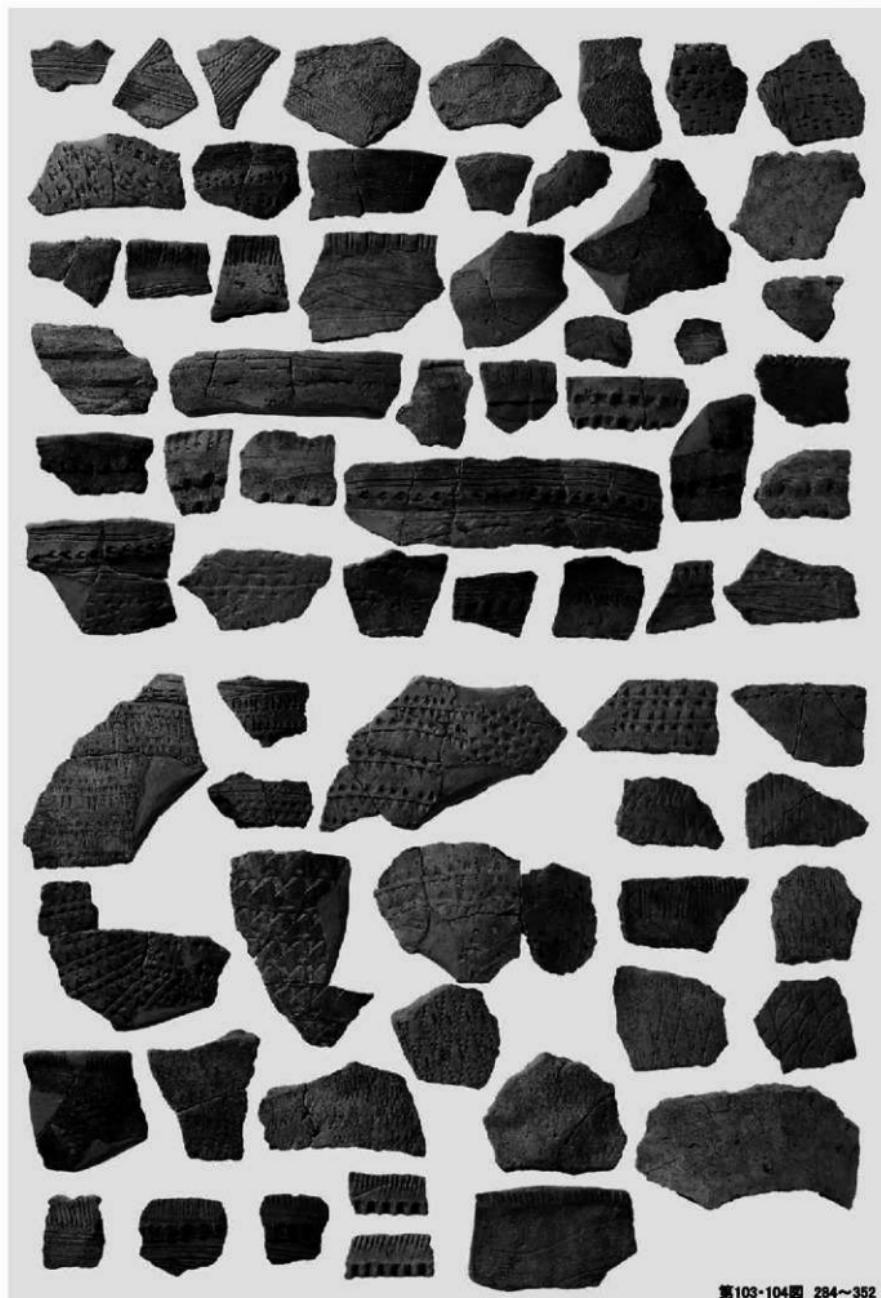
第98~99~100圖 157~222

遺物包含層出土土器 (5)



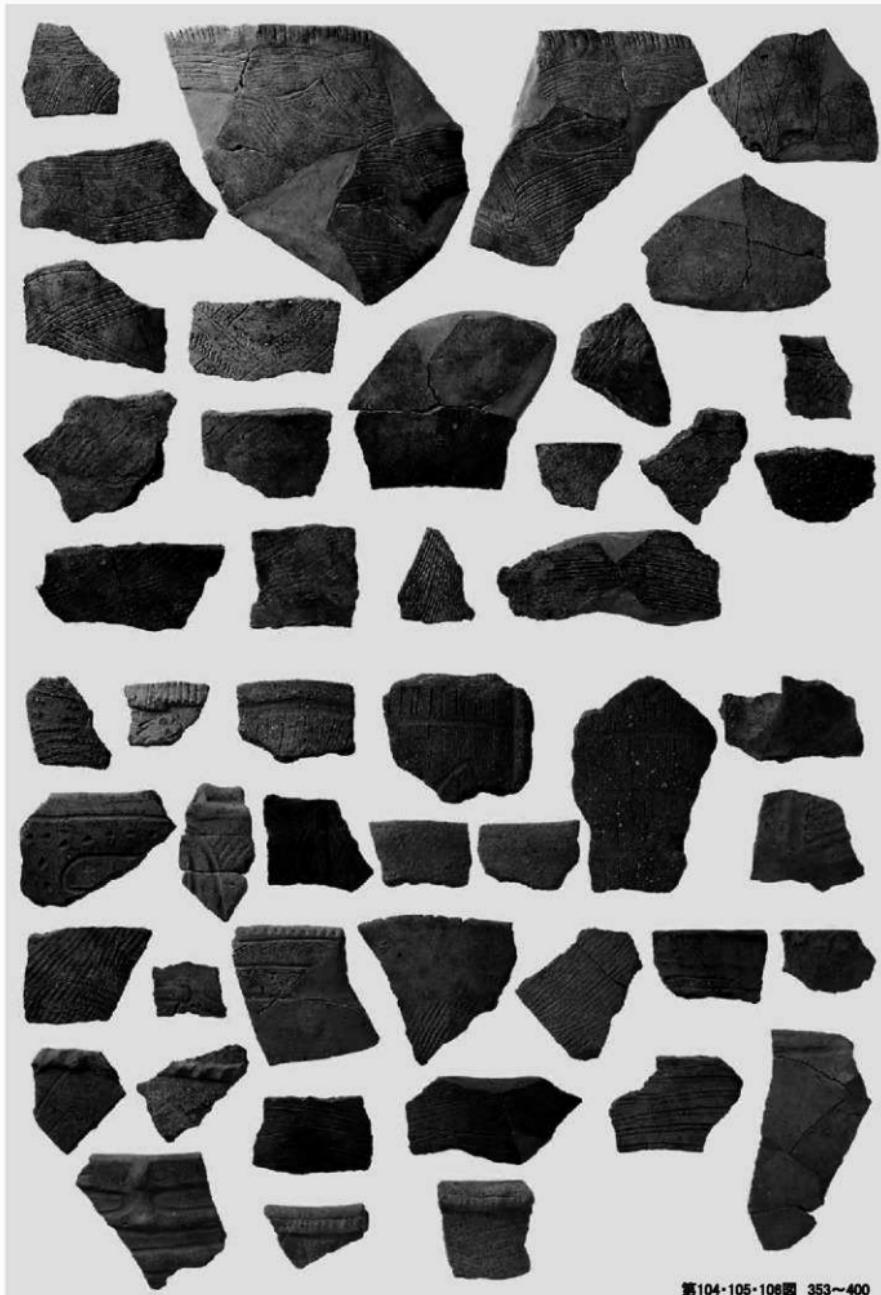
第100-101-102圖 223~282

遺物包含層出土土器（6）



第103-104图 284~352

遗物包含层出土土器 (7)



第104・105・106圖 353~400

遺物包含層出土土器 (8)



遗物内出土遗物 (1)





120住-1



120住-5



遺構外-1



120住-2



120住-6



遺構外-2



120住-3



120住-7



遺構外-3



120住-4

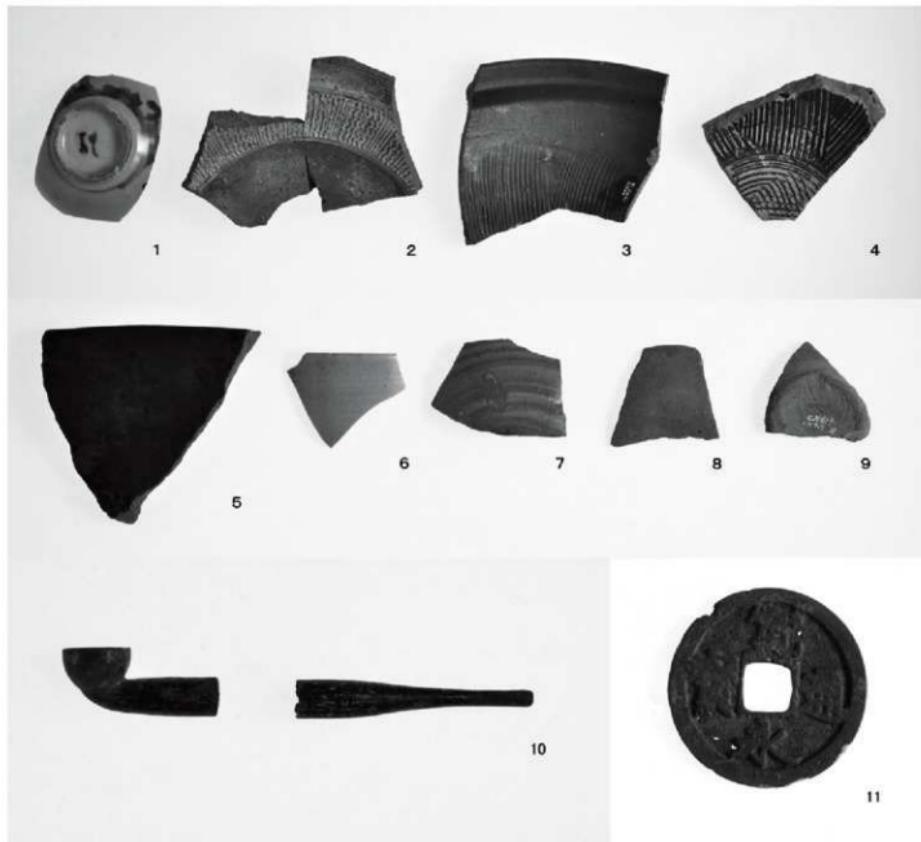


113土坑-2



遺構外-4

遺構内出土遺物（3）・遺構外出土遺物



第100図228拡大写真 (S=1/1)

- ① 擦痕工具の幅
- ② 擦痕工具の先端压痕
- ③ 擦痕工具の先端压痕
(片側)

報告書抄録

千葉県教育振興財団調査報告第719集

千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XXIX

—印西市泉北側第2遺跡(II)—

平成25年11月29日発行

編	集	公益財団法人	千葉県教育振興財団
發	行	独立行政法人	文化財センター
			都市再生機構
			首都圏ニュータウン本部
			東京都新宿区西新宿6-5-1
		公益財団法人	千葉県教育振興財団
			千葉県四街道市流波809番地の2
印	刷	株式会社	東ブリ
			千葉県船橋市咲が丘1-11-9
